上信越自動車道関係発掘調査報告書IV

関川谷内遺跡I

1 9 9 8

新 潟 県 教 育 委 員 会 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書IV

関川谷内遺跡 I

1 9 9 8

新 潟 県 教 育 委 員 会 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡インターチェンジから分岐し、群馬県・長野県を経て新潟県上越市に至る全長203キロメートルの高速自動車国道です。これによって、関越・磐越自動車と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として、沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和63年度から建設用地内の埋蔵文化財について調査を開始し、平成7年度には長野県境~中郷インターチェンジ間の発掘調査を、平成9年度には中郷インターチェンジ~上越ジャンクション間の発掘調査を終了して、県内全線の調査業務を完了しました。本書は上信越自動車道妙高インターチェンジ建設地内において、平成5年度から7年度に行った関川谷内遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、縄文時代と平安時代の生活跡が発見され、妙高山の広大な裾野が縄文時代の早い時期から活発に利用されていたこと、平安時代には頸南地域が東山道支道を通じて信州方面と強い結びつきを持っていたことなどがわかって来ました。古代の頸南地域は古文書の記録がほとんどなく、どのような地名で呼ばれていたのかさえ不明ですが、関川谷内遺跡では豊富な物品が出土しており、古代から県境一帯が越後と信濃を結ぶ交通上の要地であったことが予想されます。

今回の調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解 と認識を深める契機となれば幸いであります。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った妙高高原町教育委員会、ならびに地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成10年8月

新潟県教育委員会 教育長 野本 憲雄

例 言

- 1. 本書は新潟県中頸城郡妙高高原町大字関川字谷内・字中ノ沢ほかに所在する関川谷内遺跡の発掘調査 記録である。これまで「関川谷内A遺跡」・「関川谷内B遺跡」と呼称していたものを、本書で「関川 谷内遺跡」として統合し、それぞれ「関川谷内遺跡A地点・B地点」と改める。本書はB地点Ⅱ区を 除く関川谷内遺跡の調査報告書である。
- 2. 発掘調査は上信越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
- 3. 発掘調査は新潟県教育委員会(以下、県教委)が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団)が平成5年度~7年度に調査を実施した。
- 4. 整理および報告にかかる作業は平成7~10年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
- 5. 出土遺物と整理にかかる資料はすべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は関川谷内遺跡 A地点を「セキA」、同B地点を「セキB」とし、出土地点・層位などを併記した。
- 6. 本書で示す北方位は日本平面国家座標第八系のX軸方向を指しており、真北から0度10分50秒西偏している。
- 7. 作成した挿図・図版のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれにその出典を記した。
- 8. 掲載した遺物の番号は、縄文土器・縄文時代の石器・平安時代の遺物でそれぞれ通し番号を付し、挿図と写真図版の番号は一致している。
- 9. 文中の注釈はページごとの脚注とした。また、引用・参考文献は著者および発行年を文中に[]で示し、券末に一括して掲載した。
- 10. 本書の記述は小池義人(埋文事業団主任調査員)、江口志麻(同嘱託員)が担当した。ただし、第V章はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、第Ⅱ章は県教委・埋文事業団の既刊報告書 [星1996]・[山崎1996]・[立木1997b] を一部改変して転載した。これ以外の分担は以下のとおりである。なお、本書の編集は小池がおこなった。

第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章1·2·4、第Ⅵ章1A·2(小池) 第Ⅳ章3、第Ⅵ章1B(江口)

- 11. 本遺跡について、『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』等に概要が記載されているが、本書の記述を以って正式な報告とする。上記『年報』等と本書に齟齬のある点は、本書の記述をとるものとする。
- 12. 灰釉陶器については、井上喜久男氏(愛知県立陶磁資料館)・山内伸広氏(多治見市教育委員会)に、 鉄滓については渡邊辺朋和氏(新津市教育委員会)にそれぞれご教示を賜った。
- 13. 発掘調査から本書の製作に至るまで、下記の方々から多大なご教示を賜った。厚く御礼申し上げる。 (五十音順、敬称略)

小笠原永隆 小熊博史 大谷 猛 可児通宏 小島正巳 斎藤基生 笹沢正史 坂井秀弥 高橋 勉 土肥 孝 早津賢二 廣田和穂 吉岡康暢 妙高高原町教育委員会 領塚正浩

目 次

第 I 章 序 説	1
1. 調査に至る経緯	. 1
2. 調査経過の概要と体制	. 2
A 経 過	
(1) 平成 5 年度 2 (2) 平成 6 年度 2 (3) 平成 7 年度 2	_
B 調査体制	4
3.グリッドの設定	. 6
4. 整理の経過	
1. IE-1. 7/IE/2	. 0
第 Ⅱ 章 遺跡を取り巻く環境	7
1. 妙高火山群の噴出物と遺跡の層位	. 7
2. 周辺の遺跡	
3. 歴史的環境	
A 交 通	
B 古代の郷と荘保	
C 関山三社権現 ······	14
第 Ⅲ 章 層序と遺構	15
1. 層 序	15
	-
2. 遺構各説	17
A 縄文時代の遺構 ····································	17
(1) 集石土坑 17 (2) 土 坑 22	
(3) 石器の集積 22 (4) 焼土の分布 22	
B 古代の遺構	22
(1) B地区の竪穴建物とこれに付随する遺構遺構	
(2) 炭 窯(3) A 地区の竪穴建物	
(3) A 地区の竪八建物	24
第 Ⅳ 章 遺 物	25
1. A地点の縄文土器	25
A 概 要	25
B 各 説	25

(1) 早期の土器 25 (2) 前期の土器 28	
(3) 中期の土器 30 (4) 後期・晩期の土器 31	
2. B地点の縄文土器	31
A 概 要	31
B 各 説	31
(1) 早期の土器 31 (2) 前期の土器 32 (3) 中期の土器 33	
3. 縄文時代の石器	33
A 分類と記述	33
(1) 器種・種別 33 (2) 石材 35	
B 各 説	36
(1) A地点の石器 ····· 36 (2) B地点 I 区の石器 ····· 44	
4. 古代・近世の遺物	48
A 概 観 ······	48
B 土器の分類と記述	48
C 各 説 ······	49
(1) H 1 号竪穴の遺物 ····· 49 (2) H 1 号竪穴床造成土の遺物 ····· 51	
(3) H 2 号竪穴の遺物 ····· 51	
第 V 章 自然科学分析	55
第 Ⅵ 章 まとめ	60
1. 縄文時代	
A 早期の土器	60
B 石 器	62
(1) 石器の分布状況 62 (2) 関川遺跡群における早期・前期の石器構成 62	
2. 古代平安期	63
A 妙高山麓の概況	63
B 土 器	64
C 石銙・金属製品等	64
《要約》	66
《引用·参考文献》 ·····	67

挿図・表目次

第1図	関川谷内遺跡の位置	1
第2図	関川谷内遺跡調査範囲	3
第3図	『妙高山麓の遺跡』パンフレット	4
第4図	グリッドの設定	5
第5図	遺跡周辺の景観	7
第6図	遺跡周辺の地形	8
第7図	周辺の遺跡	10
第8図	近世における北信~頸南地域の主要交通路概略	13
第9図	土層断面図(1)	16
第10図	土層断面図(2)	17
第11図	A 地点 I 区遺構配置図 ·····	18
第12図	A 地点Ⅱ区遺構配置図 ······	18
第13図	A 地点Ⅲ区遺構配置図 ·····	19
第14図	B地点 I 区遺構配置図 ·····	21
第15図	A 地点Ⅲ区V層の土器出土状況(1) ····································	27
第16図	A 地点Ⅲ区V層の土器出土状況(2) ····································	29
第17図	B地点I区V層の土器出土状況	32
第18図	A 地点Ⅲ区 V 層の石器出土状況	30
第19図	B 地点 I 区 V 層の石器出土状況	46
第1表	H 2 号竪穴ビット計測表	24
第2表	A 地点 縄文時代の石器一覧	37
第3表	B 地点 縄文時代の石器一覧	45
第4表	関川遺跡群における石器の用途別構成	63
第5表	古代の土器の構成	64
第6表	石銙出土遺跡一覧	65
別表		
別表1	A 地点 縄文土器観察表 ·····	71
別表2	B地点 縄文土器観察表	73
別表3	A 地点 縄文時代の石器観察表	74
	(1) 稜磨石 (2) 磨石類	
	(3) 礫器 (4) 不定形石器	
	(5) 石斧・石匙・石鏃 (6) 剥片	
	(7) 石核 (8) 玉類	
	(9) 不掲載の石器類	
別表4	B 地点 縄文時代の石器観察表	78
	(1) 稜磨石 (2) 磨石類	

	(3) 石斧・不定形石器	・面極石器・剥片	
	(4) 不掲載の石器類	7-9 Ida 1-4 Mil	
別表	5 集石土坑 礫計測表 ・		79
		(2) 2号集石土坑	
		(4) 4 号集石土坑	
		(6) 6号集石土坑	
		(8) 8号集石土坑	
	(9) 9号集石土坑	(10) 10 号集石土坑	
	(11) 12 号集石土坑	(12) 13 号集石土坑	
	(13) 14 号集石土坑	(14) 15 号集石土坑	
別表	6 古代の土器観察表 ・		84
	(1) H1号竪穴 (2)	H 1 号竪穴床造成土	
	(3) B地点 I 区 I 層	(4) A地点 I 区 I 層	
	(5) H 2 号竪穴		
別表	7 青銅塊・鉄滓計測表		86
		図版目次	
図面			
図版 1	遺構実測図 縄文時代(1)	図版 17 A地点 縄文時代の石器(1)	
図版 2	遺構実測図 縄文時代(2)	図版 18 A地点 縄文時代の石器(2)	
図版 3	遺構実測図 縄文時代(3)	図版19 A地点 縄文時代の石器(3)	
図版 4	遺構実測図 縄文時代(4)	図版 20 A地点 縄文時代の石器(4)	
	古代(1)	図版 21 A地点 縄文時代の石器(5)	
図版 5	遺構実測図 古代(2)	図版 22 A地点 縄文時代の石器(6)	
図版 6	遺構実測図 古代(3)	図版 23 A地点 縄文時代の石器(7)	
図版7	遺構実測図 古代(4)	図版 24 A地点 縄文時代の石器(8)	
図版 8	A地点 縄文土器(1)	図版 25 A地点 縄文時代の石器(9)	
図版 9	A地点 縄文土器(2)	図版 26 B地点 縄文時代の石器(1)	
図版 10	A地点 縄文土器(3)	図版 27 B地点 縄文時代の石器(2)	
図版 11	A地点 縄文土器(4)	図版 28 B地点 縄文時代の石器(3)	
図版 12	A地点 縄文土器(5)	図版 29 古代の遺物(1)	
図版 13	A地点 縄文土器(6)	図版 30 古代の遺物(2)	
図版 14	A地点 縄文土器(7)	図版 31 古代の遺物(3)	
図版 15	B地点 縄文土器(1)	図版 32 古代の遺物(4)	
図版 16	B地点 縄文土器(2)	図版 33 古代の遺物(5)	
		図版 34 古代の遺物(6)・近世の遺物	

図版 35	関川谷内遺跡周辺の景観		
図版 36	関川谷内遺跡・中ノ沢遺跡全	묽	
図版 37	土層断面(39 Lグリッド)	6 号集石土坑半截状況	H 2 号竪穴調査風景
図版 38	1号集石土坑検出状況	1 号集石土坑半截状況	1号集石土坑完掘状況
	2号集石土坑検出状況	2号集石土坑検出状況	2号集石土坑半截状況
	2号集石土坑完掘状况	3 号集石土坑検出状況	
図版 39	3号集石土坑半截状况	3 号集石土坑完掘状況	4 号集石土坑検出状況
	4 号集石土坑半截状况	4 号集石土坑完掘状況	5号集石土坑検出状況
	5号集石土坑半截状況	5 号集石土坑完掘状況	
図版 40	6 号集石土坑検出状況	6号集石土坑半截状況	6号集石土坑完掘状況
	7号集石土坑検出状況	7号集石土坑半截状況	7号集石土坑完掘状況
	8号集石土坑検出状況	8号集石土坑半截状況	
図版 41	8 号集石土坑完掘状況	9 号集石土坑検出状況	9号集石土坑半截状況
	9号集石土坑完掘状況 1	0号集石土坑検出状況	10号集石土坑半截状況
	10 号集石土坑完掘状况	11号集石土坑検出状況	
図版 42	11 号集石土坑半截状况	11 号集石土坑完掘状况	12号集石土坑検出状況
	12号集石土坑半截状况	12号集石土坑完掘状況	13号集石土坑検出状況
	13 号集石土坑半截状况	13 号集石土坑完掘状況	
図版 43	14 号集石土坑検出状況	14 号集石土坑完掘状況	15 号集石土坑検出状況
	15号集石土坑半截状况	15 号集石土坑完掘状況	1号石器集石検出状況
	1号土坑半截状況	1号土坑完掘状況	
図版 44	2 号土坑半截状況	2号土坑完掘状况 焼	上2検出状況
	焼土3検出状況 A地点	Ⅲ区V層の遺物出土状況	
	A地点Ⅲ区東側完掘状況	A地点Ⅲ区西側完掘状況	1
図版 45	H 1 号竪穴検出状況 H	1 号竪穴覆土調査状況	H 1 号竪穴完掘状況
	H 1 号竪穴 a 区炭化材出土	状況 H 1 号竪穴 c 区易	化材出土状況
	H 1 号竪穴 b 区炭化材出土	状況 _. H1号竪穴西縁中	9央の炭化材
	H 1 号竪穴北西隅の炭化材		
図版 46	H 1 号竪穴東縁中央の礫	H 1 号竪穴焼土半截状況	2
	H 1 号竪穴鉄製品出土状況	H 1 号竪穴鉄製品出土	- 状況
	H 1 号竪穴床造成土調査状	況 H1号土坑半截状況	5
	H 1 号土坑完掘状況 H	3号溝調査状況	
図版 47	H 2 号竪穴覆土調査状況	H 2 号竪穴完掘状況	H 2 号竪穴カマド調査状況
	H 2 号竪穴カマド完掘状況	H 2 号竪穴カマド北側	の礫検出状況
	H 2号竪穴 pit T·V半截	状況 H2号竪穴pit R	半截状況

H 2 号竪穴床造成土調査状況

図版 48	1 号炭窯完掘状況	1 号炭窯覆土	二調査状況	1号炭窯覆土調査状況
	2号炭窯完掘状況	H 1 号炉跡検	出状況	H 1 号炉跡半截状況
	土層断面④ 土層	断面⑥		
図版 49	縄文土器(1)		図版 57	縄文時代の石器(4)
図版 50	縄文土器(2)		図版 58	縄文時代の石器(5)
図版 51	縄文土器(3)		図版 59	古代の遺物(1)
図版 52	縄文土器(4)		図版 60	古代の遺物(2)
図版 53	縄文土器(5)		図版 61	古代の遺物(3)・近世の遺物
図版 54	縄文時代の石器(1)		図版 62	遺物の詳細
図版 55	縄文時代の石器(2)		図版 63	炭化材の顕微鏡組織
図版 56	縄文時代の石器(3)			

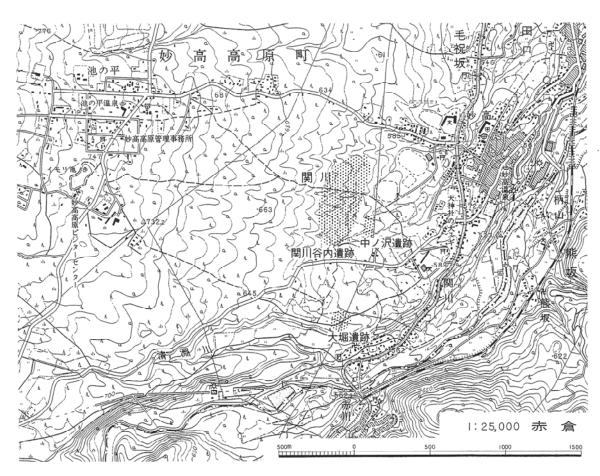
第1章 序 説

1. 調査に至る経緯

上信越自動車道(以下、上信越道)は、群馬県藤岡ジャンクション~新潟県上越ジャンクション間の総延 長 203 kmにわたる高速自動車国道であり、関越自動車道と北陸自動車道を結んでいる。

関川谷内遺跡にかかる、上信越道第10次施工命令区間(長野県中野市~新潟県中頸城郡中郷村)は、昭和63年9月に施工命令が出され、これ以後、用地内の遺跡分布調査・試掘調査等に関する協議が本格化した。新潟県教育委員会(以下、県教委)は日本道路公団(以下、公団)の依頼を受けて同年11月14日から同月19日に、第10次施工命令区間3町村(妙高高原町・妙高村・中郷村)の踏査を行い、周知の遺跡14ヶ所、新発見の遺跡2ヶ所、遺跡推定地7ヶ所、総計848,000㎡について調査が必要である旨、公団新潟建設局に回答している(昭和63年12月21日付け、教文第1002号)。

本報告書の遺跡は、この時点では存在が確認されていなかったが、遺跡推定地 No $1\cdot 2$ として取り上げられ、それぞれ上信越道用地周辺の約 $32,000\,\mathrm{m}^2$ 、約 $31,000\,\mathrm{m}^2$ に分布する可能性があるとされた。なお、踏査時には上信越道法線の詳細が明らかでなかったため、両地点の面積は後に上信越道にかかる $26,400\,\mathrm{m}^2$ と



第1図 関川谷内遺跡の位置

国土地理院 平成3年9月発行 1:25,000原図

29,900 m に修正計算されている。

平成5年の一次調査では、当初の対象範囲を拡大して、田口川・雁沢川間の総計88,500㎡の範囲を調査し、42,000㎡の範囲に縄文時代早期・前期の遺物包含層を確認した[小池1994]。同年8月には、隣接して建設される国道18号妙高野尻バイパスの埋蔵文化財調査が行われており、中ノ沢遺跡[立木・寺崎ほか1997]の存在が明らかになっていたが、これとの混同をさけるために、地籍図に記載のある小字名のひとつによって遺跡名を関川谷内とし、さらに、遺跡が広範な面積に及ぶため、いもり池用水で便宜的に二分して南方を関川谷内A遺跡、北方を関川谷内B遺跡と呼称することにした。これら3遺跡は近接している上、時代時期の共通性も強く、本来同一の名称で取り扱うべきものと考えられる。これまでの経緯があるため名称の統一は控えるが、上信越道関連の2遺跡は関川谷内遺跡として統合し、それぞれを関川谷内遺跡A地点、同B地点と改めることにする。

2. 調査経過の概要と体制

A 経 過

(1) 平成5年度

調査に着手するまでは遺跡推定地であったが、隣接する中ノ沢遺跡の調査によって、遺物の分布は十分に 予想されていた。9月27日から10月18日に、妙高インターチェンジ用地のほぼ全域にあたる田口川~雁沢 川間の88,500㎡を対象に、トレンチ掘削(86か所)による一次調査を実施した。尾根筋の緩傾斜面5面に 遺物包含層が確認され、縄文時代早期・前期の土器370点余り、石器類17点が採集された。

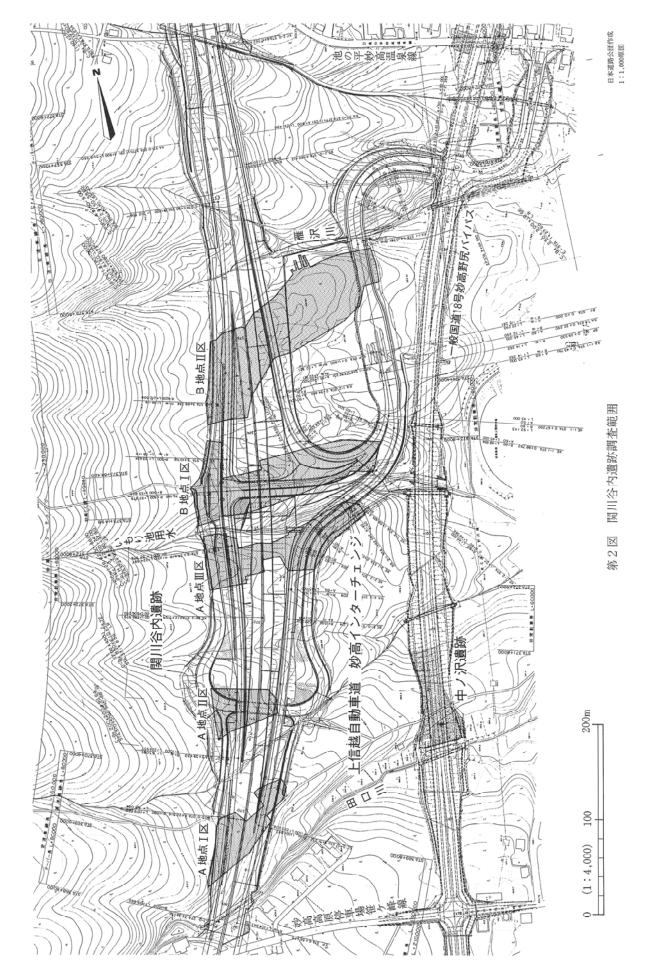
(2) 平成6年度

二次調査の対象面積は総計 42,000 m²と広大であり、6年度はA地点全体(I区~Ⅲ区、計 18,500 m²)とB地点のⅢ区 (15,000 m²)を、7年度はB地点 I区 (8,500 m²)を対象に調査を実施することとした。しかし、6年度中に妙高インターチェンジ用地西縁に工事用道路を開削したい旨、道路公団から9月に要望があり、7年度に調査を予定していたB地点 I区の西縁 (幅約20 m) 1,500 m²を6年度調査分に追加した。

5月の連休後に実質的な調査を開始するために、4月5日から除雪作業を始め、4月26日から重機による表土除去を進めた。A地点はⅢ区から調査に着手し、遺物包含層の掘り下げが終了した時点で砂利敷きの作業用道路を敷設してⅢ区・Ⅱ区に進み、最後は再びⅢ区に戻り、集積土坑などの遺構を調査して終了した。B地点は追加されたⅡ区西縁部を、10月にⅢ区と同時進行して調査した。

(3) 平成7年度

B地点 I 区 7,000 ㎡を調査して、8月25日に関川谷内遺跡すべての調査を終了した。4月17日から重機による除雪・表土除去を並行して行い、5月9日には作業員を投入して遺物包含層の調査を開始した。縄文時代早期・前期を主体とする本遺跡にあって、予想外に平安時代の遺物・遺構が認められたため、8月上旬であった終了予定が2週間ほど遅延することになった。



『妙高山麓の遺跡』開催

妙高高原町地内では、平成4年から7年に国道・高速自動車道に関連して、5遺跡(関川関所跡・東浦遺跡・大堀遺跡・中ノ沢遺跡・関川谷内遺跡)の調査が実施されており、一連の調査の中では本遺跡が最後となった。本遺跡で現地説明会を計画しなかった事情もあり、5遺跡を総合した展示会『妙高山麓の遺跡 高速道路・国道の発掘』を7年7月28日に妙高高原町公民館でを開催し、主な出土遺物と写真記録を展示した。新聞の広告折り込みで妙高高原町のほぼ全戸に案内した結果、約200名の入場者を得た。なお、展示会に際してA4版10ページのコビー資料を作成し、入場者に配布した。

B 調査体制

平成5年度

主体 新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)

調查 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 (理事長 本間栄三郎)

管 理 藍原直木 (専務理事·事務局長)

渡辺耕吉(総務課長) 茂田井信彦(調査課長)

庶 務 藤田守彦 (総務課主事)

調查指導 藤巻正信 (調査課調査第一係長)

[関川谷内遺跡A地点・同B地点一次調查] 平成5年9月27日~10月18日

調査職員 佐藤正知(調査課主任調査員)・藤田豊明(同)

小池義人 (調査課専門員) 武田孝昭 (同)

平成6年度

主体 新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)

調查 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 (理事長 本間栄三郎)

管 理 藍原直木 (専務理事·事務局長)

渡辺耕吉(総務課長) 茂田井信彦 (調査課長)

庶 務 泉田 誠(総務課主事)

調査指導 藤巻正信(調査課調査第一係長)

[関川谷内遺跡A地点二次調査] 平成6年5月9日~11月18日

調査職員 大滝良夫 (調査課主任調査員) 小池義人 (調査課文化財調査員)

武田孝昭(調査課文化財調査員) 土橋由理子(同) 星 奈津子(同)

[関川谷内遺跡B地点Ⅰ区・Ⅱ区 二次調査] 平成6年4月25日~11月14日

調査職員 佐藤正知 (調査課主任調査員) 横田 浩 (調査課文化財調査員)

滝沢規朗(調査課文化財調査員) 内山良典(調査課嘱託員) 小池右子(同)

平成7年度

主体 新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)

調查 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 (理事長 本間栄三郎)

沙高山窟の遺跡 高速道路・国道の発掘 1995年7月28日(金)・29日(土) 沙高高原町公民館 (財)新潟県複雑文化財調査事業団

第3図 『妙高山麓の遺跡』 パンフレット



管 理 藍原直木 (専務理事・事務局長)

山上利雄(総務課長) 亀井 功(調査課長)

庶 務 泉田 誠(総務課主事)

調查指導 藤巻正信 (調查課調查第一係長)

[関川谷内遺跡B地点I区 二次調査] 平成7年4月17日~8月25日

調査職員 小池義人(調査課主任調査員) 山田 聡(同) 清塚則和(調査課嘱託員)

3. グリッドの設定

A地点・B地点の全域をカバーできるように設定した(第4回)。方向は上信越道のセンター杭を基準とし、方位と合わせなかった。グリッドの主軸は STA. 370+00 杭(X=95, 401. 8348 Y=-27, 057. 4822)と STA. 375+00 杭(X=95, 889. 4015 Y=-26, 953. 6922)を結んだラインとした。主軸の方位は真北から約 12 度東偏している。大グリッドの呼称は、主軸方向の南から順に算用数字、これと直交する方向に西からアルファベットを付け、10 m四方ごとにこれを組み合わせて示した。なお、STA. 370+00 杭の北東側区画を 10 Gとした。小グリッドは大グリッドを 2 m四方に25分割し、大グリッド表示の後につけて10 G 20 のように示した。

4. 整理の経過

整理は県教委の委託を受けて埋文事業団が平成7年度~10年度に実施した。7年度~9年度の作業は冬期間(12月~3月)のみ、10年度は4月・5月の間である。出土遺物の洗浄・注記は発掘作業の現場ですべて実施しており、整理作業は遺物の図化作業から開始した。7年度は職員3名のほかに作業員を配置して主に石器の製図を、8年度は職員の配置が一定しなかったものの、出土遺物全般と遺構の製図を進め、これらの図版レイアウト作業をほぼ終了した。9年度冬期(10年1月~3月)は原稿の記述を中心にその他の作業を行った。10年度には写真図版の作成を含めて編集を進め、すべての作業を終了した。

平成7年度

指導 藤巻正信 (調査課調査第一係長)

職員 小池義人 (調査課主任調査員)・山田 聡 (調査課文化財調査員)・清塚則和 (調査課嘱託員) 平成8年度

指導 藤巻正信 (調査課調査第一係長)

職員 村木 弘 (調査課主任調査員)・吉澤 環 (同)・小池義人 (同)

澤田 敦 (調査課文化財調査員)・渡辺尚紀 (同)

清塚則和 (調査課嘱託員)・村山良紀 (同)

平成9年度

指導 藤巻正信 (調査課調査第一係長)

職員 小池義人 (調査課主任調査員)・江口志麻 (調査課嘱託員)

平成10年度

指導 寺崎裕助 (調査課調査第一係長)

職員 小池義人 (調査課主任調査員) 野水 仁 (調査課文化財調査員)

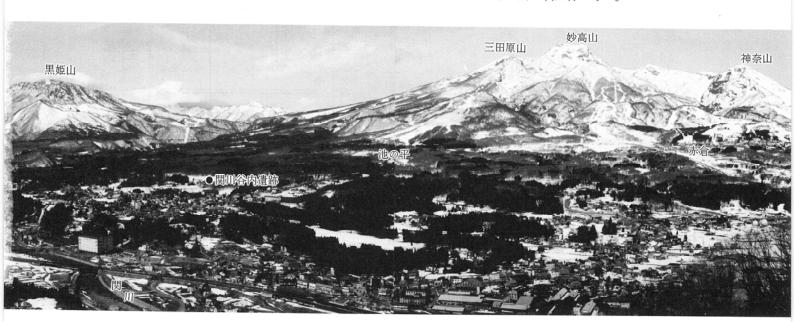
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1. 妙高火山群の噴出物と遺跡の層位関係

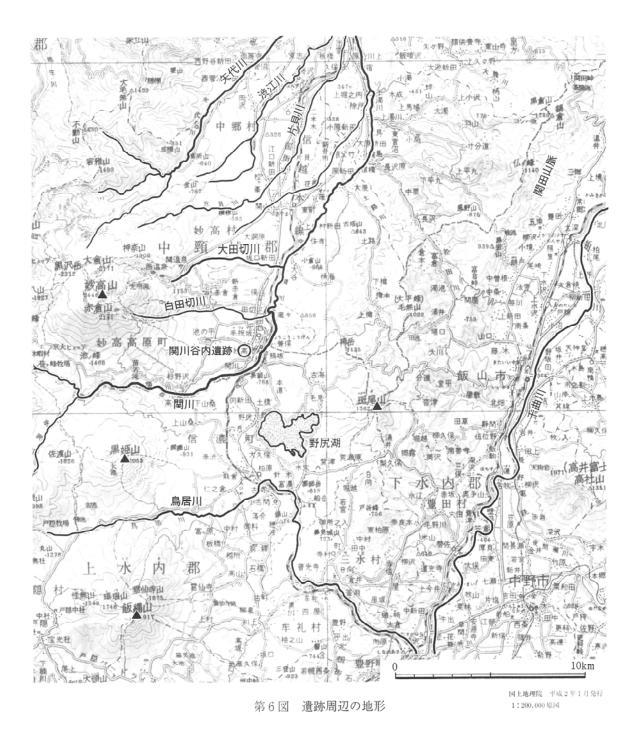
関川谷内遺跡の所在する妙高高原町は、行政区画としては中頸城郡に属している。北方は妙高村、西方は 糸魚川市、そして南方は関川を挟んで長野県上水内郡信濃町と境を接している。妙高高原町は関川本流およ び支流沿いのごく限られた沖積低地を除くと、ほぼ全域が山地や高原から成っている。

町の基盤をなすのは新生代第三紀中新世の隆起によって生まれた火打山 (2,462 m) などの山と、隆起に伴って起こった火成岩の貫入により生まれた金山、天狗山、乙妻山、高妻山などの山である。これら非火山の山々は妙高高原町のかなりの面積を占めている。その後の火山活動で生まれた妙高火山 (2,454 m) や焼山火山 (2,400 m) は西頸城山地の上に載る形で町の中部から東部を占めている。また関川を挟んで南側には黒姫山、佐渡山、さらに南へ進むと飯縄山、南東側には斑尾山などがそびえている。関川谷内遺跡は妙高山麓南東山裾、標高592~613 mの緩斜面に立地する。関川谷内遺跡の南方には中ノ沢遺跡が近接し、南にいった標高約620 mの所に大堀遺跡がある。これら3遺跡は平面的にみると直径1 kmの範囲内に収まる。いずれも縄文時代早期の押型文土器の時期を主体とする遺跡である。

妙高山麓で発掘調査を行うと、遺跡内に妙高火山起源の噴出物が複数枚堆積しているのが認められる。妙高火山は数十万年前から現在に至るまでに4回の活動期と、活動期の間に挟まれる3回の休止期があり、その間噴火と崩壊・侵食を繰り返しながら今日見るような複式成層火山となった。このうち遺跡の発掘で認められる噴出物は第4回目の活動期(第IV期)に噴出されたものが主体である。第IV期は約3万年前のシブタミ川火砕流の噴出に始まり、現在はその終末期にあたる[早津1985]。関川谷内遺跡・中ノ沢遺跡で認められた田口岩屑なだれ堆積物・赤倉火砕流堆積物・大田切川火山灰はこの第IV期の噴出物である。



第5図 遺跡周辺の景観(妙高高原町兼俣方面から)



田口岩屑流堆積物は、妙高山南東麓において始良-丹沢火山灰(AT)と赤倉火砕流堆積物との間にある岩屑流堆積物のうち、関川岩屑流堆積物を除いたものを指す[早津1985]。関川岩屑流堆積物は神奈山と前山に挟まれた谷に沿って流下したと推定される堆積物で、中C 年代値は19,600 ± 600y.B.P. (Gak-409) が当てられていた[早津1985]。田口岩屑流堆積物は当初、黒色土層を挟んで上部と下部に分けられており、中C 年代値は上部層に7,780 ± 160y.B.P. (Gak-7545)[早津・古川1981]、間層の黒色土に17,700 ± 400y.B.P. [妙高団研グループ1969] が得られていた[早津1985]。ところが、関川岩屑流堆積物と田口岩屑流堆積物下部層の分布境界付近に、北側の関川岩屑流堆積物と南側の田口岩屑流堆積物下部層にそれぞれ連続する1層の薄い岩屑流堆積物が存在することが明らかとなった。両堆積物は層位・中C年代の上からも矛盾が見られないので、これらを同一層とみなし、合わせて関川岩屑流堆積物と定義し直し、同時にそれまでの田口岩屑

流堆積物上部層を独立させ、新たに田口岩屑流堆積物(約8,000年前)と定義し直した [早津・河内ほか1992]。その後、大堀遺跡において関川岩屑流堆積物とは別に、田口岩屑流堆積物に比定できる層が黒色士を挟んで上下2層確認されたため、このうち下位の堆積物を田口岩屑流堆積物 I、上位の堆積物を田口岩屑流堆積物 I、上位の堆積物を田口岩屑流堆積物 I・IIに対比される層は確認されている。現在のところ、大堀遺跡のほかで田口岩屑流堆積物 I・IIに対比される層は確認されていないため、池の平~田切地域に分布する 「全年代値 Ca. 8,000 y. B. P. が得られている堆積物との対応関係はつかめていない [早津 1994a]。

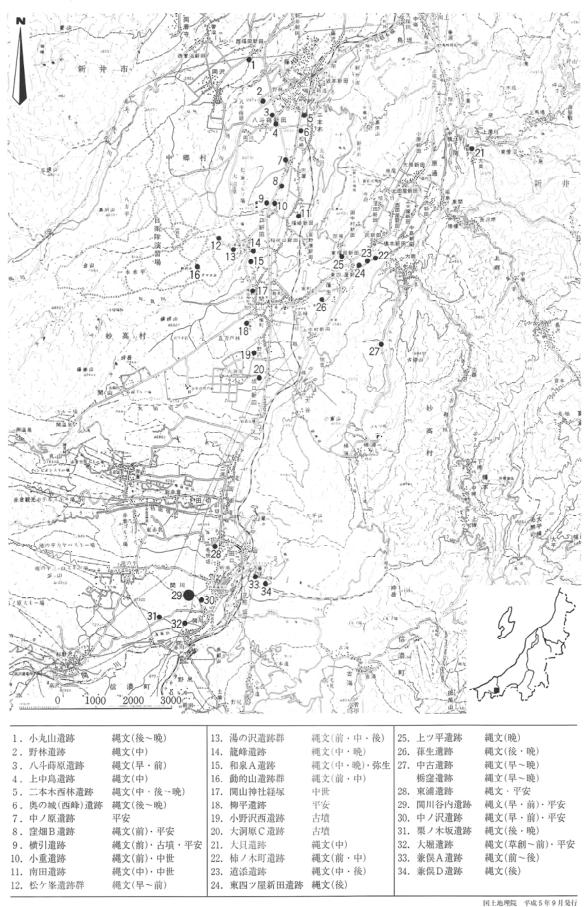
赤倉火砕流堆積物は、妙高山の東麓に広く分布し、北は片貝川から南は池の平までの範囲で認められる。考古遺物からみた噴出時期は、従来縄文時代早期末~前期初頭と考えられてきた。ところが関川谷内遺跡で赤倉火砕流堆積物が縄文時代前期中葉の有尾式土器を包含する黒色土を覆っているのが確認され、従来の認識を改める必要が出てきた[小島1995]。"C年代値は5,880 ± 190y.B.P. (Gak-7543)[早津・古川1981]、5,710 ± 140y.B.P. (Gak-11393)[早津1985]が得られていたが、最近妙高村道添遺跡で5,310 ± 110y.B.P. (I-17,943)の測定値が出された[早津1995 c]。この測定結果と遺物の出土層位との関係から、赤倉火砕流堆積物の噴出時期については従来よりも若干新しい時期、つまり有尾式より新しく、諸磯で式並行期よりは古い時期、実年代では約5,300年前と捉え直すのが妥当と考えられている[早津1995c]。大田切川火砕流堆積物は妙高山の東方から北東にかけての、古二俣川・関川・片貝川流域に分布する。噴出時期は考古遺物との関係では縄文時代中期末~後期初頭が考えられているが[早津・小島1985]、噴出年代は『C年代値の測定値にばらつきがあるため、約4,000~4,500年前という幅をもった値が示されている。なお、妙高山南東麓にはこれにともなって噴出された大田切川火山灰のみが分布している[早津1985]。

関川谷内遺跡や中ノ沢遺跡 [立木・寺崎ほか1997] の発掘限界面は一連の田口岩屑なだれ堆積物上面であるが、大堀遺跡は関川岩屑なだれ堆積物上面である [立木・寺崎ほか1996]。これはこの付近の田口岩屑なだれ堆積物の分布にムラがあることに起因するもので、関川谷内遺跡・中ノ沢遺跡でも田口岩屑なだれ堆積物の下に関川岩屑なだれ堆積物が存在する可能性は高い。縄文時代早期の遺物包含層は、中ノ沢遺跡と関川谷内遺跡では田口岩屑なだれ堆積物と赤倉火砕流堆積物に挟まれた黒色土あるいは暗褐色土であるが、大堀遺跡では関川岩屑なだれ堆積物の上位に堆積した暗褐色土層である。大堀遺跡では押型文土器の分布域に田口岩屑なだれ堆積物が堆積していなかったため、押型文土器と田口岩屑なだれ堆積物の間に直接の上下関係は確認できなかった。また、大堀遺跡では関川岩屑なだれ堆積物と暗褐色土層の間にローム層が挟在し、そこから草創期に属する可能性のある無文土器が出土している。

2. 周辺の遺跡

妙高山麓の遺跡は、1966 (昭和41) 年に『頸南-中頸城郡南部学術総合調査報告書-』の中で「先史・古代の頸南」[室岡1966] としてまとめられ、新井市・板倉町・中郷村・妙高村・妙高高原町の5市町村に所在する53遺跡の時期および出土遺物を報告している。その後、県営圃場整備事業、各種開発事業や近年における国道18号線バイパス・上信越自動車道に伴う発掘調査により新たな遺跡が確認され、頸南地方の歴史解明に詳細な資料を提供している。また妙高火山群の火山噴出物を鍵層として注目し、早津賢二氏らの地

⁽註)「岩屑流:「岩屑なだれ」などと同義に使用されるが適切な用語とはいえない」(高浜 1996)。「岩屑なだれ:粘性の高いマグマの貫入による火山体の変形や水蒸気爆発、地震などが原因で、火山体の不安定な部分が表層なだれのように高速で崩れ落ちる現象。」「岩屑なだれ堆積物:表面に流れ山地形をもち、分解しきれなかった給源火山体構成物の大きな塊を含むことが特徴。低温のことが多く、連搬機構に水は寄与しない」(字井 1996)。「関川岩屑流堆積物」「田口岩屑流堆積物」も現象を忠実にとらえた場合、「関川岩屑なだれ堆積物」「田口岩屑なだれ堆積物」というのが正しい(早津氏のご教示による。)なお、本文中では引用した文献で「関川岩屑流堆積物」「田口岩屑流堆積物」の語が用いられていたときは、これに従った。



第7図 周辺の遺跡

質学研究者と提携した発掘調査が進められ、すでに豊富な研究成果を蓄積している。特に妙高山麓に分布する遺跡の調査では、前述したように大田切川火山灰 (OT-a)・火砕流 (OT-P) 堆積層と赤倉火山灰 (AK-a)・火砕流 (AK-p) 堆積層との層位関係が重視されている。

以下、時期を追って妙高山麓の遺跡を概観する。

旧石器時代の遺跡は、妙高山の火山噴出物に厚く覆われているためか、最近まで皆無であったが、大堀遺跡 [立木・寺崎ほか1996] でナイフ形石器等を含む10点の石器類が出土した。

縄文時代の遺跡分布は、妙高山裾野周縁部に集中するが、妙高高原町田切から妙高村関山の間は遺跡密度が低い。これは大田切川火砕流層が厚く堆積しているためで、中期中葉以降の遺跡が散在するにすぎない。縄文時代草創期から前期中葉にかけては、妙高高原町関川集落西方の緩斜面に位置する大堀遺跡[前掲]、関川谷内遺跡、中ノ沢遺跡[前掲]において良好な遺物が多数出土している。このほか、妙高山北東側緩斜面に位置する松ヶ峯遺跡群[室岡1966]、大重沢B遺跡[(財)新潟県埋文事業団1993]、古塔山西方の盆地状地形に所在する中古遺跡[室岡1986 b]、高床山周辺の遺跡群[高橋1994]においても押型文土器をはじめとする早期から前期前葉の土器が出土している。縄文時代前期後葉から中期前葉の遺跡は、主に妙高山北東側斜面に点在する。湯の沢B遺跡[室岡1966]をはじめ、籠峰遺跡[中郷村教委1987]・和泉A遺跡[荒川1994]では下位の赤倉火砕流堆積物と上位の大田切川火砕流堆積物に挟まれた土層で遺構・遺物が検出されている。また、高床山南方の平坦地に位置する柿ノ木町遺跡[親跡1992]、道添遺跡[室岡1994]、この凹地北東側台地上にある大月遺跡[岡本1967]も当該期が主体を占める。

縄文時代中期中葉から後期・晩期の遺跡は、大田切川火砕流堆積層より上位に包含層がある。遺跡の分布は、前期後葉から中期前葉の遺跡とほぼ共通しており、良好な遺跡が点在する。籠峰遺跡 [前掲] では9基の竪穴住居跡や多数の配石遺構などが検出されている。籠峰遺跡で特筆される石棺状配石遺構は県内では東頸城郡浦川原村顕聖寺遺跡においてはじめて発見され [中川ほか1959]、頸南地方では葎生遺跡で検出されたのを契機とし [中川ほか1967]、奥の城(西峰)遺跡・二本木西林遺跡 [岡本1982]、小丸山遺跡 [親跡1990] でも確認されている。このほか、中期後葉から後期前葉を主体とする兼俣遺跡A地区 [本間1976]、後期中葉から晩期を主体とする兼俣遺跡D地区 [室岡1986 a]、晩期後葉を主体とする上ッ平遺跡 [上ッ平遺跡発掘調査団1992] などが調査されている。

弥生時代・古墳時代の遺跡は分布が希薄であり、籠峰遺跡、横引遺跡で少量の遺物が出土しているのみであったが、小野沢西遺跡 [武田 1996 b]・大洞原 C遺跡 [三ツ井ほか 1997] で比較的まとまった量の土器が出土している。なお、中郷村以南の頸南地域には古墳は存在していない。

奈良・平安時代の遺跡はきわめて少数であったが、近年の発掘調査がこれまでの認識に大きな修正を迫っている。第VI章で記述するように、小規模の遺跡が散在しており、頸城平野とは異なる生活様態が明らかになりつつある。

中世の史料はほとんどが関山神社に集約される。関山神社は古くは関山三社権現と呼ばれ、いわゆる山岳修験の隆盛と伴に山林抖薮や巡礼のメッカとして人々の崇敬をあつめた。これに関わる資料として、1916 (大正5)年、関川神社社殿南側から出土した13世紀代とされる銅経筒・壷などがある[吉岡1977]。また、関山神社が所蔵する阿弥陀三尊・石仏群は中世の製作とされ、貴重な仏教文化財を今に伝えている。中世の生活跡としては、南田遺跡で住居跡と四面廂を伴う大型建物跡が多数確認された[親跡1988]ほか、小重遺跡では掘立柱建物1棟・井戸・溝・集石墓群ならびに備蓄銭が出土し、銭造国の比率とサシ単位の銭種・数量が報告されている。[戸根・鈴木1995]

3. 歷史的環境

A 交通

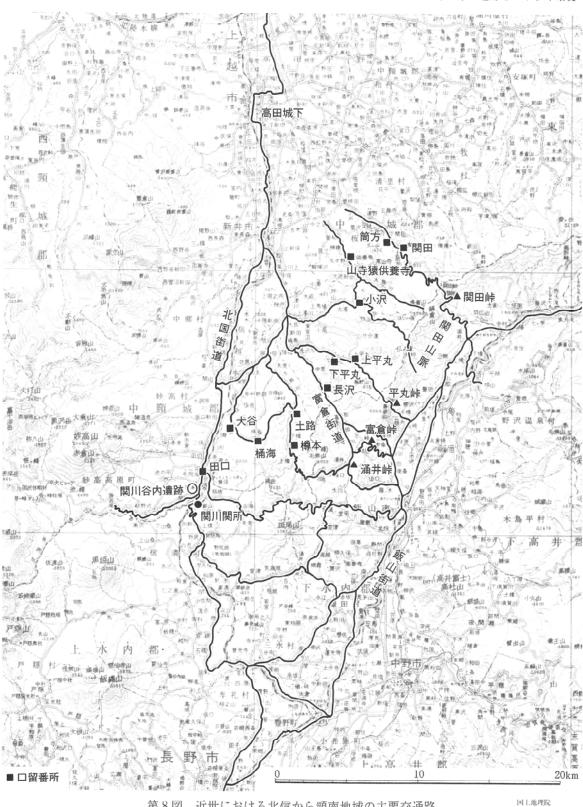
「頸南」は中頸城郡の南部をさす行政区画上の通称であり、妙高高原町・妙高村・中郷村・新井市・板倉町がこれに含まれる。地理的に平野部は新井市の北部に存在するにすぎず、ここでは妙高山東方から北東の山麓斜面と関田山脈北側の山間地を指す語として「頸南」を用いる。

古代頸南における交通路の詳細は不明である。しかし、この地は信濃と国境を接する地域であるため、頸域郡内に所在した越後国府と信濃、さらに北陸道と東山道をつなぐ交通上の要地として古くから重要な役割を果たしていた。10世紀初頭に編纂された『延喜式』には、東山道の支道について頸南地方との関わりを示唆する記事が記されている。これによると信濃国では東山道の支道が錦織駅~麻績駅~日理駅~多古駅~沿辺駅と日本海側へ向って設置されている。沼辺駅が野尻湖畔に比定されていることから,支道は現熊坂集落付近を経て頸南地域を通過し、頸域のいずこかにあったとされる国府へと続いていたことが推測できる。この東山道から越後に至る道は、『古事記』垂仁天皇の条にみえる高志国和那美の水門の物語にその存在が記されていることから、8世紀初めにはすでに利用されていたと考えられる。畿内政権が東山道を有効に活用し、東国を支配下に組み込んでいく過程で、越後への道も次第に整備されていったのだろう。越後国に入ってのちの道筋は不明であるが、これまでの研究によりいくつかの経路が想定されている[平野 1978]。妙高山麓に沿って直江津をめざす道、頸城平野の東側山麓を横切って柿崎町直海浜に至る道、さらにこれらの経路の中央を貫き関川西岸に沿って走る道などが主なものである。

中世以降、頸城郡は直江津を中心に国府所在地として賑わいを増した。交通上は東国と西国をつなぐ結節点であったため、陸路や海路を利用して諸国から多くの文人・宗教者・巡礼者・商業者が訪れ、物資や文化の往来が行われた。とりわけ越後府中から関川を経て信濃をめざす道は、善光寺や戸隠へ参詣に向かう人々に多用され、信仰の道となった。関山三社権現の項で述べる京都常光院の堯恵法印も越中から越後府中を経由して善光寺参詣に赴いている。また、この経路のほかに頸城と信濃を結ぶ道として、新井から北信の飯山に至る飯山街道などが併せて利用されていた。中世末期になると上杉氏支配の下で軍事上の交通路と要衝確保の必要から、越後府中より信濃に至る街道と宿場の整備が急速に進められた。これは江戸時代の領主に構内の交通政策として受け継がれ、北国街道へと編成されていった。

北国街道は中山道追分宿から分岐し、高田城下(のちに出雲崎)に至る街道である。この中で妙高山麓に相当する部分を中山道と称し、通過する新井・二本木・松崎・関山・二俣・田切・上原・関川の宿場を中山八宿と呼んでいる。近世中期以降になると飛躍的に商品流通が発達して北国街道は信越を結ぶ大動脈として機能し、中山八宿も輸送物資の駄貨収入や宿泊科を経営の基盤とした。しかし、最大の輸送物資である塩をはじめとして、新井宿から関田山脈を越えて飯山方面に物資輸送する動きが増加したため、二本木・関川間の宿場は収入を減じ、高田城下の問屋および他宿との間で絶えず係争を繰り返していた。

北国街道を往還する物資・人員を管理したのが、「重き御関所」関川関所である。関川関所は天正2(1574)年に上杉謙信が青野関を関川に移したのが始まりと言われ、そののち承応2(1653)年に高田藩主松平光長がこれを口留番所とし、元禄10(1697)年に幕府管轄の関所となっている。一方、藩境付近の集落にも口留番所が置かれ、藩の支配下で物資・人員の移動を管理していた。延宝7(1679)年の「越州四郡信州逆木郷高張」「中村ほか1981」によれば、頸南の信越国境には下記口留番所の記載がある(第8図)。多数の口留番所は、



第8図 近世における北信から頸南地域の主要交通路

平成2年1月発行 1:200,000原因

上述した飯山方面との交流を裏付けるものであろう。

上平丸村 (新井市) · 下平丸村 (新井市) · 長沢村 (新井市) · 大谷村 (妙高村) 田口村(妙高高原町)・桶海村(妙高村)・土路村(妙高村)・小沢村(新井市) 樽本村 (妙高村) · 関田村 (板倉町) · 山寺猿供養寺 (板倉町) · 筒方村 (板倉町)

B 古代の郷と荘保

『倭名類聚抄』によると、古代の頸城郡は「沼川・都宇・栗原・荒木 (原木)・板倉・高津・物部・五十公・ 夷守・佐味」の10郷で構成されていた。このうち、都宇・栗原・板倉・高津・物部・五十公・夷守・佐味 が、中世文書や現地名との照合・検討により、頸城平野における郷としてそれぞれ比定地が推定されている。 頸南地域については栗原郷として新井市栗原付近が有力視されているほか、『中郷村史』では妙高山麓一帯 を荒木 (原木)郷に比定している [平野 1978] が、実証史料に乏しく、不明である。

荘園制が確立する11世紀半ば以降、越後国においても土地開発の勢いが高まり、各地に多くの荘園が設置されていく。しかし、国府を擁する頸城郡は、在庁官人によって公領の開発が盛んに行われ私領化されたため、国衙領が土地の大半を占めていた。頸城郡内の荘園として、笹倉荘・三善荘・岡田荘・黒川荘など荘名は数多く挙げられているが、存在が確実で該当地が明らかにされているのは唯一柿崎町から吉川町にかけての佐味荘のみである。一方、国衙領は郷・保と称され、現在の上越市や新井市など平野部から丘陵にかけて郡内の主要な地域を占めていた。中世・近世史料にみえる頸城郡内の保の数は、現在確認されている越後国内の国衙領全体のほぼ半数近くを占める。頸城平野南部では新井市域に荒井保・中河保が、板倉町に田井保が比定されているが、山間部の地域については不明である。

C 関山三社権現

南北朝の混乱を経たのち越後国では、上杉氏が守護として、長尾氏がその守護代として実権を握るにいたった。古代以来の国府所在地である頸城は領国経営の最大の拠点とされ、越後国における政治・経済・文化の中心として展開していった。妙高村の関山神社はかって関山三社権現と称され、中世に頸城地方における信仰の中心として勢力を拡大した。関山神社の縁起は関山三社権現の開基と妙高山の開山をともに和銅元(708)年,裸行(裸形)上人に仮託している。開基・開山の時期については不明であるが、裸行上人は熊野修験の縁起に語られる人物であることから、妙高山は遍歴する熊野系修験者によって行場として開かれ、関山三社権現はその里宮として成立したと考えられている[大場1978]。修験道の浸透とともに中世末期に最盛期を迎えた関山三社権現は、頸城はもとより広く越後全域で人々の信仰を集めた。また別当寺の宝蔵院のもとで広大な権現社領を所有し、関山一帯に多くの寺社を擁したという。戦国武将の起請文には弥彦大明神や居多大明神などと並んで「当国鎮守」として名前が挙げられている[皆川・花ヶ前はか1983]ほか、15世紀半ば、善光寺参詣の途中関山に立ち寄った京都常光院の堯恵法印は、その折のことを「善光寺紀行」で「限なき行ゑの隔に聞えし関の山も是ならん」と記しており[金子1987]、越後国外にもその名が知られていたことを伝えている。上杉謙信の支配下では関山が信濃国との交通の要衝に位置する重要な軍事拠点とされていたことから、宝蔵院の有した多くの僧兵が「関山宝蔵院ノ衆徒」[高橋1928](『越佐史料』巻4 667頁)として時には戦力の一端を担うこともあった。

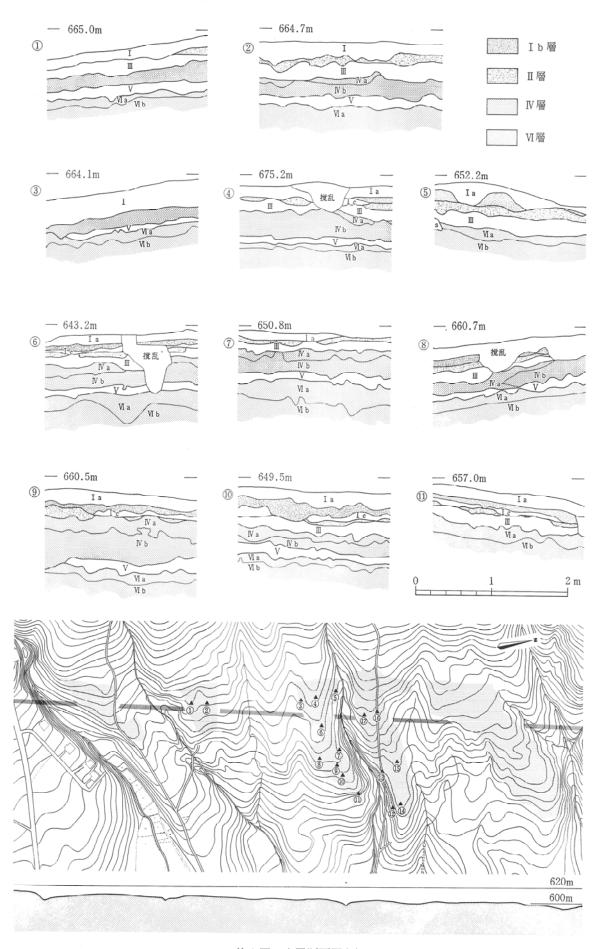
戦国時代の動乱のなかで一時衰退したものの、江戸時代初期に再興を許された関山三社権現は、往時の修 験道的色彩が薄らぎ庶民の参詣の場として古志や魚沼など遠方からも信仰者を集めた。また経済基盤として 現妙高村の関山集落付近から妙高山・火打山にいたる広大な土地を所有する封建領主的な性格をも備えてい た。明治元(1868)年には、維新政府による神仏分離政策に従って宝蔵院が廃されたほか、関山三社権現も 関山神社に改められて現在にいたっている。

第Ⅲ章 層序と遺構

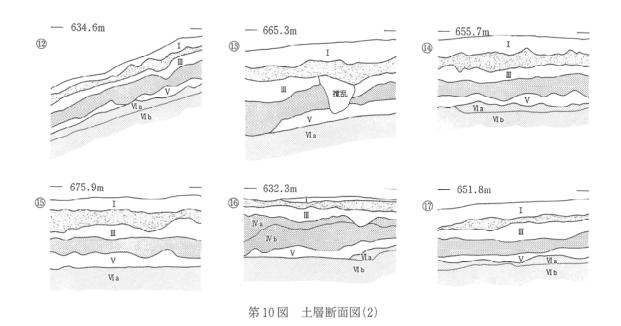
1. 層 序

遺跡は南北約600mの広がりを持ち、沢と舌状の緩斜面が交互に連続するものの、土層のあり方は妙高火山に由来する赤倉火砕流堆積物(AK-p・AK-a)と大田切川火山灰(OT-a)、田口岩屑なだれ堆積物によって、明瞭に区分される。ただし、調査区域の中央を流下するいもり池用水は年間を通じて水流がある小河川であり、関川谷内遺跡周辺の現地形を規定している田口岩屑なだれ堆積物までを浸蝕しているため、上記の堆積物およびこれらに挟在する黒色系の土壌は存在しない。基本的な層序は中ノ沢遺跡と共通するが、ごく部分的に分布する I 層中の火山灰を基本土層に数えていないため、各層の呼称が異なる。地形は基本的に田口岩屑なだれ堆積物に規定され、現地形はこれと大きく異なっていない。

- I 層:暗褐色〜黒褐色の土壌である。A地点Ⅲ区ではI層中に灰白色の火山灰(焼山火山灰KG-c?)の含まれる部分があり、これをIb層とする。Ib層が認められる範囲ではそれより下部をIcとするが、Ib層が存在しなければI層の細分は不可能である。なお、A地点Ⅱ区およびB地点I区の一部は畑作によって撹乱されている。縄文時代中期後半以降の遺物が含まれる。
- Ⅱ 層:大田切川火山灰(黄灰色〜黄褐色)が斑状に混入する暗褐色〜黒褐色の土層であり、中ノ沢遺跡の Ⅳ層に相当する。大田切川火山灰の噴出時期は、考古遺物との関係では縄文時代中期末〜後期初頭 とされている「早津・小島 1985」。遺物の混在は皆無である。
- 層:黒色~黒褐色の土壌である。中位に暗褐色粒子(金山火山灰?)の観察される部分があるものの明瞭に分層できないため、一括してⅢ層として扱う。縄文時代前期末葉~中期初頭の遺物が含まれる。
- IV 層:黄灰色を呈する赤倉火砕流堆積物の単純層であるが、木根跡と見られる小ピット状の落ち込みが散見される。最下部は厚さ 10mm 程度の火山灰層であり、それ以外は固結度の高い砂質層で、スコップ・移植ごてによる掘削は極めて困難である。赤倉火砕流堆積物の形成時期は、妙高村道添遺跡の資料で $5,310\pm110$ y. B. P. (I -17,943)という測定値が出ている [早津 1995 c]。遺物の混在は皆無である。下底は V層との境界が明瞭であるが、上面は III 層と混じりあう部分も多く、これをIV a 層としている。
- V 層:黒色~黒褐色のいわゆる「クロボク」土壌であり、中ノ沢遺跡の™層に対応する。縄文時代早期中葉~前期中葉の遺物が含まれる。遺物は便宜的にV層上部・下部・下底に分けて出土層位を記録した。下底は™層が土壌化しているために黄色味ががるが、上部~下底にかけて明瞭に分層し得ない。下部および下底では、押型文系土器が、上部には羽状縄文系土器が多く含まれる傾向にある。
- VI 層:黄褐色を呈する田口岩屑なだれ堆積物である。上面約20cmは黄褐色を呈するローム質土、それより下位は拳大程度までの礫を多く含むローム質土であり、前者をVIa層、後者をVIb層とする。ここではVIa層を田口岩屑なだれ堆積物に包括しているが、縄文時代早期の撚糸文系土器がこの層に含まれる可能性もあり、岩屑なだれ堆積物とは分離するべきものかも知れない。なお、VIa層上面を最終的な遺構検出面とした。



第9図 土層断面図(1)



2. 遺構各説

A 縄文時代の遺構

集石土坑15基、土坑2基があり、すべてV層~VI層上面で検出された。したがって、いずれも早期~前期中葉の遺構である。集石土坑はA地点Ⅲ区で9基(1号~9号集石土坑)、A地点Ⅱ区で1基(10号集石土坑)、B地点Ⅱ区で5基(11号~15号集石土坑)であり、土坑はA地点Ⅲ区で1基、A地点Ⅲ区で1基が検出された。遺構の大半はいもり池用水を挟んだ両岸に存在している。妙高山麓の小河川が、融雪期を過ぎると急激に流量が低下する中にあって、いもり池用水(湿原湖沼いもり池を介在し、池の平スキー場南側から流下する小河川)は夏季にも安定した流量を保っている。

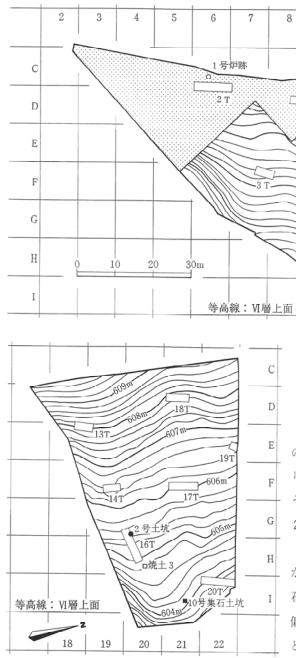
(1) 集石土坑 (図版1~4)

6号集石土坑を除いて覆土に遺物はなく、所属時期を明確にできない。しかし、多数が押型文系土器の分布と重なること、隣接する中ノ沢遺跡の集石土坑が押型文期のものと見られることから、14号集石土坑を除いて押型文期の遺構と考えている。礫の大多数は田口岩屑なだれ堆積物(VI層)に含まれる安山岩と思われ、亜角礫あるいは亜円礫である。礫は小河川によってその堆積物から洗い出されたか、直接掘り出されたものが利用されていると考えられる。多くの礫は鉄分等の沈着で変色しており、観察の困難なものがあるものの、ほぼすべてに被熱による赤変が認められる。礫は11号集石土坑を除くすべてについて、重量・赤変度・赤変面積等を記録し、巻末の一覧表に示している。しかしながら、土坑の底面・側面に赤変は観察されず、焼土の堆積はない。炭化物も14号集石土坑以外の覆土には多く含まれない。埋土除去を伴う礫の取り出しと再構成を考慮するとしても、礫が各々の集石土坑内で被熱している可能性は低いと思われる。なお、礫は土坑底面に接地せずに配置され、15~20cm程度の埋土が挟在することを通例としている。

[A地点]

1号集石土坑

A地点Ⅲ区36Dグリッドに位置する。計27点の礫からなる。礫の重量は最高が475グラムであり、小形



第12図 A地点Ⅱ区遺構配置図

の碟で構成される。土坑は掘り込みが浅く不明瞭であり、集石土坑に使用される礫が集積されたものであろ

うか。土坑の平面形は長径 52cm を測る円形である。

第11回 A地点I区遺構配置図

11

12

13

14

15

G

Η

Ι

J

2号集石土坑

608m

A地点Ⅲ区35 Cグリッドに位置する。計72点の礫からなり、礫の配置はまばらで間隙が大きい。他の集石土坑に礫が再利用されているのであろうか。東側に偏平で大形の礫が連続して立てられており、横転したと見られるものも2点ある。土坑は長径102cm、短径83cmを測り、楕円形を呈する。

3号集石土坑

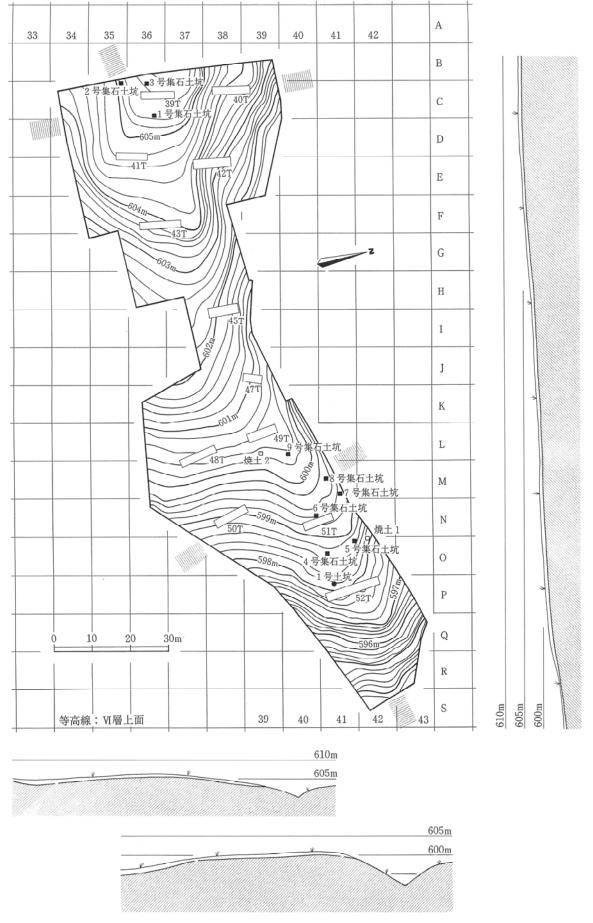
A地点Ⅲ区36 C グリッドに位置する。38点の礫からなり、小形の礫は少ない。土坑は長径80cm、短径70cmを測り、不整の楕円形を呈する。

4号集石土坑

A地点Ⅲ区41 Oグリッドに位置する。計89点の礫からなり、周縁には比較的大形の礫が置かれている。 土坑縁辺部の礫はⅥ層中の礫であるか、人為的に置かれたものか判断できない。土坑内部の礫は底面から 15cm 程度の間隔を有する。土坑は長径96cm、短径90cmを測り、不整の円形を呈する。

5号集石土坑

A地点Ⅲ区41〇グリッドに位置する。計83点の礫からなる。周縁には偏平で比較的大形の礫が置かれ、その一部は側面に沿うように立てられている。底面に接する礫もあるが、大部分は土坑底面と間隔をもつ。



第13回 A地点Ⅲ区遺構配置回

土坑は長径 55cm、短径 50cm を測り、不整の円形を呈する。

6号集石土坑

A地点Ⅲ区40Nグリッドに位置する。計65点の礫からなる。周縁には偏平で比較的大形の礫が置かれる。 礫と土坑底面の間隔は大きく、30cm前後を測る。土坑東側はトレンチによって削られるが、径110cm程度の 円形を呈すると思われる。覆土から、押型文系あるいは沈線文系土器の細片が2点出土している。

7号集石土坑

A地点Ⅲ区41Mグリッドに位置する。計26点の礫からなる小規模なものである。少し離れて位置する偏平な大形礫1点もこれに含めている。土坑は長径45cmを測り、ほぼ円形を呈する。

8号集石土坑

A地点Ⅲ区41Mグリッドに位置する。計60点の礫からなる。検出状況では比較的小形の礫で構成されるが、土坑内部に偏平で大形の礫が落ち込んでいる。土坑は長径75cm、短径58cmを測り、楕円形を呈する。

9号集石土坑

A地点Ⅲ区40 L グリッドに位置する。底面の弧に沿って置かれた偏平大形の礫 3 点を軸に計 45 点の礫からなる。最大の礫は29,450 グラムを測るが、1,000 グラム未満のものが大多数を占める。土坑は長径88cm、短径68cmを測り、楕円形を呈する。

10号集石土坑

A地点 II 区 21 I グリッドに位置する。計 60 点の礫からなるものである。礫と土坑底面は $15\sim 20$ cm の間隔を有する。土坑はほぼ円形で最大径 95cm を測る。底面にはVI層中の礫が残置されている。

[B地点]

11号集石土坑

B地点 I 区 42 D・43 D グリッド境界に位置する。構成する礫のデータを欠いており、詳細は不明である。 礫は高い密度でほぼ円形に集められ、周縁部には偏平で大形の礫が土坑底面の弧に沿って配置される。礫は 土坑底面にまで接しており、関川谷内遺跡にあっては、異例である。土坑は集石のプランとは一致せず、長 径 127cm、短径 108cm の不正楕円形を呈する。

12号集石土坑

B地点I区44Eグリッドに位置する。礫は土坑底面に接しており、VI層中の礫と明瞭に区分できないが、 136点の礫を当遺構に関わるものとした。礫には稜磨石が1点含まれる。土坑の平面形は不明瞭で、礫も分散している。土坑は長径100cm程度、短径85cm程度の楕円形を呈する。

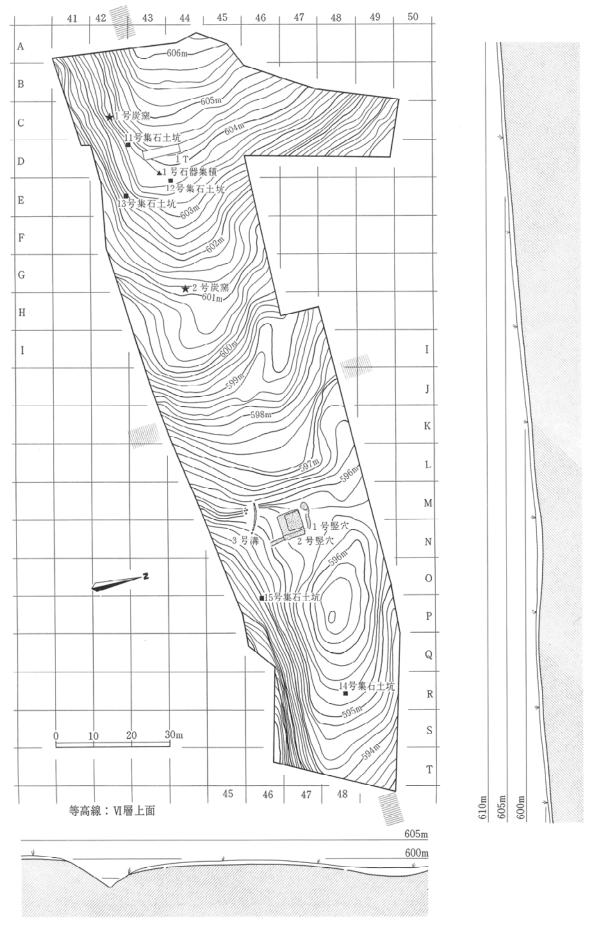
13号集石土坑

B地点I区42Eグリッドに位置する。礫の出土状況は12号集石土坑と同様であり、95点の礫を当遺構に関わるものとした。土坑の平面形が不明瞭で、礫が分散している状況も12号土坑と共通する。

14号集石土坑

B地点 I 区48 R グリッドに位置する。46点の礫からなるが、一次調査において脱落した数点が図の空白部分となっている。土坑の平面形は径 78cm 程度の円形を呈する。土坑は特に深く、礫の重量にも著しい偏りがなく、その他の集積土坑とは明らかに異なる。土器の分布状況から、前期前葉~中葉の遺構と考えられる。15 号集石土坑

B地点 $I \boxtimes 46 P$ グリッドに位置する。小形の礫が集まる主体部分とこれからやや離れて分散する礫 9 点の計 40 点からなる。主体部分は土坑の掘り込みが浅く、1 号集石土坑の状況と類似している。



第14回 B地点I区遺構配置図

(2) 土 坑 (図版2)

1号土坑

A地点Ⅲ区41 Pグリッドに位置する土坑である。VI層上面で検出された。下部がふくらむ、いわゆるフラスコ状土坑であるが、抉れは大きくなく一部が上端形より拡がるのみである。上端は径73cm程度の不整円形を呈する。遺物の出土はない。

2号土坑

A地点Ⅱ区20 Gグリッドに位置する。V層中から掘り込まれているが、一次調査の時点で南半の上端部を削られている。長径150cm、短径130cmを測り、不整楕円形を呈する。 覆土中位にはVI層土の堆積が見られ、人為的に埋められたと思われる。遺物の出土はない。

(3) 石器の集積 (図版 43)

1号石器集積

B地点 I 区 43 D グリッドに位置する。 3 点の稜磨石 (5 · 10 · 14) が密着して検出された。

(4) 焼土の分布 (図版44)

焼土1

A地点Ⅲ区42 ○グリッドに位置する。木の根が撹乱しているために明瞭でないが、160cm×120cm程度の 範囲に焼土の集積が6か所認められる。焼土の堆積は最大で5 cm あり、炭化粒(5 mm以下)が少量含まれ る。焼土下の土層に硬化・赤化は見られない。集石土坑の分布域に近く、押型文期の可能性が高い。

焼土 2

A地点Ⅲ区39 Lグリッドに位置する。Ⅳ層直下で検出された。焼土は径55cm程度の範囲があり、中心部は固くしまる。焼土の厚さは最大2 cmで炭化粒(径10mm以下)が少量含まれる。焼土の西側は炭化材(長さ50mm以下)を多く含む黒色土が三日月状に取り巻く。前期中葉有尾式土器が分布する区域にあり、該期の炉跡である。

焼土 3

A地点 II 区 I

B 古代の遺構

B地点 I 区で竪穴建物 2 基、溝状遺構 3 条、土坑 1 基、炭窯 2 基がある。 A 地点 I 区にはカマドの一部と見られる遺構が 1 基ある。いずれも I 層~ I 層上面で検出された。 B 地点の竪穴建物は関川谷内遺跡にあって、唯一傾斜のない平坦な面を占めて構築されている。中ノ沢遺跡の 3 基の竪穴建物と密接な関係にあると見られるが、緩斜面に位置するそれらとは選地を異にしている。むしろ、田口川に面している A 地点 I 区のカマドが、中ノ沢遺跡のそれらと同一の尾根上にあり、調査されていない中ノ沢遺跡~ A 地点 I 区の間にも竪穴建物が存在する可能性は高いと思われる。

(1) B地区の竪穴建物とそれに付帯する遺構(図版5・6)

 $47 \, \mathrm{N} \cdot 47 \, \mathrm{M}$ グリッド境界には重複する $2 \, \mathrm{E}$ の竪穴建物(H $1 \, \mathrm{F}$ 竪穴・H $2 \, \mathrm{F}$ 竪穴)があり、H $1 \, \mathrm{F}$ 竪穴の北側・東側にはこの縁辺と平行して溝状遺構(H $1 \, \mathrm{F}$ 溝・H $2 \, \mathrm{F}$ 溝)が掘削されている。さらに、H $1 \, \mathrm{F}$ 溝の西端にはH $1 \, \mathrm{F}$ 土坑が付随する。時間的にはH $2 \, \mathrm{F}$ 竪穴のみが古く、H $1 \, \mathrm{F}$ 竪穴・H $1 \, \mathrm{F}$ 溝・H $2 \, \mathrm{F}$ 溝・H $1 \, \mathrm{F}$ 土坑はH $2 \, \mathrm{F}$ 竪穴廃絶後に同時存在していたであろう。

H 1 号竪穴

焼失した竪穴建物跡である。表土直下から炭化物が密に散布していたため、建物の存在は明らかであった。平面形は明瞭でなく床の造成土によって東西4.7 m、南北3.7 mの規模が把握できる。柱穴は、調査時には炭化材が直立していた北西隅のものを認識しえたのみだが、2号竪穴のピットL・A・Gを1号竪穴の柱穴として図化した。北西隅柱穴内には環状の炭化材が直立する。これは丸太材であり、炭化しなかった中心部のみが腐蝕したのであろう。西辺中央にも三日月状の炭化材が直立する。しかし、これには掘り込みが伴わない。西辺北半と北辺西半には壁を構成していたと見られる板状の炭化材が垂直に立った状態で壁面に並んでいる。北西隅・南西隅の板材は厚さ15mm前後で面積も広いが、どの部分の建築部材なのか、あるいは調度品であるのか不明である。炭化材は南東部分にも角材がややまとまっている。これら炭化材の樹種については、第V章で記載しているように、ケヤキあるいはキハダである。カマドは東辺中央にある破砕礫部分を想定していたが、ここには焼土の堆積がなく、北西隅部に平面の長径55cm、厚さ8cm程度の焼土が堆積していた。

H 1 号溝 ・H 2 号溝

H1 号竪穴東側・北側に位置するごく浅い溝である。検出面は I 層中である。 H2 号溝東縁は H2 号竪穴の東縁と一致している。 2 条の溝は連結して機能していたであろう。

H 1 号土坑

長径2.2 m、短径1.6 mを測る不整楕円形の土坑である。土坑北側では圧潰した土師器長甕1個体(図版34-116)が出土している。

H 2号竪穴

H1号竪穴調査時には朧げな黒ずみとして意識されていたが、確認面をII層に下げて平面形を把握した。H1号竪穴床造成土下底とH2号竪穴床面の標高差は $20 \, \mathrm{cm}$ 前後である。東西 $6.7 \, \mathrm{m}$ 、東西 $5.8 \, \mathrm{m}$ を測る竪穴は、南北に横断する間仕切り溝に20 かれる。東の空間はさらに細い間仕切り溝が東西に走り、カマドのある空間と台石(長径 $55 \, \mathrm{cm}$)のある空間を区分している。台石は上面が露出するのみで深さ約 $30 \, \mathrm{cm}$ のピットに据えられている。台石に隣接するピットRには鉄銹塊(粒状滓?)が多く含まれており、東の空間が作業的な性格を持つことは明らかである。羽口・鉄滓等の出土もあり、 $2 \, \mathrm{5} \, \mathrm{Ext}$ でいたことが想定される。カマドは焼土の堆積が厚く、 $15 \, \mathrm{cm}$ 程度である。袖部は観察されず、煙道に使われていたと見られる偏平な赤化した礫が残存していた。北側には間仕切り溝に沿って最大 $5 \, \mathrm{cm}$ 程度の作堤があり、また東壁に接してピットI でいたは同一地点にあるが、下部のピット(I とは区分され

pit	底面標高	pit	底面標高	pit	底面標高	pit	底面標高
Α	595.595m	G	595.675m	M	595.778m	S	595.500m
В	595.244m	Н	595.499m	N	595.746m	Τ	595.490m
С	595.310m	Ι	595.217m	Ο	595.740m	U	595.520m
D	595.547m	J	595.535m	Р	595.190m	V	595.220m
E	595.195m	K	595.547m	Q	595.018m	W	595.268m
F	595.141m	L	595.750m	R	595.675m	Χ	595.810m

第1表 H2号竪穴ピット計測表

る。ピットは南東隅を除く3隅(I・P・Q)、北辺・南辺の中央(E・F)、西半南北軸上の一対(B・C)が深く、これらが柱穴に相当すると思われる。ピットN・O・Yは焼土が堆積する浅い皿状のピットで、その底面は硬化している。床面はIV層下部

から V 層 (赤倉火砕流堆積物)上面にあり、床は V 層土で極めて固く造作されている。なお、竪穴は土層断面 A-A、B-Bで4分し、それぞれを a 区~ d 区と呼称する。

H 3 号溝

46 N・46 Mに位置する轍状の遺構である。妙高高原町総合運動公園と池の平を結ぶ町道 256 号にほぼ重複する位置と方向にある。幅 40cm 前後の溝中に円形の落ち込みが連続する。南側 4 か所のピットは溝が一部のみ残存する。締まりのよい覆土は固い底面から剥離するように掘り出される。これは天水が轍を流れた結果であるが、円形落ち込みの形成理由は不明である。

(2) 炭 窯(図版7)

いわゆる伏窯であり、平面形が長方形を呈する炭窯である。頸南地域では上信越自動車道・国道 18 号上新バイパスなどに関係して多数調査でされている。この形態の炭窯は覆土中に焼山火山灰 (KG-c?) の認められるものがあり、平安期の遺構と推定されている [早津1994 b]。本報告書で放射性炭素による絶対年代が初めて公表され、第 V 章で記載するように 1 号炭窯は平安期の年代が得られている。端部中央が半円状に突出する長方形の形態をとり、長軸方向の底面はごく緩く傾斜する。長軸方向の底面中央には浅い溝が掘られるものもある。両端の突出はレベルの低い方が焚口、高い方が煙道であろう。また、底面の溝は焚口と煙道を結び、内部に空間を持たせることで火の回りを良くしていると思われる。炭は窯に材木を詰めた後に小枝・木の葉などで覆い、さらに土を被せて焚口から火を入れ、焚口を密閉することで焼かれる [遠藤1995]。窯の脇に不整形の土坑が伴う例 [武田1996] があるのは、窯を被覆する土が掘り出されたことを示す。

1号炭窯

B地点Ⅱ区42 C グリッドに位置する。古代の遺構の存在は一次調査で未確認であったために、重機がⅣ 層上面まで排土した状況で検出された。窯の形態は上述のとおりである。南側の壁面はわずかに赤化している。樹種の同定では材のすべてがコナラであった。

2号炭窯

B地点Ⅱ区44 Gグリッドに位置する。重機による排土作業中に窯の断面が観察された。破壊された北半を除けば、検出面はⅡ層上面である。南端のビットは大きく張り出し窯の内側も掘り窪められる。ピット東側は赤化しており、南側が焚口である。中央の溝は長く延びない。

(3) A地点の遺構(図版4)

1号炉跡

A地点I区6Cに位置する。赤化した大小の角礫7点、支脚と見られる棒状の円礫1点、焼土の堆積2か 所、平箱1箱弱の土器(9~10世紀)からなる。竪穴建物のカマド部分のみが残存した遺構と考えられる。

第Ⅳ章 遺 物

1 A地点の縄文土器 (図版8~14)

A 概要

I区ではI層・Ⅲ層・Ⅴ層に、Ⅲ区ではⅤ層に、Ⅲ区ではⅢ層・Ⅴ層にそれぞれ縄文時代の遺物が含まれている。層序の項で説明しているように、I層に中期後半以降の、Ⅲ層に前期末葉~中期初頭の、Ⅴ層に早期から前期中葉の土器が出土している。Ⅲ区の東端部ではⅣ層を欠いているために遺物の出土層位が不明瞭であるが、その他については、倒木痕などを除いて遺物の所属層位は明確である。土器の集中地点は大半が同一個体土器の散開であり、点数は土器の個体数を反映していない。土器の個体数は実測図の掲載数と大きく異なっていないと思われる。

I区の土器 V層は土器の分布が散漫であるが、早期の条痕文系土器、前期の羽状縄文系土器を中心に、計 246点の縄文土器片が出土している。このうち、102と同一個体の土器片が110点を占める。Ⅲ層は前期後葉の諸磯式系・十三菩提式系の土器、中期初頭の土器が10Gグリッド付近にまとまって出土している。 I区 I 層は8 D グリッド付近に中期末葉~後期前葉土器・晩期土器の散漫な分布がある。

Ⅱ区の土器 V層は I 区と同様に土器の分布が散漫である。計136点の土器片が出土がしており、早期の押型文系土器・条痕文系土器を主として、少量の前期羽状縄文系土器が混じる。これらのうち8と同一個体の土器が52点を数える。

Ⅲ区の土器(第15 図・第16 図) V層の出土土器がもっとも多く、1,750点の出土がある。分布の中心は西端部($B \sim E$ ライン付近)と東半部($L \sim Q$ ライン付近)北側とにあり、これら集中域の他は土器の分布は希薄である。西端部では押型文系土器と条痕文系土器が主であり、羽状縄文系土器はほとんど見られない。東半部は押型文系土器が広く分布するほか、39Mグリッド付近に羽状縄文系土器が密集する。Ⅲ層は東端部(42 P グリッド付近)で諸磯式系土器がまとまっている。東端部でIV 層が欠落しているのは、おそらくその時期に地形の改変がなされているためと思われる。

B 各 説

(1) 早期の土器

燃糸文系土器(1~6)

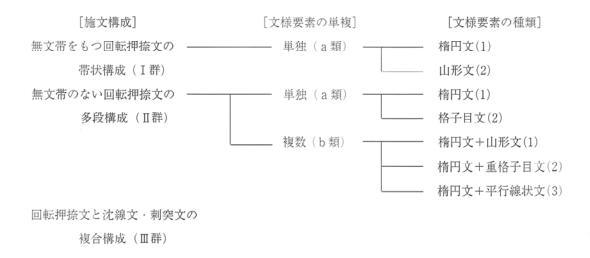
いずれも器体の表裏に縄文を施文する「表裏縄文土器」で、6以外は I 区の出土である。1 から5 は同一個体であり、図示した5 点のほかに8 点の小破片がある。縄文は単節L R で、外面は縦方向に、口縁部内面は横方向に原体を回転して施文される。 $2\sim5$ の内面に縄文は認められない。6 の縄文は単節 R L で外面は右下がりの斜方向に、内面は横方向に施文される。

押型文系土器 $(9 \sim 56 \cdot 62)$

押型文系土器は、施文構成によってⅠ群~Ⅲ群に大別され、これらは文様要素の単複と種類によって細分

される。以下の説明では、 Π 群 b 類 2 のように省略して呼称する。ここでの分類は破片単位、および同一と 認められる個体単位のものであり、器体全体の構成とは異なる。例えば、施文要素が単独である Π 群 a 類 1 が、別の文様要素を複合することは予想される。なお、破片が小さく施文単位の接する部分がなくても、無 文部が観察されなければ Π 群に含めている。

Ⅲ群は貝殻沈線文系土器の文様要素が複合する「異系統同居個体」であるが、便宜的に押型文系土器に含める。 I 群・Ⅱ群に共通する細分は適用しない。



I 群 a 類 1 (9・10・14・15) 9・10 はおそらく同一の個体で、9 下半の無文部は10 下端の無文部に一致すると思われる。10 は口唇上にも同一の楕円文が施文される。14 は押捺が不明瞭である。口唇上および口縁内面にも同一原体による施文がある。15 は縦方向に施文され、破片の左右端部に無文部が残される。

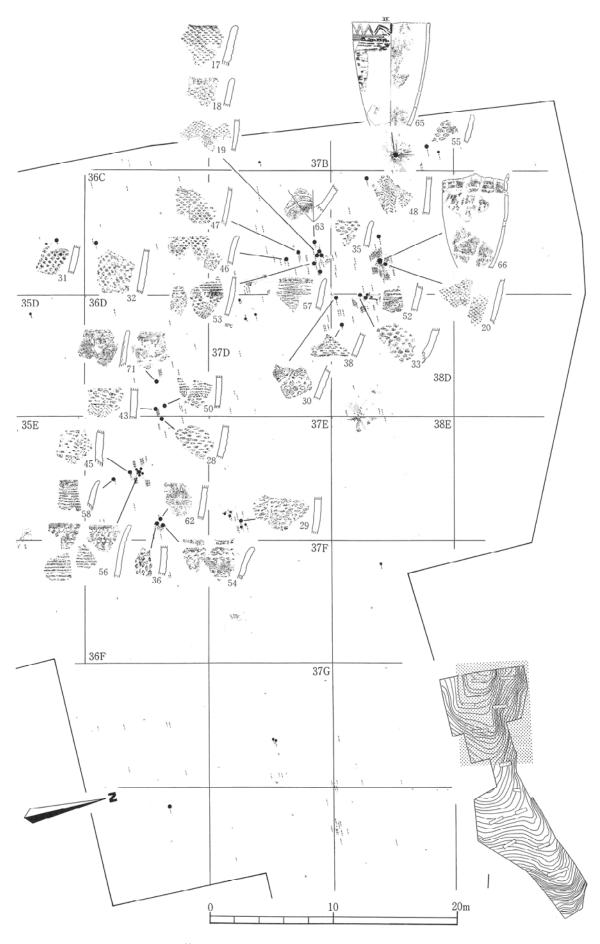
I 群 a 類 2 (11 ~ 13) 山形文が帯状施文されるものである。11 の山形文は $12 \cdot 13$ に比べて粗く口唇にも施文される。石英砂粒の混入の多さと内面橙褐色の色調は特異なものである。

Ⅱ群 a 類 1 (16~40) 16 は縦方向の回転押捺を主としており、その他とは区別されるべきものである。 16 は口縁外面に横方向の、口縁部に縦方向の楕円文が施文される。楕円文は細かく、凹凸が小さい。

17から 40 は横方向の回転押捺を主としており、 $23 \cdot 36$ のみ一部に異なる方向の施文が交錯する。 $17 \sim 20$ は同一個体と思われる。器体下半部には磨り消したような縦方向の擦痕が加えられる。18の口縁部は無文帯があるのではなく、土器製作時以降に削られた面である。胎土には細かい繊維痕がまばらに認められる。 $22 \sim 24$ は同一個体である。22 の無文部は調査時に切削を受けたもので、無文帯ではない。23 は異方向の施文がなされるが、それが部分的なものか、器面全体の構成によるものかわからない。おそらく、底部付近で施文方向が錯綜していると思われる。36 も施文方向が交錯している。 $25 \sim 27$ は同一の個体である。 $28 \cdot 29$ は同一個体であり、45 とも同一個体である可能性がある。34 は色調が $25 \sim 27$ に類似するが、楕円が横に細長く同一個体ではい。40 は尖端を除いて丁寧に施文されており、下半は原体を斜方向に回転させている。39 も施文は尖端を残すのみである。

Ⅱ 群 a 類 2 (41) 格子目文を密接施文する唯一の例である。原体の末端は格子目に沿った彫去処理がなされる。口唇は水平にナデられる。

Ⅱ群 b 類 (42~53) 複数の異なる原体が使用されるもので文様要素が多彩である。45は重格子目文と楕円文を併用しており、施文の順序は重格子目文-楕円文である。重格子目は中央に右下がりのレンズ状刻み



第15図 A地点Ⅲ区V層の土器出土状況(1)

を持つ部分がある。43~49は山形文と楕円文が併用されている。44は重層山形文2列とアミダ状線を複合 した原体と、楕円文の原体が併用される。前者は特に細密なモチーフが刻まれている。50~53は楕円文と 平行線状文を用いるものである。平行線状文は原体の回転押捺によるものであろうが、ややシャープさを欠 いており、軸に平行線を刻んだものか、軸に0段の紐などをまきつけたものかなど検討を要する。

Ⅲ群($54 \sim 56 \cdot 62$) 沈線文・刺突文が、口縁部文様帯を構成しているものと、器体の一部に用いられるものとがある。54は下端に 1 条の沈線が見られる。楕円文の端部は連続する山形としている。破片中央部の無文部は、押捺が深く達しなかったことによるのであろう。口唇上には半截管状工具(以下、管状工具)による爪形文が連続刺突される。55は管状工具による C 字状刺突が 2 列あり、その下に楕円文が施文されている。56は管状工具による連続刺突文と平行線状文が組み合わされる。連続刺突文は管状工具の背面を使ったものと内面を使ったものを交互に繰り返している。62は下端部左方に不明瞭な楕円文が 1 つのみ確認できる。貝殻沈線文系土器($57 \sim 61 \cdot 63 \cdot 64$)

沈線文のみが描かれたもの、貝殻腹縁の押捺があるものをここに含めた。 $57 \cdot 58$ については、沈線文が押し引きによるものと判断したが、紐状のものを軸に巻きつけて回転させている可能性も否定できない。 いずれにせよ押型文系土器の平行線状文と同様なモチーフを意図したものであろう。 $59 \cdot 60$ の沈線は細く、59 には3本1単位の爪形文が3単位加えられる。64 は月殻腹縁文のほかに横方向の擦痕が見られるのみである。 条痕文系土器 $(65 \sim 71)$

65は口縁部に絡条体押圧による2条並列の山形モチーフを連続させている。山形モチーフの間には何ヶ所かに縦位の押圧を挟むようである。山形モチーフの下位には、2条の絡条体押圧・絡条体による連続方形モチーフ・3条の絡条体押圧が置かれる。胴部は内・外面とも比較的細密な条痕調整が、横方向または斜方向に施される。絡条体の押圧は口唇にもなされる。器面の繊維虚痕はきわめて少ない。66は65と対照的に繊維虚痕が特に著しく、混入していた繊維も紐状に太いと見られる。口縁部には横位3条の絡条体押圧が、胴部上半には方向が一定しない絡条体押圧が施される。口縁は何ヶ所かを波状に突起させるようである。胴下半外面には斜方向の条痕調整がなされる。67は縦位3条・横位1条のの絡条体押圧がなされる。内面は横方向の条痕調整。繊維痕が特に著しい。69の裏面は粗大な条痕調整。裏面の繊維痕が著しい。70は外面のみの条痕調整。71は繊維痕が特に著しく、内面が大きく剥落している。

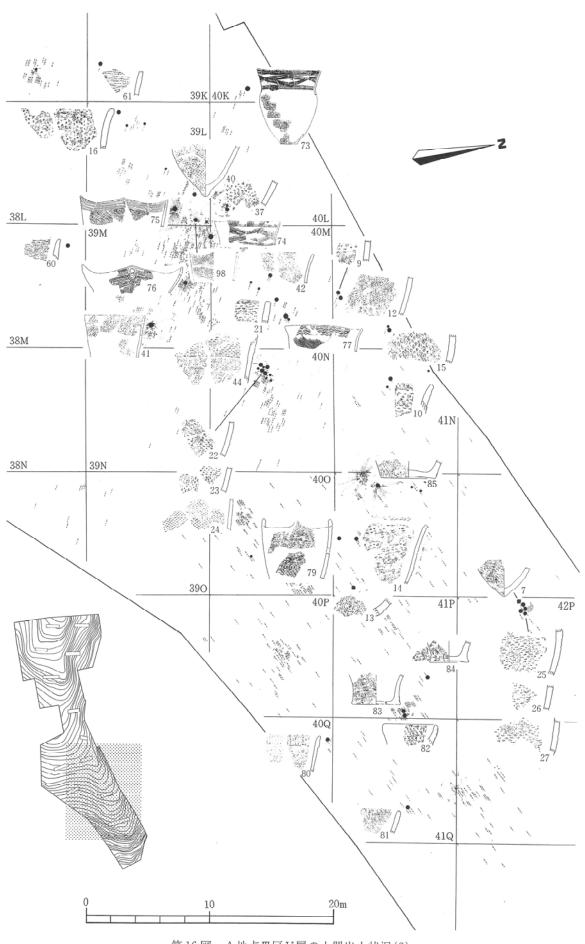
その他の土器 (7 · 8)

7の縄文は明瞭でないが、単節LRで縦方向に施文される。押型文並行期あるいは前期初頭の土器であろうか。8は縦方向のナデ痕が著しい無文の土器である。撚糸文系土器終末の無文土器である可能性を考えたが、質量感が乏しく緻密さに欠ける胎土は、Ⅱ群の押型文系土器に共通するように思われる。

(2) 前期の土器

羽状縄文系土器 (72~85)

有尾式・神ノ木式に相当するものを一括した。72 は短い片口を持つ小形の深鉢である。背面側口縁には 1 対の補修孔がある。縄文は単節 R L を横回転して施文されるが、密接していないために部分的に無文部として残る。73・74 は口縁部の文様構成が共通している。口縁部は平行沈線で挟まれた菱形のモチーフを、その上端は縦位平行沈線を置いており、平行沈線は同一の管状工具で描かれる。73 は平行沈線上に管状工具に よる C 字状文が加えられる。菱形モチーフの頂部にあたる口縁は鋸歯状に作り出される。74 は口縁部復元円 周からすると、菱形モチーフが 6 単位めぐるものと考えられる。菱形モチーフの頂部には小波状の突起が付



第16図 A地点Ⅲ区V層の土器出土状況(2)

される。75 は波状の口縁に沿って4条の凹線が描かれる。76~78 はコンパス文が描かれるものである。76 は口縁部上半を管状工具の連続押引き文で挟まれたコンパス文とし、下半をコンパス文の変形した平行蛇行沈線(波状文)としている。波頂部には円形の凹陥を配し、管状工具の連続押引き文を垂下させる。77 は 3 列のコンパス文とR L 縄文で施文される。78 にも平行蛇行沈線が描かれる。79 は器体上半に絡条体条痕あるいは櫛歯状工具による菱形のモチーフを描き、それに沿って同一の工具による連続押引きを加えている。連続押引きは口縁と器体中位にも配されて、縄文地文とする器体下半を区分している。80は口縁に粗大な櫛歯状工具あるいは絡条体による連続押引きを施し、その下位に条痕文状の平行沈線を沿わせている。地文は単節R L の縄文である。81 は平行沈線で菱形のモチーフを描き、口縁には管状工具背面の連続刺突を施す。82 は小形の椀状土器である。器面全体を管状工具の刺突で充填している。83~85 は有尾式・神ノ木式土器の底部と思われる。いずれも底端外周には爪形文がめぐる。85 には木葉圧痕が見られる。

諸磯式系・十三菩提式系の土器 (86~94・115)

86は波状の口縁に沿った3条のソーメン状貼付けをヘラ切りの沈線で細かく刻み、結節浮線文を擬えた文様を作り出している。それ以外は結節の羽状縄文を地文としている。87は結節状浮線文によって矢羽状・レンズ状のモチーフと平行垂下線を描いている。88は口縁部上半に粘土紐貼付けで環状・「X」字状・凹レンズ状のモチーフを描き、屈曲位置と口縁部下半中央に押圧隆線を置く。口縁部下半には、管状工具の背面による刺突が充填される。89は口縁部が平行沈線で区画され、その内部に平行沈線の波状モチーフが描かれる。胴部はレンズ状のモチーフを4単位巡らせていると見られ、その中間の口縁部には耳状貼付け・円形貼付けがなされる。RL縄文を地文とする。90の文様はすべて管状工具による平行沈線で描かれる。胴部上半は同心円文を描き、下半はおそらく縦のレンズ状文であろう。左右の側面には6cm程度の間隔を置いた剣先状の狭い凹面が残される。91は中央の垂下帯を挟んで左右に矢羽状文を置く構成をとる。施文は管状工具による平行沈線の上にへラ切りの沈線を描く手法をとる。垂下帯の中央と矢羽状文の間隙には太い凹線が引かれる。92の隆帯貼付けは90と似た同心円文を描いていると思われる。口縁上の円形貼付けはおそらく波状口縁の波底部に置かれている。93は口縁に沿って連続刺突沈線で文様が描かれる。94にも円形貼付けがなされている。115は単節RL地文の上にすべてソーメン状貼付けで斜格子目文・平行線文・ジグザグ文が描かれる。

その他の縄文施文土器 (95~113)

前期中葉~後葉の土器であるが、42ライン付近のものは出土層位が不明瞭であり、ここで一括する。しかし、111以外は前期中葉の土器(有尾式・神ノ木式)に伴うものであろう。102は撚りが逆の撚糸を2本単位で軸に巻きつけ回転施文したもので、撚糸文は菱形のモチーフを描いている。108は破片上端に平行沈線が見られる。109は口唇上に管状工具による連続刺突がなされる。

(3) 中期の土器 (116~119)

新保式期に相当する中期初頭の土器がI区で出土している。117・118はいわゆる斜格子目文をもつが、前者は右下がり平行沈線+左下がりソーメン状貼り付けであり、後者はソーメン状貼り付けを用いない。117 は半隆起線上に絡条体圧痕が施される。119は口縁部上半に文様が集約され、平行沈線に挟まれた口縁下の狭い無文帯には波頂部にのみ三角陰刻がなされる。正面波頂にはY字状の貼り付けが垂下する。三角陰刻は波底部にも平行沈線に接して2個1単位でなされる。また、口縁と口縁部屈折位置には絡条体圧痕が施される。大波状を呈する器形は新保式に一般的なものではなく、異系統の土器であろう。116は口縁に付けられ

た大形の亀頭状中空突起である。卵形2面・三角形1面で構成される突起は口縁に対して捩じれた形で置かれ、三角形面に三角形の透かしが、卵形面に円形の透かしが彫られる。透かし以外は半截管状工具による平行沈線で施文される。

(4) 後期・晩期の土器 (120~124)

123 は三十稲葉式土器の橋状把手である。120 は器体上位に沈線で区画された帯縄文が描かれ、口縁部の 隆起線上に列点を加えられる。堀之内式並行期の土器である。121 と条線文のある 122 は中期末から後期前 葉の粗製土器である。124は晩期の粗製土器であろうか。ナデとヘラケズリによって器面調整されており、砂 粒の移動痕が著しい。口縁は外面に折り返している。

2. B地点 I 区の縄文土器 (図版 15·16)

A 概要

V層には総計650点あまりの縄文土器片が出土している。244点が集中するの西端部(A~Eライン)は、早期の土器がまとまっているものの、A地点Ⅲ区と同様に羽状縄文系土器は見られない。西端部以外は分布が散漫であり、若干の押型文系土器が混じるほかは羽状縄文系土器が多数を占める。45 H·48 Q付近では羽状縄文系土器が比較適まとまっている。Ⅲ層では48 Nに中期前葉の土器が1 個体出土している。

B 各 説

(1) 早期の土器

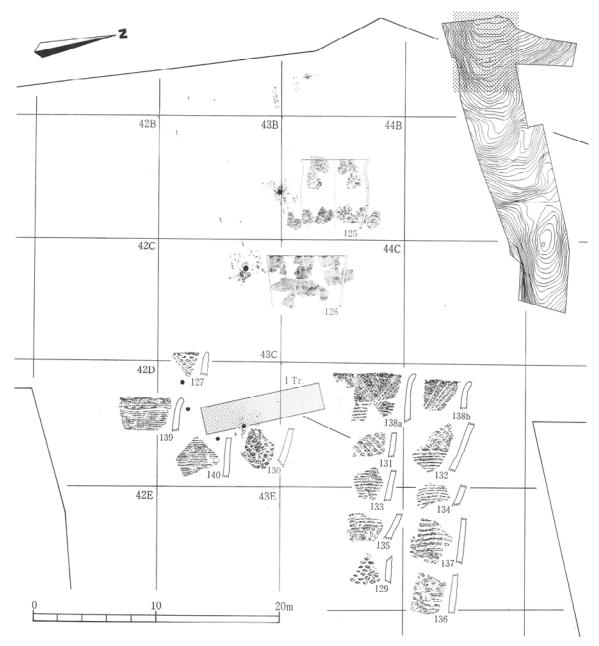
撚糸文系土器(125)

125 は 43 B・44 B グリッドでまとまって出土した表裏縄文土器である。出土層位は VI a 層であるが、 VI a 層に包含されていたものか、VI a 層上面から掘り込まれた皿状の土坑を確認できなかったのか、解釈が分かれる。外面は基本的に単節 L R 原体の縦位施文がなされるが、一部に横位・斜位施文が見られる。内面は同一原体の横位施文とし、最大幅 4.5 cm 程度の範囲で施文される。口唇・口縁外面にも縄文が施文される。押型文系土器(126 \sim 140)

分類と記述はA地点に従う。

Ⅱ群 a 類 1 (126~130) 施文原体は楕円陰刻に合わせた波状の末端処理をしており、横位施文の重複部分は明瞭である。

Ⅱ群 b 類 3 (131~140) 131~135 は同一個体である。いずれも器体下半部と思われ、平行線状文と楕円文が交互に施文されている。136・137 は同一個体である。平行線状文・楕円文は粗大で、平行線状文の凹部は縦方向の筋目が観察される。 A 地点の土器と同様に、平行線状文の施文原体については検討を要する。 Ⅲ群 (138~140) 138 は口縁部には 3 条単位の山形沈線を置き、それ以下を原体回転押捺の平行線状文としている。口縁部の列点は沈線を描いた後に加えられる。平行線状文は 131~135 とよく似ており、これと同一個体である可能性も残される。139・140は同一個体であろう。原体の回転押捺による平行線状文を主とするが、肥厚した口縁の下端に押引きの沈線が引かれている。 Ⅲ群としたが、沈線文が口縁部文様帯を構



第17図 B地点I区V層の土器出土状況

成している138とは異なる。

条痕文系土器 (141~143)

141はヘラ描きで格子目が描かれた丸底あるいは乳房状の土器である。型式不明であるが、条痕文系土器であろう。底部付近は格子目が錯綜している。142は8条の絡条体側面圧痕が認められる。圧痕は直線的に連続しておらず、絡条体をずらしながら重複させている。144は破片中央部に横位の絡条体圧痕、上部に絡条体圧痕による山形のモチーフが置かれ、下部は撚糸文Rである。144の裏面に条痕調整は見られない。

(2) 前期の土器 (145~153)

145のみ前期初頭の土器であり、その他は中葉の羽状縄文系の土器である。前期後葉の諸磯系・十三菩提系土器は全く出土していない。145は管状工具背面による連続刺突が口縁部と胴部部を区画している。口縁

には丸棒状工具側面の押圧が連続して施される。146の上端は丸棒状工具先端の交互押圧で蛇行隆線が作り出される。147はループ縄文の条が菱形をなすように施文されている。150は口唇にも縄文が施文される。151は管状工具背面の連続刺突で口縁部が区画され、その内部にU字形のモチーフが配置される。口縁は丸棒状工具の側面押圧によって鋸歯状に作り出される部分がある。153は櫛歯状工具先端の連続刺突で環形・十字形のモチーフが描かれる。

(3) 中期の土器 (154~156)

154~156は同一個体である。半隆起線で2帯に区分された口縁部は、上位をヘラ描きの格子目、下位を 無文とする。縄文地文とする胴部には隆帯が垂下する。中期の土器はこの個体以外に存在しない。

3. 縄文時代の石器

A 分類と記述

(1) 器種·種別

ここでは、分類や呼称等に必要があるものについて記述する。記述のないものは、基本的に中ノ沢遺跡[立木(土橋) 1997] の器種・種別に従う。

稜磨石

従来、特殊磨石と呼ばれてきた石器であるが、本書では「稜磨石」と呼称する。稜磨石が石器全体に占める割合いは著しく高い。横断面でみると角に当たる部分(稜)に残された細長い使用痕跡が特徴的であり、磨石類と区別する。偏平礫の場合は側縁・側面を「稜」として扱う。厚みのある柱状・棒状のほか、偏平な板状の礫も素材として多用される。横断面の形状は厳密に言えば多角形であるが、元の素材の形状から三辺(三角)形・四辺(四角・台)形・円形・楕円形に分けることができる。使用痕の識別基準は清水上Ⅱ遺跡 [鈴木俊成 1996] を参考にして以下のように設定した。

- 摩耗痕 磨れてつぶれた痕跡。スリ・コスリだけでなくタタキ的な作業も含めた複合作業の結果と考えられる。使用面は平坦に細長く残る。素材のカーブの名残か、やや曲面的な場合もある。比較的滑らかな場合と微細な凹凸の集合でザラつく場合とがあるが、これは使用の程度と石材によるものと考えられる。強い衝撃によると考えられる剥離が周縁につく場合もある。
- 磨 痕 滑らかに磨り減った痕跡。素材の表裏面に比較的広い面積で残る。石の素材のカーブを残す場合、 平坦な場合、使用が進めば凹む場合がある。摩耗痕とは区別する。
- 敲打痕 稜磨石では端部に見られる微小な凹凸の集合で、たたきつぶれた痕跡。摩耗痕のような滑らかさ や、局所的な凹陥部はない。周縁に剥離がつく場合もある。
- 凹陥部 局所的に凹陥した部分。単独で集中的に深いものや複数の凹みが集中して広い範囲を占める ものもある。敲打の結果できた痕跡と考えられるが、断定はできない。
- 上記した使用痕の組み合わせによって、以下のようにA~Dの4類に大別できる。
 - A類 稜上の摩耗痕と端部の敲打痕を併せもつもの。稜上の摩耗痕については、1(1稜のみ)・2(1稜であるが、摩耗痕が2面に分かれるもの)・3(2稜)・4(3稜)に細分する。端部の敲打痕につ

いては、a(一端のみ)・b(両端)に分け、これらを組み合わせてAlaのように表記する。

- B類 A類と同様な稜上の摩耗痕と端部の敲打痕のほかに、磨面があるもの。
- C類 稜上の摩耗痕のみもつもの。稜上の摩耗痕についてはA類と同様である。
- D類 稜上の摩耗痕を残すが、A・B・C類とは異なる痕跡を残すもの。また、素材の形状が磨石類的な 円礫であるもの。

実測図は、原則として最大面を底面(裏面)とし、稜の摩耗痕の少なくても一つが右側にあるように置いた状況を正面図とした。摩耗痕のある面を正面とした場合、素材の形状や使用痕の位置などについて十分に表現できないためである。端部に敲打痕がある場合はその面(上面・下面)を表現した。使用痕については正面図と断面図に範囲を図示した。

磨石類

素材となる円礫や偏平礫に磨痕・凹痕・敲打痕が残るもの。本遺跡でも、同一個体上に複合した使用痕跡を併せ持つ場合が多く、従来、磨石・凹石・敲石と呼ばれてきた石器すべてを含む。使用痕の識別基準は稜磨石の基準に、使用痕の組み合わせによる分類については清水上遺跡[高橋保雄1990]に拠る。

A類 磨痕のみ(狭義の磨石) B類 磨痕+凹陥部 C類 磨痕+敲打痕

D類 磨痕+凹陥部+敲打痕 E類 凹陥部のみ (狭義の凹石) F類 凹陥部+敲打痕

G類 敲打痕のみ (狭義の敲石)

礫器

偏平な自然礫や、片面に礫面を多く残す分割した厚手の剥片を素材として、側縁の一部あるいは周縁に片面あるいは両面から連続的な二次加工を加えて刃部を作り出したものである。使用痕と見られる微細剥離やツブレは、二次加工が施されていないところにもあることから、鋭利な断面の縁辺も刃部として利用したと考えられる。以下のような特徴が観察された。

- 素 材 一般には偏平な自然礫そのままを使用することが多いが、本遺跡では偏平な自然礫をそのまま使 用したものはなく、片面に礫面を残す厚手の分割した大型剥片を主に素材としている。 両面加工 の場合、礫面がほとんど見られなくなる。
- 二次加工 片面加工と両面加工がある。片面加工には礫面を残して分割剥離面 (主要剥離面) 側に大中の剥離を施した場合と、分割剥離面はそのままで礫面側に大中の剥離を施した場合の、二種類が認められる。刃部に対する側縁は礫面や折れ面のままである場合と、大型の剥離が施されている場合があり、持ち手(基部)を意識していると考えられる。また、幅広い素材の長い側縁を中心に加工して長辺形や楕円形を呈するものと、寸詰まり素材の周縁に加工して四辺形や円形を呈するものが見られる。

以下のように分類できる。

- A類 片面加工のもの。二次加工の位置によって、1 (分割剥離面側に二次加工を施し、礫面を多く残す もの)・2 (礫面側に二次加工を施し、分割剥離面をそのまま残すもの)・3 (正裏面とも剥離され ているが、側縁に礫面を残す厚手の剥片に、片面だけ加工を施すもの) に細分される。
- B類 両面加工のもの。二次加工の位置によって、1 (礫面を片面一側縁以上に残したまま、両面に二次加工が施されているもの)・2 (一側縁のみに礫面を残し、あとは正裏面も含めすべてに二次加工が施されているもの)・3 (礫面を片面に若干残すが、側縁はすべて二次加工が施されているもの)

に細分される。

また、A類・B類ともに二次加工が施される位置は、a(一側縁)・b(互いに接する二側縁)・c(互いに向き合う二側縁)・d(一側縁を除いた周縁)・e(全周縁)があり、これを組み合わせてB2aのように表記した。実測図は素材によって置き方がまちまちであるが、原則的には刃部と思われる部分が側面図・断面図に表されるようにした。

不定形石器

従来、「掻・削器類」・「スクレイパー」・「二次加工のある剥片」・「使用痕のある剥片」・「微細剥離のある剥片」・「不定形剥片石器」等とよばれている石器。清水上遺跡の細分基準[高橋1990]を参考にして、素材の形状や二次加工によって分類を行った。

- A類 長めの剥片の素材形状を残して、周縁部に急角度の二次加工を連続的に施したもの。清水上遺跡 の不定形石器 A 類に相当する。
- B類 長めの剥片を素材として、周縁部に浅く急角度の二次加工を連続的に施したもの。箆状石器や打製石斧に類似する形状を作り出しているが、それと断定しがたいもの。
- C類 小型で浅い二次加工あるいは使用による小剥離が見られるもの。清水上遺跡のH類に相当するか。
- D類 刃部の二次加工は施されず、使用の結果と考えられる微細剥離痕などが認められるもの。清水上 遺跡の I 類に相当する。
- E類 他の剥片石器とは異なる砂岩質の素材で周縁の剥離と端部の明らかな磨耗が見られるもの。砥石 あるいは擦切石器的な機能が想定されるが断定しがたい。

に砕片として区別した。

原石

石器、特に剥片石器の素材として遺跡に持ち込まれた小形の石。人為的な剥離作業は行われていない。 円礫・角礫

本来、遺跡の土中に含まれない円礫あるいは角礫。円礫は稜磨石や磨石類の素材と考えられる。

(2) 石 材

本遺跡出土の石器石材は、礫石器と剥片石器はともに安山岩が主流である。同一岩石と判断されたもののうち、肉眼観察により細分が可能なものをさらに分けた。ただし、この細分は便宜的なもので厳密な意味での岩石名ではない。

安山岩 特徴的に含まれる鉱物などにより、以下のように分けられる。

- ①多孔質角閃石安山岩 ガスの膨張・逸散により生じたと考えられる球形に近い孔が全体的に見られ、 海綿状を呈する。二次的に鉱物などが溶脱したと考えられる細長い孔もある。有色鉱物の中でも角閃石 が目立つ。
- ②角閃石安山岩 有色鉱物、特に角閃石を多く含む。海綿状ではないが比較的多孔質である。
- ③多孔質安山岩 海綿状ではないが、非常に多孔質なもの。有色鉱物はそれほど見られないが、細長孔 の見られるものが多い。
- ④安山岩 以上3種類のように顕著な特徴が見られない安山岩。多かれ少なかれ気孔はあるが、有色鉱物はほとんど見られない。細長孔の見られるものが多い。
- ⑤玄武岩質安山岩 他の安山岩より細粒・緻密で、比重が大きい玄武岩質の安山岩。短冊状の孔が多く見

られるものとほとんど見られないものがある。やや暗色味に欠ける。

無斑晶質安山岩 黒色から灰色の暗色味の強い緻密な安山岩。斑晶はまったくないというわけではないが、 あったとしてもごく小さい。ガラス質安山岩ともいわれる。A~Hに細分したが、類似点も多く明瞭に区 分できないものもある。

- A 緻密でガラス状の斑晶が目立つ。気孔も多い。暗色。
- B ごく緻密。Aよりは目立たないがわずかに斑晶や気孔がある。暗色。
- C ごく緻密で多孔。ガラス質の石基。風化のためか明色。
- D 気孔はほとんどない。ガラス状の斑晶。節理が発達している。暗色。
- E Bに似る。気孔は多いが斑晶は見えない。
- F Dに似るが、斑晶は見えない。
- G 節理が非常に発達して粘板岩状であるが、片状にはがれるものではない。「貝殻状の弾痕」と「水磨 した自然面にツメのような傷がある、いわゆる「ツメ石」[中村1995]である。
- H 気孔はごく小さく緻密。斑晶はごく小さい。風化している。
- 砂岩 均質な砂粒が膠結されてできた石。主に明色。
 - ①硬砂岩 特に暗色で堅硬な砂岩。砂粒の円磨度は低く、岩片や有色鉱物などが淘汰されずに含まれる。
 - ②花崗岩質砂岩(アルコース) 花崗岩質の長石や石英を多量に含む砂礫が膠結されてできた石。
 - ③石英質砂岩 泥質の基質に対して石英の割合が非常に高い明色の砂岩。
 - ④砂岩 以上3種類のような特徴が認められない一般的なもの。

黒曜石 以下の3種が認められる。

- A 黒色が強い。透明感がある。
- B 茶色がかっている黒色。透明であるが、若干濁りがある。縞模様が見えるものもある。
- C 黒色だが白濁していて縞模様が見える。
- 凝灰岩 火山灰を主成分とする堆積岩の一種。頁岩に近いが火山灰ガラスを含み、比重が比較的軽い。
 - ①細粒凝灰岩 白色から黄色で非常に細かく緻密。いわゆる「火山灰ガラス」はそれほど多くない。
 - ②凝灰岩 白色。細粒凝灰岩ほど粒子は細かくない。
 - ③珪質細粒凝灰岩 珪化して硬質になっている。

B各説

(1) A地点の石器 (図版17~25)

A地点で出土した石器は、道具としての石器が102点、石器製作に関わる剥片・砕片が54点、石核が8点、原石が1点、円礫・角礫が56点、玉未成品が1点、その他が2点の計224点である。出土する層位は土器と同様であり、集中地点は土器の出土状況とほぼ合致する。

I区の石器 35点が出土した。少ない総点数の中でも、北東部のV層以下に分布の偏りがある。11 I グリッドのI層・Ⅲ層に黒曜石の剥片がまとまるが、ほとんどはV層から出土する稜磨石である。稜磨石は11~13 ラインのV層に多く、14点中7点が出土した。

Ⅱ区の石器 V層以下から27点が出土した。道具としての石器は少ない一方、搬入された円礫・角礫が10点を数える。

100		(~			-	N -	-		23	70	1.	*		53			N -	v s	2 6		12	^)		-1-		-		×	2 =	1 000	64	99		18	- 6	÷		m	5	-	00	23	4		2) 3	130	224	, c
ξņ																																															.4	ぞれ上部・下部・下底である。 (序)の区別がないものを会めたV陽出+占数の私であり
型																		I																			-		-	1-					3	20		(金)(2)
3	(英			-					9	-	2							1					-	7			-	1	4 35	22	-	ŀ	4	25	1				1,6	+	-	ω,		4	2000	7. 2.4. 3.4.	(46)	+
N層		ıc			-	27.	- -	1	F	2	m	-		(27)			-	7	-	-	(2)	2			-	-		-	100	- E		n	\perp	(9)	- 0	2		_	2	\perp	00	8,	1		100000	(57)	(101)	2 Λ·
Ιŀ	+	-	1	Н		_	1	-	100	┡	-			(6)			7	-	1-	1	(\$)			1	+			_			_	+	4	9		_	1		L	+	Н	=	+			8		50°
180	i i	7	-		7	~].	7	+	23	-	20	-	_	ଛ		_	21	40	10	3	* **	~		7	+	-		70	7	-	2	m :	2 -	***	- 6	2 -	_	2	9	1	7	1 48	7	-		2 107	197	それぞれ上部・下部・下底である。 (下) (庫) の区別がないものを会め)
N W	+	+	\vdash	Н	+	+	+	+	+		-						+	+	+	+			-	+	+	+	H	+	88			\perp	+		+	+		H	3			4	+	H			.04	N - N
H 80	1	+	+	Н		+	+	+	+	\vdash	-	H			H		+	+	+	+				+	+	+	Н	+	- 22		Н		+		+	+	+	H	+	+		+	+	+	- 5		64	海上· 河水
II 88	1	$^{+}$	H	Н		+	+	+	+	H	-	, ,,		XS#			+	$^{+}$	\dagger	+				+	+	+	Н	+	8888				+	::::::::::::::::::::::::::::::::::::::	+	+	+		u	9	Н	+	+	+	1	1/2	00	上部区
-																														100			***	-													-	たぐれ (単)
																														100																		V層欄の(上)(下)(底)は、それ &錮本区のV區の計((下)(下)
- Gra		ĸ	2	Æ		<i>,</i> —			100	1	Sep	00	ee4	35			C)	ege (c	0 4	e. e.		.63		-		4 244	***		27 0	2	2	67	oc. w	13	Arrest C	0		2	76	D AH	9	37	A	4		93	162	(原)
																																																(F)
乱土坑		+	1			4	4	+	+	L	L	L	L				4	+	+	+				4	+	+	Н	+	000		_		+		_	+	+		+	_		Н	+	+	-	m		(E)
推乱	(英)		-	_	Н		+	+	6	1 -		-		(9)			-	_	+	+	200				+	+		-	- 2		_	Н	2	(4)		+	-		-			2	-	_				新 で り
I ⊢	_	cr	2		_	_	-	+	00	╀	100			(61)		Н	_	23	+	+	1000	2	Н	+		-	-	-	- 100	(0)		2	1	(4)	_	200		_	-	51	m	Н	+	-		(42) (16)	3	
S A	(F)	+	+	H	Н		+	+	-	-	-	.	-	0		Н	_	_	-	+	(4)	1_	Н	+	+	+		+	2000		-	Н	~	(1)	H	+	-	-	+	+	Н	11	+	+		(13)	(34) (75) (34)	1
lŀ	岩	ıc	,				+		14		2 -4		-	25.			63		9 -		1	-			-		-		7 2 2 2	25	67	C-3	∞ -	- 00	_ (~ -	+	C-3	cc	55	Н	33	-	+		₩ 23	150	
N 788		\dagger	t	T			1	\dagger	t	t	t	t	r					†	†	Ť				T	Ť	t	H	T	- 0		t		+		H	Ť	t	П	1	+			1	T	-	*****	C4	
82 11		Ť	T	T			1	Ť	Ť	F	t	T	T					1	Ť	T	1000				Ť	T			0.0000		T									7		0				600	ಹ	
1 88	1																												100000					10000					0	7						0.0	en.	
-			4						0	3		4		4						-4	-							ent.		-			ert.	2						O		1	Ca			18	26	
124									6					-01																				358								2				Sec.		
200	(原)	+	+	H		Н	-	+	Ť	+	+	+	H			H	Н	+	+	+	3		H	Н	+	+	H		- 6		+		7	(1)		+	+	Н	-	4	\perp	6	_	+	1 1	2)	⊛ ⊛	
-	(E)	+	+	+		Н		+	+	+	+	+						+	+	+					+	+		H	- 2		+	H	+	900		+	+		+	+	H		+	+	\parallel	Ξ	0	
1	<u> </u>		64			aren l	yees.				0	a m		7																	4			2				A YOU		5 2	6.0	2			l.	19	32	
***	9																													1000000																	(,,	
+ 558	78.		T	T									Ī																0.00								-	4								-	****	
-	(逆)	Ť	Ť	Ť	T			1	-	9	-	1	Ť	(8)		T			1	Ť			T			T	Ī	П			T						T			Ť		-		T		(3)	9	
150	(F)	-	-				-		c	2		T		(9)																-	-			(8)												(1)	(8)	
NΒ	(王) (上)									1				3(2)																			-	24% 973 947						-					-	(3)	(4)	
\vdash	i c	-	1		Ĺ	-		ŀ	- 1	1	-			259									Ĺ					Ц		-	-		-	99						77	-	m	-			15-	~	
B	1						Ц											Ц			100							Ц											Ц	4	_	-		-		9	.0	
100	1	_	1	1			Ц	_	1	1	1	1	1			L		Ц		1	100		L			1	1	Ц			1			1000			1	-	Ц	1	_			1	\perp		.cu	
1	-	_	et -	1 -	10			Cest 1	1	1		1		41		L		Ц	_	1	200		1-			0 0	1	Ц	7		_	L	Ц	1000			1	_	Ц	m	_	L	Ц	_		00	ശ	
	/	分類	A La	A 2 3	A 2 b	A 3 a	A 3 L	A 4 5	m .	٠ د د	3 0	3	大田		×	e e	U	田	(T.	5	F-1	4	A 2 8	A 2 k	A 3 s		220	B 3	B 3 d		1 CC	O		2														
		器種・種別	\top						T	T				riban Graza	Г				1		200	4				T				Guz.	Œ			2000 (0000										T		ż	ilia seo	
/		dmst 1					П								磨石箱	×												П	- [:		小疋形石商		П		製石斧	纵		石鎌	0% 0%				П	Π.			#2	

第2表 A地点 縄文時代の石器一覧

Ⅲ区の石器(第18図) 161点が出土した。Ⅳ層以上の出土は10点であるが、Ⅴ層では150点を数える。 分布の中心は土器と同様、西端部(B~Eライン付近)と東半部北側(L~Qライン付近)とにある。西端 部では、Ⅴ層下部から下底にかけて稜磨石・礫器・円礫が多い。磨石類は1点のみであり、剥片石器の数も 少ない。稜磨石の接合資料が1組出土した。他に比べれば少ないが、Gライン付近でも若干のまとまりがあ る。

東半部北側は当遺跡内で最も石器が集中する範囲であり、特に40〇・41〇グリッド付近でまとまる。稜磨石は25点のうち6点がV層上部で出土したほかはV層下部・下底である。一方、磨石類は7点中4点が V層上部で出土した。礫器はV層上部での出土はない。なお、石核と剥片の接合資料が2組確認された。

稜磨石 (1~50・54・56)

計53点が出土しており、小破片1点のほかはすべて図版に掲載している。

A類 稜上の摩耗痕のほかに、端部に敲打痕を併せ持つもので13点出土している。

A 1 a 類($1\sim4\cdot6\cdot7$) 6 点出土した。 1 は摩耗痕上部に剥離痕が見られる。摩耗痕の触感はザラついているが、凹凸のない滑らかな面である。敲打痕は微細な凹凸の集合でつぶれている。 2 の摩耗痕は平らな裏面側では明瞭であるが、高まった表面に向かって境界が漸移的ではっきりしない。 3 は下面に著しい敲打痕がある。上面にも若干敲打らしい痕跡が見られるがはっきりしない。摩耗痕の幅は狭く、長さは稜の端まで及ばない。 4 の摩耗面は平坦で滑らかな長い面をなしている。周縁に小剥離がある。 6 は左側面には敲打した後に磨ったような痕がみえるがはっきりしない。 7 は素材が厚いので摩耗面の幅も広い。敲打痕から表面にかけて連続した剥離が走る。摩耗痕はツルツルしているが敲打痕はザラザラしている。表面全体が煤けている。

Alb類(8) 摩耗痕の周縁に小剥離がある。左表面に黒い付着物がついている。

A2類 $(9\cdot10)$ 9 は隣接する摩耗面が一体化して幅広になっている。表面に黒色の付着物が薄くつく。 摩耗痕の触感はザラザラしている。約1/2欠損しており一端の敲打痕しかわからないが、とりあえずA2 a 類としておく。10は両端に敲打痕をもつA2 b 類である。隣り合った面の摩耗で幅広い面を示す。左側の稜 も摩耗らしい痕跡が見られるが、不明瞭である。両端の敲打痕に接してそれぞれ大きな剥離がある。

A 3 類($11 \cdot 13 \cdot 14$) 13 は薄い板状素材の両側面に摩耗痕がある。右側の摩耗痕には幅の狭い摩耗痕が接するが、合わせても側面全体を覆うほどではなく、A 3 a 類に含める。敲打痕から摩耗痕にかけて大きく剥離している。14 も A 3 a 類であるが、それぞれ単独で稜の長さいっぱいに摩耗痕が残る。11 は離れた2 移に摩耗痕、両端に敲打痕がある A 3 b 類である。一方は稜の長さ全体に摩耗しているが。もう一方は中途で短い。

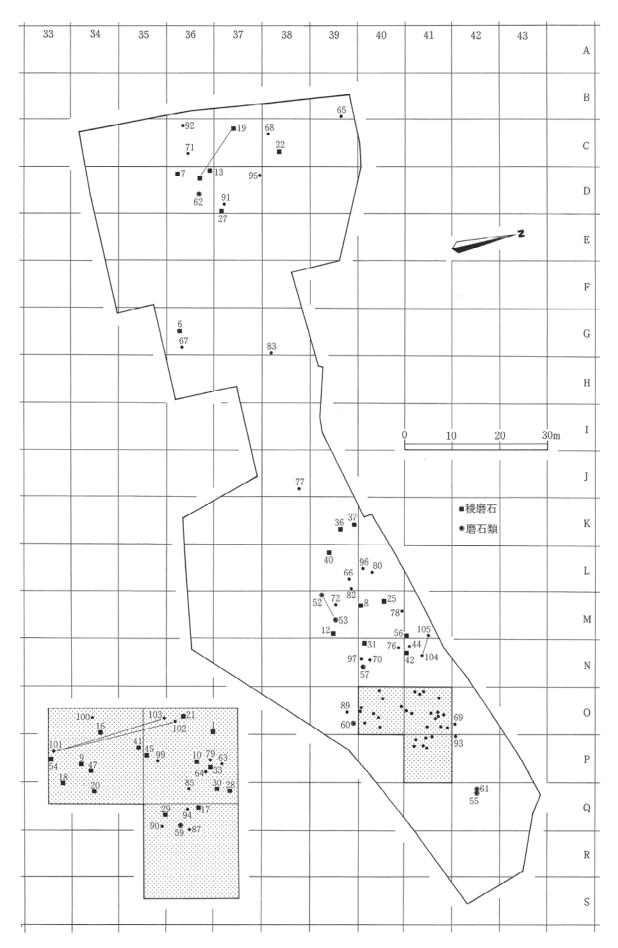
A 4 類(12) 3 稜の摩耗痕と一端の敲打痕を持つ A 4 a 類である。摩耗痕の大きさはバラバラで、一番幅広の摩耗痕は稜いっぱいに長く使われ、周縁に剥離もあるが、他はそれほどではない。摩耗痕はそれぞれ滑らかでごくわずかにふくらみをもつ。横断面は多角形的である。

B類 1点のみが出土している。

Bla類(5) 磨面は磨石類のように全面が磨られているわけではなく、中央に斑状に残る。

C類 23点が出土しており、A~Dの分類の中でもっとも多い。

C1 類($15 \cdot 16 \cdot 18 \sim 21 \cdot 23 \sim 36 \cdot 38 \sim 40$) 15 の摩耗痕は短く幅狭い。礫面はなめらかであるが摩耗面はザラついている。16の摩耗痕は所々に微小な凹凸や筋状の凹みが見られるが全体としては平坦である。



第18図 A地点Ⅲ区V層の石器出土状況

非常に風化している。18の摩耗痕は稜全体にわたる。周縁に剥離がある。流紋岩で、なめらかな礫面よりは 摩耗痕がややザラつく。19は離れて出土した2点が接合したものである。流紋岩で非常になめらかな礫面に 比べると摩耗痕は若干ザラつくが、微細な凹凸もなくやや膨らんだ平坦面である。20は摩耗痕周縁についた 剥離の先に煤状の炭化物が付着している。摩耗面の幅は狭く短い。21は大きい剥離があって摩耗痕はわずか しか残っていない。約1/3欠損している。23は安定のよい断面四辺形である。1稜しか使用されておらず、 幅も狭い。なめらかな礫面よりも摩耗面の方が非常に滑らかである。24は摩耗面の周縁に小剥離痕が連続す る。ザラついた摩耗面は、長い一辺全体に及ぶ。不明瞭ではあるが、下辺にも若干の摩耗が続く。25は約1/2 欠損しているが、残った部分の摩耗痕の幅は広い。26の摩耗痕は、剥離を挟んだ上はやや滑らかで下はやや 器面が粗い。左稜も幅は狭いが若干平坦になっており、摩耗痕の可能性がある。27は他の稜や端部も使用さ れているかもしれない。28 は短い稜上に摩耗痕が見られ、摩耗痕の上端に剥離がある。29 は一端がわずか に欠損している。30の摩耗痕は短く幅狭い。周縁に剥離痕が見られる。31は稜全体が摩耗しており、やや 膨らんだ平坦面である。摩耗痕は滑らかである。32は長く幅広い摩耗痕である。摩耗痕は礫面と同様にザラ ザラしている。33の摩耗痕は膨らみのやや強い平坦面である。34の周縁に剥離のある幅広の摩耗痕は若干 の膨らみを持つ。摩耗面の中には微細な凹凸もある。触感はざらついている。約1/3欠損する。35は流離構 造によってもともと断面三角形を呈する流紋岩を素材としている。両端部とも欠損している。摩耗痕の幅は 狭い。摩耗痕は欠損面よりはかなり滑らかだが、非常になめらかな礫面ほどではない。36は見た目は滑らか だが、ザラついている。摩耗痕の幅は広くない。約1/2 欠損する。38 は摩耗面が狭く短い。風化が著しい。 39 の摩耗面はザラついている。素材は偏平で厚みのある円礫である。40 はもともとの稜が狭かったことも あって摩耗痕の幅も狭い。左下側縁に薄く黒色付着物が見られる。

C 2 類($17 \cdot 22 \cdot 37 \cdot 41$) 17 の摩耗痕は不明瞭だが、2 面に分かれる。反対側の稜も摩耗したような若干平坦な面が見られるが不明瞭である。約1/2欠損している。22は明瞭な摩耗面から表面に向かってややばやけた摩耗痕が広がる。小さい方の摩耗面の方がツルツルしている。37は2 面の摩耗痕がつながって摩耗面の幅が広くなっている。ザラザラしている。上端の一部以外は欠損している。41は長い摩耗面に隣り合って短い摩耗面が見られる。触感には明らかな差があって小さい面はツルツルで大きい面はザラつく。素材は中央部が窪んでおり、摩耗痕を下にしたとき持ちやすい形状をしている。

C 3 類($42 \sim 48$) 42 は素材の形状に影響されたものか、摩耗痕の形状は上端に向かって三角形を呈する。風化が非常に著しい。43の2 稜はそれぞれ幅広い。これに挟まれた稜も摩耗して平坦面を作っているようにも見える。横断面は多角形的である。44は素材の形状に制約されるためか摩耗痕の長さが異なる。表面から上端・下端にかけて微小な凹凸がある。全体的にヒビが入り、表裏面・右側面にほんやりと黒色付着物が見られる。45 は風化が著しい。46 は裏面に凹陥部状の凹凸が見えるが、作業痕跡なのかどうかは不明瞭である。47 は摩耗痕の長さが極端に違う。滑らかな礫面に比べて摩耗痕はザラついている。48 は磨石類に多用されるような偏平の円礫素材で両側縁に摩耗痕を持つ。被熱によると思われる剥離が表面から側面に広がっている。礫面のなめらかさに比べると劣るが、滑らかで平坦な摩耗痕である。

A地点には3稜以上摩耗痕を残したC4類は見当たらなかった。

D類 (49・50・54・56) 稜上に摩耗痕はあるが、磨石類的な使用痕跡を含むもので、素材もまた磨石類的な円礫である。49は卵状の円礫素材である。摩耗痕は礫面よりザラザラしているが、凹凸のない平坦面である。それに連続して微細な凹凸の敲打痕が側面から表面にかけて広がる。50は右側縁にわずかに摩耗痕があるほか、表面にはツルツルの磨面が、上端には微小な凹凸を持つ敲打痕がある。素材は偏平な円礫である。

54は偏平円礫素材で表面の磨痕は磨石類的であるが、側面の途中までは明らかに平坦でザラついた摩耗痕である。摩耗痕は側面を全周する可能性もあるがはっきりしない。黒色付着物が散在的につく。56は両側面に明らかに平坦な摩耗痕を持つが、表面に凹陥部も見られる。

磨石類 (51~53・55・57~62)

稜磨石に比べると数は少なく、10点が出土した。このほかに磨石類の可能性がある円礫も数点見られる。 C類・E類・F類・G類がある。

C類(52・53) 磨痕と敲打痕をもつ2点は接合する。本来は稜磨石的に使用されていたものが、割れたか割ったかして二つになり、それぞれを再利用したものである。52は側縁の敲打痕のほかに、割面の左半分に微細な凹凸の敲打痕を、右端になめらかな磨痕を残す。下半には表面の敲打痕も割面の敲打・磨痕も及んでいないが、上半の端は割面の作業によってつぶれ・磨耗している。53は上半分が欠損し、さらに剥離している。右側面で見ると敲打痕の下に平坦でザラザラした摩耗痕がある。表面は石皿状にすり込まれて凹んでいる。割面にも斑状に磨痕がある。表面の磨面は敲打痕に及んでおり、最終的に磨りの作業が行われていたことがわかる。ただし、磨りは剥離に及んでいない。また、割れ面の端がつぶれていることから割れた後に敲打具として使われていた可能性もある。

E類(57・59・60・62) 57は板状楕円礫の片面に筋状の長く伸びた凹み、もう一面に2か所の不整形な凹みをもつ。59は片面にふたつ連なる凹みがある。左側面と上端部に若干器面の荒れが見られるが、摩耗痕や敲打痕といったものかは判断できない。60は表裏両面に2個連なった凹みを持つ。左上から右下の側面に器面の荒れが見られるが不明瞭である。62は細長い偏平礫に2か所凹陥部がある。

F類(55・58) 55 は正面に浅く小さい凹陥部があり、それを中心として黒色の付着物が広がっている。 一側面には浅く微細な凹凸の敲打痕がある。58は偏平な卵形の素材全体に微細な敲打痕があって、平らな面 にはいくつかの凹みが見られる。

G類(51・61) 敲打痕のみを使用痕跡として残す、狭義の敲石であるが、2点は素材も痕跡もまったく 異なる。51は偏平円礫の裏面の中心と側面の一部以外ほとんど全部に微細な凹凸の敲打痕が見られる。上端 に大きい剥離痕がある。61 は両端部にすりへったような敲打痕を持つ。

礫器 (63~73)

計11点出土しており、刃部加工で以下のように細分できる。

A類 (63・66・68・71・72) 5 点出土した。片面加工という点では共通するが、素材や形状はさまざまである。

A 1 類 (63・66) ともに幅広素材である。63 は片面に礫面をほとんど残す厚手の大剥片で、楕円形状の素材の一側縁を除いた周縁に階段状の中小の剥離が施されている。下側縁には微細剥離も見える。A 1 d 類とする。66 も片面に礫面をほとんど残す、厚手の不整な楕円形状の素材で、原石を大きく剥離したうえで折断している。裏面右側縁は中小の剥離を施している。反対の側縁は折断面側で非常に厚く、そこに大きい剥離を施している。A 1 d 類とする。

A 2 類 (68・71) 大きい幅広素材であるが、厚さと形状が異なる。68 は礫面を残す台形の素材である。主要剥離面は一側縁に若干の大剥離があるが、礫面側の下縁に大きな剥離と微細剥離痕の両方が見られ刃部と考えられる。A 2 a 類とする。71は礫面を残したあまり大きくない台形の剥片素材で、一側縁は折断されている。一側縁に中小の剥離が階段状に入り、その範囲に微細剥離痕が見られる。主要剥離面側に二次加工は見られない。A 2 b 類とする。

A 3 類 (72) 72 は不定形剥片に含まれるような素材の形状をしているが、刃部のあり方などは明らかに礫器に含まれる。厚手の剥片で、礫面は一側面にのみ残る。右側面が折断されて、箆のような台形を呈する。裏面の下縁から右側縁にかけて中小の剥離がある。下縁に微細剥離痕もあり、刃部と考えられる。長めの素材の中ではこれだけが短辺に刃部を置いている。A 3 a 類とする。

B類 (64・65・67・69・70・73) 6 点出土した。両面加工で寸詰まりの素材が多い。

B1類 (64・70) この2点は形状も大きさもまったく異なるが、刃部加工は共通する。64は片面に礫面を多く残す長円形状の素材である。主要剥離面の弧状の長い側縁に大中の剥離が階段状に施される。反対の周縁に微細剥離痕が見える。礫面にも大剥離がある両面加工で、B1 a 類とする。70は片面に礫面を残す台形の厚手剥片である。礫面に急角度の大型剥離を、裏面には階段状も含めた中小の剥離を施している。向き合う二側縁はともに急角度で、微細剥離痕が見えることからそれぞれ刃部と考えられる。B1 c 類とする。B2類 (65) 65は上側面にのみ礫面を残した半円状の厚手剥片素材である。礫面の残る一側縁以外の周縁に両面から大中小の剥離が施され、またそれに伴って微細剥離痕が見えることから一側縁を除く周縁すべてが刃部と考えられる。B2 d 類とする。

B3類(67・69・73) 67・69は清水上遺跡の「両面加工石器」[高橋1990] に類似する。67は礫面をごくわずかに残す厚手剥片が素材で、不整な円形を呈する。正面のほぼ全面に急角度の中小剥離が入る。裏面は主要剥離面を多く残すが、厚い部分には急角度の、薄い部分には緩角度の中小の剥離が入る。小剥離や微細剥離痕がほぼ全周するが、礫面をわずかに残すあたりは厚く、刃部というより持ち手の可能性が考えられる。B3d類とする。69は礫面を正面の左半に残した厚手剥片で不整な円形を呈する。正面にはほば全周して中小の剥離が急角度に施されている。裏面には平らな主要剥離面が残り、所々に中小の剥離が入る。礫面の残る側は厚さがあるので主に持ち手であったと考えられる。B3d類とする。73は礫面を若干残す厚手の剥片で、右側面は折断されている。表面は急角度に大中の剥離が入り、裏面には浅い大剥離が入る。表面の上半には微細剥離が見える。折断面が欠損なのか故意のものなのかは不明だが、両面の二次加工は、礫器的であるため、B3類に含めて捉える。

不定形石器 (74~76·78~84·92·93)

18点が出土しており、12点について説明する。A~E類に細別される。

A類 (74) 比較的厚手の横長剥片を素材とし、平行四辺形様を呈する。正面の右側縁から下縁部にかけて急角度の中剥離が、裏面の上側縁に浅い小剥離が施されている。折断面の側縁にも微細剥離痕が見える。端部のつぶれは下端を除く周縁に及んでいる。

B類(92・93) 92 は右側面に礫面を残す横長の剥片素材で、凹凸のある節理面をもつ。平面は「基部」から「刃部」にかけて開く箆状石器様であるが、二次加工の部位などから断定しがたく、不定形石器に含めた。下端からは左側面の両面には大中の剥離が入り、礫面の裏面側縁には小剥離が連続する。周縁はほぼ全周がつぶれている。93は縦長の剥片素材で表面から上端に礫面を残す。大雑把に短冊状に作り出した後、左側縁は長軸線に向かって急角度の中剥離が、右側縁は同じく小剥離が入る。下端部は上に向かって大きく剥離を入れた後に中小の剥離を急角度で入れている。打製石斧に似た形状であるが剥離が浅い。

C類 (78・80) 78は横長剥片を素材とし不整な四辺形を呈する。上面の礫面が打面である。右側縁は折れている。80は裏面が節理面、下側面が折れ面である。左側縁の表裏に中小剥離が急角度で入るが、打点が表裏で同じことから使用によるものであろう。右側縁から下縁部にかけて、端部は丸みを帯び微細剥離が見られることから、これも使用によるものと考えられる。C類はこの他に1点出土している。

D類(75・76・79・81・83・84) 75 は三角形状の大きめの横長剥片を素材としている。上面の礫面を打面として、連続的に取られたものと考えられる。打面以外の2辺の刃部には小剥離・微細剥離が連続するが二次加工というよりは使用痕であろう。つぶれも認められる。76は側面に礫面を残す剥片素材で、正面は節理で割れている。上側面も節理である。右側縁の一部に小剥離・微細剥離が見られる。79は縦長の剥片素材で上下の側面にわずかに礫面を残す。両側縁に微細な剥離痕を残し、つぶれている。81は打面転移後に平らな面を打面にして取られた横長剥片を素材としている。左下縁の折れ面より、微細剥離の方が新しく、微細剥離痕に連続する折れ面の縁辺はつぶれている。83はチャートの剥片素材で、下側面に礫面、左側面に節理面を残す。上側面はバルブを残すため厚い。右側縁に微細剥離痕が見られ、短い範囲ではあるが鋸歯縁状にジグサグしている。84は黒曜石の縦長剥片を素材する。上縁を除く周縁にぐるりと微細剥離痕が見られる。D類はこの他に5点出土している。

E類 (82) 82 は縦長剥片を素材とする。一端は折れている。下端は磨耗しており、研ぎ面と考えられる。両側縁に急角度の大中剥離を入れているが、砥石様のものだとすれば研ぎ面の再生とも考えられる。 石匙 (86)

1点のみ出土した。不定形石器的であるが、刃部の形状から石匙に分類した。チャートの横長剥片を素材とする。右側面は抉れたように折れているが、ほぼ三角形を呈する。表面は比較的浅角度に小剥離が入り、つぶれるような微細剥離がそれに伴う。裏面の下縁部には急角度の小剥離が入る。

石錐 (87)

1点のみ出土した。87はやや厚手の横長剥片を素材とする。錐部からつまみ部にかけて次第に広がる。つまみ部と錐部はそれぞれ急角度の小剥離で作り出している。右側面は折れている。

石鏃 (88・89・90)

出土した3点はともに黒曜石製で、基部は凹状のいわゆる凹基無茎鏃である。88 は内彎状に膨らむ側縁と鋭く尖る脚端部の外形である。挟在物を残したままほぼ全面に細かな調整を入れて仕上げている。3点の中では一番大きい。89は直線状の側縁で、脚端部はやや鋭さに欠ける外形である。両面の基部付近に素材の剥離面を残すがほぼ全面に細かな調整が施されている。90は挟在物を境に片方の脚部が欠損する。側縁は直線的だが、先端でわずかに屈曲がかわる。脚端部はやや鋭さに欠ける。ほぼ全面に細かな調整が施されている。89とほぼ同じ大きさである。3点とも装着痕や付着物などは見えない。

打製石斧 (91)

明らかな打製石斧は1点のみである。91は厚手の剥片を素材とした打製石斧の基部である。厚みを残しつつ、表裏面とも大型の剥離を入れて細身に作り出している。両側縁はつぶれて微細剥離が見える。刃部が欠損しているため全体の平面形態は不明である。

磨製石斧 (94~96)

3点が出土した。94は板状の楕円礫に敲打を施した剥離成形段階の未成品である。側縁と上端の表裏の敲打は基部の厚さを減じるためのものであろう。95は基部から刃部に向かって両側縁は緩やかに開く。横断面は薄い凸レンズ状となる。小型品で刃部に明瞭な稜を持つ片刃の円刃である。刃縁に微細剥離とつぶれが見える。基部は先端が若干欠損しているほか、表裏とも剥離がある。96は基部が欠損して刃部のみである。刃部は、両刃の円刃で、刃縁がつぶれている。横断面は薄い凸レンズ状である。右側縁の表裏に線状痕が強く現れている。完形であれば、95よりは大型のものであろう。

剥片・砕片 (77・85・102・103・105)

剥片53点、砕片1点のうち5点を図化した。77は一見すると箆状石器のような形状をしている。しかし、正面には礫面が下縁辺まで残り、周縁部には一切加工が入っていない。よって種別としては剥片にせざるを得ないが、平面・側面の形状的には箆状石器の素材の可能性を考慮すべきであろう。85は左・上側面に礫面を残し、右側面に折れ面がある。下縁部も折れており、剥離が加工・使用の結果かどうかは判断しがたい。102・103・105 については、接合資料であるため、石核の項で説明する。

石核 (97・98・100・101・104)

図化した5点のうち、剥片と接合するものが2点ある。97は節理の多い亜円礫が原石で、荒割は2面以上、剥離作業は打点を周縁で移動して行っている。打面・剥離作業面とも1面ずつである。

98は黒曜石で打面は3面、剥離作業面も3面である。右側面の剥離の後に正面が剥離されている。100は、 荒割調整はないか、あるいは節理によって割れた一回で、打面調整はない。剥離作業は同一の剥離作業面で 90度ずれる剥離を行った後、さらに別の面で打面も変えて剥離を行っている。打面が3面で剥離作業面が2 面である。

101は102・103の剥片と接合する。右から2番目の礫面の実測図を正面として説明する。偏平礫を素材としており荒割は2面以上行っている。基本的には礫面・節理面を打面にしているが、古い剥離作業面も打面にしている。打面は合わせて4面、剥離作業面も4面である。102は下端が折れていることから、剥離された直後は剥離作業面全体の大きさであったと考えられる。打面は左側面の古い剥離作業面である。102を剥離した後に同じ方向から1枚、90度打面移動して2枚剥片をとっている。103は剥離の接合はできるが打面の接合面がすでになく、左側面同一打面の3枚と右側面下2枚を剥離する前に剥ぎ取られたものである。

104は偏平礫あるいは円礫素材である。最終段階にとられた剥片105と接合する。荒割調整は2回以上で、 打面は180度ずれる稜線上で、それぞれ裏表交互に剥離を行って、最後に各打面から90度移動した礫面を 打面として剥離している。よって、打面は3面で剥離作業面は2面である。

原石 (99)

いわゆる「ズリ」と呼ばれる黒曜石の原石である。礫面や節理面に剥離状のリング・フィッシャーが見えるが、これは破砕などによるもので人為的な剥離ではない。やや白濁して透明度は若干低く、縞模様が見える。

玉未成品石 (106)

表裏両面から擦り切り、折断されている。

上記以外の石器については、巻末の別表に概略を記載した。

(2) B地点 I 区の石器 (図版 26~28)

B地点で出土した石器は、道具としての石器が34点、石器製作に関わる剥片・砕片が18点、搬入された円礫・角礫が12点の計64点である。V層上部・下部・下底、倒木痕からの出土のほか、遺構からも検出された。石器の集中は西側のD~Hライン付近と、東端のO~Sラインに見られる。西と東では石器の種類と出土層位が明確に分かれた。西側では15点中12点が稜磨石で、うち3点は1号石器集積から、1点は12号集石土坑から出土した。それ以外のほとんどがV層下部・下底からの出土である。搬入礫は1点しかない。一方、東端部では磨石類が9点、稜磨石が4点である。このうち9点がV層上部の出土である。搬入礫が10点、剥片も数点あるが、剥片石器はまったくない。また、48 Kグリッドでは、同一母岩と思われる無斑晶質安山岩の両極石器4点・不定形石器2点、剥片9点が集中して出土した。

稜磨石 (215 ~ 230)

A1 a類 (215~218・220) 215は偏平な円礫素材である。摩耗痕の縁辺と敲打痕の周縁に剥離があって、特に下端の剥離は抉れるように割れている。剥離があるあたりの摩耗痕は他より凹凸が目立つ。216の摩耗痕は非常によく摩耗して滑らかである。礫面は表面にかけて剥離している。敲打痕はごく小さい。217 はなめらかな砂岩の礫面には劣るが、摩耗面は滑らかに磨れている。敲打痕は微細な凹凸があるとはいえ、すったようなつぶれた平坦面をなしている。摩耗面のとなりの面に線状の敲打痕がある。218 は砂岩のなめらかな礫面に比べるとかなりザラつく。敲打面は小さい。220 の摩耗痕は礫面よりはザラつくが凹凸の少ない平坦面である。敲打面の凹凸も微小である。半分欠損しており、もう一端に敲打痕のある可能性もある。

A1b類(219) 両端に敲打痕がある。稜の長さいっぱいに幅広の摩耗痕が認められる。非常にざらついた礫面で摩耗痕もざらついているが、凹凸は少なく平坦である。敲打面も凹凸が少なく平坦で、摩耗痕に似る。

C類 (221~230) 10点はすべて C 1 類である。221 は厚みのある偏平な楕円礫素材である。摩耗痕はザラつくが非常に平坦である。正面は全体的に赤化していてはじけたような窪みがある。222の摩耗痕は平坦で滑らかだが、幅が狭い。223 はゴツゴツして厚みもある。摩耗痕は礫面よりザラつくが非常に平坦な面である。224 は礫面より滑らかな摩耗面を持つ。225 は礫面よりは若干劣るが滑らかな摩耗痕を持つ。226 はなめらかな礫面が剥げたような、ザラつく平坦な摩耗痕を持つ。摩耗痕の周縁が剥離している。227 は摩耗されることで気孔の凹凸があらわになった痕跡を示す。228 は礫面もなめらか

		V層				撹乱	不明	遺構	計
		計	(上)	(下)	(底)	18.00	71195	JEI 119	nı
器種·種別	分類								
麦磨石	A 1 a	3		(2)		1		1	5
	A 1 b							1	1
	A 2 a								
	A 2 b								
	А3а								
	A 3 b								
	A 4 a								
	В								
	C 1	8	(3)	(5)				2	10
	C 2								
	C 3								
	D								
	不明								
計		11	(3)	(7)		1		4	16
善百類	A	1	(1)			1			2
	В	2	(2)						2
	C		\ <u>-</u> /						-
	E	3	(3)			-			3
	F		107						- 0
	G	3	(3)						3
	不明	ľ	(0)						
計		9	(9)			1			10
業器	A 1		(0)		-	- 4	-		10
水 Diff	A 2 a	-		_		_			
	A 2 b	-	-	_	-	_	-		
	A 3 a				_		-	\vdash	
	B1a	-					-		
	В1с	├──		-	-			-	
	B 2	-			-	_			
	B 3	 	-	-	-				
	B 3 d			-	-	-			**********
ât	ID 9 G	-							
	Ι.			(1)					
不定形石器	A	1		(1)					1
	В			7-1					
-	С	1		(1)					1
	D	1		(1)					1
	E								
計		3		(3)					3
打製石斧									
磨製石斧						1			1
石錐									
石匙									
石鏃									
両極石器		4		(4)					4
削片		17	(4)	(13)			1		18
 译片		1		.207			_		
石核									
円碟		11	(10)	(1)					11
角礫		1	(1)	(4)					1
小碟		1	(1)					 	1
玉未製品									
不明		-							
計		33	(16)	(18)		1	1		25
		-	(15)	-		1	1		35
総制	†	56	(27)	(28)		3	1	4	64

第3表 B地点 縄文時代の石器一覧

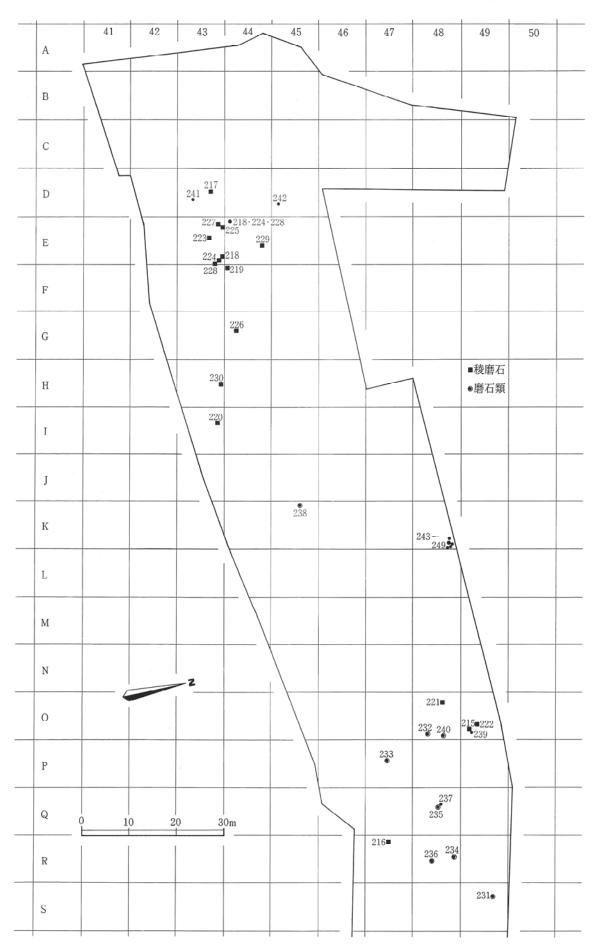
- V層欄の(上)(下)(底)は、それぞれ上部・下部・ 下底である。
- 2) 各調査区のV層の計は(上)(下)(底)の区別がない ものを含めたV層出土点数の和であり、(上)(下)(底) の和と一致しない。
- 3) 分類が不確定なものについては、指定される分類の点数に加えている。

だが、摩耗痕はさらにきめの細かい滑らかさを持つ。稜が狭いため摩耗痕の幅も狭い。229は柱状節理によって断面三角形を呈する安山岩である。節理面が剥げて摩耗痕のように見えるが、各稜部は実際磨られたのは1稜のごく狭い範囲である。この安山岩が硬質だったためと考えられる。一端は節理面、一端は折れている。230 は約 1/2 欠損する。227 と同様に孔の凹凸があらわであるが、平坦な摩耗痕である。

磨石類 (231~240)

10点出土しており、A類·B類·E類·G類に分けられる。

A類 (239・240) 239 は偏平な円礫素材のいわゆる狭義の磨石で平らな面をなめらかにすっている。240 も狭義の磨石であるが、ほとんどを欠損しているため詳細は不明である。磨面は非常になめらかで、若干窪



第19図 B地点I区V層の石器出土状況

んでいる。熱を受けてはじけ、裏面から割れ面かけて煤が付着している。

B類(235・237) 235 は厚みのあるゴツゴツした円礫素材である。表面は円形の凹みが3個まとまっている。裏面は不整形の凹みが複数つながっていてその下の方に平坦な磨面がある。ただ、石材が稜磨石と同じ多孔質角閃石安山岩なので、気孔の凹凸でザラつく。237 は断面が正方形に近い厚みのあるもので、その一面が磨られて平らになっている。同じ面に円形の凹みと小さい敲打の痕跡がある。微細な気孔のある石質のため磨面はザラつく。この面を上にして置いたとき下面は丸みを持っていて安定性が悪いので、置いて使ったものではなく持って使用したものと考えられる。

E類(232・234・238) 232は小ぶりの円礫の両面中央に、円形のしっかりした凹陥部が1か所ずつある。234は厚みのある亜円礫の両面に凹みを持つ。凹陥部は円形で底の方が小さい逆三角形の断面を示す。表面は2か所、裏面は1か所である。238は厚みのある円礫に右上がりの筋状の深い凹陥部が4面についている。正面に1本、右側面に1本、裏面に2本、左側面に1本が明確で、その周りにもやや浅い凹みがついている。 G類(231・233・236) 231は端部に敲打痕を持つが、先端以外欠損しているので稜磨石の可能性もある。 黒色の付着物が線状につく。233は棒状の長円礫で、両端部に微小な凹凸の敲打痕を持つ。平坦面にも微小な凹凸の敲打痕がつく。236は偏平な長円礫の平坦面に微細な凹凸が見られる。

不定形石器 (242 · 243 · 244)

A類・C類・D類が各1点出土している。

A類 (244) 横長剥片を素材として、右側縁に急角度の二次加工を連続的に施している。上縁・左側縁 に明確な加工は見られないが、微細な剥離が見える。下縁は折れている。

C類(242) 横長の剥片を素材とする。表面には礫面を残し裏面には打面・主要剥離面を残しているが、明確な二次加工痕はなく、使用によると考えられる小剥離・微細剥離が長い縁辺部に残る。

D類(243) 横長の剥片素材である。刃部の加工は見られないが、鋭い剥離の縁辺に微細剥離が見える。 下端は折れている。

両極石器 (245 · 246 · 247 · 248)

4点があり、ほぼ同地点で出土している。すべて無斑晶質安山岩である。剥離は4個2対の30以外は2個1対である。それぞれ一側縁は折れている。ほぼ同じ大きさであるが、厚みが異なる。245の上下端部、246の両側縁、247の上下端部、248の上下端部の稜線はツブレている。

磨製石斧 (241)

1点のみ出土した。基部から刃部に向かって両側縁が緩やかに開く。両刃の円刃である。基部から刃部までほぼ同じ厚さで、横断面は短辺が直線で長辺が膨らむ凸レンズ状である。基部の肩がわずかながら一方はつぶれ、一方は破砕している。刃部は磨耗あるいはつぶれていて、中央が少し剥離している。全面的によく磨られている。

剥片 (249)

18点中1点を図化した。249は両極石器と同一母岩の剥片である。両側縁とも折れている。

4. 古代・近世の遺物

A 概 観

古代の遺物は9世紀末~10世紀初頭にかけての短期間のものである。B地点I区における2基の竪穴建物とその周辺のI層中に出土遺物の大半があり、A地点I区には炉跡遺構とその周辺のI層中に少量の遺物が出土している。B地点のH1号・H2号竪穴は同一の地所での竪穴建物の建替えであり、竪穴覆土と竪穴の周囲では、土器の他に鉄製品・銅製品や石銙など豊富な内容を持つ遺物の出土がある。2基の竪穴では共通して使用されたものがあると思われ、器種の構成を統合して見ると、黒色土器椀が多数を占める構成をとり、須恵器はわずか数点の個体数に止まる。施釉陶器は頸城地方の古代の遺跡としては比較的多く、妙高山麓と北信地方との物流の緊密さをうかがわせている。また、隣接する中ノ沢遺跡と同様に「六」を記した墨書土器が多く、10点あまり出土している。

近世の遺物はB地点に磁器・陶器の細片60点あまり出土しているが、A地点の泥メンコ1点のみを掲載した。

B 土器の分類と記述

土 師 器 黒色土器以外の土師器。椀・小甕・長甕がある。

無台椀 ここでの分類は、黒色土器の無台椀と共通させたものを示す。A類は身が皿状に浅く、径高指数 (器高/口径×100) が 26 前後のものである。B類は一般的な身の深さのものである。C類はとくに身が深く、径高指数が 33 を超えるものである。B類については、底面が小さく円盤状に張り出すB 2 、底面が張り出さないB 1 、明瞭な底面をもたずに体部が立ち上がるB 3 に分離できる。C類もB類と同様にC 1 ・C 2 に分けられる。口径は、 $12 \sim 14$ cm のもの(I)と $14.5 \sim 17$ cm のもの(I)に分類できる。底面は回転糸切り無調整とするものが圧倒的に多い。

有台椀 明らかなものはH1号竪穴に1点のみある。

- 小 **甕** 器体の全容が知られるものがなく、分類しえない。体部の調整はロクロナデによる。底部の調整は回転糸切りするものとヘラケズリのものが見られる。
- 長 **甕** 調整はロクロナデの後、体部外面にヘラケズリを施すことを基本とする。体部内面はナデ・ハ ケ目・カキ目の調整がなされる。口縁端部はすべて丸く収められる。
- 黒色土器 土師器に含められるものであるが、黒色処理されたものを土師器と区別して扱う。
- 無台椀 分類は土師器椀と共通させているが、口径が17cmを超える(Ⅲ)が1点のみある。底面は土 師器無台椀と同様に、回転糸切り無調整とするものが圧倒的に多い。B2は、底面切り離し時

の粘土はみだしが顕著なものもある。口縁端部を外側に強く引き出す72のみをB4とする。 黒色処理は基本的に内面のみであるが、外面も黒色処理しているものが1点ある。

有台椀 外側にふんばる比較的長さのある高台がつく椀である。明らかなものは掲載した2点のほかに 1点あるのみである。

盤体部から口縁部にかけて外弯ぎみにのびる皿形の器である。

灰釉陶器 灰釉を施した陶器。椀・皿・長頸瓶・小壷・耳皿など多岐にわたる。椀の施釉はいずれもハケ 掛けである。

緑釉陶器 鉛釉を施した陶器。稜椀が1個体のみある。

須恵器杯・甕・瓶があるものの、個体数がは限られており、各器種内の細分はできない。

C各説

(1) H 1 号竪穴の出土遺物 (図版 29·30)

土 器

平箱にしてほぼ1箱の出土量がある。H1号竪穴はH2号竪穴の建替えであるにもかかわらず、遺物はH2号竪穴に多く残されており、H1号竪穴の掘り込みが浅く、遺物が周囲に散開したことを考慮しても、土器の絶対量は少ない。機能別の個体数は、食膳具が5.3(土師器椀2.3・黒色土器椀2.1・灰釉陶器椀および皿0.9)、貯蔵具0、煮沸具0.4(長甕0.3・鍋0.1)の計5.7である。

土師器 無台椀・有台椀(1~6)

2は黄橙の色調を呈しており、橙色を基調とする本遺跡の土師器・黒色土器にあっては異質な素地土を用いている。体部は直線的に開く。3は内・外面ともに丁寧にミガキがなされている。部分的に黒色処理状の黒変が見られる。5は底面の回転糸切り痕がナデによってほぼ消し潰されている。3と同様に部分的な黒変が認められる。4は残存している器体のほぼ3分の1が黒変している。内面底部には漆と見られる黄褐色の物質が付着している。底面外周と底部外周にロクロケズリがなされる。6は高台外面に稜を持ち、内面はゆるやかに湾曲する。

黒色土器 無台椀 (7~10)

7・8の底面には回転糸切り後、それぞれナデ・ヘラケズリがなされる。7には「六」の第一画と見られる左はらいのテンが逆位に墨書されている。9は内面に極めて丁寧なミガキがなされ、金属的な光沢を発している。

灰釉陶器 椀・皿(11~13)

11・12は口径がほぼ等しい皿であり、施釉は底面・高台内・高台接地面を除いた外面と器体上半の内面になされる。11の内面中央には、太い棒状の釉が2条引かれる。高台外面の稜は明瞭でない。12は外面口縁下が凹線状に窪む。13も施釉範囲は12と同様である。高台の形状も11・12に近似する。いずれも黒笹90号窯式並行の尾北窯製品に比定される。なお、掲載したものとは識別される椀の細片が1点ある。

須恵器 甕(15)

H1号竪穴では15のほかに須恵器甕・瓶・杯の破片が各1点ある。15のタタキ目は外面が簾状、内面が 青海波文であり、H1号竪穴周辺の包含層に同一個体約40片の散開がある。

土師器 長甕・鍋 (14)

14はH2号竪穴にも口縁部の一部があり、一部破損した後にもH1号竪穴で使用されたと思われる。外面は口頸部がロクロナデ、それ以外を斜方向のケズリとしているが、ケズリはハケ目状の明瞭な凹凸が見られる。内面はロクロナデの後に強いナデがなされ、カキ目と縦方向のハケ目が加えられる。狭い平底の底面を有する。長甕は14と識別される別個体はない。

金属製品・鉱滓

金属製品は図示した9点と用途不明の鉄製品小片3点の、計12点がある。

金具 (16~18·22·23)

16は管状の銅製品である。刀剣柄の總通し孔に装着された金具であろうか。端部の凸帯には花弁状の加工がなされている。銅板を丸めて縦に熔着されたと思われるが、その痕跡は観察されない。

17 は鋲であり、皿天面が銅、皿地面・軸部が鉄で作られている。18 は断面が円形を呈しており、何らかの金具の一部であろう。22・23 は遺存状態が異なるものの、形態はよく似ている。いわゆる「カンヌキ型鉄製品」と呼ばれるものに類似している。22 は両端部が図の表側方向に折り曲げられ、端面は折損している。23 も端部を折り曲げられ、折損している。ボタン状の突起は何であろうか。

刀子 (19~21)

鉄製の刀子である。19には明瞭な関が、20にはやや不明瞭な関が作り出され、刀身刃部は緩やかに反る。 21は刀子茎部であろう。

燧鉄(24)

頂部から両裾にかけて弧を描き、端部は内弯気味に反りあがる。底辺から頂部にかけて次第に厚みを減じているが、上縁は尖らない。

鉄滓

小指大のものが1点ある。詳細は巻末の別表7に記す。

石器類・石製品

燧石 (25~31)

燧石と考えた石核・剥片等である。26・27 は25と接合する剥片で、石材は灰色の頁岩である。26・27 には細かな打撃が縁部に加えられており、25 も B 面左縁部に細かな打撃が見られる。おそらく26・27 は稜線の鋭さが減少した時点で剥離され、新たな稜線が作り出されたのであろう。25~27 には部分的に灰釉陶器状の光沢が認められる。住居焼亡の際に付着したものであろうか。28も稜線状に細かな打撃が加えられている。25 らと同一の母岩から派生したものと思われる。29 は正面上端の稜線に打撃が加えられている。石材は黒色の片岩である。30 は腹面左方からの打撃によって円礫が半割されている。30 A は30 B と分離した後に被熱したらしく、全面が黒変している。石材は石英である。31 は25 らとよく類似した同一の石材であるが、同一の母岩ではないであろう。A 面右上の稜線に細かな打撃が集中している。

石銙(32)

淡黒色を呈する丸鞆である。裏面を除き、平滑によく磨かれて、にぶい光沢を発する。裏面周縁には幅の ごく狭い面取りがなされる。裏面は研磨が粗いために擦痕が残り、やや白味がかっている。裏面の潜り穴は 穿孔時の熱変によるものか赤褐色を呈する。石材は珪質頁岩で、重量は8.9 g である。

木 器

櫛(33)

偶然に形状が保持された、炭化した梳き櫛である。櫛歯の間は山形に挽き残される。

(2) H 1 号竪穴床造成土の遺物 (図版30)

土器・土製品

土器は総計35片が出土している。内容は長甕・小甕の破片6点、須恵器長頸瓶の破片1点、須恵器杯の破片1点のほか、椀類である。機能別の個体数は、食膳具が1.2(土師器椀0.1・黒色土器椀1.0・須恵器杯0.1)、貯蔵具0、煮沸具0.3(小甕0.3)の計1.5である。

黒色土器 椀(34)

内面は放射状のミガキがなされている。底面は糸切り無調整である。

須恵器 杯(36)

素地土は質量感が乏しく、焼成は軟質である。

土師器 小甕 (35)

外面と口縁内面にはスス状の炭化物が付着している。これとは識別される破片が1点ある。

羽口 (図版 37)

先端部は緑黒色の釉薬状の物質が付着し、その下部は灰色に変色している。

(3) H2号竪穴の遺物 (図版31~33)

土器・土製品

土器は平箱にしてほぼ4箱の出土量がある。機能別の個体数は、食膳具が27.7 (土師器椀7.1・黒色土器 椀および盤19.8・須恵器杯0.4・灰釉陶器皿0.4)、貯蔵具0.4 (土師器小壷0.4)、煮沸具1.9 (長甕0.3・小甕1.4・鍋0.2) の計30.0である。

土師器 無台椀 (38~48)

身が浅く体部が直線的に開く「杯」と呼ぶべきものも存在するが、器種として明瞭に区分できないため、ここでは椀としてまとめておく。底部を欠く43、底面にナデが加えられる48を除けば、底面は回転糸切りである。42には底面の中心を通るように一条の沈線が描かれ、体部に4画目を欠いた正位の「六」が墨書される。45・48は二次的な被熱が著しい。

黒色土器 無台椀・有台椀・盤(49~82)

椀の法量は、特に大きい 75 を除けば、口径が $12\sim14$ cm の I($49\sim68$)と口径が $14.5\sim17$ cm の II($69\sim79$)に二分される。内面のミガキは中心から放射状に、口縁部は水平になされるために、中心に低い膨らみを残すものが多い。底面は基本的に回転糸切りであり、54 が底面・底部外周にヘラケズリ、74 が底面・底部外周にロクロケズリ、75 が底面にロクロケズリ、77 が底面・底面外周にヘラケズリを施す。高台を有するものは $70\cdot81$ の 2 点に限られる。70 は高台が剥落した後にその接合部を摩耗させ、無台椀として利用している。

59は全面にタール状・スス状の炭化物が、60は口縁部にタール状の炭化物が垂れるように付着している。 また、58・76・81の内面には漆と見られる皮膜が付着している。58は光沢のある茶褐色、81が黄褐色を呈 しており、81は皮膜が厚くハケ状工具の痕跡が明瞭に残る。

墨書されるものが14点ある。「六」あるいは「六と見られるもの」が10点であり、このうち逆位の「六」が7点を占める。また、「六」1画目のテンを左に払う例が多い。79には鬼あるいは思が墨書される。「鬼」であるとすれば、1画目のテン欠如に疑問が持たれる。「思」とすれば、最後の2画が「ム」らしく見えることに違和感がある。いずれにせよ、横位に墨書するのは79の1点のみであり、複数の文字からなる文章であった可能性も考えられる。74は「仇」と読める字に「コ」状の記号を被せている。

82 は唯一の盤である。高台部を欠落する。

須恵器 杯(83)

計7片があり、細片2点を除けば4あるいは5個体に識別される。1点は底面を回転糸切りとしている。 灰釉陶器 皿(84)

底部を除く外面に施釉される。口縁部外面にも薄い釉が見られるものの、これが意図的なものかどうかは 不明である。高台は内端接地で外面の稜は明瞭である。猿投窯の製品である。

土師器 小壷 (85)

形態は小甕に相似する。体部はロクロナデを施され、底面は回転糸切りされる。

須恵器 長頸瓶 (93)

ロクロナデの痕跡が内面で特に明瞭であり、角高台は外端が接地する。ほかに別個体の瓶の細片が2点出 土している。

土師器 小甕・長甕・鍋ほか (87~89・14 B・90~92)

平箱ほぼ1箱分が出土している。長甕は少なくとも3個体に識別できるが、掲載した以外0個体である。86はロクロナデの後、底部外周と底面をヘラケズリしている。86と88は同一個体である可能性が高い。88はかなり高い温度で二次的に被熱しており、破片の端部は気泡を発して膨張している(図版62)。長甕14Bは1号竪穴の14と同一個体である。91は体部外面がヘラケズリされる。92は口縁端部を細く仕上げられる。92は鋸歯状の口縁をもつ寸胴形の器と思われる。口径は鍋と同様であろうか。仮に土師器でないとすれば、縄文時代晩期の粗製深鉢である可能性が最も高い。

別口 (94)

先端部を欠いており、通例見られるガラス状物質の付着部分がない。上半は被熱黒変している。

鉄製品・鉱滓等

鉄製品は図示した2点のほかに用途不明の小片6点がある。また、pit Rで鉄銹塊・鉄銹粒(粒状滓?) 144 グラムが出土している。

鉄鐸・鎌 (95・96)

95 は鉄鐸であろうか。厚さ 1.5mm 前後の鉄板を筒状に丸めている。96 は鉄製鎌の刃部先端である。

青銅塊・鉄滓(図版 61 125 ~ 127)

125・126は青銅塊である。成分は第V章に記す。鉄滓は4点あり、内容は鶏卵大2・親指大2である。詳細は巻末の別表7に記す。

(4) B地点I区の遺物(図版33・34)

十. 器

土器は平箱にしてほぼ1箱の出土量がある。機能別の個体数は、食膳具が8.3 (土師器械3.7・黒色土器 械4.2・須恵器杯0.3・灰釉陶器皿0.1)、貯蔵具0.5 (灰釉長頸瓶0.5)、煮沸具0.8 (長甕0.6・小甕0.2) の計9.6である。

黒色土器 椀 (97)

墨書のある椀を1点掲載した。逆位の「六」が書かれる。ほかに墨書のある細片2点があり、1点はおそらく「六」であろう。なお、外面にも黒色処理する底部破片が1点見られる。

灰釉陶器・緑釉陶器 (98~109)

識別される個体数は、灰釉陶器椀2・皿1・小瓶2・長頸瓶3・耳皿1、緑釉陶器稜椀1であるが、灰釉陶器椀の1つは細片である。

灰釉陶器皿 (100) が尾北窯の、灰釉陶器長頸瓶の1個体 (不掲載)と耳皿および緑釉陶器稜椀 (109) が 猿投窯の製品であり、このほかは東濃窯の製品である。103・105・106は同一個体と思われ、淡青色の曜変 部分がある。

土師器 長甕・小甕・鍋

平箱1/3程度の破片があるものの、器体の概要が判るものはない。

須恵器 甕・瓶

平箱1/3程度のこれら約半数は15と同一個体の甕であり、数個体の瓶類が識別される。

鉄製品・鉱滓

鉄製品は図示した2点のほかに用途不明の板状製品が3点ある。また、鉄滓4点がある。

紡錘車ほか (110・111)

110 は口縁が緩やかに弯曲しており、鉢のような器であろうか。111 は紡輪と紡軸が組み合わされた紡錘車であろう。紡輪は方形に近い不整形である。

鉄滓

拳大1点、ピンポン玉大1点、小指大1点の出土がある。詳細は別表7に記す。

石製品等

石銙・研磨具 (112~118)

112 は石材が大理石で、重量は 5.1 g である。石材は白色に黒褐色が斑状に混じるものであるが、表面は白色である。表面はよく磨かれ光沢を発する。裏面周縁には幅のごく狭い面取りがある。側面・裏面にはうっすらと煤状の付着物が見られる。上方中央の潜り穴には黒色の炭化物が残る。出土地点は 45 Mグリッドである。113 は乳白色の大理石が石材であり、表面は鏡状の反射光沢を持つ。裏面周縁には幅のごく狭い面取りがなされる。重量は 12.6g である。出土地点は 46 N グリッドである。114 は淡黒色を呈する珪質 頁岩を用いており、32 とよく近似している。裏面には擦痕が残るものの、その他はよく磨かれ、表面はにぶい光沢がある。重量は 2.8g を測る。出土地点は 46 N 9 グリッドである。115 は下端部の小破片である。石材は 112

とよく似ており、同一個体の可能性がある。上端には潜り穴の一部がわずかに残っている。表面は剥落して不明だが、裏面・側面にうっすらと煤状の付着物が見られる。裏面周縁には幅のごく狭い面取りがなされる。重量は0.8g。出土地点は46 Mグリッドである。

117は小型の研磨具である。折損あるいは剥離した面も利用され、ほぼ前面が滑らかに摩耗している。板状の118は据え置かれた状態で使用されたであろう。側面以外の両面が摩耗している。

(5) A地点I区の遺物(図版34)

古代の遺物は、焼土の堆積と支脚状の礫からなる炉状遺構周辺で出土しているのみで、量は極めて少なく 掲載した個体のみである。器種は土師器椀 (119)・黒色土器無台椀 (120・121)・土師器甕 (122)・須恵器 瓶 (123・124) がある。

近世の遺物は泥メンコ (125) 1点で、絵銭を模したものである。絵柄は「吉田の牛曳き」と呼ばれるもので、「吉田」の字句・牛・人物で構成される。絵柄を押捺した後に打抜きされており、中心の孔部は貫通していない。『貨幣から見た生活史』[神奈川県立埋蔵文化財センター1993] によれば、近世には穴の中に銭貨を入れ、上から銭貨を打ち付けて飛び出した銭貨を勝ち取る「フクツン」という子供の遊びが行われ、幕府の賭博禁止令によって銭貨を用いることができなくなると、絵銭の一部や泥メンコが使われるようになったという。

第 V章 自然科学分析

関川谷内遺跡における自然科学分析

はじめに

関川谷内遺跡は、妙高山東麓に位置する。発掘調査により、縄文時代早期・前期および平安時代を中心と する遺構・遺物が検出されている。

本報告では、以下に示す課題を設定し、それぞれ自然科学分析を実施する。

1. 調査課題

(1) 遺構の年代観

平安時代と考えられる竪穴建物および炭窯から検出された炭化材について放射性炭素年代測定を行い、これらの遺構の使用時期に関する情報を得る。

(2) 炭化材の樹種

平安時代と考えられる竪穴建物および炭窯から検出された炭化材の樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。

(3) 青銅塊の成分

竪穴建物から出土した青銅塊について、蛍光X線分析装置を用いて、その成分比を明らかにする。

2. 放射性炭素年代測定

(1) 試 料

試料は、平安時代の焼失家屋と考えられるH1号竪穴と、1号炭窯から出土した木炭各1点である。各試料の詳細は、測定結果とともに表1に記した。

(2) 分析方法

a) 前処理

乾燥、粉砕したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸した。 室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去した。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に濃硝酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き(無酸素状態で400℃に加熱)にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。ただし、試料が少量(試料表中で試料少量と記載がある試料)の場合は水酸化ナトリウム溶液による処理を省略し、硝酸の代わりに塩酸で煮沸した。

b)測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3ml(足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとした)にシンチレ

2. 放射性炭素年代測定

イターを含むベンゼン 2ml を加えたものを測定試料とした。

c) 測 定

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返す計1,000分間行った。未知試料の他に、値が知られている スタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定した。

d) 計 算

放射性炭素の半減期として LIBBY の半減期 5,570 年を使用した。

(3) 結果

測定結果を表1に示す。

表 1 放射性炭素年代測定結果

				誤	差	
検出遺構	試料番号	試料の質 (樹種)	年代値	+	_	Lab No.
1号炭窯	1	炭化材 (コナラ節)	880	250	240	PAL-193
H 1 号竪穴	5	炭化材 (キハダ)	660	190	190	PAL-194

注 (1)年代層:1950年を基点とした値。

(2)誤差:測定誤差2σ (測定値の95%が入る範囲) を年代値に換算した値。

(4) 考察

1号炭窯は、考古学的所見より平安時代と考えられている。測定した炭化材の状態は良好であり、出土状況、樹種などを考慮しても、大きな誤差がでる可能性は低い。今回得られた年代測定値は、平安時代の中でも10世紀頃に相当する年代であり、1号炭窯はこの頃に操業した可能性がある。

一方、焼失家屋H1号竪穴は、出土遺物などから平安時代(9~10世紀)とされている。今回得られた 年代測定値はほぼ中世に相当し、出土遺物から推定されている時期とは必ずしも一致しない。炭化材がやや 脆く、微細な根も多少入っており、後世の根の混入などによる汚染の可能性もある。本竪穴からは他にも炭 化材が出土しているので、今後これらの炭化材についても年代測定を行い、確認したい。

3. 炭化材の樹種

(1) 試 料

試料は、平安時代の焼失家屋と考えられるH1号竪穴から出土した、住居構築材と考えられる炭化材 6 点 (試料番号 $2,3,5\sim8$) と、1 号炭窯から出土した木炭 15 点 (試料番号 $1\sim15$) である。炭窯の炭化材については、径が細いものから比較的太いものまで認められた。試料は、試料間の接合関係を確認したうえで、径の偏りがないように選択した。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに表 2 に記した。

(2) 方法

木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査 型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

竪穴建物から出土した炭化材は落葉広葉樹 2 種類 (ケヤキ・キハダ) に、炭窯から出土した炭化材は全て落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。各種類の解剖学的特徴などを、以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) ブナ科 環孔材で孔圏部は $1\sim 2$ 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の 穿孔は単穿孔、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、 $1\sim 20$ 細胞高。

・ケヤキ (Zelkova serrata (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部は $1 \sim 2$ 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管の穿孔は単穿孔、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性 III 型、 $1 \sim 10$ 細胞幅、 $1 \sim 30$ 細胞高で、結晶細胞が認められる。

・キハダ (Phellodendron amurense Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で孔圏部は $2\sim5$ 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し紋様をなす。道管の穿孔は単穿孔、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、 $1\sim5$ 細胞幅、 $1\sim40$ 細胞高。

(4) 考察

住居構築材にはケヤキとキハダ、炭窯の燃料材にはコナラ節が それぞれ確認された。このことから、それぞれの用途に合わせて 木材を選択していたことが推定される。

長野県では、主に佐久盆地周辺地域で平安時代の住居構築材の 樹種が明らかにされている (パリノ・サーヴェイ株式会社, 1989a, 1989bなど)。それらの結果では、基本的にはコナラ亜属が 多く用いられている。しかし、住居構築材の調査例が豊富な関 東地方では、同時代であっても遺跡によって種類構成が異なる例 があり、周辺植生の違いや住居の建築方式・用途等が用材に反映 されたと考えられている (高橋・植木, 1994; 橋本ほか, 1996)。

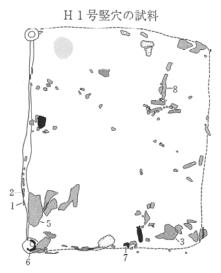


表 2 炭化材の樹種同定結果

遺構名	時代・時期	試料番号	用途	樹 種
		2	住居構築材	ケヤキ
		3	住居構築材	キハダ
H 1 号竪穴 (焼失家屋)	平安時代(9~10世紀)	5	住居構築材	キハダ
		6	住居構築材	キハダ
		7	住居構築材	キハダ
		8	住居構築材	ケヤキ
		1	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		2	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		3	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		4	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		5	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		6	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		7	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
1号炭窯	平安時代	8	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		9	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		10	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		11	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		12	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		13	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		14	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		15	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節

これらのことを考慮すれば、本遺跡周辺にはケヤキやキハダ等の落葉広葉樹を主とする植生が見られたと 考えられる。炭窯の燃料材にコナラ節が使用されていることを考慮すると、コナラ節も遺跡周辺に生育して いた可能性がある。

4. 青銅塊の成分分析

炭窯の試料には径の細い枝から比較的径が太いものまであったため、偏りがないように試料の選択を行ったが、すべてコナラ節であった。これより、炭窯内の炭化材は、同定を行っていない試料や製炭後に取り出された木炭も含めて、ほとんどがコナラ節の可能性がある。コナラ節は、薪炭材として特に優良な種類の一つであり、適材を選択的に利用していたことが推定される。

本地域周辺では、これまでに同様の調査を行った事例が少ないため、過去の用材の実態やその変遷等が不明である。今後さらに多くの調査事例を蓄積し、詳細を明らかにしたい。

4. 青銅塊の成分分析

(1) 試料

試料は、竪穴建物 (H 2 号竪穴) から出土した青銅塊 1 点である。試料表面は、淡緑色の錆で覆われている。

(2) 分析方法

蛍光X線分析装置(理学電気工業製:RIX1000)により、 $9F\sim 92$ Uの範囲の元素定性分析を行った。この方法は試料にX線(一次X線)を照射し、含有される元素が発する固有X線(二次X線)を測定することにより、その成分を知ろうとするものである。以下に分析条件を記した。

a)装置

理学電機工業社製RIX1000 (定性分析プログラム)

b) 試料調製

試料をポリエチレン膜(6μ m)で挟み、スナップリングでポリエチレン容器(ケンプレックス製 CatNo1540)上部に固定する。次に容器底部にマイクロポーラスフィルム(5μ m)を固定する。作成したポリエチレン容器試料を装置付属試料ホルダーにセットする。

ブランクとしてポリエチレン膜($6~\mu$ m)から微小のZn、Fe、Cr のピークが、また軽元素領域もSi、Ca などのピークが検出されるが、試料からの蛍光X線の方が十分大きいので数+ppmオーダーまでの検出が可能である。

c) 測定条件

X線管;Cr (50Kv - 50mA)

試料マスク;20mm ø

試料スピン;OFF

ダイアフラム;20mm ø

分光結晶; LiF, PET, TAP, Ge

検出器;F-PC,SC

(3) 分析結果

定性分析による検出元素および測定強度を表3に示す。検出された元素は、軽元素領域では、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、カリウム(K)、リン(P)、硫黄(S)の6元素、重元素領域では鉄(Fe)、チタン(Ti)、銅(Cu)、鉛(Pb)、亜鉛(Zn)、銀(Ag)、

表 3 定性分析結果

	検出元素	測定強度 (kcps)	含有率(%)
由又	Si (ケイ素)	1.635	16.00
軽元素領域	Al (アルミニウム)	0.670	6.60
夫	Ca (カルシウム)	1.541	0.59
新領	K (カリウム)	1.176	0.73
域	P (リン)	0.113	0.30
	S (硫黄)	0.246	0.69
	Fe (鉄)	2.588	3.80
垂	Ti (チタン)	0.267	0.24
黒	Cu (銅)	63.272	69.00
北	Pb (鉛)	0.193	0.77
重元素領	Zn (亜鉛)	0.039	0.03
域	Ag (銀)	1.185	1.20
	Sb (アンチモン)	0.096	0.15
	Bi (ビスマス)	0.066	0.24

注)含有率はFP法によるオーダー分析

アンチモン (Sn)、ビスマス (Bi) の8元素である。これら成分のうち、FP法によるオーダー分析によって、銅 (Cu) の含有量が 69.0% と高いものとなっている。

(4) 考察

定性分析結果から、ケイ素、アルミニウム、カルシウム、カリウム、リン、硫黄、鉄、チタン、銅、鉛、亜鉛、銀、アンチモン、ビスマスが検出された。本試料は、非破壊を前提として前処理(覆土、錆の除去)を行わず直接分析に供したため、青銅塊に本来含まれない成分も認められている可能性がある。これまでの青銅製品の成分例(山崎,1990)から、青銅塊の構成成分としては銅、鉛、亜鉛、銀、アンチモン、ビスマスおよび微量の鉄が推定される。したがって、その他の検出元素(軽元素、チタン)は青銅塊中に極微量存在する可能性はあるものの、大部分が青銅塊に付着している覆土の成分に由来すると考えられる。鉄については、本来青銅塊に含まれていたものの他に、覆土中の成分に由来するものが相当量含まれていると考えられる。

青銅の主成分は銅、錫、鉛であることが知られているが、本試料も大部分が銅で構成されている。また、鉛含有量は0.77%と少なく、錫は検出限界以下であることが特徴的である。また、青銅塊には含まれていなかったと考えられる元素を除き、含有されている成分を100%とした場合の推定成分含有量を表4に示す。銅は96.65%と極めて高いが、鉛が1.08%と低いものである。また銀が1.68%と比較的高い含有量を有する。蛍光X線分析は表面分析であることから、試料表面を覆っている緑青成分が強調されていることを考慮しても錫、鉛含有量が極めて少ない。

鉛含有量については、これまでの青銅製品の分析例(山崎,1990;中口,1987)においても、変動が大きい。一方、錫が検出限界以下であることは、鋳造時に意図的に添加されていなかった可能性がある。山崎(1990)によれば、錫は青銅の硬度を上げる役割を持つ。今回の試料とよく似た組成は、弥生時代の銅鏃、銅矛などに認められた例がある。このような銅製品については、用途と成分比の関係などの詳細が不明である。今後、用途が明確な製品も含めてさらに多くの調査事例を蓄積し、詳細を検討したい。

表 4 青銅塊の推定成分含有量

検出元素	含有率(%)
Fe (鉄)	_
Cu (銅)	96.65
Pb (鉛)	1.08
Zn (亜鉛)	0.04
Ag (銀)	1.68
Sb (アンチモン)	0.21
Bi (ビスマス)	0.34

引用文献

石河寛昭(1977) 最新液体シンチレーション測定法. 189p., 南山堂.

中口 裕(1987) 改訂 銅の考古学. 294p., 雄山閣.

日本化学会編(1976)同位体,年代測定.「新実験化学講座10 宇宙地球科学」,p. 337-353, 丸善.

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1989a) 根岸遺跡出土炭化材の樹種同定. 「鋳師屋遺跡群 根岸遺跡 発掘調査報告書」, p. 291-293, 御代田町教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1989b) 広畑遺跡出土炭化材の樹種同定. 「広畑遺跡 - 長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書-」, p. 35-40. 御代田町教育委員会.

富樫茂子・松本英二 (1983) ベンゼン-液体シンチレーションによる¹⁴ C年代測定法. 地質調査 所月報, 34, p.513-527.

山崎一雄(1990) 古文化財の科学、352p., 思文閣出版、

第Ⅵ章 ま と め

1. 縄文時代

妙高山麓は赤倉火砕流・大田切川火砕流という2枚の堆積物に覆われているため、近年まで縄文時代の遺跡が稀薄な地域であった。しかし、妙高高原町大堀遺跡[立木・寺崎ほか 1996]の調査によって、赤倉火砕流より下位に遺跡の存在が明らかとなり、その後、中ノ沢遺跡[立木・寺崎ほか1997]・関川谷内遺跡[本書・滝沢1995]が調査される契機となった(以下、大堀・中ノ沢・関川谷内と略する)。それら3遺跡は大字関川に所在し、早期・前期を主体とするという点で、「関川遺跡群」と呼称してもよい内容をもっている。地形的には、多くの小河川や沢が東に向かって流下する中で、その間の舌状の緩斜面に各遺跡は立地している。関川遺跡群の調査面積は60,000㎡を超えているが、検出された早期・前期の主な遺構は、陥し穴30基(早期・前期)、集石土坑および集石25基(早期)、土坑10数基(早期・前期)、竪穴建物「竪穴住居跡」1基(前期)であり、集石土坑の多くが屋外炉の一形態であるとしても、定置的居住の痕跡は少ない。出土遺物も、多くは遺構に伴わず、比較的散漫なブロックを構成している。妙高山の広大な裾野では、未発見の早期・前期の遺跡も局所的で散漫な遺物・遺構の散在という形を取るのであろう。

A 早期の土器

「表裏縄文土器」は、B地点I区に器体をほぼ復元できるものが1個体あるほか、A地点I区にも数点の出土がある。口縁部破片は、内面の施文がいずれも口縁部でおさまり、器体の下半部には及んでいない。この施文手法は長野県木島平村三枚原遺跡 [広瀬・高橋1977] の表裏縄文と共通するもので、内面を胴部下半まで施文する例より後出するものと言われている [広瀬1995]。本文第Ⅳ章では、表裏縄文土器を撚糸文系土器としたが、他の土器の共伴がないため、撚糸文系土器のどの段階に置かれるものか不明である。表裏縄文土器は大堀・中ノ沢にも存在し、中ノ沢には撚糸文系土器の出土もある。表裏縄文土器の位置づけについては、一定の論及がなく、大堀の報文もそれを保留しているが、関川遺跡群3遺跡の出土状況を見る限り、押型文系土器I群に先行するか、その時期に一部並行する可能性が考えられる。この問題については、押型文系土器I群に先行するか、その時期に一部並行する可能性が考えられる。この問題については、押型文系土器と表裏縄文土器が多く出土している長野県信濃町東浦遺跡 [岡村1993]・日向林B遺跡 [谷1994]の正式な報告によって、明らかにされると期待する。

押型文系土器は、I 群 (無文帯をもつ帯状構成)・Ⅱ 群 a (無文帯のない同種文様の多段構成)・Ⅱ 群 b (無文帯のない異種文様併用構成)・Ⅲ 群 (回転押捺文と沈線文・刺突文の複合構成) に分類されるが、以下、大堀・中ノ沢の土器もこの分類に対比させた上で若干の検討を加えてみたい。ただし、小破片で文様の構成を把握できないものが多いという制約上、無文帯の有無−いわゆる密接施文と帯状施文の区分−などに分類の不徹底があることも否定できない。なお、関川谷内については調査面積が広大で、A 地点 I 区・Ⅱ 区が中ノ沢と近接するため、A 地点 Ⅲ 区と B 地点 I 区を代表させる。関川谷内および関川遺跡群に、それぞれの分類が単独で存在するブロック・遺構はなく、明確な共伴関係を知り得る状況にはないが、以下のような各遺跡間の相違を抽出することができる。

		大 堀	中ノ沢	関川谷内	(小熊) 1997)
I 群		表裏縄文?	表裏縄文?	表裏縄文?	(1期) 2期
					期
I 君 老	I ¥				3
II 群 b	1				期
b	2				
郡				具殼沈線文系	4 期

第20図 関川遺跡群における押型文系土器の構成

「大堀・中ノ沢は I 群(山形文)を主体とし、関川 谷内は II 群・Ⅲ群を主体とする」

「中ノ沢の I 群には菱目文・楕円文が一定量存在するが、大堀では両者とも少ない」

「大堀・中ノ沢のI群には、異方向施文のものが少数存在する」

「無文帯の有無は不明だが、大堀にネガティヴ楕円 文を用いるものがある|

「関川谷内に多出する Ⅱ群 b は中ノ沢に皆無であり、 大堀でも3点(107~109、同一個体)にとどまる」 「Ⅲ群 b でも、楕円文と平行線状文を併用するもの は関川谷内にしかない」

「Ⅲ群は関川谷内にしか存在しない。また、沈線文 系土器も関川谷内にしか存在しない」

絶対量の少なさからくる偶発的なものがあること を否定できないが、近接する3遺跡における上記の

相違はほぼ時間差として理解され、小熊博史による変遷案[小熊 1997 a] におおむね対比することが可能である(第20図)。

1期は大堀のネガティヴ楕円文、大堀・中ノ沢の異方向施文・縦位施文の山形文、関川谷内の14(口唇と口縁内面にも施文)・16(口縁外面に横位、口縁部に密接する縦位の施文)などの押型文系土器が相当すると思われるが、それらを分離できる出土状況は見られない。また、撚糸文系土器・「表裏縄文土器」との関係についても問題が残っている。2期については、I群の土器がほぼ相当するであろう。ただし、大堀・中ノ沢には多少の前後差が認められる。おそらく、菱目文・楕円文が比較的多用される中ノ沢が、相対的に新しく置かれると思われる。3期については、3遺跡における出土状況からⅡ群aとⅡ群bを分離し、Ⅱ群bについても、Ⅲ群に見られる平行線状文との関係から、山形文を用いるもの(①とする)と平行線条文を用いるもの(②とする)を分離することができる。この間で楕円文は両者に併用され、長い時期幅をもつ。Ⅲ群については、沈線文・刺突文が山形文とではなく、楕円文・平行線状文と併用されることから、Ⅲ群b②に共伴する可能性は高いと思われるが、3遺跡にはそれを裏付ける事実関係がない。今のところ、Ⅲ群は少なくても県内に類例のない特異なものである。いずれにせよ、上記の把握は関川遺跡群3遺跡の対比のみによるものであり、この点、上信越自動車道関係の報告を始めとして、周辺地域の様相を考慮した上で、今後再構成される必要のあるものである。

押型文系土器の様相については、中ノ沢遺跡の報文でも層位的所見から3段階の設定「W層上位・W層下位・W層」がなされているが、W層(早期~前期中葉の遺物包含層)上位・下位の分離は土層それ自体の相違でなく、出土地点でのW層の厚さを折半した「上下」であり、それが層位的なデータとして見なせるかという、資料操作上の問題がある。加えて、B区のW層は上位に早期末葉~前期中葉の、下位に前期前葉の土器が混在しており、押型文期単純の遺物包含層ではない。出土層位に相対的な新旧関係はあるとしても、出土層位の違いを押型文系土器の時間的段階に敷衍することは難しいように思われる。

B 石 器

(1) 石器の分布状況

V層の石器は、便宜的に上部・下部・下底(以下、V上・V下・V底)と分けて取り上げているが、Ⅲ章 1節で述べているように厳密な層位ではない。しかし、土器の時間的前後関係と出土層位には、ある程度の 対応が認められるので、第Ⅳ章3節で記述できなかった石器の所属時期について、ここで補足しおきたい。 B地点1区

平面的分布と層位的分布が最も明確に分かれる。B地点I区の西側A~Eラインには押型文系土器が分布し、その東側寄りのD~Hラインに石器が分布する。V底出土の不定形石器・磨製石斧以外は全て稜磨石で、12点ある。遺構以外で出土した稜磨石8点のうち、2点はV上、5点はV下、1点はV底のものであり、V下が一番多い。一方、東端のO~Sラインでは、石器と羽状縄文系土器の分布がほぼ重なっている。西側に多い稜磨石は4点、他の9点は全て磨石類であり、磨石類の8点がV上で出土している。したがって、羽状縄文系の土器に磨石類、押型文系土器に稜磨石が主として共伴する傾向があるといえる。

A地点Ⅲ区西端部

B~Eラインに、多量の押型文系土器と若干の条痕文系土器が分布し、その範囲内で石器 12 点が出土した。稜磨石が一番多く、V下から 6 点出土した。うち 1 点は V上の 1 点と接合した。ほかに礫器が V底で 1 点、V下で 2 点、不定形石器・磨製石斧が V上で各 1 点、磨石類が V下で 1 点出土した。ここでは、稜磨石は押型文系~条痕文系土器に伴う石器と捉えられる。

A地点Ⅲ区北東側

K~Qラインで、押型文系・羽状縄文系土器と石器が分布を同じくして混在する。石器はV上で15点、V下で23点、V底で18点の計56点で、器種・出土層位とも西端部やB地点I区と比べて多様である。稜磨石の平面的な分布は散漫である。25点中、V上が6点、V下が13点、V底が6点で、V層下部が一番多い。磨石類は7点中、V上が4点、V下が2点、V底が1点で、V層上部が一番多い。礫器はV下とV底で各3点出土した。稜磨石がV層下部、磨石類がV層上部にまとまるという傾向はB地点I区と共通する。碟器はV層上面での出土が全くなく、おそらく羽状縄文系土器には伴わないのであろう。

(2) 関川遺跡群における早期・前期の石器構成

3遺跡はともに早期・前期を主体とするが、時間的なばらつきが大きく、単純に石器の構成を比較しうる 状況にない。関川谷内V層は羽状縄文系・押型文系土器が多数で、中ノ沢は早期・前期土器の約7割が押型 文系土器である。大堀は草創期?から前期末葉の時期幅があり、条痕文系・羽状縄文系土器が多数を占め、 押型文系・撚糸文系土器がこれに次ぐ。このような条件をふまえた上で、ここでは、用途別の石器構成(用 途の区分は[鈴木1996]による)、礫石器とそれ以外の石器の比率、トゥールと素材の比率をもとに3遺跡 の石器を整埋したい。

石器は、用途別に狩猟具(石鏃・尖頭器・石錘)、採取・加工具(打製石斧・磨製石斧・箆状石器)・調理 具(稜磨石・磨石類・石匙)に分類し、その構成を第4表に示した。中ノ沢と大堀の石器は、報告書の図と 表から本遺跡の分類に対比させた上で、用途別に集計した。また、中ノ沢については遺物の密度が高いB区 の遺物を抽出し、早期・前期に対応するW・W・X層出土の石器を数量化した。 3遺跡とも調理具の割合が一番高いが、関川谷内A地点Ⅲ区(以下、AⅢ)・B地点I区(以下、BI)と中ノ沢は、調理具>採取・加工具>狩猟具であり、大堀は調理具>狩猟具>採取・加工具となる。関川谷内は調理具の中でも特に稜磨石が多く、全地区の総計288点中、69点(24%)を占める。また、稜磨石・磨石類の素材として持ち込まれた円礫は64点(22%)で、稜磨石の点数に相当する。中ノ沢は調理具の割合は高いが、用途分類

		関川谷	内	関川谷	内	中ノ沢	B区	大力	屈
		A 地点]	$\mathbb{I}\mathbb{Z}$	B地点	IΧ	M · M ·	IX層	_ ^ *	/III
		比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数
狩	石鏃	3.9	2			13.6	6	30.6	15
猟	尖頭器							2.0	-1
具	石錘							2.0	1
ăl		3.9	2			13.6	6	34.7	17
採	打製石斧	1.9	1	3.8	1			2.0	1
加	磨製石斧	5.8	3			2.3	1		
具	箆状石器					13.6	6	2.0	1
副		7.7	4	3.8	1	15.9	7	4.1	2
調	稜磨石	67.3	35	59.2	16	34.2	15	26.5	13
理	磨石類	21.1	11	37.0	10	29.5	13	32.6	16
具	石匙					6.8	3	2.0	1
計		88.4	46	96.2	26	70.5	31	61.2	30
合計		100.0	52	100.0	27	100.0	44	100.0	49

第4表 関川遺跡群における石器の用途別構成

以外の石器と剥片が多い。大堀は他より狩猟具を含めた剥片石器の割合が高いが、素材の比率は低い。なお、中ノ沢・大堀には、礫石器の素材はほとんど見られないが、発掘調査・整埋時の、「円礫」に対する認識が関係していることも考えられる。

礫石器(素材を含む)とそれ以外の石器(剥片等を含む石器類全体)の比率は、関川谷内AⅢで5:5、 関川谷内BIで7:3、中ノ沢・大堀で2:8を示す。また、トゥールとトゥールでないものの比率は、関 川谷内AⅢで6:4、関川谷内BIで5:5、中ノ沢で4:6、大堀8:2である。上述したこれらの差異 が、生活様態を反映したものか否かの判断や、他遺跡の石器構成との細かい比較は今後の課題である。

2. 古代平安期

A 妙高山麓の概況

H1号竪穴・H2号竪穴で、猿投窯K90号窯式~O53号窯式に相当する灰釉陶器を含む一括遺物が得られ、古代頸城地方の歴史を追求する上で基礎となる良好な資料を提示することができた。関川谷内の灰釉陶器は、今日の研究成果 [齊藤1994] によれば、9世紀後半から10世紀前半の年代を与えるもので、2基の竪穴建物を中心とする遺跡の存続時期もこれを外れることはないと思われる。頸城地方、特に頸城平野(新井市街地以北)の平安期は掘立柱建物を基本としており、竪穴建物は新井市岡崎新田遺跡に十数基 [新井市教委1995概要パンフレット]、上越市蛇谷遺跡に3基 [星1997]、裏山遺跡に1基 [小池1997] あるのみで、明確な時間枠の中で扱うことのできる資料は限られている。

『和名類聚抄』は越後国に7郡32郷を記載しており、頸城郡10郷のうち荒井郷について、『日本地理志料』『中郷村史』は妙高高原町から新井市南部の旧北国街道沿いをあてている。しかし、史料は乏しく、頸南地域、ことに遺跡周辺がどのような郷下にあったか、あるいは郷制から外れていたのか不明である。縄文時代と同様に中ノ沢遺跡・大堀遺跡・関川谷内遺跡は、共通して9世紀末葉頃の遺跡であるほか、約2㎞北方でも東浦遺跡 [小田1993] があり、9世紀前後、妙高高原町関川集落一帯にある程度の規模をもつ村落が存在したことは明らかである。これらの遺跡は標高600mほどの高地に存在し、「里」と隔絶した「山棲み」の特異な集落という性格も想定されるが、近距離にある野尻湖の周辺では同時期の遺跡が比較的密に分布しているという状況 [中村1994] があり、その延長上に展開した集落と考えるのが妥当な方向であろう。

B土器

頸城地方平野部においては、美濃・尾張産、特に光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器が比較的多く出土しており、以前から頸域地方の物流が北陸道より、東山道に傾斜していると指摘されていた。関川谷内の灰釉陶器は、椀・皿7、瓶類3、小瓶2、耳皿1の個体が識別され、さらに緑釉陶器も1点含まれている。また、妙高村柳平遺跡[大滝1996]・大洞原C遺跡[三ツ井ほか1997]のような

食膳具			数字は [宇野1992] に	こよる個体数
	土師器椀	黒色土器椀	須恵器杯	灰釉椀・皿	計
H 1 号竪穴	2.3	2.1	_	0.9	5.3
H 1 号竪穴床造成土	0.1	1.0	0.1	_	1.2
H 2 号竪穴	7.1	19.8	0.4	0.4	27.7
B地点1層	3.7	4.2	0.3	0.1	8.3
計	13.2	27.1	0.8	1.4	42.5
БI	(31%)	(64%)	(2%)	(3%)	
貯蔵具					
	土師器小壷	灰釉長頸壷			計
H 1 号竪穴	_	-		-	-
日1号图定庆造成十					

	土師器小壷	灰釉長頸壷		計
H 1 号竪穴	_	-		_
H 1 号竪穴床造成土	_	_		_
H 2 号竪穴	0.4	-		0.4
B地点1層	_	0.5		0.5
青	0.4	0.5		0.9
老油目				

总办六				
	長甕	小甕	鍋	計
H 1 号竪穴	0.3	-	0.1	0.4
H 1 号竪穴床造成土	-	0.3	_	0.3
H 2 号竪穴	0.3	1.4	0.2	1.9
B地点1層	0.6	0.2	_	0.8

1.9

0.3

総計 46.8個体

	食膳具	貯蔵具	煮沸具
機能別構成比	90.8%	1 9%	7 2%

1.2

第5表 古代の土器の構成

小規模遺跡においても灰釉陶器が出土し、上述の指摘を補足している。同時期の信濃にあっては量的な多寡 はあっても、灰釉陶器の出土は特別なことではないと言われており、少なくても頸南地域では灰釉陶器を稀 少品とする理由はなくなっているように思われる。

計

土器の組成は、食膳具に占める黒色土器の比率が高く、総計では64%に達する。また土師器は橙色系の「赤い土器」が圧倒的に多く、甕はいわゆる北信系である。中ノ沢遺跡では食膳具の絶対量が少なく、その数値に統計的な意味を求められないが、SI4では9割が黒色土器、SI5でもほとんどが黒色土器である。松本平の吉田川西遺跡SB144・SB111段階でも黒色土器の比率は高く[原1988]、現在の行政区画から信濃を彼岸に置いて、両遺跡の土器を「信濃の影響を受けている」とするより、むしろ北信濃と共通の基盤上にあるものと考えるのが適当と思われる。

頸城平野において、関川谷内H1号・H2号竪穴に対応するのは、上越市今池遺跡群VI期・VI期 [坂井1984]、上越市四ツ屋遺跡 I - 2期・II期 [四ツ屋遺跡調査団 1988]、新井市杉明遺跡 V期 [高橋 1989] であり、それらに共通して認められることは、「須恵器は貯蔵具に限られ、食膳具にはごく少量しか見られなくなること、土師器甕は口縁端部を丸くおさめる北信系がある程度の比率を占めること、施釉陶器が少量含まれること」である。これらの動きは関川谷内・中ノ沢に共通するが、食膳具に占める黒色土器の比はおそらく2~3割程度と低く、食膳具にのみ明らかな差異が見られる。なお、土師器甕は頸城平野では杉明遺跡のほかにまとまった資料が提示されておらず、遺跡間の相違はあると思われるが、それを抽出できない。

C 石跨・金属製品等

現在、新潟県内で出土している石銙は、藤巻正信の教示によれば第 6 表のとおりである。それらにおおむね 9 世紀~10 世紀の年代が与えられることは、延暦十五(796)年に銅材の銙帯が禁止されたことに対応していると見られる。佐藤興治・阿部義平らが、かつて銅製のものを含めて銙帯の寸法を律令官人の位階に対置させる方向を示した[佐藤 1975]・[阿部 1976]が、亀田博は位階による銙帯の整然とした差はなく、石

遺跡名	所在地	点数	文 献
宮野	上越市三ツ橋新田	丸鞆 1	新潟県教委 1985 『宮野遺跡』
四ツ屋	上越市大豆	丸輌5 (2点に垂孔)	四ツ屋遺跡調査団 1988 『四ツ屋遺跡発掘調査報告書』
		巡方1	
		丸鞆 2	上越市教委 1989 『四ツ屋遺跡発掘調査報告書』
新田畑	上越市大貫	巡方1	上越市教委 1994 『新田畑遺跡現地説明会資料』
高津	上越市高津	巡方1	上越タイムス 1995.6.13
宮ノ本	新井市高柳	巡方1(垂孔)	新井市教委 1995 『平成6年度新井市遺跡確認調査報告書』
杉明	新井市栗原	巡方?1	新井市教委 1989 『杉明遺跡発掘調査報告書』
関川谷内	中頸城郡妙高高原町関川	巡方1、丸鞆3	本書
		不明1	
八幡林	三島郡和島村島崎	巡方1	和島村教委 1997 『国指定史跡 八幡林官衙遺跡』
寺前	三島郡出雲崎町乙茂	巡方1	1988~90県教委調査。未報告
山木戸	新潟市山木戸	蛇尾1、巡方1	新潟市 1994 『新潟市史資料編1原始古代中世』(巡方は未報告)

第6表 石銙出土遺跡一覧

装腰帯の着用も官人に限定されていなかったとする異なった視点を示し [亀田1983]、それを展開する方向で田中広明が型式学的に跨帯を再構成している [田中1990・1991]。亀田が論ずるように、石装腰帯が一般に官給でなく、売買されていたものであれば、石銙の材質や大きさから腰帯を装着していた者の位階を追求することはあまり意味を持たないであろう。また、出土した白色系石材(大理石)3点と黒色系石材(頁岩)2点の石銙が、養老衣服令以降のどの腰帯にあたるかということと、居住者の官人としての位階、あるいは階層がどうであるかということは別の問題である。

隣接する中ノ沢遺跡でも、鉄滓・羽口が出土し、共通して「六」の墨書土器が出土していることは、両遺跡の至近に鍛冶工房が存在し、共通する組織の下に鍛冶作業が行われていたことを想定させる。鍛冶関係の遺構としては竪穴建物の西方に炭窯があり、炭の放射性炭素年代は灰釉陶器の年代にほぼ一致することという分析結果が出ているが、頸南地域で伏窯と鍛冶関連遺物がセットとしてある遺跡は関川谷内のほかになく、生産効率・品質に優れない伏窯の炭が鍛冶に使用されたとは考えがたい。

石跨、墨書土器、鉄淬、青銅塊、鉄・銅製品、漆付着土器という豊富な遺物から類推される竪穴建物の性格は、ある施設の掌握者、あるいはそれに付随する工房掌握者の居宅であるが、墨書土器の文字に直接その性格を規定するものは見出せない。また、施設や工房が、律令体制下の公的なものか否かは、今後検討されるべき課題である。いずれにしても、有力者の居宅が山間地に存在したことの背景が明らかではなく、『延喜式』の記載では信濃国沼辺駅で途絶えている東山道支道の整備状況に関心が持たれる。

要 約

- 1. 関川谷内遺跡は新潟県南西部の中頸城郡妙高高原町大字関川に所在し、妙高山東山麓の緩斜面に位置する。標高は600 m前後であり、現況は山林であった。
- 2. 調査は上信越自動車道妙高インターチェンジの建設に伴い、平成5から7年度の三か年に実施した。調査面積は総計42,000㎡であり、このうち35,000㎡の調査について本書に報告した。遺跡は上信越自動車道用地内にとどまらず、周辺に広がっていると考えられる。
- 3. 調査の結果、縄文時代と古代の遺物・遺構が発見された。
- 4. 縄文時代の土器は早期・前期を中心としており、それらは赤倉火砕流堆積物より下位の層で出土している。このことから、赤倉火砕流の発生年代が見直された。早期の押型文系土器については、周辺遺跡との対比によって詳細な土器の変遷を知りうる資料が示された。石器は調理具である稜磨石・磨石類が特に多く、このことは妙高山麓の早期・前期の傾向として理解できる。検出された15基の集石土坑は炉跡と考えられる。
- 5. 古代については堅穴建物 2 基と炭窯 2 基などがあり、これらの年代は 9 世紀後半から 10 世紀前半の年代が与えられる。遺物は 2 基の竪穴建物から多数出土しており、妙高山麓の土器のあり方を知る基準的な資料である。 2 基の竪穴建物は建替えと見られる。竪穴覆土には墨書土器・金属製品・石跨などがあり、居住者の一人は官人、あるいはそれに相当する有力者であろう。ただし、竪穴建物が鍛冶工房を兼ねていることが予想され、不明な点も多い。土器は「北信・頸南系」が多数を占めており、北信地方と頸南は深く共通している状況が窺われる。

妙高山麓では、前述の時期に小規模な集落が形成されており、この頃が山麓開発の一画期であることが明らかである。しかし、この要因については今後の検討課題である。

引用・参考文献

ア会田 進ほか 1971 『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教育委員会

赤塩 仁・三上徽也 1994 「下島式・晴ケ峯式の再提唱とその意義 - 縄文時代前期末葉土器群の型式変化をとおして - 」『中部高地の考古学IV』 長野県考古学会

阿子島香 1989 『石器の使用痕』考古学ライブラリー56 ニューサイエンス社

阿部義平 1976 「銙帯と官位制について」 『東北考古学の諸問題』 東北考古学会

荒川隆史 1995 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成5年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

飯坂盛泰 1997 「八斗蒔原遺跡・野林遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度 (財)新潟県埋蔵文化 財調査事業団

上ッ平遺跡発掘調査団 1992 『上ッ平遺跡発掘調査概況報告書』 妙高村教育委員会

遠藤ケイ 1995 「炭焼き窯職人伝」『男の民俗学』 山と渓谷社

大滝良夫ほか 1996 「柳平遺跡」『上信越自動車道関係発掘調査報告書 I 横引遺跡 籠峰遺跡 柳平遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

大竹憲昭 1995 「貫ノ木遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』12 (財)長野県埋蔵文化財センター

小笠原水隆 1994 「琵琶島遺跡採集の縄文土器」『野尻湖博物館研究報告』第2号 信濃町立野尻湖博物館

岡村秀雄 1993 「東浦遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』10 (財)長野県埋蔵文化財センター

岡本郁栄 1982 『奥の城(西峯)遺跡第二次発掘調査概報』 中郷村教育委員会

岡本勇ほか 1967 『大貝遺跡の調査』 立教大学考古学研究会

小熊博史 1989 「縄文時代早期終末における絡条体圧痕文土器の一様相-新潟県中魚沼地方の資料を中心に」 『信濃』第41巻第4号 信濃史学会

小熊博史 1997a 「新潟県における押型文系及び沈線文系土器群の様相」『押型文と沈線文』シンポジウム本編 長野 県考古学会縄文時代(早期)部会

小熊博史 1997b 「卯ノ木遺跡出土土器の研究I」『長岡市立科学博物館研究報告』第32号 長岡市立科学博物館 小田由美子 1993 「東浦遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 平成4年度 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業

大場厚順 1978 「妙高山信仰の変遷と修験行事」『山岳宗教史研究叢書』 9 富士・御嶽と中部霊山 名著出版

大場厚順 1994 「妙高山信仰の展開」『妙高村史』 妙高村

カ笠木信男 1986 「土製品・石器・石製品 不定形石器、ピエス・エスキーユ、石核」『田柄貝塚』 宮城県教育委員

神奈川県立埋蔵文化財センター 1993 『かながわの遺跡展 貨幣から見た生活史』

春日真実 1995 「古代集落の展開 - 越後を事例として - 」『研究紀要』1995 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実 1997 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会

金子 達 1987 「越後・佐渡の神社」『新潟県史』通史編2中世 新潟県

亀井 博 1983 「銙帯と石帯-出土銙・石帯の研究ノートー」 『考古学論攷』 関西大学文学部考古学研究室

北村 亮 1990 「縄文時代早期の土器について」『関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原 I 遺跡 上林塚遺跡』 新 潟県教育委員会

北村 亮ほか 1990 『関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原 I 遺跡 上林塚遺跡』 新潟県教育委員会

桐原 健 1968 「平安期に見られる山地居住民の遺跡」『信濃』第20巻第4号 信濃史学会

黒坂周平 1989 「東山道」『長野県史』通史編第一巻 長野県史刊行会

小池義人 1995 「関川谷内A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成6年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人 1996 「関川谷内B遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人・立木(土橋)由理子ほか 1996『上信越自動車道関係発掘調査報告書 I 横引遺跡 籠峰遺跡 柳平遺跡』 新 潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人 1997 「裏山遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

小島正巳 1985 「妙高山麓松ヶ峯遺跡群」『信濃』37巻5号 信濃史学会

小島正巳 1991 「妙高山麓採集の押型文土器-松ケ峯No. 202·208遺跡ほか(17遺跡)-」『新潟県考古学談話会会報』 第7号 新潟県考古学談話会

小島正巳 1993a 「妙高山麓高床山山地の遺跡-表面採集からの所見-」『新潟県考古学談話会会報』第7号

小島正巳 1993b 「妙高村松ケ峯 No. 237 遺跡の縄文時代早期土器」『新潟考古』 4 新潟県考古学会

小島正巳 1995 「妙高山麓における最近の考古学事情」『妙高火山研究所年報』第3号 妙高火山研究所

小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 - 松本市内その1 - 総論編』 (財) 長野県埋蔵文化財センターほか

小林昌二・戸根与八郎 1995 『新潟県出土の墨書文字 (稿一)』 新潟墨書土器研究会

小林達雄 1989 「縄文土器の様式と型式・形式」『縄文土器大観4』 後期・晩期・続縄文 小学館

駒形敏郎・石原正敏・小熊博史 1984 「新潟県における縄文時代早期・前期の基礎的研究 (1)」『長岡市立科学博物 館研究報告』第19号 長岡市立科学博物館

駒形敏郎・石原正敏・小熊博史 1986 「新潟県における縄文時代早期・前期の基礎的研究(3)」『長岡市立科学博物館研究報告』第21号 長岡市立科学博物館

駒形敏郎・小熊博史 1988 「新潟県における縄文時代早期・前期の基礎的研究 (5)」『長岡市立科学博物館研究報告』第23号 長岡市立科学博物館

サ齊藤秀平 1937 「新潟縣における石器時代遺蹟調査報告」『新潟縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第7輯 新潟縣 斎藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産ー猿投窯を中心にー」『古代の土器研究ー律令的土器様式の西東3』 古代 の土器研究会

(財)新潟県埋蔵文化財調查事業団 1993 「大重沢B遺跡」『新潟県埋蔵文化財調查事業団年報』

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1995 『妙高山麓の遺跡-高速道路・国道の発掘』

坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告 I 今池 遺跡 下新町遺跡 子安遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥 1990 「越後平安期土器編年素描-西南部頸城地方を中心に-」『東国土器研究』第3号 東国土器研究会

笹沢浩・小林学 1966 「長野県上水内郡信濃町塞ノ神遺跡出土の押型文土器」『信濃』18巻4号 信濃史学会

笹沢 浩 1988 「古代の土器」『長野県史考古資料編全一巻 (四) 遺構遺物』長野県史刊行会

笹澤正史 1995 「信・越地域にまたがるロクロ土師器甕の在り方について」『新潟考古学談話会会報』第15号 新潟 考古学談話会

佐藤興治ほか 1975 『平城京発掘調査報告書VI』 奈良国立文化財研究所

佐藤雅一 1987 『川久保遺跡Ⅱ·宮林B遺跡』湯沢町埋蔵文化財報告第6輯 湯沢町教育委員会

鈴木俊成 1996 「石器」『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡Ⅱ』 新潟県教育委 員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

鈴木俊成 1994 「平安時代の土器」『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』 新 潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

鈴木次郎 1977 「磨石類」『尾崎遺跡』 神奈川県教育委員会

鈴木道之介 1991 『図録 石器入門事典 縄文』柏書房

タ高橋 保ほか 1992 『関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡』 新潟県教育委員会

高橋 勉 1989 『杉明遺跡』新井市教育委員会

高橋 勉 1994 「高床山遺跡群」 『新井市遺跡確認調査報告書』 新井市教育委員会

高橋 勉 1995 『平成6年度新井市遺跡確認調査報告書』 新井市教育委員会

高橋保雄 1990 「石器」『関越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡』新潟県教育委員会

高浜信行 1996 「岩屑流」『新版 地学事典』地学団体研究所 平凡社

滝沢規朗 1995 「関川谷内B遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成6年度 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

田口昭二 1982 「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』No.211 ニュー・サイエンス社

武田孝昭 1996 「野林遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

武田孝昭 1996b「小野沢西遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業 団

田中広明 1990 「律令時代の身分表象 (I) -帯飾具の生産と変遷-」『土曜考古』第15号 土曜考古学研究会

田中広明 1991 「律令時代の身分表象(Ⅱ)-腰帯をめぐる人々の奈良・平安時代-」『土曜考古』第 16 号 土曜考古学研究会

谷 和隆 1994 「日向林B遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』11 (財) 長野県埋蔵文化財センター

親跡 喬 1988 『図録 南田遺跡』 中郷村教育委員会

親跡 喬 1992 『図録 柿ノ木遺跡』 妙高村教育委員会

地学団体研究会·新版地学辞典編集委員会 1996 『新版地学辞典』 平凡社

立木(土橋)由理子 1996 「横引遺跡」『上信越自動車道関係発掘調査報告書 I 横引遺跡 籠峰遺跡 柳平遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

立木(土橋)由理子・寺崎裕助ほか 1996 『一般国道 18 号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書 I 大堀遺跡』 新潟 県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

立木(土橋)由理子・寺崎裕助 1997 『上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 萩清水遺跡・三本木新田B遺跡』 新潟県 教育委員会 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

立木(土橋)由理子・寺崎裕助ほか 1997 『一般国道 18 号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 中ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

立木(土橋)由理子 1997 「縄文時代の石器」『一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 中ノ沢遺跡』 新 潟県教育委員会 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

立木(土橋)由理子 1997b 「妙高火山起源の堆積物とその年代」『一般国道 18 号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告

書Ⅱ 中ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

土田孝雄ほか 1988 『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』青海町教育委員会

寺島俊郎 1991 「栗毛坂遺跡群5 (1) 古墳時代末から平安時代の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化祭発掘調査報告 書2-佐久市内その2 木戸A遺跡ほかー』 (財) 長野県埋蔵文化財センターほか

常磐井智之・望月静雄ほか 1994 『上野遺跡Ⅳ』 飯山市教育委員会

戸根与八郎ほか 1985 『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 宮野遺跡』 新潟県教育委員会

ナ中郷村教育委員会 1987 『籠峰遺跡発掘調査概報』

中川成夫 岡本 勇ほか 1959 『顕聖寺遺跡』 浦川原村教育委員会

中川成夫 岡本 勇ほか 1967 「葎生遺跡」 『頸南』 新潟県教育委員会・頸南地区総合学術調査会

中村敦子 1994 「歴史的環境」『丸谷地遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書 - 平安時代住居址・押型文土器の遺跡 - 』 信 濃町教育委員会

中村孝三郎 1963 『卯ノ木押型文遺跡 貝坂遺跡』長岡市立科学博物館考古研究調査報告第五冊 長岡市立科学博物 館

中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館考古研究調査報告第八冊 長岡市立科学博物館

中村孝三郎・小片 保 1964 『室谷洞窟』長岡市立科学博物館考古研究調査報告第六冊 長岡市立科学博物館

中村辛一・松永靖夫ほか 1981 『新潟県史』資料編6近世一上越編 新潟県

長野県考古学会縄文時代(早期)研究部会 1994 『表裏縄文土器から立野式土器へ』研究会資料

中村由克ほか 1994 『丸谷地遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書-平安時代住居址・押型文土器の遺跡-』 信濃町教育 委員会

奈良国立文化財研究所 1989 『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』 奈良国立文化財研究所史料第31 冊 奈良国立文化財研究所

新潟市史編纂原始古代中世部会 1994 「山木戸遺跡」『新潟市史資料編1 原始古代中世』 新潟市

野尻湖人類考古グループ 1993 「仲町遺跡 第6回陸上発掘の考古学的成果 VI仲町1号・2号住居址」 『野尻湖博物館研究報告』 第1号 信濃町立野尻湖博物館

能登 健・洞口正史・小島敦子 1985 「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』第37巻第4号 信濃史学会

野村一寿 1987 「研究ノート・凹石研究のために―学史―」『紀要1』 (財) 長野県埋蔵文化財センター

ハ橋口定志 1985 「平安期における小規模遺跡出現の意義」『物質文化』44 物質文化研究会

早津賢治・古川成光 1981 「妙高火山赤倉火砕流堆積物と田口泥流堆積物の□ C 年代」『第四紀研究』20 日本第四 紀学会

早津賢治・小島正巳 1985 「火山噴出物と先史時代遺物包含層との層位関係」『妙高火山群ーその地質と活動史ー』 第 一法規

早津賢治・河内晋平ほか 1992 「妙高火山の大規模崩壊堆積物」『八ヶ岳韮崎岩屑なだれ堆積物の側方岩相変化と発生源の不整合および妙高火山の大規模崩壊堆積物』中部日本における火山体の巨大崩壊堆積物の特性に関する調査研究 平成3年度文部省科学研究 費補助金研究成果報告

早津賢治 1994a 「妙高火山群研究の 1993 年における新展開と問題点」『妙高火山研究所年報』第2号 妙高火山研究所

早津賢治 1994b 「新潟焼山火山の活動と年代-歴史時代のマグマ噴火を中心として-」『地学雑誌』Vol. 103 No 2 (社)東京地学協会

早津賢治 1995a 「妙高村史の「妙高山の地形と地質」に関する部分の論評」『妙高火山研究所年報』第3号 妙高火山研究所

早津賢治 1995b 「妙高火山群研究の1994年における新展開と問題点」『妙高火山研究所年報』第3号 妙高火山研 究所

早津賢治 1995c 「妙高火山-赤倉火砕流の¹⁴ C年代」『道添遺跡Ⅱ』 妙高村教育委員会

早津賢治 1996 「妙高火山の火砕流・岩屑なだれ堆積物と降下テフラ」『第四紀露頭集-日本のテフラ』 日本第四紀 学会

原 明芳 1988 「長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』 2 (財) 長野県埋蔵文化財センター

原 明芳 1989 「吉田川西遺跡にみられる食器の変容」 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3 - 塩尻市 内その 2 - 吉田川西遺跡』 (財) 長野県埋蔵文化財センターほか

原 明芳 1994 「信濃の施釉陶器」『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西・東3 施釉陶器』古代の土器研究会

平野団三 1978 「古代」 『中郷村史』 中郷村役場

広瀬昭弘·高橋 桂 1977 『三枚原遺跡』 木島平村教育委員会

広瀬昭弘 1995 「表裏縄文土器研究の現状と課題」『長野県考古学会誌』77・78号 長野県考古学会

星 奈津子 1996 「頸南地域の歴史的環境」『上信越自動車道関係発掘調査報告書 I 横引遺跡 籠峰遺跡 柳平遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

星 奈津子 1997「蛇谷遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

本間信昭・室岡 博 1976 『兼俣遺跡 新潟県中頸城郡妙高高原町兼俣遺跡発掘調査報告』 妙高高原町教育委員会 マ町田勝則 1996 「石器の研究法」『長野県の考古学』 (財) 長野県埋蔵文化財センター

町田洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス-日本列島とその周辺』東京大学出版会

三ツ井朋子ほか 1997 『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ 大洞原C遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋 蔵文化財調査事業団

皆川完一・花ヶ前盛明ほか 1983 『新潟県史』資料編4中世二 新潟県

宮崎朝雄・金子直行 1995 「回転文様系土器群の研究-表裏縄文系・撚糸文系・室谷上層系・押型文系土器群の関係」 『日本考古学』第2号 日本考古学会

妙高村史編さん委員会 1994 『妙高村史』 妙高村

妙高団体研究グループ 1969 「妙高火山の形成史と山麓の水理地質 - 新潟県の第四系・その10 - 」『新潟大学教育学 部高田分校研究紀要』No.14

室岡 博ほか 1966 「先史・古代の頸南」『頸南-中頸城郡南部学術総合調査報告書-』新潟県教育委員会・頸南地 区総合学術調査会蛇

室岡 博·早津賢治 1986 『中古遺跡』妙高村教育委員会

室岡 博 1986 『兼俣遺跡 (D地区)』 妙高村教育委員会

室岡 博 1994 『道添遺跡』 妙高村教育委員会

望月 映 1990 「古代の竪穴住居址」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 - 松本市内その1 - 総論編』 (財) 長野県埋蔵文化財センターほか

ヤ八幡一郎 1936 「越後魚沼郡芋坂の土器略報」『人類学雑誌』第51巻12号 日本人類学会

山崎 天 1996 「周辺の遺跡」『上信越自動車道関係発掘調査報告書 I 横引遺跡 籠峰遺跡 柳平遺跡』新潟県教育 委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

山崎 盈ほか 1982 『歴史の道調査報告書 X - 飯山道 - 』 長野県教育委員会

吉岡康暢 1977 「加賀·珠州」『世界陶磁器全集』 3 日本中世 小学館

ワ和島村教育委員会 1997 『国指定史跡八幡林官衙遺跡』

綿田弘実 1996 「中央高地における縄文早期末葉絡条体圧痕文土器」『長野県立歴史館研紀要』第2号

渡辺敏泰 1993 「七ツ栗遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』10 (財) 長野県埋蔵文化財センター

別表1 A地点 縄文土器観察表

系統(様式名)は[小林1989]の用語による。

,,,,,,,			111 14/1/1/2			系統(様式名)は[小林1989] の用語による。
図番号	系統(様式名)	調査区	出土位置	層位	混入物等	色 調	備考
1	撚糸文系	I	12 I	V下		赤褐	1~5同一個体
2	撚糸文系	I	12 I	V底		赤褐	//
3	撚糸文系	I	12 I	V		赤褐	4
4	撚糸文系	I	12 I	V下		赤褐	"
5	撚糸文系	I	12 I	V下		赤褐	"
6	撚糸文系	П	20 H	V下		橙	
7	?	Ш	42 P	V上		黄褐	
8	押型文系?	П	22 G	V下	石英	にぶい黄褐	
9	押型文系	Ш	41M	V下		暗褐	
10	押型文系	Ш	41 N	V底	石英	にぶい褐	
11	押型文系	П	20 J	V下	石英	黒褐	
12	押型文系	Ш	41M	V下		にぶい橙	
13	押型文系	Ш	410	V下		にぶい黄褐	
14	押型文系	Ш	410	V		暗褐	
15	押型文系	Ш	41M	V底		橙	
16	押型文系	Ш	39 L		白色砂	暗褐	
17	押型文系	III	37 C		繊維痕	にぶい橙	17~20同一個体
18	押型文系	Ш	37 C		繊維痕	にぶい橙	"
19	押型文系	Ш	37 C		繊維痕	にぶい橙	4
20	押型文系	Ш	38 C	V下	繊維痕	にぶい橙	11
21	押型文系	Ш	40M	V上		にぶい褐	
22	押型文系	Ш	40 N	V底		黄橙	22~24同一個体
23	押型文系	Ш	40 N	V底		黄橙	//
24	押型文系	Ш	40 N	V底		黄橙	"
25	押型文系	Ш	42 P	V広	繊維痕	灰黄褐	25~27同一個体
26	押型文系	Ш	42 P		繊維痕	灰黄褐	//
27	押型文系	Ш	42 P		繊維痕	灰黄褐	"
28	押型文系	Ш	36 E	V底		にぶい黄橙	28 · 29同一個体
29	押型文系	Ш	37 E	V底		にぶい黄橙	//
30	押型文系	Ш	38 D		灰白色軟質砂碟・繊維痕	暗褐	
31	押型文系	III	35 C	V底	THE STATE OF THE S	橙	
32	押型文系	Ш	36 C		白色砂	にぶい黄褐	
33	押型文系	Ш	38 D	V底		にぶい黄褐	
34	押型文系	Ш	40トレンチ	V		暗褐	
35	押型文系	Ш	38 C	V下		にぶい黄褐	
36	押型文系	Ш	36 E	V底		にぶい橙	
37	押型文系	Ш	40 L		石英	にぶい黄橙	
38	押型文系	III	38 D	VΤ	H	橙	
39	押型文系	Ш	38 H		石英·繊維痕	橙	
40	押型文系	Ш	39 L		白色砂	褐	
41	押型文系	Ш	39M		繊維痕	褐	
42	押型文系	III	40M	V底		にぶい黄褐	
43	押型文系	Ш	36 D	V底	117	にぶい黄橙	
44	押型文系	Ш	40 O	V下		橙	-
45	押型文系	m	36 E		灰白色軟質砂礫	黄橙	
46	押型文系	Ш	37 C		繊維痕	橙	
47	押型文系	Ш	37 C	V下	できな中国が大	にぶい褐	
48	押型文系	II	38 C		繊維痕	にぶい橙	
49	押型文系	Ш	37 C	V底	Teacher 13%	黄橙	
50	押型文系	II	36 D	V下		にぶい黄橙	
51	押型文系	Ш	36 H	V上		橙	
52	押型文系	III	38 D	V点		にぶい褐	
53	押型文系	II	37 C	V底		橙	
54	押型文系	II	36 E	V下		にぶい橙	
55	押型文系	II	38 B	V底		にぶい黄褐	
56	押型文系	Ш	36 E	V下	万茁	にぶい黄橙	
57	貝殼沈線文系	Ш	37 C	V底	ロス	橙	
58	貝殼沈線文系	Ш	36 E	V底			
59	貝殼沈線文系	III	81127	V		にぶい黄橙	
60	貝殼化線文系	III		V上		暗褐	
61			37M		占在7 0	にぶい黄褐	
62	貝殼沈線文系	Ш	39 J	V	白色砂	にぶい黄褐	
63	押型文系	Ш	36 E	VT		にぶい褐	
1 03	貝殼沈線文系		37 C	V下	IT 台 在 北 原 71.7%	にぶい黄橙	
				1/ b	灰白色軟質砂礫	褐	1
64	貝殼沈線文系	Ш	39 J				
	具設沈線文系 条痕文系 条痕文系	Ш	38 B 38 C	VF	白色砂・チャート礫繊維痕	にぶい褐~橙 にぶい褐~橙	

	de etc. I est				Lucan de		
67	条痕文系	П	21 H		繊維痕	にぶい黄褐	
68	条痕文系	I	14 J		繊維痕	にぶい黄褐	
69	条痕文系	П	?		繊維痕	橙	
70	条痕文系	П	20 D	V底	チャート砂碟	にぶい橙	
71	条痕文系	Ш	36 D		チャート砂礫	橙~褐	
72	羽状縄文系	I	9 F	V.L.		橙	
73	羽状縄文系	Ш	40 K	V		にぶい黄橙	
74	羽状縄文系	Ш	39M	V上		明褐	
75	羽状縄文系	\square	39 L	V上		褐	
76	羽状縄文系	Ш	39M	V下	繊維痕	にぶい黄橙	
77	羽状縄文系	Ш	40M	V		にぶい黄橙~暗褐	
78	羽状縄文系	I	9 D	V		にぶい黄褐	
79	羽状縄文系	Ш	410	VT	灰白色軟質砂礫	褐~橙	
80	羽状縄文系	Ш	40 Q	V下	灰白色軟質砂礫	明褐	
81	羽状縄文系	Ш	41 Q	?		明褐	
82	羽状縄文系	Ш	41 P	V下	灰白色軟質砂礫	橙	
83	羽状縄文系	m	41 P	?	灰白色軟質砂礫	橙	83 · 84同一個体?
84	羽状縄文系	Ш	41 P	?	灰白色軟質砂礫	橙	4
85	羽状縄文系	Ш	410	V	石英	橙	
86	諸磯	III	42 Q	?	石英・白色砂	橙~にぶい褐	
87	十三菩提	I	11 I	İ	雲母	暗赤褐	
88	十三菩提	Ī	11 I	Ш	白色砂	灰黄褐	
89	諸磯	Ш	42 P	Ш	雲母	にぶい黄褐	
90	十三菩提	I	11 I	Ш	云中	にぶい黄褐	
91	十三菩提	I	10 G	Ш	白色砂	にぶい黄褐	
92	十三菩提?	_		Ш	口巴沙		
93	諸磯?	I	10 H 42 Q	?	白色砂	にぶい黄褐	
93	諸磯?	Ш	42 Q 42 Q	?	チャート礫	にぶい黄褐	
95	羽状縄文系	Ш	42 Q 40 P	V	灰白色軟質砂礫	にぶい黄橙	
96	羽状縄文系	Ш				明褐	0.C - 0.0 EI - 4EI 4+
97	羽状縄文系	Ш	39M		繊維痕・白色砂		96~98同一個体
			39 L	V	繊維痕・白色砂	明褐	"
98	羽状縄文系	Ш	39 L		繊維痕·白色砂	明褐	φ 100 EI 401/4-
99	羽状縄文系	Ш	39M	V上		明褐	99・100同一個体
100	羽状縄文系	III	40M	V上	E 点点 想 照 形 对	明褐	
101	羽状縄文系	Ш	41 N		灰白色軟質砂礫	褐	
102	羽状縄文系	I	12 H	V	石英・チャート砂礫	橙	
103	羽状縄文系	Ш	41 Q	?	灰白色軟質砂礫	橙~灰褐	
104	羽状縄文系	Ш	38 E	カクラン	チャート	にぶい褐	104·105同一個体
105	羽状縄文系	Ш	38 E		チャート	橙	"
106	羽状縄文系	Ш	40 O	VT		灰褐	
107	羽状縄文系	Ш	410		石英	橙	
108	?	Ш	42 P	?	白色砂・石英	橙~褐	土器片円盤
109	羽状縄文系	Ш	410		石英	にぶい褐	
110	羽状縄文系	Ш	38 O	V	チャート	橙	104·105同一個体?
111	諸磯	Ш	42 Q	?		橙	
112	羽状縄文系	Ш	38 J		繊維痕	にぶい橙	
113	羽状縄文系	Ш	39 L	V.L.		橙	
114	?	Ш	38 D	カクラン	灰白色軟質砂礫	にぶい黄橙	
115	十三菩提	I	11 I	Ш		にぶい黄橙~黒褐	
116	新保・新崎	I	7 C	I	雲母・石英	赤褐	
117	新保・新崎	I	9 G	Ш	雲母	にぶい赤褐〜黒褐	
118	新保・新崎	I	9 G	Ш		にぶい黄褐	
119	新保·新崎	I	9 G	Ш	白色砂·石英	にぶい褐ー暗褐	
120	堀之内	I	8 D	I		橙	y *
121	堀之内?	I	7 D	I	白色砂	灰黄褐	
122	堀之内?	I	8 C	I	チャート砂礫	にぶい黄橙~灰黄褐	
123	三十稲葉	I	7 D	I	白色砂・石英	橙	
124	?	I	8 D	I	チャート・石英	橙	
	•						

別表 2 B地点 縄文土器観察表

系統(様式名)は「小林1989」の用語による。

						系統(様式名)は [/	N林1989] の用語による。
図番号	系統(様式)	調査区	出土位置	層位	混入物等	色 調	備考
1	撚糸文系	I	43 B	VIa?	暗赤色軟質砂礫・石英	赤褐~橙	
			44B		雲母		
2	押型文系	I	43 C	V下	石英・繊維痕	明褐~橙	
3	押型文系	I	43 D	V下		にぶい橙	
4	押型文系	I	470	VIа		明褐	
5	押型文系	I	1トレンチ	V	石英	にぶい黄橙	
6	押型文系	I	43 D	V下		明黄褐	
7	押型文系	I	1トレンチ	V	石英	黄橙	7~11同一個体
8	押型文系	I	1トレンチ	V	石英	橙	"
9	押型文系	I	1トレンチ	V	石英	橙	"
10	押型文系	I	1トレンチ	V	石英	橙	4
11	押型文系	I	1トレンチ	V	石英	橙	"
12	押型文系	I	43 D	V下	石英	浅黄橙	12 · 13同一個体
13	押型文系	I	43 D	V下	石英	橙~にぶい褐	"
14	押型文系	I	1トレンチ	V	石英	浅黄橙~暗褐	
15	押型文系	I	43 D	VT		にぶい褐	15・16同一個体
16	押型文系	I	43 D	V下		にぶい褐	"
17	条痕文系?	I	49 S	V下	チャート・白色砂	にぶい橙	
18	条痕文系	I	480	V上		にぶい褐	
19	条痕文系	I	12トレンチ	V	石英	暗赤褐	
20	条痕文系	I	480	V上	白色砂	橙	
21	羽状縄文系	I	45 K	V	石英砂礫	橙~にぶい褐	
22	羽状縄文系	I	480	V上	繊維痕	橙	
23	羽状縄文系	I	45 H	V.E.	石英	にぶい黄橙	
24	羽状縄文系	I	48 Q	V下	石英	橙	
25	羽状縄文系	I	45 H	V上	繊維痕・白色砂	にぶい褐	
26	羽状縄文系	I	29トレンチ	V	繊維痕・白色砂	明褐~褐	
27	羽状縄文系	I	48 O	V上	白色砂・チャート砂礫	橙	
28	羽状縄文系	I	48 P	V上	繊維痕	にぶい黄橙~黒褐	
29	羽状縄文系	I	45 H	V上	白色砂・繊維痕	にぶい橙~褐	
30	新保・新崎	I	48 N	Ш	雲母	橙~褐	30~32同一個体
31	新保・新崎	I	48 N	Ш	雲母	橙~褐	4
32	新保・新崎	I	48 N	Ш	雲母	橙~褐	"
		-					

別表3 A地点 縄文時代の石器観察表

(1) 稜磨石

出土位置の () は取り上げ時の番号。その他は小グリッド 長さ・幅・厚さの単位はcm。重さの単位は g。

3	出土位置	層位 V 下 V V 下 V 上 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下	稜	Ala B Ala	長さ 13.5 13.3 17.6 18.9 13.8 14.5 13.1 14.9 9.9 13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	中国 7.3 6.2 9.5 8.6 7.1 7.3 5.7 9.0 7.1 6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.7 5.4 4.7 5.5 5.3 6.3 6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4	690.5 1190.0 1177.8 661.6 642.9 703.5 955.5 588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7	石 材 玄武岩質安山岩 安山岩 淀山岩 流紋岩 玄武岩質安山岩 硬砂岩 玄武岩質安山岩 安山岩 角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 東山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 玄武岩質安山岩 本武岩質安山岩 玄武岩質安山岩 玄武岩質安山岩 本武岩質安山岩 东武岩質安山岩 东武岩質安山岩 东武岩質安山岩 东武岩質安山岩 流紋岩	板状 柱状 板状	断面 精円形 三辺形 三辺形 三辺形 三辺形 三辺形 三辺形 三辺形 三辺形 三辺形 三辺	備考 黑色付着物 黑色付着物 1/2欠損
2	21H (2) 11 I (6) 13 J (4) 36G (3) 36D (14) 40M (69) 40O (81) 41O (29) 13H (1) 39M (170) 36D (6) 9H (1) 13 I 15 40O (21) 41 P (63) 40O (26) 36D (7) 37C (35) 40O (49) 41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V 下 V 上 V 下 V 上 V 下 V 上 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下	稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜	Ala	13.3 17.6 18.9 13.8 14.5 13.1 14.9 9.9 13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	6.2 9.5 8.6 7.1 7.3 5.7 9.0 7.1 6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.2 6.3 6.7 5.4 4.7 5.5 5.3 6.3 6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4	690.5 1190.0 1177.8 661.6 642.9 703.5 955.5 588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9	安山岩 安山岩 流紋岩 玄武岩質安山岩 硬砂岩 玄武岩質安山岩 安山岩 角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 有閃石安山岩 安山岩	柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱	三辺形 三辺形 三辺形 三辺形 四辺形 三辺形 円形 内形 四辺形 三辺形 内形 四辺形 三辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四	1/2欠損
3	11 I (6) 13 J (4) 36 G (3) 36 D (14) 40 M (69) 40 O (81) 41 O (29) 13 H (1) 39 M (170) 36 D (6) 9 H (1) 13 I 15 40 O (21) 41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V / V / V / V / V / V / V / V / V / V /	稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜	Ala	17.6 18.9 13.8 14.5 13.1 14.9 9.9 13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	9.5 8.6 7.1 7.3 5.7 9.0 7.1 6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.3 6.7 5.4 4.7 5.5 5.3 6.3 6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5	1190.0 1177.8 661.6 642.9 703.5 955.5 588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	安山岩 流紋岩 玄武岩質安山岩 硬砂岩 玄武岩質安山岩 安山岩 角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 有閃石安山岩 玄武岩質安山岩 东山岩	柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱	三辺形 三辺形 三辺形 四辺形 三辺形 円形 円形 梅円形 三辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四辺形 四	黒色付着物 1/2欠損
4 I 5 I 6 III 7 III 8 III 10 III 11 I 12 III 13 III 14 I 15 I 16 III 17 III 18 III 19 III 19 III 20 III 22 III 23 I 24 I 25 III 26 II 27 III 28 III 29 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I	13 J (4) 36 G (3) 36 D (14) 40 M (69) 40 O (81) 41 O (29) 13 H (1) 39 M (170) 36 D (6) 9 H (1) 13 I 15 40 O (21) 41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V F V 上 V 下 V 上 V 区 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下	稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜	Ala B Ala	18.9 13.8 14.5 13.1 14.9 9.9 13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	8.6 7.1 7.3 5.7 9.0 7.1 6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.7 5.4 4.7 5.5 5.3 6.3 6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4	1177.8 661.6 642.9 703.5 955.5 588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9	流紋岩 玄武岩質安山岩 硬砂岩 玄武岩質安山岩 安山岩 角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 有閃石安山岩 玄武岩質安山岩 东武岩質安山岩 玄武岩質安山岩 苏紋岩	柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 枝状 柱状 板状 板状 板状 板状 板状 板状 板状 板状 板状 板状 板状 板板 板板	三辺形 三辺形 三辺形 四辺形 三辺形 円形 楕円形 三辺形 四辺形 三辺形 四辺形	1/2欠損
5	13 J (4) 36 G (3) 36 D (14) 40 M (69) 40 O (81) 41 O (29) 13 H (1) 39 M (170) 36 D (6) 9 H (1) 13 I 15 40 O (21) 41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V上 V下 V上 V底 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V上 V下 V上 V下 V上 V下	<u>*</u>	B Ala	13.8 14.5 13.1 14.9 9.9 13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	7.1 7.3 5.7 9.0 7.1 6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2	5. 4 4. 7 5. 5 5. 3 6. 3 6. 4 5. 7 6. 4 4. 1 6. 7 5. 1 4. 3 6. 5 5. 4 5. 4	661.6 642.9 703.5 955.5 588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9	玄武岩質安山岩 硬砂岩 玄武岩質安山岩 安山岩 角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 枝状 枝状 板状 板状 板状 板状	三辺形 三辺形 四辺形 三辺形 円形 楕円形 三辺形 四辺形 三辺形 四辺形	1/2欠損
6 III 7 III 8 III 9 III 10 III 11 I 12 III 13 III 14 I 15 I 16 III 17 III 18 III 19 III 19 III 20 III 22 III 22 III 22 III 23 I 24 I 25 III 26 II 27 III 28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 33 III 34 I	36G (3) 36D (14) 40M (69) 40O (81) 41O (29) 13H (1) 39M (170) 36D (6) 9H (1) 13 I 15 40O (21) 41 P (63) 40O (26) 36D (7) 37C (35) 40O (49) 41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V 下 V 上 V 底 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下	稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜	Ala	14.5 13.1 14.9 9.9 13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	7.3 5.7 9.0 7.1 6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	4.7 5.5 5.3 6.3 6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4	642.9 703.5 955.5 588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	硬砂岩 玄武岩質安山岩 安山岩 角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 安山岩 玄武岩質安山岩 安山岩 安山岩 东山岩 安山岩 东山岩	柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 板状 板状 板状 板状	三辺形 三辺形 四辺形 三辺形 円形 楕円形 三辺形 四辺形 三辺形 四辺形	1/2欠損
7	36 D (14) 40 M (69) 40 O (81) 41 O (29) 13 H (1) 39 M (170) 36 D (6) 9 H (1) 13 I 15 40 O (21) 41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V 下 V 上 V 底 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下 V 下	稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜	A1a A1a A2a A2b A3b A4a A3a C1 C1 C2 C1 C1 C1 C1 C2	13. 1 14. 9 9. 9 13. 6 17. 3 16. 0 19. 0 14. 8 15. 5 13. 0 (10. 7) 14. 2 16. 5	5.7 9.0 7.1 6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	5.5 5.3 6.3 6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4	703.5 955.5 588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	硬砂岩 玄武岩質安山岩 安山岩 角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 安山岩 玄武岩質安山岩 安山岩 安山岩 东山岩 安山岩 东山岩	柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 板状 板状 板状 板状	三辺形 四辺形 三辺形 円形 楕円形 三辺形 四辺形 三辺形 四辺形 四辺形	1/2欠損
8	40M (69) 40O (81) 41O (29) 13H (1) 39M (170) 36D (6) 9H (1) 13 I 15 40O (21) 41 P (63) 40O (26) 36D (7) 37C (35) 40O (49) 41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V上 V底 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下	稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜 稜稜磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨	A1a A2a A2b A3b A4a A3a C1 C1 C2 C1 C1 C1 C1	14.9 9.9 13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5 12.7 11.9	9.0 7.1 6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	5.3 6.3 6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4 5.4	955.5 588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	安山岩 角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	柱状 柱状 柱状 柱状 柱状 枝状 板状 板状 板状 板状	四辺形 三辺形 円形 楕円形 三辺形 四辺形 三辺形 四辺形 四辺形	黒色付着物 1/2欠損
9	40O (81) 41O (29) 13H (1) 39M (170) 36D (6) 9H (1) 13 I 15 40O (21) 41 P (63) 40O (26) 36D (7) 37C (35) 40O (49) 41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V底 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下	梭稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜 接磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨	A2a A2b A3b A4a A3a C1 C1 C2 C1 C1 C1 C1 C1	9.9 13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	7.1 6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.3 6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4	588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	安山岩 角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	柱状 柱状 柱状 柱状 板状 板状 板状 板状	三辺形 円形 門形 楕円形 三辺形 四辺形 三辺形 直辺形 四辺形 四辺形	1/2欠損
10	41 O (29) 13 H (1) 39 M (170) 36 D (6) 9 H (1) 13 I 15 40 O (21) 41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下	楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼楼梯	A2b A3b A4a A3a C1 C1 C2 C1 C1 C1 C1	13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4	588.5 729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	角閃石安山岩 花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	柱状 柱状 柱状状 板状 板状 柱状状 板状状	円形 円形 着円形 三辺形 四辺形 三辺形 楕円形 四辺形	1/2欠損
11	13H (1) 39M (170) 36D (6) 9H (1) 13 I 15 40O (21) 41 P (63) 40O (26) 36D (7) 37C (35) 40O (49) 41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下	楼榜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜	A3b A4a A3a A3a C1 C2 C1 C1 C1 C1	13.6 17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	6.4 7.2 6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.4 5.7 6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4	729.0 1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	花崗岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	柱状 柱状 柱状状 板状 柱状状 板状 柱状状 板状	円形 楕円形 三辺形 四辺形 三辺形 有円形 四辺形	
12	39M (170) 36D (6) 9H (1) 13 I 15 40O (21) 41 P (63) 40O (26) 36D (7) 37C (35) 40O (49) 41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下 V下	稜磨石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石	A4a A3a C1 C1 C2 C1 C1 C1 C1 C2	17.3 16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4 5.4	1150.7 823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	柱状 柱状 板状 板状 柱状 板状 柱状	精円形 三辺形 四辺形 三辺形 楕円形 四辺形 四辺形	
13	36 D (6) 9 H (1) 13 I 15 40 O (21) 41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V下 V下 V下 V下 V上 V下 V下 V下 V下	稜磨石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石	A4a A3a C1 C1 C2 C1 C1 C1 C1 C2	16.0 19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	6.3 8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.4 4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4 5.4	823.8 982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	柱状 板状 板状 柱状 板状 柱状	三辺形 四辺形 三辺形 楕円形 四辺形 四辺形	1/2欠損
14	36 D (6) 9 H (1) 13 I 15 40 O (21) 41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V下 V V下 V下 V上 V下 V下 V下 V下	稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜转接磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨	A3a C1 C1 C2 C1 C1 C1 C1 C2	19.0 14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	8.0 7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	4.1 6.7 5.1 4.3 6.5 5.4 5.4	982.3 837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	玄武岩質安山岩 角閃石安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	板状 板状 柱状 板状 柱状	四辺形 三辺形 楕円形 四辺形 四辺形	1/2欠損
14	9H (1) 13 I 15 40O (21) 41 P (63) 40O (26) 36D (7) 37C (35) 40O (49) 41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V下 V V下 V下 V上 V下 V下 V下 V下	稜稜稜稜稜稜稜稜稜稜 稜稜磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨磨	A3a C1 C1 C2 C1 C1 C1 C1 C2	14.8 15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	7.0 7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	6.7 5.1 4.3 6.5 5.4 5.4	837.7 786.5 414.7 830.9 548.1	角閃石安山岩 安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	板状 柱状 板状 柱状 板状	三辺形 楕円形 四辺形 四辺形	1/2欠損
15	13 I 15 40 O (21) 41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V V下 V下 V上 V下 V下 V底 V下 V上	稜磨石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石	C1 C2 C1 C1 C1 C1 C1 C2	15.5 13.0 (10.7) 14.2 16.5	7.1 6.9 8.9 7.2 6.8	5. 1 4. 3 6. 5 5. 4 5. 4	786.5 414.7 830.9 548.1	安山岩 多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	柱状 板状 柱状 板状	楕円形 四辺形 四辺形	1/2欠損
16	40 O (21) 41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V下 Ⅲ? V下 V上 V下 V下 V底 V下 V上	稜磨石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石石	C1 C2 C1 C1 C1 C1 C2	13.0 (10.7) 14.2 16.5	6.9 8.9 7.2 6.8	4.3 6.5 5.4 5.4	414.7 830.9 548.1	多孔質角閃石安山岩 玄武岩質安山岩 流紋岩	板状 柱状 板状	四辺形 四辺形	1/2欠損
17	41 P (63) 40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	Ⅲ? VT VT VT VK VT VL VT	稜磨石 稜磨磨石 稜磨磨石 稜磨磨石 稜磨磨石 稜磨	C2 C1 C1 C1 C1 C1 C2	(10.7) 14.2 16.5 12.7 11.9	8.9 7.2 6.8 8.7	6.5 5.4 5.4	830.9 548.1	玄武岩質安山岩 流紋岩	柱状 板状	四辺形	1/2欠損
18	40 O (26) 36 D (7) 37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V下 V上 V下 V底 V下 V上 V上	稜磨石 稜磨石 稜磨石 稜磨石 稜磨石 稜磨石	C1 C1 C1 C1 C2	14. 2 16. 5 12. 7 11. 9	7.2 6.8 8.7	5. 4 5. 4	548.1	流紋岩	板状		エノム人は貝
19 III 19 III 20 III 21 III 22 III 23 I 24 I 25 III 26 II 27 III 28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I	36D (7) 37C (35) 40O (49) 41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V上 V下 V下 V底 V下 V上 V下	稜磨石 稜磨石 稜磨石 稜磨石 稜磨石	C1 C1 C1 C2	16.5 12.7 11.9	6.8 8.7	5.4					
19 III 20 III 21 III 22 III 22 III 23 I 1 25 III 26 II 27 III 28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I 1	37 C (35) 40 O (49) 41 O (16) 38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V下 V下 V底 V下 V上 V下	稜磨石 稜磨石 稜磨石 稜磨石	C1 C1 C2	12.7 11.9	8.7		140.1		XXY+	三辺形	
20 III 21 III 22 III 23 I I 24 I 25 III 26 II 27 III 28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I	40O (49) 41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V下 V底 V下 V上 V下	稜磨石 稜磨石 稜磨石 稜磨石	C1 C2	11.9		0.5		NUXA	柱状	二处形	
21	41O (16) 38C (44) 13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V底 V下 V上 V下	稜磨石 稜磨石 稜磨石	C1 C2	11.9			762.0	d:1122	+4-1L:		囲たたは金糸
22 III 23 I 24 I 25 III 26 II 27 III 28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I	38 C (44) 13 J (3) 12 H (109) 40 M (87) 21 I (2)	V下 V上 V下	稜磨石 稜磨石	C2		1 <i>E</i> A	6.5	762.0	安山岩 硬砂岩	柱状	三辺形	黒色付着物
23 I 24 I 25 III 26 II 27 III 28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I I	13 J (3) 12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V上 V下	稜磨石		19.7	6.4	4.7			柱状	三辺形	1/3欠損
24 I	12H (109) 40M (87) 21 I (2)	V下			13.7	6.7 7.4	6.8	859.8	角閃石安山岩		四辺形	
25 III 26 II 27 III 28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I	40M (87) 21 I (2)		仅是七		14.5 18.2		6.6		砂岩		四辺形	
26 II 27 III 28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I	21 I (2)	VI				7.4	4.8		玄武岩質安山岩		四辺形	1 10 1-11
27 III 28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I			稜磨石		11.0	6.4	5.6	530.9	多孔質角閃石安山岩	柱状	三辺形	1/2欠損
28 III 29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I	3/1/ 141				13.0	7.5	6.5	815.5	安山岩	柱状	三辺形	
29 III 30 III 31 III 32 I 33 III 34 I			稜磨石		17.1	6.6		1044.3	多孔質角閃石安山岩		四辺形	
30 III 31 III 32 I 33 III 34 I	410 (47)		稜磨石		14.3	8.4		1186.4	多孔質安山岩	柱状	三辺形	
31 III 32 I 33 III 34 I	41 P (32)		稜磨石		10.5	7.4	6.8	494.0	多孔質角閃石安山岩	柱状	三辺形	欠損
32 I 33 III 34 I	410 (48)		稜磨石		13.7	9.2	6.8	982.0	安山岩	柱状	三辺形	
33 III -	40 N (70)			C1	12.4	6.1	5.1	544.0	角閃石安山岩		楕円形	
34 I	8F (2)		稜磨石		14.3	8.0	6.2	857.8	多孔質角閃石安山岩	柱状	三辺形	
	410 (38)		稜磨石		12.0	8.0	6.2	506.5	多孔質安山岩	柱状	三辺形	
35 1	8F (1)		稜磨石		(11.6)	8.5	5.1	679.3	砂岩		四辺形	1/3欠損
	12 I (11)			C1	(6.0)	7.2	6.0	360.1	流紋岩	柱状	三辺形	両端欠損
	39 K (1)		稜磨石		(9.9)	6.6	6.2	539.0	多孔質安山岩	柱状	三辺形	1/2欠損
	39 K (4)		稜磨石		(7.9)	(5.3)	4.4	205.7	多孔質角閃石安山岩		三辺形	
	20 H (9)		稜磨石		12.2	8.8	5.1	753.1	多孔質角閃石安山岩		四辺形	
	10 G (1)		稜磨石		10.2	6.7	4.4	536.8	石英質砂岩	板状	楕円形	
	39 L (87)		稜磨石		13.5	6.8	3.5	451.3	安山岩	板状	楕円形	黒色付着物
	40O (69)	V底	稜磨石	C2	14.4	6.0		569.8	角閃石安山岩		四辺形	
	41N (3)	V上	稜磨石	C3	16.4	8.3	7.3	1123.9	多孔質角閃石安山岩		不整四辺形	
	7F (6)	V底	稜磨石	C3	15.1	5.8			多孔質角閃石安山岩		円形	
	41N (18)	V底	稜磨石	C3	13.9	9.3		768.8	安山岩		楕円形	
	410 (138)	V下	稜磨石	СЗ	10.6	8.7	5.2	455.4	多孔質角閃石安山岩		五辺形	
	19F (1)		稜磨石		13.0	5.7			多孔質角閃石安山岩		三辺形	
	40O (22)		稜磨石		15.0	10.2					楕円形	
48 I !	9H5		稜磨石		12.9	7.9		667.3	多孔質安山岩		楕円形	
49 III			稜磨石		12.3	6.5	6.1		石英質砂岩		円形	
	- 320		稜磨石		13. 1	9.1	5. 2		多孔質角閃石安山岩		楕円形	
		T 1	稜磨石		10.7	8.9	4.4					黒色付着物
56 III 4	11 I 25 40 O (47)			D	12.5	9.5		630.7	多孔質角閃石安山岩		長円形	

別表3 A地点 縄文時代の石器観察表

(2) 磨石類

図番号	調査区	出土位置	層位	種別	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備考
51	П	21H (26)	V下	磨石類	G	11.1	9.0	3.3	405.5	砂岩	
52	\prod	39M (221	V下	磨石類	C	12.1	7.5	2.1	247.3	砂岩	稜磨石の再利用。53と接合
53		39M (211	V上	磨石類	C	7.6	8.0	2.9	194.5	砂岩	稜磨石の再利用。52と接合
55		42Q (2)	V上	磨石類	F	9.5	6.2	3.1	292.0	硬砂岩	
57	\prod	40N (75)	V底	磨石類	E	13.2	8.6	4.9	732.9	多孔質角閃石安山岩	
58		Ⅲ区	V	磨石類	F	9.6	5.3	3.5	230.5	砂岩	
59	\square	41 P (26)	V上	磨石類	E	10.9	7.2	4.5	507.1	石英質砂岩	
60	\square	39O (6)	V下	磨石類	E	9.7	7.4	2.7	305.4	石英質砂岩	
61	Ш	42Q (1)	V上.	磨石類	G	11.3	5.3	3.5	286.4	安山岩	
62	Π	36 D (3)	V下	磨石類	E	11.7	5.1	3.2	271.1	砂岩	

(3) 礫 器

図番号	調査区	出土位	:置	層位	種別	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備	考
63	Ш	410 (45)	V下	礫器	A1	13.5	8.5	4.4	519.7	無斑晶質安山岩D		
64	Ш	410 (39)	V下	礫器	B1a	16.1	9.1	3.3	517.4	無斑晶質安山岩D		
65	Ш	39B (1)	V底	礫器	B2	8.2	8.7	2.2	201.7	無斑晶質安山岩E		
66	Ш	39 L (189	V下	礫器	A1	14.4	8.4	4.8	468.6	細粒凝灰岩		
67	Ш	36 G (6)	V下	礫器	B3d	8.0	7.2	3.2	246.5	無斑晶質安山岩E		
68	Ш	38 C (94)	V底	礫器	A2a	8.8	6.9	2.8	179.2	細粒凝灰岩		
69	\prod	420 (3)	V底	礫器	B3d	13.4	10.4	2.8	345.6	無斑晶質安山岩D		
70	\blacksquare	40N (43)	V下	礫器	B1c	8.3	6.9	2.1	139.9	無斑晶質安山岩D		
71	Ш	36 C (9)	V底	礫器	A2b	6.6	7.9	3.7	189.4	無斑晶質安山岩B		
72	\coprod	39M (296	VT	礫器	A3a	13.5	8.6	2.8	330.8	無斑晶質安山岩B		
73	П	21 I (4)	V底	礫器	B3	9.4	4.9	2.4	166.2	無斑晶質安山岩A		

(4) 不定形石器

図番号	調査区	出土位置	層位	種別	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備	考
74	I	10 H (1)	V下	不定形石器	A	9.3	4.8	1.7	70.1	無斑晶質安山岩D		
75	II	21 I (12)	V底	不定形石器	D	7.1	9.3	1.8	89.9	無斑晶質安山岩D		
76	Π	40N (33)	V底	不定形石器	D	9.3	4.9	2.8	106.8	細粒凝灰岩		
78	\coprod	40M (99)	V下	不定形石器	C	4.4	8.5	2.1	63.7	無斑晶質安山岩A		
79	Ш	410 (112)	V上	不定形石器	D	7.5	2.9	1.0	22.3	無斑晶質安山岩D		
80	\coprod	40 L (44)	V下	不定形石器	C	5.4	4.8	1.4	45.6	無斑晶質安山岩E		
81	\coprod	39トレンチ	V底	不定形石器	D	3.4	6.8	1.0	18.9	珪質細粒凝灰岩		
82	Ш	39 L (13)	V	不定形石器	E	5.8	4.5	1.8	76.5	砂岩		
83	$ $ \square	38 G (4)	V上	不定形石器	D.	2.9	3.0	0.6	5.7	チャート		
84	I	12 I (48)	V上	不定形石器	D	3.3	2.1	0.8	4.4	黒曜石B		
92	\prod	36 C (11)	V底	不定形石器	В	9.7	4.6	1.7	73.9	無斑晶質安山岩G		
93	\square	42 P (1)	V上	不定形石器	В	7.3	4.3	1.2	44.2	無斑晶質安山岩D		

(5) 石斧・石匙・石鏃

図番号	調査区	出土位	置層位	種別	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備	考
91	Ш	37D (3)	V下	打製石斧		(4.7)	3.3	1.5	23.4	細粒凝灰岩	基部	
94	Ш	41 P (42) V下	磨製石斧		7.6	8.1	1.6	70.1	蛇紋岩	未成品	
95	Ш	37D (46) V下	磨製石斧		4.8	3.0	0.8	17.8	蛇紋岩		
96	Ш	40 L (43	() V下	磨製石斧		(7.5)	3.6	1.0	30.4	蛇紋岩		
86	I		廃土	石匙		2.6	1.7	0.4	1.7	チャート		
87	Ш	41 P (25) V上	石錐		4.3	2.6	1.0	10.0	凝灰岩		
88	I		П	石鏃		2.8	2.1	0.4	1.8	黒曜石B		
89	Ш	39 O (2)	V下	石鏃		1.9	1.6	0.2	0.6	黒曜石B		
90	Ш	41 P (31) V上	石鏃		2.0	(1.7)	0.3	0.3	黒曜石B		

(6) 剥 片

図番号	調査区	出土位	过置	層位	種別	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備考
77	Ш	38 J	(1)	V底	剥片		8.5	3.9	2.0	68.4	無斑晶質安山岩B	
85	Ш	410	(31)	根	剥片		3.8	4.1	1.7	22.7	無斑晶質安山岩D	
102	Ш	410	(136)	V底	剥片		6.8	3.1	1.0	7.0	珪質細粒凝灰岩 (緑色)	101と接合
103	Ш	410	(137)	V底	剥片		5.0	4.4	1.5	31.4	珪質細粒凝灰岩 (緑色)	101と接合
105	Ш	41M	(8)	V下	剥片		2.5	3.5	0.6	4.9	無斑晶質安山岩D	104と接合

別表3 A地点 縄文時代の石器観察表

(7) 石 核

図番号	調査区	出土位置	層位	種別	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備	考
98	I	13 I 21	V	石核		2.9	4.2	1.7	16.1	黒曜石B		
99	Ш	410 (140)	V底	石核		4.8	4.3	2.8	43.5	黒曜石C		
97	Ш	40 N (42)	V下	石核		6.1	9.7	5.4	360.3	細粒凝灰岩		
100	Ш	40 O (48)	V下	石核	9	10.7	4.8	4.5	284.5	無斑晶質安山岩G		
101	Ш	40O (46)	V上	石核		9.3	6.8	5.7	449.5	珪質細粒凝灰岩 (緑色)		
104	Ш	41N8	V	石核		8.5	9.3	3.7	211.5	無斑晶質安山岩D		

(8) 玉 類

図番号	調査区	出土位置	層位	種別	分類	長さ	巾屉	厚さ	重さ	石 材	備考
106	Ш	41 P 2	V	玉製品		2.0	1.3	0.8	2.7	滑石	未成品

(9) 不掲載の石器類

(0)	1 10 40	、V / 11 11 75只						
図番号	調査区	出土位置	層位	種別	分類	重さ	石 材	備考
107	I	7F (7)	V底	円礫		835.2	角閃石安山岩	搬入
108	I	11 I (9)	V下	円礫		376.9	多孔質安山岩	搬入
109	I	12 I (26)	V上	剥片		13.2	無斑晶質安山岩B	
110	I	21 I (11)	V下	円礫		536.3	多孔質角閃石安山岩	搬入
111	I	9H5	Ш	剥片		0.3	無斑晶質安山岩B	
112	I	9 G 24	Ш	剥片		7.9	無斑晶質安山岩B	
113	I	9 G 25	Ш	石核		5.5	黒曜石A	
114	I	11 I 1	Ш	円礫		222.2	多孔質安山岩	搬入
115	I	11 I 3	Ш	剥片		15.6	無斑晶質安山岩B	
116	I	11 I 6	I	剥片		2.6	黒曜石B	
117	I	11 I 6	I	剥片		1.9	黒曜石B	
118	I	11 I 6	I	剥片		1.1	黒曜石B	
119	I	11 I 6	П	磨石類?				所在不明
120	I	11 I 19	Ш	剥片		5.7	無斑晶質安山岩B	
121	I	13 H 13	V	角礫		466.9	角閃石安山岩	搬入
122	I	13 I 3	V	円礫		488.9	砂岩	搬入
123	I	13 I 14	V	剥片		121.5	無斑晶質安山岩A	
124	I	13 I 16	V	円礫		174.6	多孔質角閃石安山岩	搬入
125	Π	19E (1)	V下	不定形石器	С	60.2	無斑晶質安山岩A	
126	Π	20 E (1)	V下	剥片		70.5	無斑晶質安山岩H	礫面あり
127	II	20 E (2)	VT.	剥片		20.4	無斑晶質安山岩A	
128	II	20 H (1)	V下	円礫		637.0	多孔質安山岩	搬入
129	II	20 H (14)	V下	剥片		3.1	安山岩	
130	П	201 (24)	VT	角礫		134.0	角閃石安山岩	搬入
131	П	21 H (3)	V底	円礫		560.7	安山岩	搬入、炭化物付着
132	Π	21 H (4)	VF	円礫		248.8	砂岩	搬入
133	1	21H (5)	V下	円礫		265.8	多孔質角閃石安山岩	
134	П	21 H (17)	V下	円礫		124.8	流紋岩	搬入、203と同質、被熱、欠損
135	Π	21 I (1)	V底	剥片		7.1	無斑晶質安山岩D	被熱
136	П	21 I (6)	V下	剥片		8.8	砂岩	砥石?
137	Π	21 I (7)	V下	円礫		546.6	玄武岩質安山岩	搬入
138	П 1	21 I (8)	V下	円礫		456.6	砂岩	搬入、被熱
139	П	21 I (9)	V下	円礫		574.0	安山岩	搬入
140	Π	21 I (10)	V底	円礫		3.0	チャート	搬入
141	П	21 J (1)	V下	円礫		95.7	砂岩	搬入、稜磨石?
142	_ []	22G (1)	V底	角礫		189.2	多孔質安山岩	搬入
143	Ш	36B (1)	V下	磨石類		76.5	砂岩	欠損
144	Ш	36 C (1)	V下	円礫		392.0	角閃石安山岩	搬入
145	\blacksquare	36 C (5)	V下	円礫		573.1	多孔質安山岩	搬入
146	Ш	36 C (6)	V下	剥片		1.7	無斑晶質安山岩D	被熱
147	Ш	36 D (4)	V下	不定形石器	D	2.7	黒曜石B	被熱
148	\blacksquare	36D (5)	V下	剥片		55.3	無斑晶質安山岩H	
149	Ш	36D (9)	V下	円礫		133.9	流紋岩	搬入
150	Ш	36D (20)	V下	円礫		45.0	砂岩	搬入
151	Ш	36D (25)	V底	不定形石器	D	2.2	チャート	
152	Ш	36E (10)		剥片		89.4	無斑晶質安山岩H	
153	Ш	36E (11)	V上	円礫		219.6	砂岩	搬入
154	III	36 G (4)	V上	円礫		46.3		搬入
155	Ш	36 H (2)	V下	円礫		435.0	角閃石安山岩	搬入

150	m	05.0 (0)	17.7	∃# LL.		4 1	田畑プロ	† # = + h
156	Ш	37 C (9)		剥片		4.1	黒曜石B 閃緑岩	自然面あり 搬入、欠損
157 158	Ш	37 C (20) 37 D (1)		円礫 剥片		58.3 16.7	チャート	加入、人損
159	Ш	37D (1)		円礫	-	648.1	砂岩	搬入、被熱、割れ、稜磨石D?
160	Ш	37 D (37)		剥片		1.6	チャート	放入、放然、例45、夜岩石D:
161	Ш	37 D (48)		剥片		4.8	細粒流紋岩	
162		37M (4)		円礫		263.3	砂岩	搬入、被熱、割れ、稜磨石D?
163		38B (12)		円礫		78.6	砂岩	搬入
164		38 C (3)		円礫			安山岩	搬入
165	Ш	38 C (13)		円礫			多孔質安山岩	搬入、磨石類G?
166	Ш	38 C (47)	V下	円礫		452.7	安山岩	搬入
167	Ш	38D (31)		円礫		174.3	砂岩	搬入、被熱、割れ
168	Ш	38 G (2)		剥片		1.2	チャート	
169	Ш	38 G (3)		円礫		139.8	角閃石安山岩	搬入
170	Ш	39 K (2)	V下	剥片		12.3	無斑晶質安山岩A	
171	III	39 K (2)		剥片		47.5	無斑晶質安山岩A	
172	Ш	39 L (22)		剥片		86.0	無斑晶質安山岩C	自然面
173		39 L (72)	V上	円礫		387.4	多孔質安山岩	搬入、欠損
174	Ⅲ	39M (163)		剥片			細粒流紋岩	I Annua
175		39M (168)		円礫		716.9	多孔質安山岩	搬入
176	Ш	39M (204)		円礫		271.8	花崗岩質砂岩	搬入、欠損
177	Ш	39M (317)		稜磨石破片		43.5	砂岩	端部の敲打痕
178	Ш	40M (4)	V上	剥片		0.4	黒曜石B	
179	Ш	40M (67)	V上	剥片		2.4	黒曜石B	
180	Ш	40 N (27)	V底 V底	剥片 剥片		2.4	細粒凝灰岩 黒曜石A	
181 182		40 N (30) 40 N (35)	V 底 V 底	剥片		5.6	無曜石A 細粒凝灰岩	
183	Ш	40 N (85)	V底	剥片		2.3	黒曜石B	
184	Ш	400 (16)	V上	円礫		304.7	多孔質安山岩	搬入
185	Ш	40 O (17)	V T	円礫		755.0	安山岩	搬入
186	Ш	400 (25)	VT	円礫		446.0	多孔質安山岩	搬入
187	III	40 O (27)	V F	円礫		126.9	砂岩	搬入
188	Ш	40 O (43)	V.L.	円礫		128.4	安山岩	搬入、欠損
189	Ш	40 O (72)	V底	円礫		155.2	砂岩	搬入、欠損
190	Ш	40O (80)	V底	剥片		2.8	黒曜石A	1100
191	Ш	40 P (47)	V下	円礫		781.2	多孔質角閃石安山岩	搬入
192	Ш	41M (5)	VT	円礫		207.5	安山岩	搬入
193	Ш	41N (4)	V底	剥片		34.1	無斑晶質安山岩A	
194	Ш	41N (16)	V下	剥片		16.8	無斑晶質安山岩D	
195	Ш	41N (20)	V下	剥片		0.3	黒曜石B	
196	Ш	41 N (22)	V下	剥片		2.8	無斑晶質安山岩D	
197	Ш	410 (2)	V上	円礫		362.2	安山岩	搬入、ヒビ、磨石類F?
198	Ш	410 (27)	V底	円礫		497.2	角閃石安山岩	搬入
199	Ш	410 (28)	V底	剥片		2.9	珪質凝灰岩	
200	Ш	410 (30)	V底	剥片		59.7	無斑晶質安山岩D	
201	Ш	410 (34)	V上	剥片		45.6	細粒凝灰岩	
202	Ш	410 (44)	VF	円礫		180.6	細粒凝灰岩	搬入
203	Ш	410 (113)		剥片	D	6.2	流紋岩	礫面あり
204	Ш	410 (116)		不定形石器	D	2.0	黒曜石A	
205	Ш	410 (127)		剥片		3.1	細粒凝灰岩	HON 7 - 242 - 244 - 245 - 2
206	III	410 (128)		円礫		530.0	角閃石安山岩 黒曜石	搬入、被熱、欠損
207	Ш	41 O (129) 41 O (142)		石核 円礫		16.2		
208			V底 V底	剥片		4.6 1.2	建質凝灰岩 凝灰岩	
210	Ш		V底	剥片		1.3	雄灰石 珪質凝灰岩	
210	Ш		5号集石?	砕片		0.1	工資稅於石 黒曜石A	
212	Ш	410 (145) 41P (6)	□?	円礫		305.1	安山岩	搬入
213	Ш	41 P (0)	V上.	円礫		434.0	多孔質角閃石安山岩	搬入、稜磨石
214	III	41 P (28)	V L	円礫		115.2	流紋岩	搬入、欠損
215	Ш	41 P (30)	V T	剥片		14.9	無斑晶質安山岩D	PIA/ N / N / N
216	Ш	41 Q (26)	Ⅲ?	剥片		8.5	珪質頁岩	
217	Ш	41 Q (41)	Ⅲ?	円礫		643.3	玄武岩質安山岩	円礫、炭化物付着
218	II	41 Q (69)	Ш?	剥片		5.5.0	- ZIEZZEE	所在不明
219	Ш	42 P (2)	V T	不定形石器	D	18.1	無斑晶質安山岩D	
220	Ш	42 Q (3)	V上	円礫		259.2	硬砂岩	搬入
221	Ш	42 Q (32)	Ⅲ?	円礫		240.9	閃緑岩	搬入
212		?	I	不定形石器	D	2.2	珪質頁岩	
213	Ш		I	剥片		4.1	珪質頁岩	
214	Ш		I	剥片		1.1	黒曜石B	
								•

別表 4 B地点 縄文時代の石器観察表

(1) 稜磨石

出土位置の () は取り上げ時の番号。その他は小グリッド長さ・幅・厚さの単位はcm。重さの単位はg。

Terra off test 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 mm		44										
図番号 出土位置	層位	種別	分類	長さ	中国	厚さ	重さ	石 材	素材形状	断面	備	考
215 49 O (2)	倒木痕		Ala	18.8	9.8	3.5	990.0	安山岩	板状	長円形		
216 47R (1)	V下	稜磨石	Ala	12.8	7.3	5.1	682.2	多孔質角閃石安山岩	柱状	四辺形		
217 43 D (14)	V下	稜磨石	Ala	15.5	7.5	5.5	787.7	砂岩	柱状	三辺形		
218 1 号石器集積		稜磨石	Ala	18.0	7.0	6.9	1112.2	硬砂岩	柱状	三辺形		
219 12号集石土坑		稜磨石	Alb	15.7	6.8	5.9	803.2	ガラス質角閃石安山岩	柱状	円形		
220 43 I (4)	V	稜磨石	(Ala)	(12.1)	7.8	4.6	594.2	角閃石安山岩	柱状	楕円形	欠損	
221 48 O (21)	V.L.	稜磨石	C1	16.0	8.5	5.6	1092.0	閃緑岩	板状	長円形		
222 49O (3)	V下	稜磨石	C1	14.4	6.8	5.0	650.6	玄武岩質安山岩	柱状	三辺形		
223 43 E (4)	V下	稜磨石	C1	13.3	8.4	7.6	948.8	多孔質角閃石安山岩	柱状	円形		
224 1号石器集積		稜磨石	C1	15.0	7.8	6.1	1018.1	安山岩	柱状	三辺形		
225 43 E (2)	V下	稜磨石	C1	17.7	7.9	7.0	1217.8	安山岩	柱状	三辺形		
226 44 G (1)	V上	稜磨石	C1	15.1	9.9	4.8	1012.8	閃緑岩	板状	楕円形		
227 43 E (3)	VT	稜磨石	C1	13.6	6.8	6.7	809.2	多孔質角閃石安山岩	柱状	三辺形		
228 1号石器集積		稜磨石	C1	19.8	9.6	7.5	1612.9	砂岩	柱状	三辺形		
229 44 E (2)	V下	稜磨石	C1	(9.3)	5.3	4.9	356.6	安山岩	柱状	三辺形	欠損	
230 43 H (1)	V上.	稜磨石	C1	(9.7)	5.7	5.1	403.2	多孔質角閃石安山岩	柱状	三辺形	欠損	

(2) 磨石類

図番号	1-1-1	土位置	層位	種別	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	素材形状	断面	備	考
231	49 S	(1)	V上	磨石類	G	(7.0)	5.0	3.6	138.3	砂岩	柱状	円形	欠損	
232	480	(35)	V上	磨石類	E	8.1	5.5	3.5	147.0	角閃石安山岩	板状	楕円形		
	47 P	(2)	倒木痕		G	13.8	6.3	5.2	589.8	砂岩	柱状	円形		
234	48 R	(4)	V上	磨石類	E	9.0	8.0	4.6	342.4	角閃石安山岩	板状	楕円形		
235	48 Q	(53)	V上	磨石類	В	10.4	9.3	5.8	612.0	角閃石安山岩	板状	楕円形		
236	48 R	(3)	V上	磨石類	G	14.4	6.7	3.8	547.7	多孔安山岩	板状	楕円形		
237	48 Q	(52)	V上	磨石類	В	12.3	6.6	6.5	703.5	角閃石安山岩	柱状	四辺形		
238	45 K	(6)	V 上	磨石類	E	10.9	7.2	4.9	457.3	角閃石安山岩	板状	楕円形		
239	490	(1)	倒木痕	磨石類	A	13.5	7.6	4.6	713.2	安山岩	板状	楕円形		
240	480	(3)	V上	磨石類	(A)	(3.5)	7.0	3.4	87.8	砂岩	板状	楕円形	欠損 炭化物1	付着

(3) 磨製石斧·不定形石器·両極石器·剥片

図番号		層位	種別	分類	長さ	中国	厚さ	重さ	石 材	備考
242	45 D 16	倒木痕			9.0	5.4	1.5	142.2	蛇紋岩	
241	43 D (23)	V底	不定形石器	C	8.5	5.8	1.7	59.2	無斑晶質安山岩D	
243	48 K	V下	不定形石器	D	7.2	4.7	1.0	34.2	無斑晶質安山岩A	48K一括
246	48 K	V下	不定形石器	Α .	7.6	5.1	1.5	53.7	無斑晶質安山岩A	48K一括
244	48 K	V下	両極石器		3.2	3.0	0.9	7.8	無斑晶質安山岩A	48K一括
245	48 K	V下	両極石器		3.3	2.5	0.6	3.9	無斑晶質安山岩A	48K一括
247	48 K	V下	両極石器		3.0	3.0	0.7	5.7	無斑晶質安山岩A	48K-括
248	48 K	V·下	両極石器		3.1	2.4	0.6	3.0	無斑晶質安山岩A	48K一括
249	48 K	V下	剥片		3.3	1.3	0.4	1.6	無斑晶質安山岩A	48K一括

(4) 不掲載の石器類

. ,	- нн /у	•			
図番号 出土位置		種 別	重さ	石 材	備考
250 43A (1)	V下	剥片	19.5	無斑晶質安山岩H	
251 43A (2)	V下	剥片	4.6	珪質頁岩	
252 43H (13)	V上	円礫	184.7	砂岩	
253 45H (51)	V上	剥片			所在不明
254 45G (4)	?	剥片	7.6	チャート	
255 47P (1)	V下	剥片 円礫	9.0	無斑晶質安山岩B	
256 47Q (1)	V上	円礫	146.5	流紋岩	搬入
257 48Q (7)	V.E.	円礫	387.5	砂岩	搬入
258 48Q (80)	V下	円礫	144.8	石英質砂岩	搬入
259 48Q (98)	V上	円礫	162.2	角閃石安山岩	搬入、欠損
260 48P (1)	V上	角礫	39200.0		台石?
261 48P (2)	V上	円礫	261.7	角閃石安山岩	搬入
262 48P (6)	V上	円礫破片	14.0	安山岩 安山岩	
263 48P (7)	V上	剥片	71.0	安山岩	
264 48P (59)	V下	剥片	18.4	無斑晶質安山岩B	
265 480 (24)	V上	剥片	2.3	黒曜石	
266 480 (33)	V上	円礫	515.0	硬砂岩	搬入
267 480 (34)	V上	円礫	191.6	角閃石安山岩	搬入
268 49Q (8)	V上	円礫	318.1	玄武岩質安山岩	搬入、被熱、欠損
269 49Q (16)	V上	剥片	0.8	無斑晶質安山岩B 角閃石安山岩	
270 49Q (17)	V上	円礫	641.1	角閃石安山岩	搬入
271 48K	V下	剥片	9.8	無斑晶質安山岩A	48K一括
272 48K	V下	剥片	9.0	無斑晶質安山岩A	48K一括
273 48K	V下	剥片	5.5	無斑晶質安山岩A	48K一括
274 48K	V下	剥片	4.5	無斑晶質安山岩A	48K一括
275 48K	V下	剥片	2.7	無斑晶質安山岩A	48K一括
276 48K	V下	剥片	1.5	無斑晶質安山岩A	48K一括
277 48K	V下	剥片	1.3	無斑晶質安山岩A	48K一括
278 48K	VT	剥片	0.6	無斑晶質安山岩A	48K一括

別表5 集石土坑礫計測表

赤変面積:I(100~81%) Ⅱ(80~61%) Ⅲ(60~41%) Ⅳ(40~21%) Ⅴ(20%以下) 赤 変 度:A(著しい赤変) B(明瞭な赤変) C(軽度の赤変) D(ごく軽度の赤変) E(鉄分等の付着で不明瞭)

重量の単位はg

(1) 1号集石土坑

番号	重量	赤変面積	赤変度
1	370	I	BCD
2	475	I V	D
3	450	IV	CD
4	370	IV	CD
5	620	II	CD
6	175	II	CD
7	240	IV	CD
8	360	П	BCD
9	180	I	BCD
10	310	I	BCD
11	165	П	ABCD
12	285	П	ABCD
13	415	Ш	BCD
14	200	II	ABCD
15	115	IV	CD
16	95	Ш	CD
17	205	Ī	ABC
18	145	I	BCD
19	175	II	CD
20	105	I	BCD
21	150	I	ABCD
22	55	I	ABCD
23	25	I	CD
24	25 20 15	I	CD
25	20	I	BCD
26	15	I	CD
27	630	I	BCD

(2) 2 号集石土坑

采旦	重量	赤変面積	赤変度
番号			礫面
1	3680	I	ABCD
2	6080	I	ABCD
3	4620	I	ABCD
4	890	III	BC
5	395	\coprod	CD
6	335	V	CD
7	200	I	ABCD
8	395	IV	BCD
9	125	I	D
10	100	V	C
11	80	Ш	CD CD
12	365	I	CD
13	1080	I	CD
14	2340	I	CD
15	275	I	ABCD
16 17	305	V	D
17	485	I	BCD
18	340	I	CD
19	425	Ш	CD
20	500	II	ABC
21	360	I	BC
22	245	IV	CD
23	430	Ш	BCD
24	810	П	ABCD
25	160	Ī	BCD
26	15	I	CD
27 28 29	385	П	BCD
28	225 260	V	CD
29	260	Ī	CD
30	180	I	BCD
31	110	IV	CD
32	75	V	D
33	65		CD
34	155	Ш	CD
35	185		BCD
36 37	160		CD
	130		D
38	275		CD
39			ABC
40	105	I	BCD

1920 135 75 60 CD BCD CD D 41 42 43 44 45 46 25 2780 4520 315 100 350 850 340 155 300 ABCD ABCD D 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 CD CD ABC BCD CD D 120 5670 CD CD CD BCD 285 420 125 190 165 185 CD CD 160 65 80 125 95 140 68 69 70 71 72 8460 BCD

(3) 3 号集石土坑

番号	重量	赤変面積	赤羽	変度
年ケ	里里	小 変 田 恒	礫面	破砕面
1	555	V	CD	
2	1115	I	ABCD	
3	560	\mathbb{II}	BCD	
4	465	\blacksquare	BCD	D
5	275	IV	BCD	
6	1020	IV	CD	
7	295	\coprod	CD	
8	425	П	ABC	
9	250	П	BCD	
10	200	V	D	
- 11	4060	III	BCD	
12	830	IV	D	D
12	120	II	BCD	
14	25	IV	BCD	
15	2420	Ш	D	
16 17	335	I	ABC	
17	8500	Ш	ABCD	В
18	1070	\blacksquare	CD	
19	2360	П	BCD	
20	655	IV	D	
21	1100	Ш	ABCD	
22	4400	V	D	
23	1310	Ш	CD	
24 25 26	255	Ш	ABC	
25	700	Ш	ABC	
26	545	Ш	CD	
27	460	IV	CD	
28	470	I	ABC	
29	7890	\square	CD	
30	470	V	CD	
31 32	1025	Π	ABCD	
32	2480	Ш	ABCD	
33	580	IV	CD	D
34		IV	CD	D
35	260		ABCD	
36		V	D	
37			D	
38	8500	I	BCD	

(4) 4 号集石土坑

(4)	4 号集	: 七土玩		
番号	重量	赤変面積		変度
			礫面	破砕面
1	775	Ĭ	ABCD	-
2	675 340	I III	BC CD	-
4	310	Ш	CD	
5	125	V	D	
6	230	Ī	CD	
7	1120	I	CD	
8	950	Ш	CD	
9	240	I	CD	
10	685	Ш	CD	
11	395	Ш	BCD	-
12 13	225 530	П	BCD ABC	-
14	400	IV	CD	
15	695	III	BCD	
16	735	I	BC	
17	775	I	CD	D
18	685	I	BC	
19	695	Ш	CD	
20	660	П	BC	D
21	1690	Ī	BCD	D
22	160	I	BC	-
23	230	П	BCD	
24 25	520 950	Ш	CD	-
26	430	I	CD	-
27	165	I	CD	1
28	810		CD	
29	325	ĪV	D	
30	1900	\square	ABC	D
31	845	Π	CD	
32	390	I	BCD	
33	670	I	BCD	
34	345	IV	D	
35	2050	I	BC	-
36	1435		DE DE	
37	2140 810		DE	-
39	45		BC	
40	60		BC	D
41	100		BC	
42	150	I	CD	
43	650	Ш	BCD	
44	1630	IV	D	
45	415		ABC	
46	315		CD	
47	700		BCD	
48	1480	IV IV	D	
49 50	320 60	IV V	CD D	+
51	295	V IV	CD	D
52	1565		BCD	10
53	290		C	1
54	1020	I	CD	
55	1085		BCD	
56	350		BCD	
57	385		D	
58	465	IV II	D	
59	265		CD	-
60	80 440		D BCD	-
62	255) II	BCD	
63	195		CD	
64	470		BCD	
65	385		AB	
66	U()			
		5 II	CD	
67	55 60) III	BCD	
67 68	55 60 655) <u>III</u>		
67 68 69	55 60 655 1205) III 5 II	BCD ABCD CD	
67 68 69 70	55 60 655 1205 1705) Ш 5 I 5 Ш	BCD ABCD CD BCD	
67 68 69	55 60 655 1205	III	BCD ABCD CD	

73	1670	II	BCD	
74	2570	II	BCD	
75	695	\coprod	CD	
76	490	IV	CD	
77	1385	I	ABCD	
78	1120	Ш	CD	
79	335	Π	ABC	
80	260	Ш	BCD	D
81	605	Π	BCD	
82	40	V	D	,
83	620	Ι	BCD	
84	290	Π	BCD	
85	185	Π	CD	D
86	325	П	CD	
87	600	V	D	
88	1830	Ш	CD	
89	145	Ш	BC	

(5) 5号集石

			·	-des estes
番号	重量	赤変面積		変度
			傑 山	破砕面
1	2905	I	CD	
2	255	Ш	CD	
3	2100	I	ABCD	
4	1840	П	ABCD	
5	280	IV	D	
6	505	II	BCD	
7	125	${ m I\hspace{1em}I}$	CD	D
8	140	IV	D	
9	435	II	CD	
10	360	\coprod	D	
11	100	\blacksquare	CD	
_ 12	25	Ι	BC	
13	85	Ш	BC	D
14	680	II	CD	
15	280	V	D	
16	530	II	ABC	
17	245	Ш	D	
18	1600	II	ABCD	
19	305	IV	D	
20	1460	Π	CD	
21	280	IV	CD	
22	990	II	BCD	
23	185	III	CD	- :
24	665	III	CD	
25	610	Ī	BCD	
26	920	Ī	CD	
27	245		BCD	D
28	1640	Π	BCD	C
29	295	Π	BCD	
30	315		В	
31	550	I	ABCD	
32	875		BCD	
33	190		D	
34	710	Ш	CD	D
35	470	Ш	ABCD	D
36	375	V	D	
37 38	420	Ш	CD	
38	370	II	BCD	C
39	15	II	CD	
40	15	Ш	BCD	D
41	15	II	CD	
42	20	II	CD	С
43	25	Ш	BCD	
44	25	V	D	
45	165		CD	
46	170	Ш	CD	D
47	360	П	BCD	
48	165	IV	CD	
49	150	IV	CD	D
50	1255	I []	BCD	
51	305	Ш	BCD	С
52	170	IV	CD	
53	425	IV 1	D	1
54	215	1	BCD	CD
55	875	I	ABCD	С
56	100	III (CD	
57	230		CD	D

58	110	IV	D	
59	825	Π	BCD	
60	265	П	CD	
61	465	П	BCD	BC
62	715	Ш	BCD	
63	465	П	BCD	D
- 64	190	IV	CD	
65	665	Ш	CD	
66	2790	Ш	CD	
67	655	II	BCD	
68	365	III	BCD	D
69	655	IV	CD	
70	700	IV	D	
71	420	V	D	
72	4280	Π	BCD	
72 73 74 75 76 77 78	4230	IV	ABCD	
74	380	Ш	CD	
75	295	П	BCD	D
76	1690	I	CD	
77	630	IV	В	
78	730	II	ABCD	
79	345	Ш	BCD	
80	380	Ш	CD	
81	480	IV	D	
82	810	Π	CD	
83	35	V	D	

(6) 6号集石土坑

	0.73	コエッ		
番号	重量	赤変面積		変度
ш -5		小文画识		破碎面
1	1450	I	ABC	
2	2050	I	ABC	
3	1700	IV	CD	
4	450	III	BCD	CD
5	820	П	BCD	
6	380	I	ABC	
7	930	Ш	BCD	
8	615	V	DE	
9	760	\square	D	
10	500	II	BCD	
11	560	I	ABC	
12	315	IV	CD	
13	380	IV	CD	
14	195	III	BCD	
15	550	II	D	
16	375	Ī	D	C
17	1090	I	BCD	
18	365	I	В	
19	625 1535	Ĩ	CD	
20	1535	Ĩ	CD	
21	265	ĪĪ	BCD	
22	455	I	BCD	
23	595	Î	BC	
23 24	675	V	D	
25	285	I	CD	
26	345	I	BCD	
27 28	435	I	BCD	1
28	220		D	
29 30	220	Ш	BCD	
30	105	I	AB	В
31	95	I	AB	B
32	105		CD	
33	180		BCD	
34	35		BCD	
35	15		BC	
36	460		BCD	
37	485		BCD	
38	505		CD	
39	610		CD	
40	690	II	CD	
41	165	I	CD	
42	765		BCD	
43	645		CD	
44	3650		BC	С
45	510		BCD	
46	785	Ī	ABCD	C
47	310		CD .	
48	370		ABCD	

49	600	I	BC	
50	535	I	CD	
51	275	Ш	CD	
52	470	IV	CD	
53	380	Ш	BCD	
54	245	Ш	ABCD	
55	370	I	BCD	
56	170	I	AB	
57	375	I	AB	
58	65	III	BCD	
59	230	П	CD	
60	370	I	BC	
61	180	III	ABCD	
62	320	Ш	BCD	
63	25	IV	CD	
64	50	I	CD	
65	45	Π	CD	

(7) 7 号集石土坑

	,		
番号	重量	赤変面積	赤変度 礫面
1	430	П	CD PRE LEI
2	500	Ī	CD
2	665	IV	CD
4			CD
5	760 655	IV V II	CD
		V	D
6	298	II	CD
7	260	V	D
8	435	IV	CD
9	415	IV	D
10	445	I	BC
11	220	I	BCD
12	185	I	ABCD
11 12 13 14	200	I	BC
14	160	V	D
15	235	Ш	BCD
16	130	V	D
17	315	I	ABCD
18	190	I	CD
19	350	П	BC
20	275	V	D
21	290	IV	CD
21 22	160	IV	CD
23	900	Ш	CD
24	1800	I	BCD
25	3250	I	ABCD
26	45		D

(8) 8 号集石土坑

			赤	変度
番号	重量	赤変面積	礫面	破砕面
1	795	II	BCD	n/A F I IIII
2	625	II	CD	
3	570	I	ABC	
	415	Ī	CDE	_
4		I		
5	310		CD	n
6	715	Ī	ABCD	В
7	1880	I	BCD	
8	265	II	CD	
9	20	II	D	
10	4720	I	ABC	
11	7525	I	BCD	
12	720	I	AB	
13	570	I	BCD	
14	445	V	BCD	
15	165	I	ABC	
16	1210	Î	BCD	
17	420	Ī	BCD	-
18	875	I I	CD	
10	010	I	BCD	С
19	315		DCD	10
20	425	Ĭ	BCD	
21	40	I	ABC	
22	25	V	CD	
23	85	I	BC	
24	25	IV	C	C
25	40	I	BCD	
26	360	П	CD	
27	275	Ш	BC	A
28	850	Ī	CD	
29	570	Ī	BCD	
30	455	П	CD	D
31	1545	I	ABC	17
32		I	ABC	
	1415			-
33	2570	I	CD	-
34	1285		CD	
35	45	I	AB	
36	1570		D	
37	1810		ABC	
38	770		CD	
39	485		BC	
40	540		CD	D
41	485		CD	1
42	395		ABC	
43	670		BC	+
			ABC	+
44	1215	1 17		1
45	1530	V	D	-
46		Ĩ	BC	
47	895		BC	
48			BC	С
49	525	V	D	
50	310	I	CD	
51	165		BC	
52	555		CD	
53	390	Ī	CD	1
54			BCD	
			BC	
55	1090	/ <u>1</u>		
56			CD	
57			BCD	
58			ABC	
59			BCD	
60	10000)	BCD	

番号	重量	赤変面積		変度
笛ケ		.,	礫面	破砕面
1	935	I	BC	
2	895	IV	CD	
3	790	I	CD	
4	2250	IV	CD	
5	165	V	D	
6	1625		BCD	
7	320	П	BCD	
8	1220	I	BCD	
9	290	Ш	CD	
10	1900	I	BCD	
11	170	П	ABCD	
12	1780	Ш	BCD	
13	215	Ш	BCD	
14	580	III	BC	
15	400	Ш	CD	
16	735	V	D	
17	1020	IV	ABCD	D
18	535	Π	BCD	
19	690	\blacksquare	BCD	
20	910	Ш	CD	
21	3680		D	
22	260	Ш	BCD	D
23	925	V	D	D
24	385	Ш	CD	
25	800	V	D	
26	695	IV	CD	
27	1140	V	D	
28	200	Ш	BCD	
29	280	V	D	
30	365		BCD	
31	1160	V	D	
32	240	V	D	
33	435	I	BC	
34	325	Ш	BC	D
35	560	IV	CD	
36	225	V	D	-
37	95		CD	C
38	165		CD	
39	120		CD	
40	385	V	D	
41	170		D	
42	250	I	BC	
43	10500	Ш	BCD	
44	22500		AB	
45	29500	III	BCD	

(10) 10号集石土坑

(10)	10万多	長口工切	
番号	重量	赤変面積	赤変度
田力			礫面
1	580	I	AB
2	565	\blacksquare	BCD
3	330	I	CD
4	415	I	AB
5	510	I	CD
6	650	I	BCD
7	420	Ш	CD
8	1120	I	AB
9	330		BC
10	500	I	BCD
11	285	I	BCD
12	1565		CD
13	410	I	CD
14	375	Ш	CD
15	245	I	CD
16	465	П	BCD
17	220	П	CD
18	640	П	BCD
19	390	I	CD
20	935	I	ABCD
21	265	Ш	CD
221	325	I	CD
23	505	I	BCD
24	540	I	BCD
25	405	I	ABCD
26	980	I	BCD
27	230	II	BCD
28	510	I	CD
29	560	I	CD
30	530	I	BCD
31	1460	I	ABC
32	275	I	BCD
33	415	I	ABCD
34	930	I	BCD
35	375	I	BCD
36	620	I	AB
37	335	I	AB
38	295	Π	CD
39	665	Π	BCD
40	460		CD
41	860		CD
42	760	V	CD
43	280		BC
44	210	I	BC
45	315	l V	CD
46	220	I	CD
47	760	I	BCD
48	295		CD
49	325	II	CD
50	385	IV	CD
51	175		BC
52	485		BC
53	140		CD
54	195		CD
55	295		BCD
56	185		ABCD
57	125	I	BC
58	125	Ī	CD
59	65	Ī	CD
60			ABCD
			,

(11) 12号集石土坑

630

1570 1060

3180

110

175 1300

CD CD BCD

CD CD BCD ABCD

B ABC

C BC CD CD AB CD CD BCD BCD BCD

ABCD CD BCD CD ABC BC

BCD BCD BC BCD B AB

B BCD

ABCD BCD D BCD BCD

(/		14 11 11 1	-		
番号	重量	赤変面積		変度	76
				破砕面	77
1	1890	I	BC		78
2	2020	I	BC		79
3	1580	III	CD		80
4	855	Ī	BC	В	81
5	1390	Î	BC	D	82
6	1250	Ī	BCD		
7	385		DCD	-	83
		I	BC		84
- 8	1000	V	В		85
9	3130	I	BCD		86
10	2680	Ι	AB		87
11	5940	Ш	BCD		88
12	3865	IV	BCD		89
13	65	Ī	CD		90
14	85	V	CD		91
15	40		В	_	92
16	215	I	CD		
				-	93
17	155	I	CD		94
18	400	Π	CD		95
19	125	I	CD		96
20	75	Ι	CD		97
21 22	25	I	CD		98
22	505	Π	ABCD		99
23	840	I	CD		100
24	595	Ī	BCD		101
25	450	I	ABC		102
26	415	IV	CD	-	
20				-	103
27	490	I	ABC		104
28	365	II	CD		105
29	790	I	ABC		106
30	475	Ι	AB		107
31	275	Ι	BC		108
32	1160	I	CD		109
33	1490	III	CD		110
34	510	IV	CD		111
35	820	V	D	-	112
36	520	Ĭ	AB	\vdash	113
37	315	ĪV			
20			CD		114
38	815	I	ABC		115
39	595	П	ABCD		116
40	875	I	CD		117
41	305	I	BCD		118
42	1245	Ш	BC		119
43	410	Ī	BCD		120
44	815	Î	BC		121
45	1870	Ī	CD		121 122
46	200	I	BCD		123
40			DCD		123
47	670	V	CD		124
48	965	II	CD		125
49	80		CD		126
50	930		BC		127
51	995		BC	BC	128
52	880		ABC		129
53	1390		D		130
54	565	V	D		131
55	385		D		132
56	1720	İ	AB		133
57	380		BC		134
58	295		BC		135
59	380		ABC		136
60	430		В		
61	245	V	В		
62	90		В		
63	65		BC	В	
64	60		ABC	C	
65	6740		CD		
66	350		AB		
67	245		AB		
68	510		CD		
69	985		BCD		
70	420		BCD		
71	2270		CD		
72					
72	1170		BCD		
73	985		CD		
74	1530		BCD		
75	1400	I	BCD		

(12) 13号集石土坑

(12	1079	未石工列	4	
番号	重量	赤変面積		変度
1			傑 山	破砕面
2	170 295	I	BC BCD	
3	305	V	D	
4		V	D	
5	90	V	D	
6		IV	D	
7	9000	IV	D	
8	490	V	AB	D
9	645	V	D	
10	215	V	D	
11 12	3140 255	V II	D	
13	4420	I	ABC CD	D
14	175	Ш	В	D
15	980	III	D	
16	180	Ш	BC	
17	1330	Ι	AB	
18	540	V	D	
19	1820	I	A	
20 21	1420 990		D C	
22	655	Ĭ	BC	
22 23	470	II	BCD	
24	350	I	BC	
25	120		D	
26	115	Ш	CD	
27	825		AB	
28	145		D	
29	70		BC	
30	80 40		CD D	
32	560		BCD	
33	2020		ABC	
34	265	V	D	
35	2980	Ш	BCD	
36	6200		D	
37	440		CD	
38 39	1440 1040		D BCD	
40	335		CD	
41	760		D	
42	260		CD	
43	320	Ш		В
44	310			В
45	210	Ш 1	BC	D
46	260			D
47 48	210 145		ABCD BCD	
49	145		BCD	
50	380)	
51	125			
52	130)	
53	110)	
54	70	II I		
55 56	185 115) 3C	
57	70			С
58	90		CD CD	
59	30			D
60	50		CD	
61	55	V)	
62	20		ABC	
63	1620 1010		BC	
64	4820		BC	
66	750		BCD	
67	2750		BC BC	
68	765		BC	
69	6060	Ш (D	
70	2810		BCD	
71 72	415		BCD	
72	700		BC	
74	2800 625		BCD B	-
75	2650		BC BC	
	20001	- 1D	-	

76	1030	II	ABC	
77	575	Π	BC	
78	300	IV	В	
79	45	V	D	
80	550	II	BC	
81	65	I	A	
82	75	Ш	В	-
83	70	IV	D	
84	10	Ш	ABC	
85	3920	IV	В	
86	13000	II	ABC	
87	11000	V	В	
88	2480	I	BC	
99	1250	Ш	CD	
90	1440	IV	D	
91	165	I	BCD	
92	190	I	BC	
93	125	V	D	
94	665	П	BCD	
95	40	IV	D	

(13) 14号集石

		1 -1	赤	変度
番号	重量	赤変面積	礫面	破砕面
1	1650	I	ABC	
2	1530	Π	BCD	
3	800	IV	D	
4	715	Ш	BCD	
5	2200	IV	CD	
6	1020	I	ABCD	
7	1340	I	BCD	
- 8	1150	IV	CD	
9	4280	Ш	CD	
10	675	Ш	CD	
11	1470	IV	D	
12	525	Ш	BCD	
13	1580	Ш	CD	
14	20	\blacksquare	CD	В
15	850	Ш	CD	
16	5000	Ι	ABC	
17	760	Ш	BCD	
18	775	Π	BCD	D
19	860	Π	BCD	
20	1920	Π	BCD	
21	805	V	D	
22	1450	I	ABCD	
23	1220	\coprod	CD	
24	4020	I	ABCD	
25	1780	IV	CD	
26	1230	Ш	BC	
27	2930	I	BC	
28	2220	IV	BCD	
29	1270 1340	I	ABCD	
30	1340	I	ABC	
31	900	I	BCD	
32	2620	Ш	CD	
33	1390	Ш	BC	
34	2885	I	AB	
35	565	Ш	CD	
36	3000	V	CD	
37	455	V	D	
38	2080	Ш	CD	
39	1700	I	ABC	
40	1190	Ш	CD	
41	2940	V	D	
42	1290	IV	CD	
43	1260	П	BCD	
44	2100	IV	D	
45	595	V	BC	
46	270	Ш		D

(14) 15号集石土坑

·	E体部	K-H -1-70	•	
			赤石	変度
Na	重量(g)	赤変面積	礫面	破砕面
1	770	I	BCD	1.547 1.54
2	655	I	AB	
3	270	I	ABCD	
4	790	II	BCD	
5	120	I	BC	
6	475	\blacksquare	CD	
7	150	V	D	
8	235	V	D	
9	225	I	A	
10	230	V	D	
11	60	V	D	
12	180	I	CD	
13	215	П	CD	
14	190	I	BCD	
15	415	I	ABC	
16	65	V	D	
17	135	V	D	
18	55	I	BC	
19	140	Ш	BCD	
20	340	IV	D	
21	135	Ш	D	
22	190		BCD	
23	100	IV	BC	
24	245	I	ABC	
25	225	Ш	CD	
26	130	Ш	CD	
27	205	IV	D	
28		IV	CD	
29	105	V	D	
30	95	I	BC	
31	130	Ш	BCD	
32	165	IV	BCD	
33	220	Ш	BC	
34			BCD	
35	110	V	D	
36	142	Ш	CD	
37			D	
38			BCD	
39		V	D	
40		IV	D	
1	寸帯部			

付帯部

1	510	IV	CD	
2	565	I	AB	
3	880	Ш	CD	С
4	380	V	D	
5	180	III	CD	
6	890	IV	CD	
7	335	IV	BC	
8	990	I	ABC	
9	345	V	D	
10	60	I	AB	С
11	90	V	D	

別表6 古代の土器観察表

(1) H 1 号竪穴

残存度は推定口縁周に対する口縁部残存率 法量の単位はcm

図番号	種別	器種・分類	法 量	残存度	混入物等	色調	手 法	備考
1	土師	無台椀A I	□12.8	1/16		明褐	回転糸切り	l line
			高 3.4					
	1 4-4		底 6.2					
2	土師	無台椀B1 I	□13.2	9/16	雲母	黄橙	回転糸切り	
		,	高 3.9					
2	L óz	for A trace of T	底 6.3	1 /1 0		170		
3	土師	無台椀C?I	□13.0	4/16		にぶい橙		二次被熱
4	工師	無台椀C1Ⅱ	口16.5	10/16		にぶい橙	回転糸切り後	二次被熱
			高 5.8				ロクロケズリ	
5	土師	無台椀C1 I	底 6.2 口13.1	10/16	雲母	にぶい褐	同此女团为公	- \L. \n\ \n\
"	T tub	*** □ 1/ECT 1	高 4.5	10/10	云以	(一分八枝	回転糸切り後	二次被熱
			底 6.0				7 7	
6	土師	高台椀	底 8.0	_		橙	_	
7	黒色	無台椀C1 I	□13.0	4/16	赤褐色砂粒	にぶい橙	回転糸切り後	墨書「六」逆位
			高 4.3		77 14 0.15 12	1.2.2	ナデ	<u> </u>
			底 6.4					
8	黒色	無台椀B1 I	□13.2	13/16		明赤褐	回転糸切り後	
			高 3.8				ヘラケズリ	
	FTT 4.	<i>t. I II.</i> 2 =	底 5.2					
9	黒色	無台椀B?Ⅱ	□15.8	10/16		にぶい褐	-	二次被熱
10	黒色	無台椀	底 6.0	-		にぶい赤褐	回転糸切り	
11	灰釉	Ш	□17.0	9/16		灰白	刷毛掛け施釉	尾北窯産
			高 3.4					
12	灰釉	Ш	底 8.3	2 /16		Erra pla	Dit -C 441 () 46 31.	El II. etc =
12	りく不田	Ш	口16.5 高 3.6	3/16		灰白	刷毛掛け施釉	尾北窯産
			底 8.0					
13	灰釉	椀	口16.0	2/16		灰白	刷毛掛け施釉	尾北窯産
10	// Сти	- IV &	高 5.5	2/10		//C	47リーピザゴックが担不出	/毛-北煞 歴
14	土師	長甕	□23.1	4/16		明赤褐	ヘラケズリ・	
			高27.0	1, 10		27/01/16)	ハケ目・カキ目	
			底 4.5				7 7 7 7 7 7	
15	須恵	甕	-	-		灰	内外面タタキ	

(2) H1号竪穴 床造成土

図番号	出土位置	種別	器種・分類	法 量	残存度	混入物等	色 調	手 法	備考
34	d⊠	黒色	無台椀?	-	-	チャート	明褐		7
35	b区	須恵	杯	_	1/16		灰白		
36	a 🗵	土師	小甕	□10.0	4/16		橙		

(3) B地点I区

図番号	出土位置	種別	器種・分類	法 量	残存度	混入物等	色 調	手 法	備考
97	47 N	黒色	無台椀?	-	_		橙	, ,,,,	710
98	47 N	灰釉	椀	-	1/16		灰白		美濃窯産
99	47 N	灰釉	椀	-	_		灰白		美濃窯産
100	47 N	灰釉	Ш	底 8.3	-		灰白		尾北窯産
101	46 N	灰釉	小瓶	-	-	精良	灰白	回転糸切り	美濃窯産
102	47M	灰釉	小瓶	底 5.0	-	精良	灰白	回転糸切り	美濃窯産
103		灰釉	長頸瓶	□11.0	2/16		灰・曜変		103.105.106同一個体?
104		灰釉	長頸瓶	□12.0	3/16		灰白		美濃窯産
105	46M	灰釉	長頸瓶	-	-		灰・曜変		103.105.106同一個体?
106	46 N	灰釉	長頸瓶	-	-		灰·曜変		4
107		灰釉	長頸瓶	□11.0	3/16	精良	灰白		美濃窯産
108		灰釉	耳皿	底 4.6			灰白		猿投窯産
109	46 N	緑釉	稜椀	-	1/16		灰オリーブ(釉)		猿投窯産
							灰		
116	1 号土坑	土師	蹇	□24.0	7/16	チャート	橙~浅黄橙	ヘラケズリ	
	北側							・ハケ目	

(4) A地点 I 区

図番号	出土位置	種別	器種·分類	法 量	残存度		色調	手 法	備考
119	1号炉跡	土師	無台椀B2?	□13.0	4/16	白色砂· 雲母	明赤褐		
120	1号炉跡	黒色	無台椀B2 I	口12.0 高 3.5 底 6.0	2/16		にぶい褐	回転糸切り	
121	1号炉跡	黒色	無台椀B2 I	口13.4 高 3.5 底 5.4	10/16		にぶい黄褐	回転糸切り	
122	1号炉跡		長甕	_	_		橙		
123	1号炉跡		瓶	底 10.6		白色砂	灰白		124と同一個体?
124	1号炉跡	須恵	瓶	-		白色砂	灰白		7

(5) H 2 号竪穴

	1 4 7 3 1		na ee						
	出土位置			法量		混入物等	色調	手法	備考
38	pitV	土師	無台椀AI	□12.9	8/16		橙	回転糸切り	
				高 3.4					
39	カマド	土師	無台椀AI	底 6.1 口13.2	5/16		橙	回転糸切り	
39	77 4 1	그그타	無日祝和	高 3.4	5/16		位	回転が切り	
				底 6.4					
40	pitT	土師	無台椀B2 I	□12.9	12/16		黄橙	回転糸切り	
40	piti	HIP		高 3.7	12/10		JA 1111	E1#47/C 90 '9	
				底 5.7					
41	カマド	土師	無台椀B I	□12.8	3/16	雲母	明赤褐	回転糸切り	
			, p. p. c.	高 3.9	0, 20		177713		
42	a 🗵	土師	無台椀B I	□12.9	3/16		橙	回転糸切り	ヘラ記号
				高 3.7					墨書「六」
				底 4.9					
43	pit V	土師	無台椀B?	□12.3	4/16	雲母	にぶい赤褐	_	
44	a 🗵	土師	無台椀C2Ⅱ	□14.8	0/16		浅黄橙	回転糸切り	
				高 5.1					
				底 5.0					
45	pitV	土師	無台椀C2 I	□14.0	2/16		にぶい褐	回転糸切り	
				高 5.1					
				底 5.8					
46	a 🗵	土師	無台椀	底 6.0	-		明赤褐	回転糸切り	
47	d⊠	土師	無台椀C2Ⅱ	□15.2	6/16		黄橙	回転糸切り	
				高 5.4					
				底 4.9			Total Control of the		
48	pitT	土師	無台椀CII	□17.0	6/16		橙	ヘラケズリ	
				高 5.5					
		TTT de	to the v	底 6.4			-t- tm	Enter & Inch	ET -t- F / L W//L
49	c 🗵	黒色	無台椀BI	□14.0	5/16		赤褐	回転糸切り	墨書「六」逆位
				高 4.1					
	1 . T	田力	for 4x to DO T	底 6.0	10/10		179		
50	pitT	黒色	無台椀B2 I	口13.0	16/16		橙	回転糸切り	
				高 4.1					
51	pitT	黒色	無台椀C2 I	底 5.3	8/16	雲母	明赤褐	回転糸切り	
51	piti	羔巴	無口物U2 1	口12.6 高 4.3	0/10	石英	明亦怕	凹転ポ切り	
				底 5.3		117			
52	d⊠	黒色	無台椀BI	□13.5	3/16		浅黄橙	回転糸切り	
02	u E		200 L	高 3.9	3/10		(人)风 伍	E14471 97 7	
				底 5.4					
53	a⊠	黒色	無台椀B I	□12.5	6/16		にぶい褐	回転糸切り	
00	u	/ J	, L PGD 1	高 4.0	0, 10		12001 [0]	1 1 1 2 7	
				底 6.0					
54	b区	黒色	無台椀B3 I	□13.0	11/16	チャート砂礫	橙	ヘラケズリ	
				高 3.8	,				
				底 6.0					
55	pitV	黒色	無台椀B? I	□13.0	7/16		橙	-	
56	pitV	黒色	無台椀CI	□13.0	6/16		明赤褐	回転糸切り	
				高 4.6					
				底 5.4					
57	d⊠	黒色	無台椀CI	□12.5	16/16		明赤褐	回転糸切り後	墨書「六」逆位
				高 4.1				ナデ	
				底 5.9					
58	pitT	黒色	無台椀B I	□13.2	12/16		橙	回転糸切り	漆付着
				高 4.2					墨書「六」
				底 6.4					
59	pitT	黒色	無台椀B I	□12.4	16/16		明褐	回転糸切り	炭化物付着
				高 3.9					
-				底 6.0					
60	b区	黒色	無台椀C2 I	□13.2	13/16		明褐	回転糸切り	炭化物付着
				高 4.4					墨書「七」逆位
				底 5.7					
61	b 🗵	黒色	無台椀?	□13.0	5/16		にぶい褐	-	
62	pit V	黒色	無台椀CI	□13.3	0/16		橙	回転糸切り	
		EE7 A-	for Litera	高 4.3	F 10.5		Tara .	I make to be t	
63	pit V	黒色	無台椀C2 I	□13.6	7/16	雲母	橙	回転糸切り	
				高 4.6					

64	b 🗵	黒色	無台椀B I	□14.0	2/16		にぶい赤褐	回転糸切り	
				高 4.4					
2.1				底 5.8					
65	b区	黒色	無台椀C2 I	□13.8	10/16		橙	回転糸切り	墨書「七」?
		, <u> </u>		高 4.5	10, 10		132	E14671 93 7	22 B T C J .
				底 5.2					
66	pitV	黒色	無台椀B? I	□13.0	5/16		明赤褐	_	墨書「本
67	pitT	黒色	無台椀B? I	□13.4	4/16		橙	_	空音 平]
68	b 🗵	黒色	無台椀B?I	□13.4	4/16		11111		
69						pla /7. 1. dula	にぶい橙	_	ER eb. F. I. I. W. M.
70	pit V	黒色	無台椀B? I	-	0/16	白色土粒	橙	- to the to	墨書「六」逆位
10	d⊠	黒色	無台椀AⅡ	□15.5	16/16		明赤褐	回転糸切り	高台接合部スリ
				高 4.3					墨書「六」逆位
7.1		DOI 44	for t the o m	底 7.5					
71	pitV	黒色	無台椀?Ⅱ	П14.5	4/16		にぶい橙	-	
72	pitT	黒色	無台椀B4 II	□15.2	7/16		橙	回転糸切り	
				高 4.6					
				底 5.7					
73	pitT	黒色	無台椀CI	□15.6	4/16		橙	-	
74	c 🗵	黒色	無台椀CⅡ	□16.0	8/16	砂粒	橙	回転糸切り後	墨書「仇」?逆位
				高 5.3		雲母		ロクロケズリ	タール状炭化物
				底 5.7					
75	c 🗵	黑色	無台椀C2Ⅲ	□17.8	8/16	砂粒	橙	回転糸切り後	
				高 6.1				ロクロケズリ	
				底 6.5					
76	b区	黒色	無台椀	底 6.1	_		橙		漆付着
77	pitT	黒色	無台椀	底 4.8	_		橙	ヘラケズリ	墨書「六」逆位
78	d 🗵	黒色	無台椀?	-	_		橙	17/77	墨書「六」佐匹
79	d 🗵	黒色	有台椀?	□15.6	3/16		橙	_	墨書「鬼または思」
''	u 12		H LIVE.	ш10.0	0/10		15	_	横位
80	c 🗵	黒色	有台椀?	□15.6	4/16		橙		/與 1公
81	pitT	黒色	有台椀	□15.8	7/16		明赤褐	- 回転糸切り後	
01	piti		75 178	高 5.7	1/10		明亦管		
								ロクロナデ	
82	. IV	田島	40-	底 7.8	C /1C		1978		
83	a 🗵	黒色	盤杯	□14.0	6/16		橙		
83	pitT	須恵	111	□12.4	2/16		灰白	回転ヘラ切り	
1				高 2.9					
				底 7.6					
84	pitT	灰釉	Ш	□14.5	6/16	白色砂	灰白	-	猿投窯産?
				高 2.9					
				底 6.9					
85	b区	土師	小壷	□ 7.3	6/16		橙	回転糸切り	
				高 7.0					
				底 5.1					
86	c 区·d区	土師	小甕	底 6.5	-		明赤褐	ヘラケズリ	
87	pitT	上師	小甕	□14.2	9/16		橙	-	
88	カマド	土帥	小甕	□13.6		雲母	橙	_	二次被執・膨張
89	カマド	土師	小甕	□17.0	5/16		橙	_	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2
14B	カマド	土師	長甕	□23.1	4/16		明赤褐	_	14と同一個体
90	pitT	土師	鍋	-	1/16		にぶい橙	_	7 7 0 1) list 14.
91	pit T	土師		□40.0	2/16		橙	_	
92	a 🗵	土師	?	_	-		橙	_	
93	a 🗵	須恵	長頸瓶	底10.2			灰	_	
- 70	αΔ	火心	以现瓜	12,10.2			101	_	

別表 7 青銅塊·鉄滓計測表

図番号	出土位置	重量 (g)	備考
青銅塊			, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
	H 2 号竪穴pit	40.2	成分分析
	H 2 号竪穴pit	36.4	
鉄 滓			
	H 1 号竪穴 a 区	6.6	
	H 2 号竪穴 d 区	23.4	炉床付着· 椀形滓
	H 2 号竪穴 d 区	13.7	
	H 2 号竪穴 p i t I	133.1	炉床付着・椀形滓
127	H 2 号竪穴 b 区	272.3	炉床付着· 椀形滓
	48M22 · I 層	5.1	
	47M20 · I 層	15.4	
128	47M14 · I 層	33.2	
129	47N13・I 層	255.1	炉床付着· 椀形滓

図 版

凡例

- 1. 土器の実測図において、口径復元が困難なものは、中心線と外形線を離して示している。
- 2. 石器実測図の断面においては、●印が摩耗痕、■印が敲打痕、*印が 微細剥離であり、投影図の網がけはそれぞれがこれに対応している。
- 3. 古代の土器実測図断面は、須恵器を黒彩、施釉陶器を網がけとした。 付着物については図版32に示すとおりである。

1号集石土坑





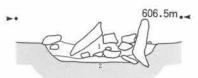
1. 褐色土層……VI層土を主とし、黒色のシミが斑点状に混じる。 炭化粒(径 5 mm 以下)を多く含む。



1. 暗褐色土層…炭化粒 (径 5 mm 以下) を少量含む。

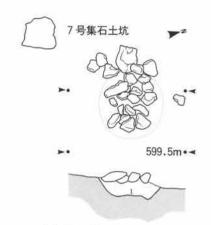






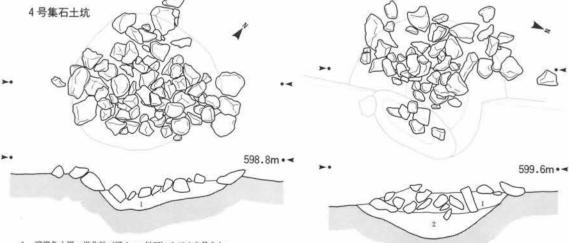
1. 暗褐色土層…炭化粒(径10mm以下)を多く含む。 2. 褐色土層……炭化粒(径5mm以下)を少量含む。





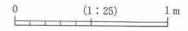
1. 暗褐色土層…木根による撹乱を受け、しまりに欠ける。 VI層土粒子が霜降り状に混入する。

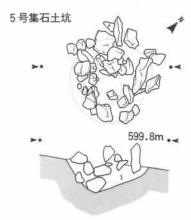
6号集石土坑



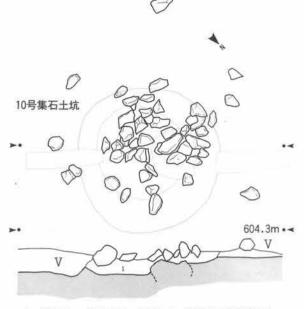
1. 暗褐色土層…炭化粒(径 2 mm 以下)をごく少量含む。

1. 黒褐色土層 2. 暗褐色土層…炭化粒(径10mm以下)を少量含む。 土層はよくしまる。

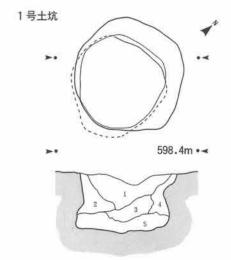




1. 褐色土層……炭化粒 (径 5 mm 以下) を少量含む。 土層のしまりはよい。

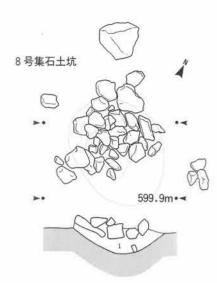


1. 褐色土層……切響土ブロックを主とし、黒褐色土が斑状に混じる。 土層のしまりはよい。

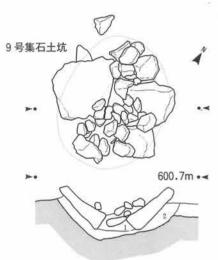


- 1. 黒褐色土層…炭化粒(径5 mm 以下)を多く含む。しまりに欠ける。 2. 褐色土層……Ⅵ層土を主とし、黒褐色土がシミ状に混じる。 3. 黒褐色土層

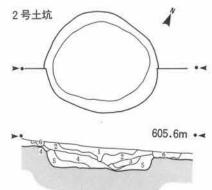
- 3. 端配上面 4. 褐色土層……2層土と近似するが、VI層土をより多く含む。 5. 暗褐色土層…VI層土の粒子(径 2 mm 以下)を霜降り状に多く含む。



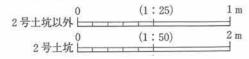
1. 暗褐色土層…炭化粒 (径15mm 以下) を少量含む。土層はよくしまる。

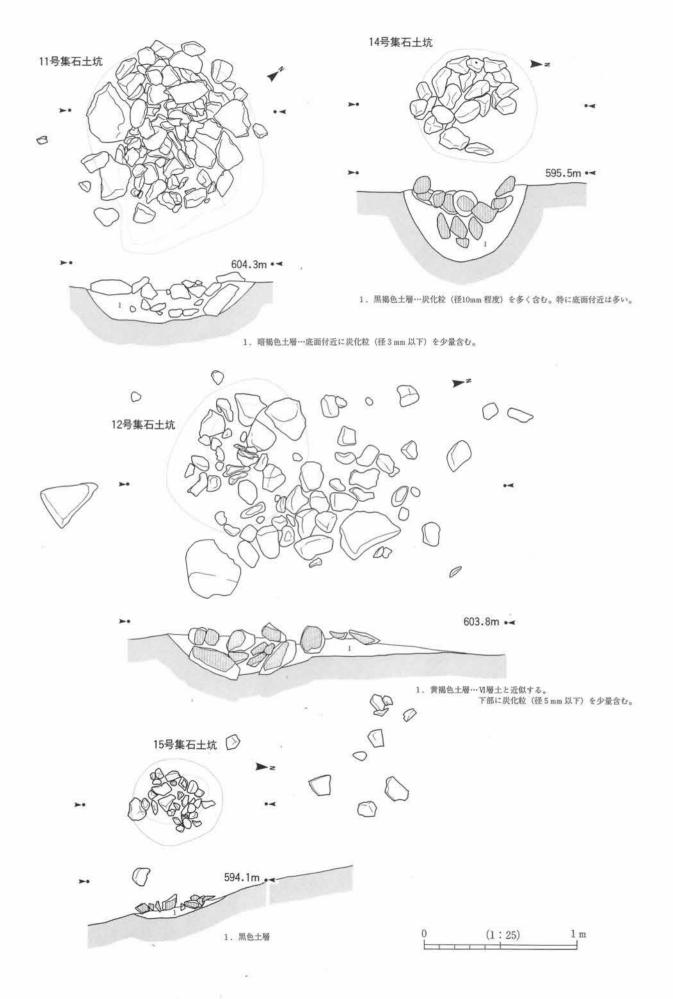


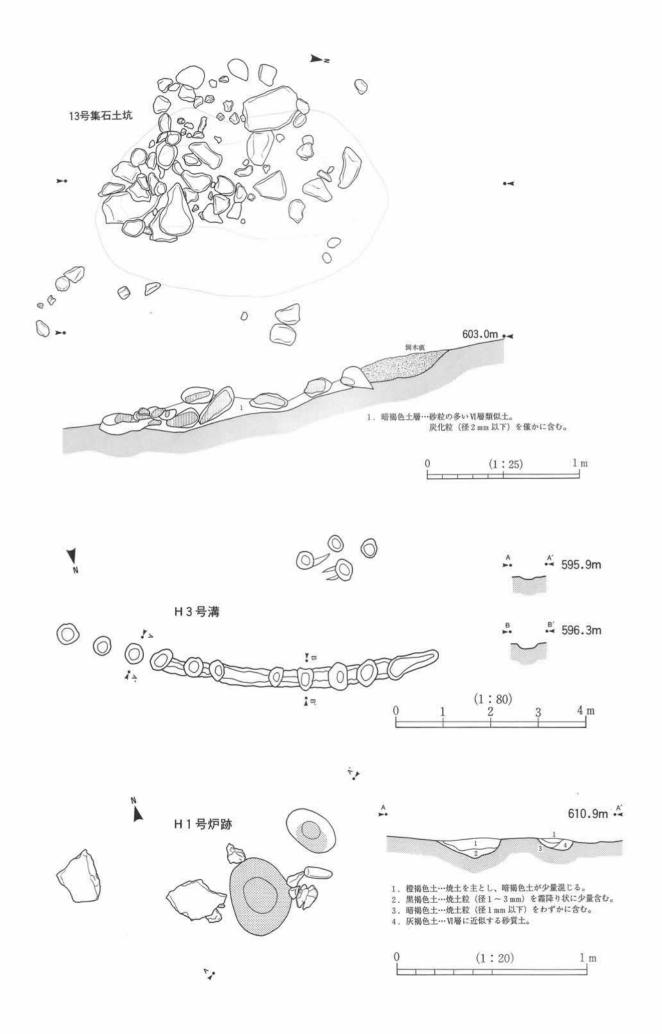
- 1. 黒褐色土層…炭化粒(径10mm以下)を多く含む。土層のしまりは弱い。 2. 褐色土層……炭化粒(径5mm以下)を少量含む。土層はよくしまる。

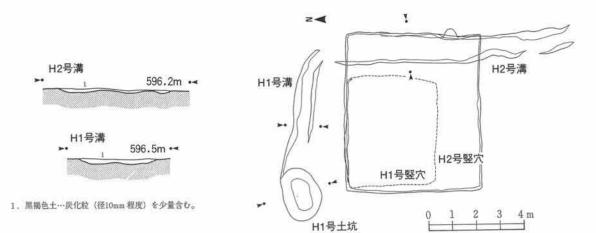


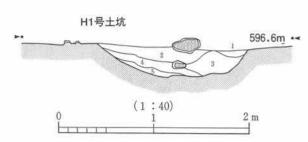
- 6. 黒褐色土層



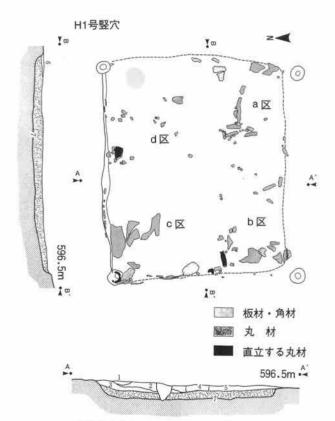


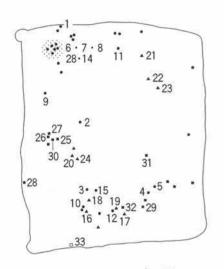




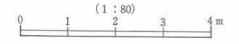


- 1. 暗褐色土 2. 暗黒褐色土…炭化粒 (径10mm以下) をまばらに含む。 Ⅱ層土粒 (径10mm 以下) が少量混じる。
- 3. 黒褐色土…炭化粒 (径10mm 以下) をまばらに含む。
- 4. 明褐色土…Ⅱ層土に近似する。
- 5. 黒褐色土…炭化粒 (径 3 mm 以下) を多く含む。



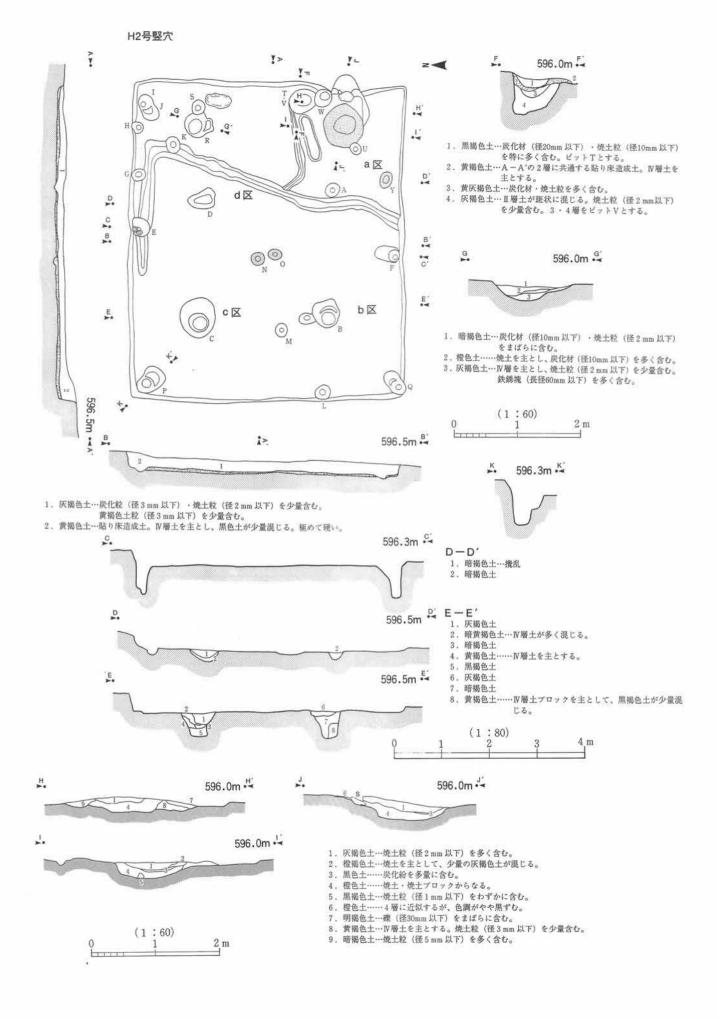


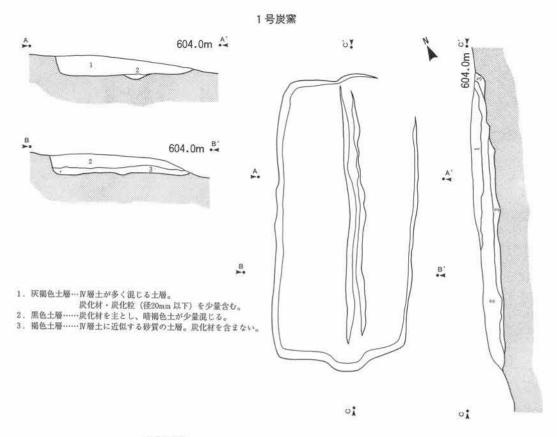
- 土 器
- 鉄 器
- 石製品等
- 木製品

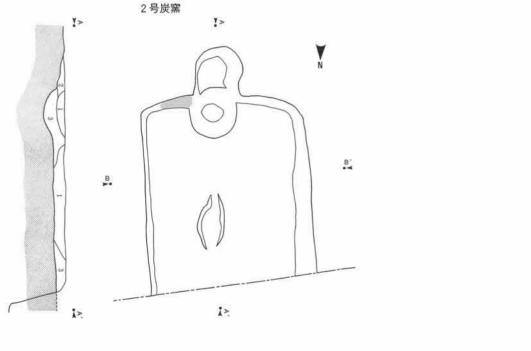


- 1. 黒褐色土…褐色土のブロックが斑状に混じる。 2. 黒色土…炭化粒(径5 mm 以下)を少量含む。 3. 黒褐色土…焼土粒・炭化粒(径5 mm 以下)を多く含む。
- 4. 暗褐色土
- 5. 黒褐色土…炭化材・炭化粒を特に多く含む。

- 焼土・II層土が遊状に混じる。
 6. 黒褐色土…炭化材(径30mm 以下)を多く含む。
 7. 黄褐色土…I層土を主とし、黒褐色土が遊状に少量混じる。床造成土

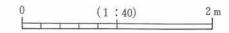


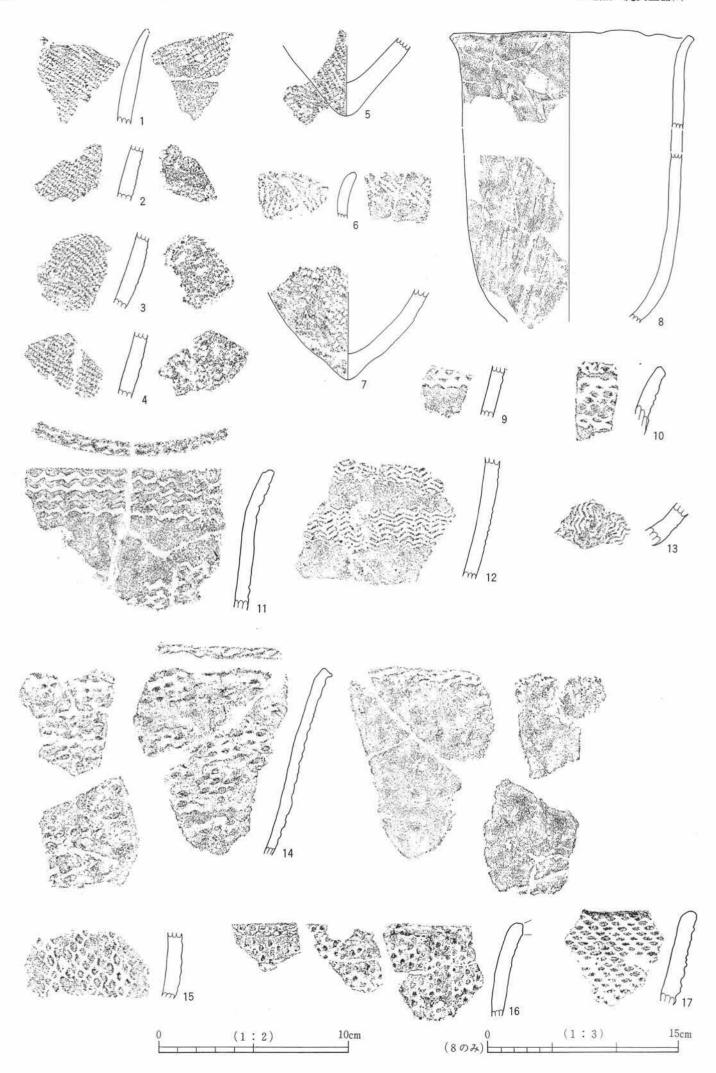


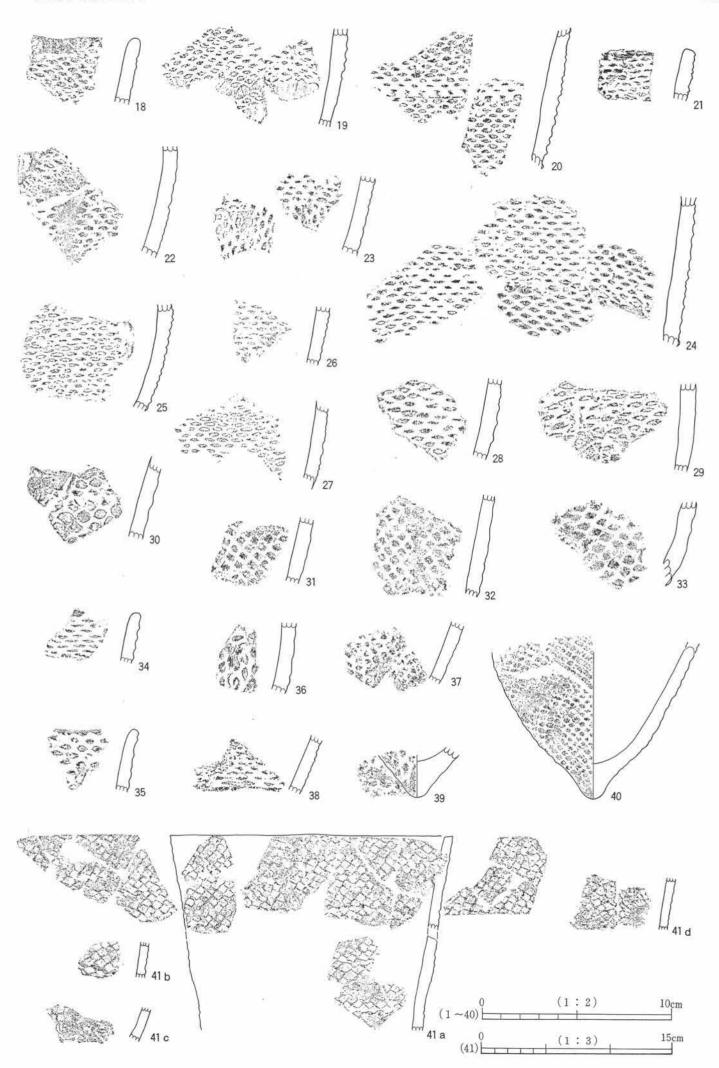


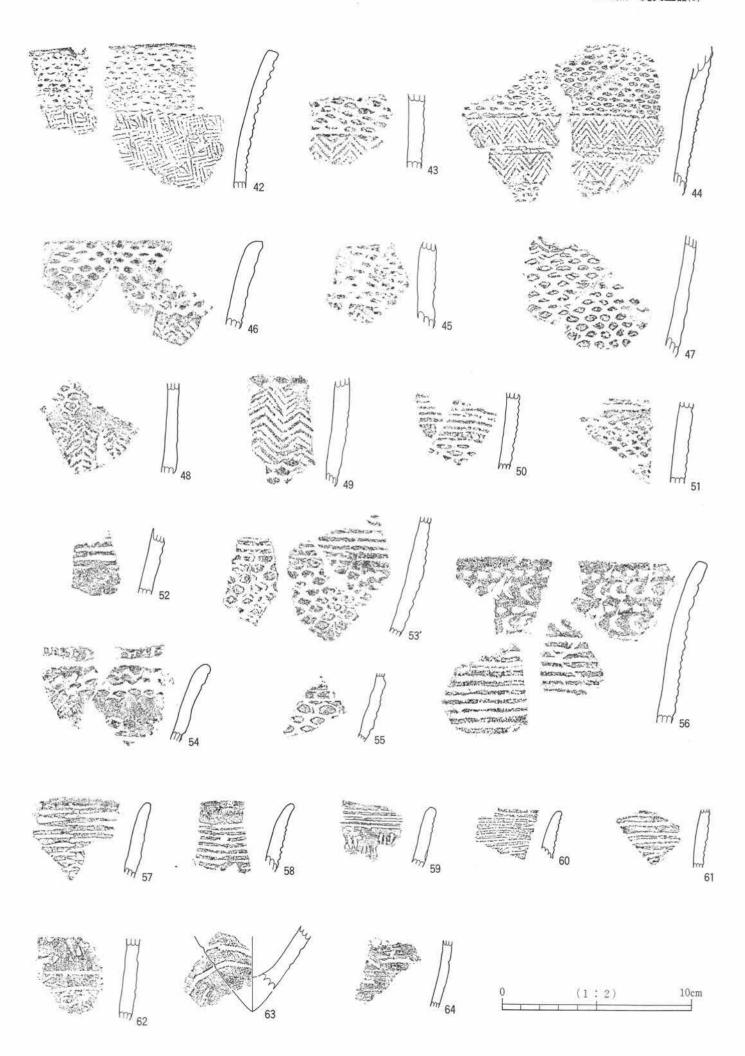
601.9m ♣

- 1. 暗褐色土層…暗褐色土を主とし、炭化材を多く含む。 2. 黒色土層……炭化材を主とし、黒色土が混じる。 3. 黒色土層……炭化材を主とし、黒褐色土が混じる。 4. 黒色土層……炭化材からなる。焼土粒を少量含む。



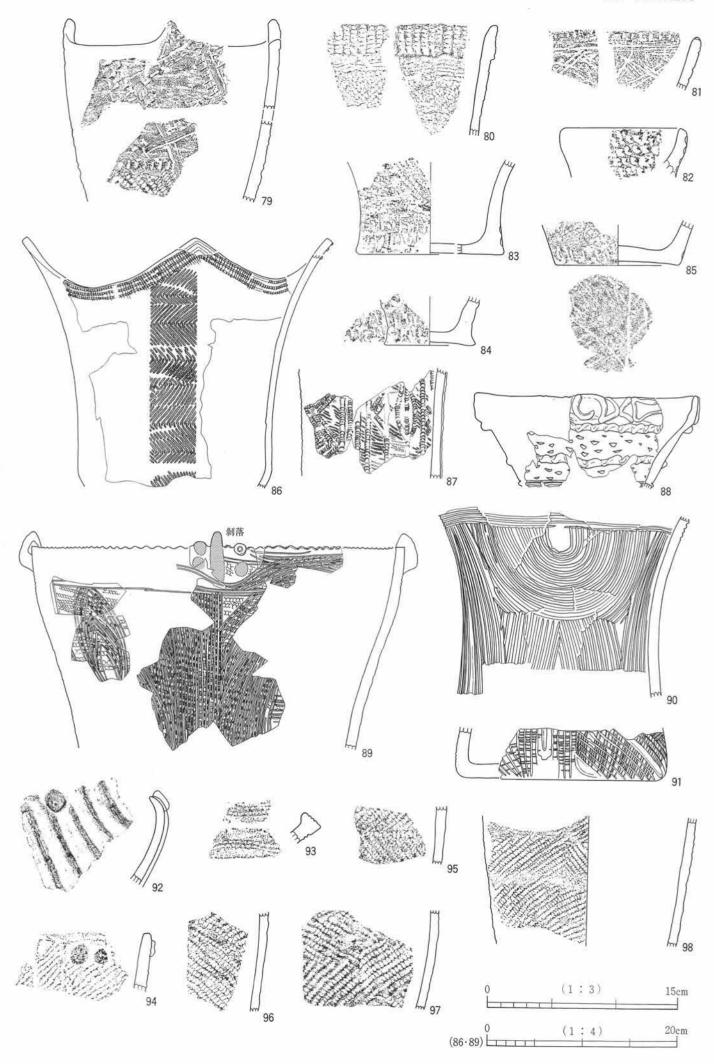




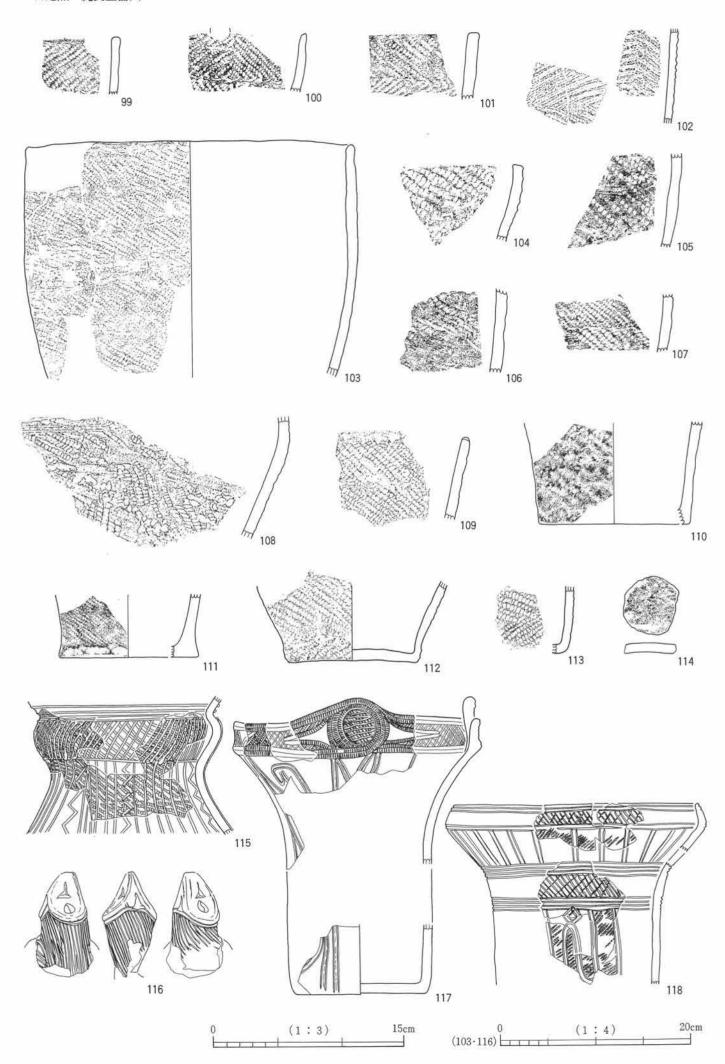


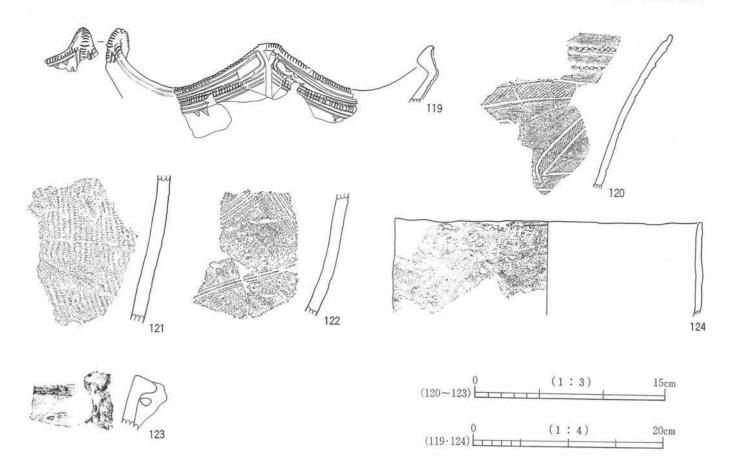
A地点 縄文土器(4) 凶版II

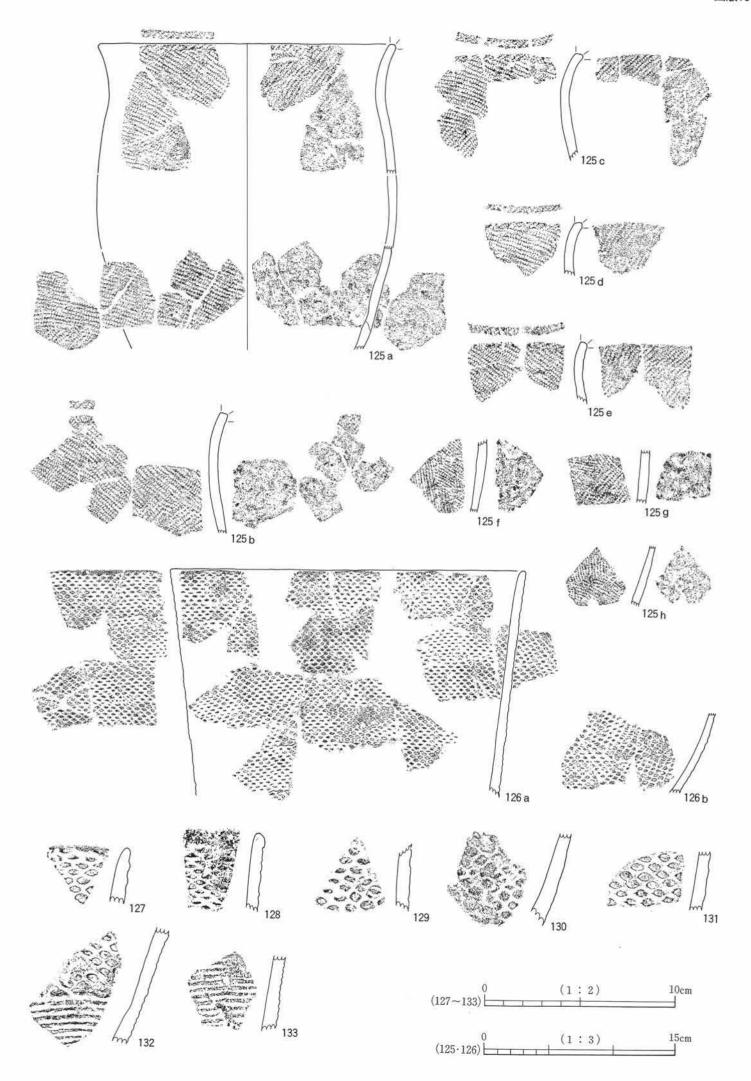


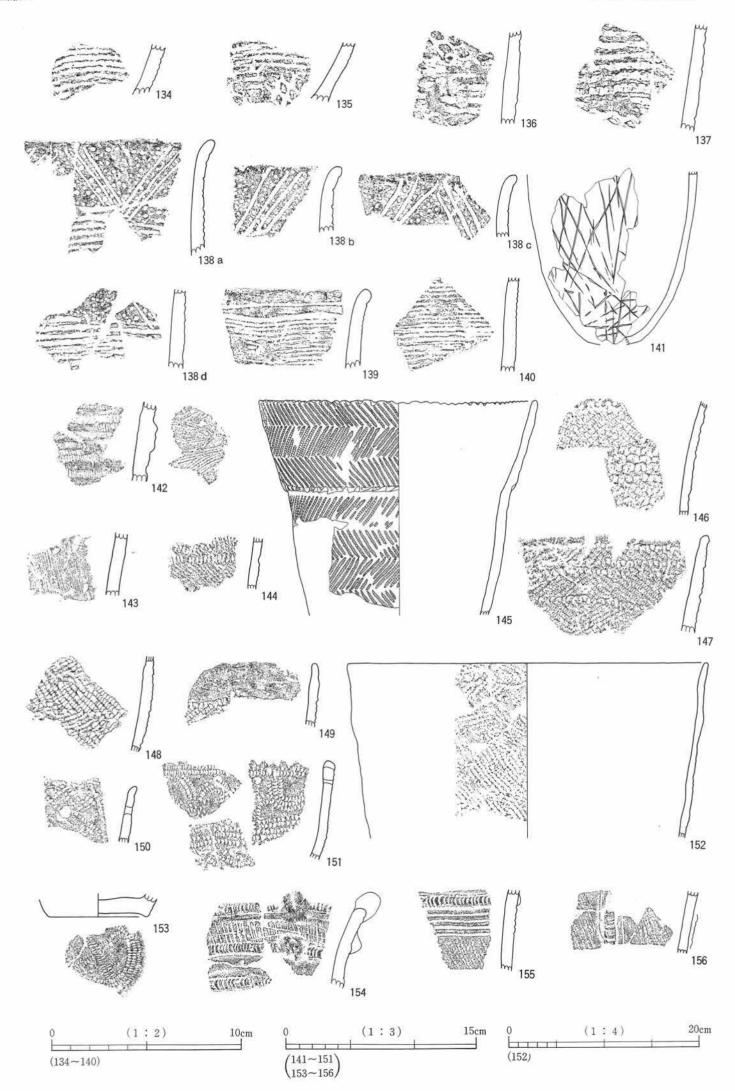


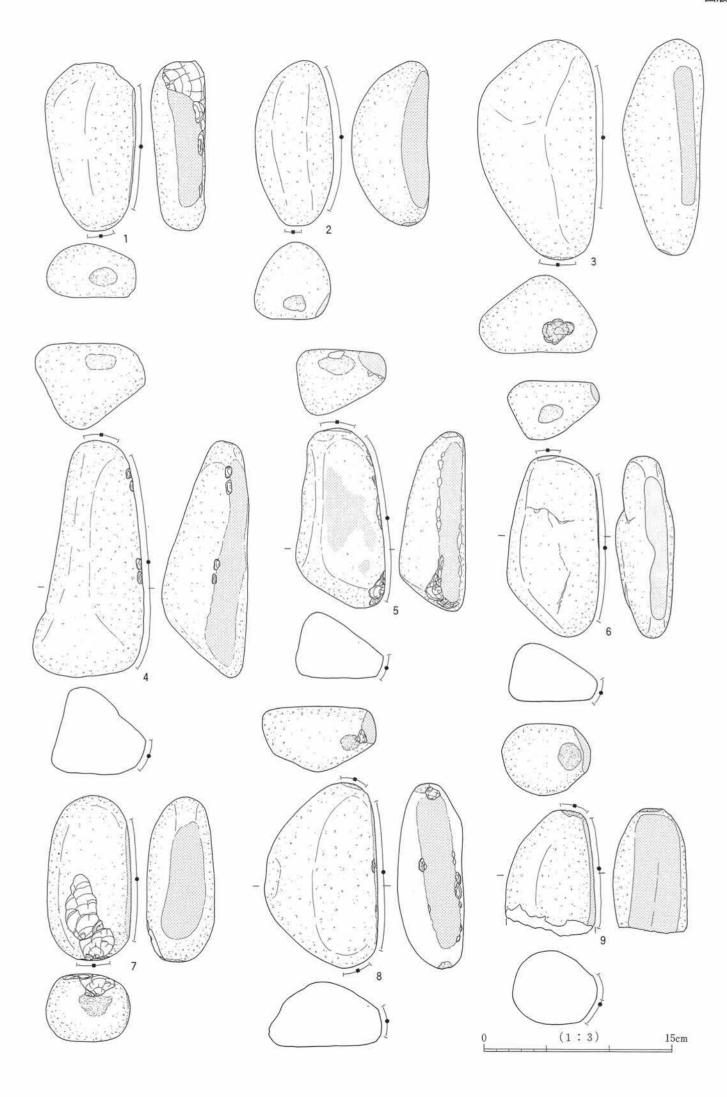
A地点 縄文土器(6) 凶版13

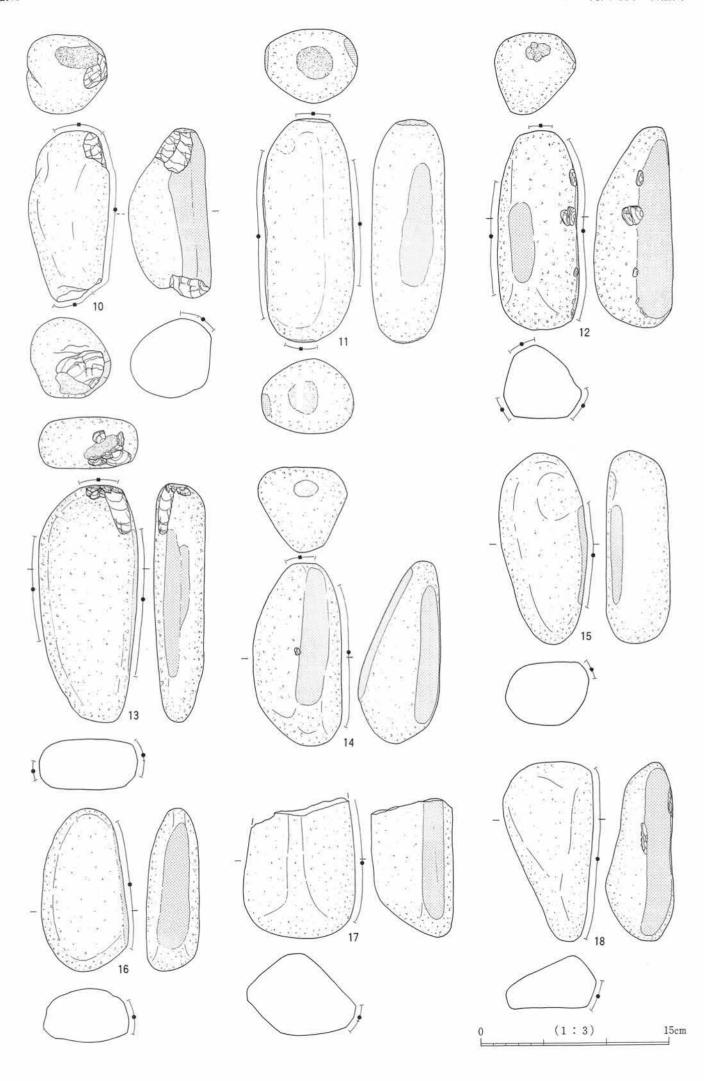


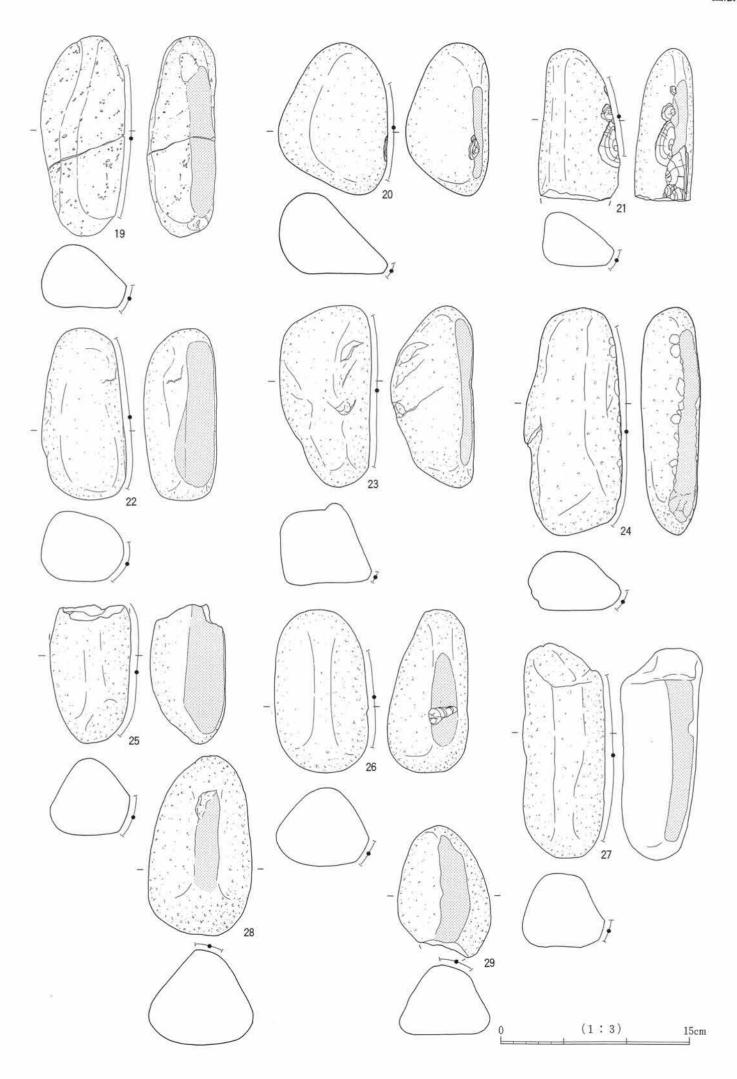


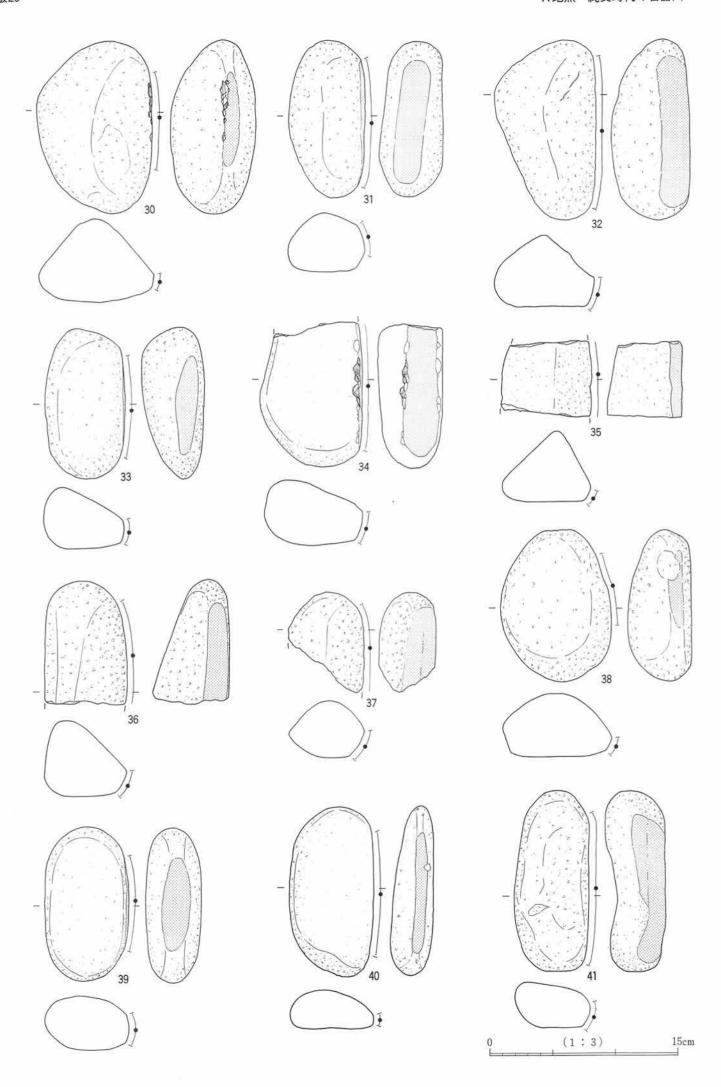


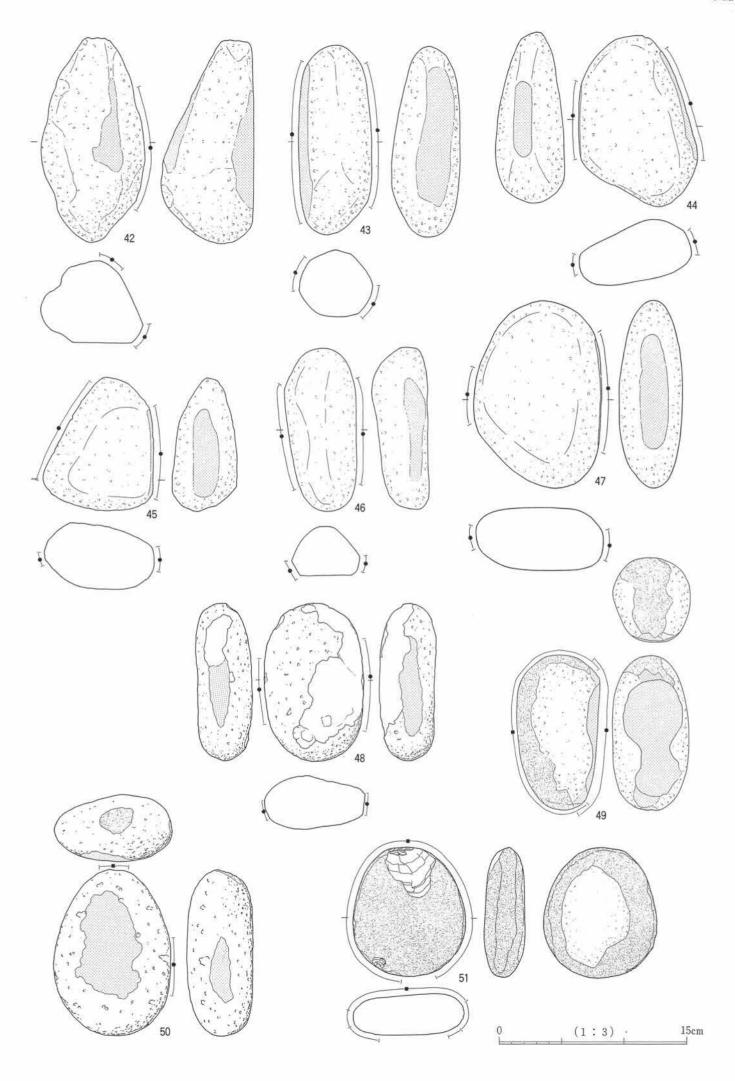


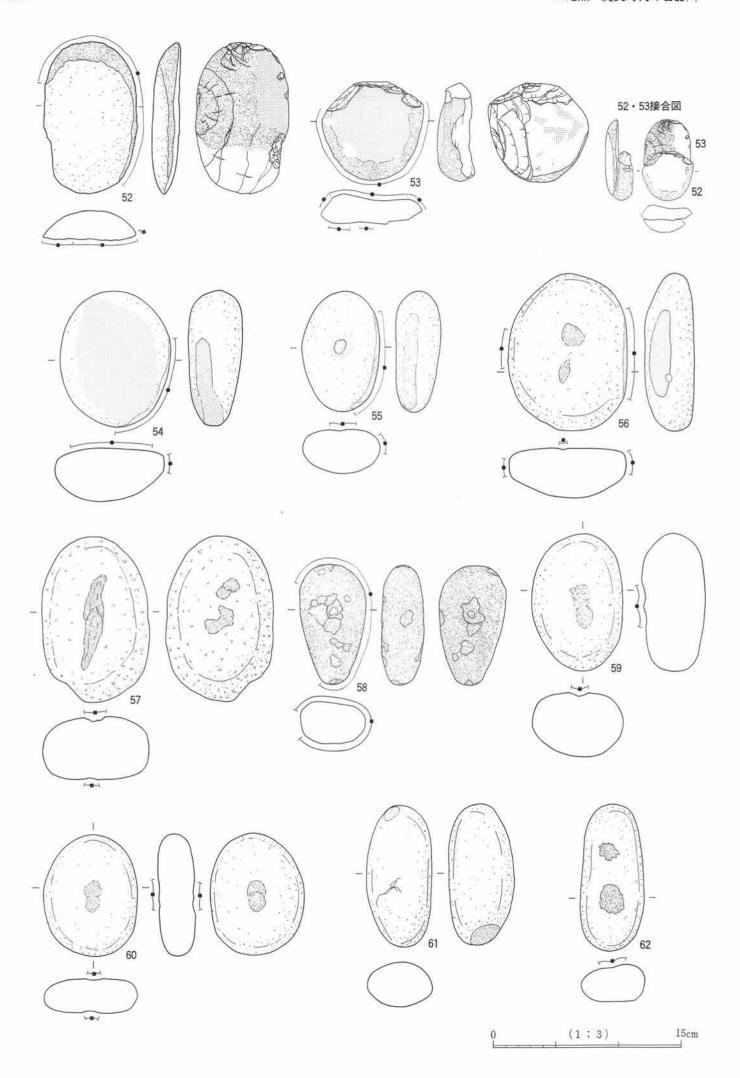




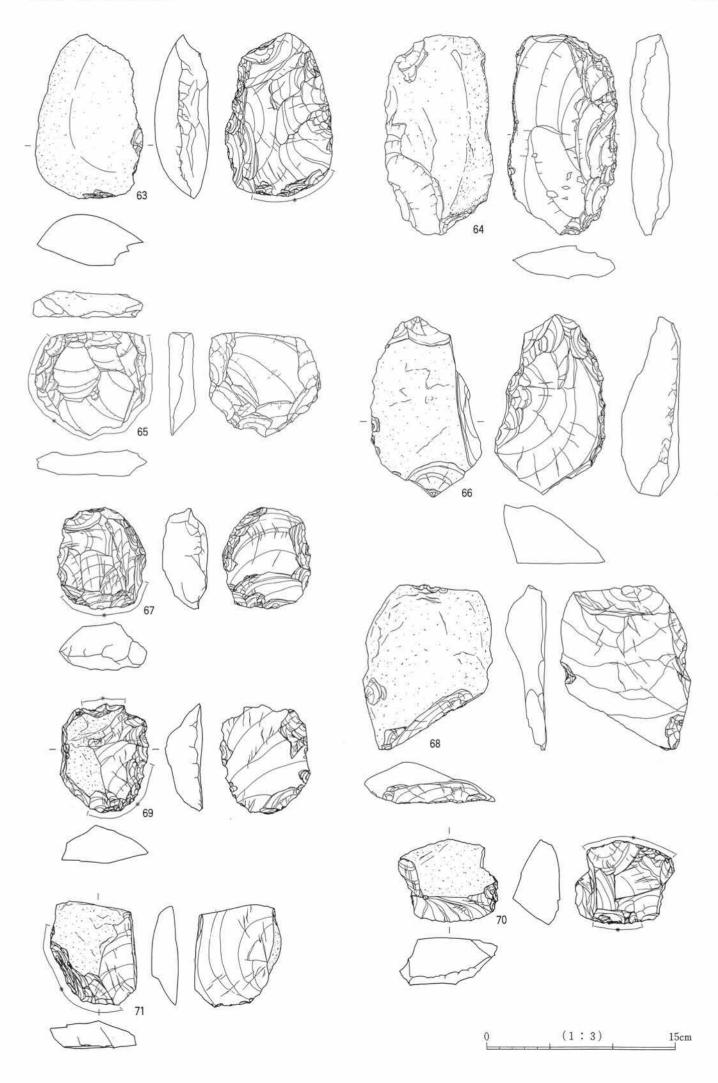






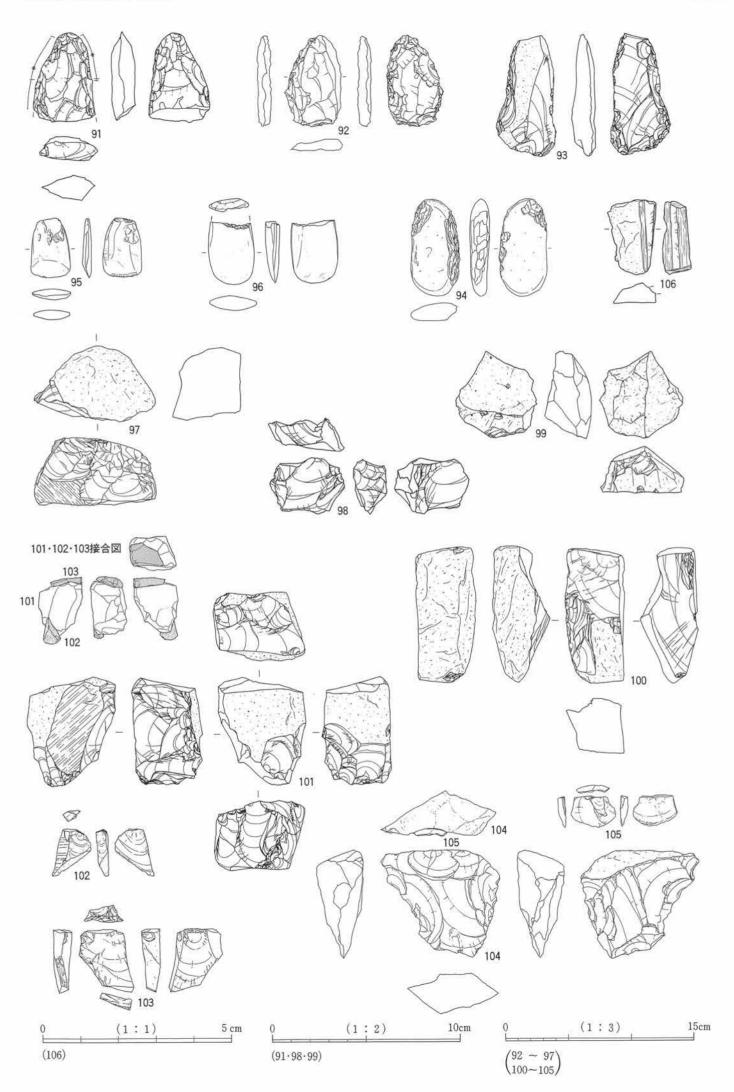


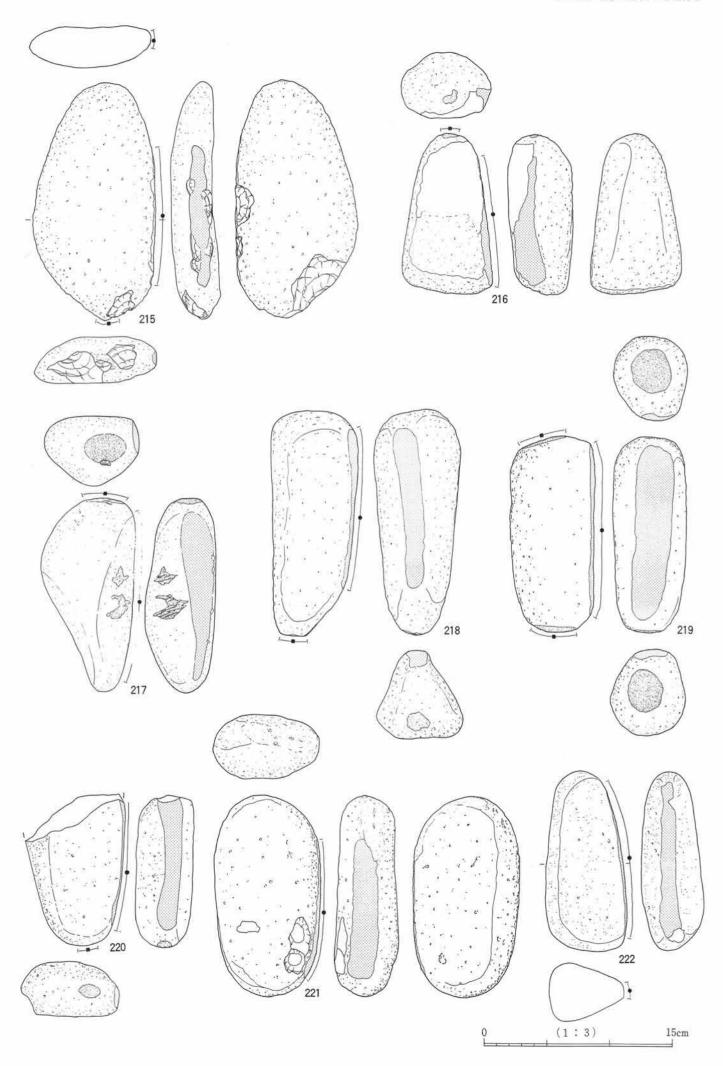
A 地点 縄文時代の石器(7) 図版23



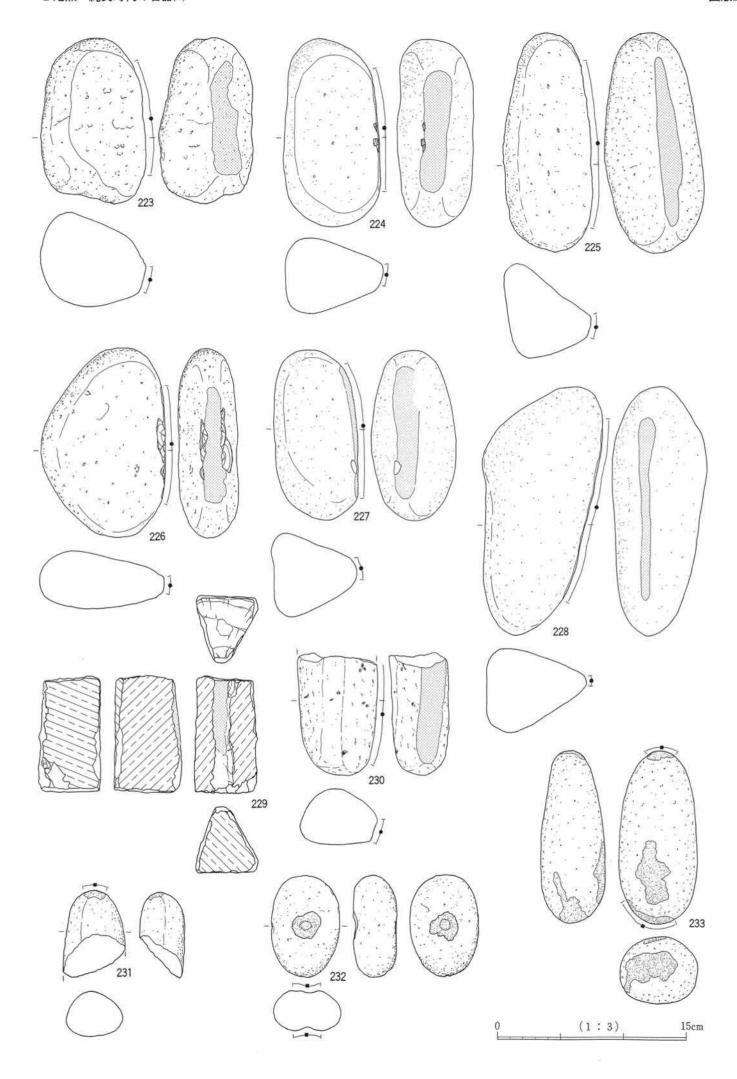


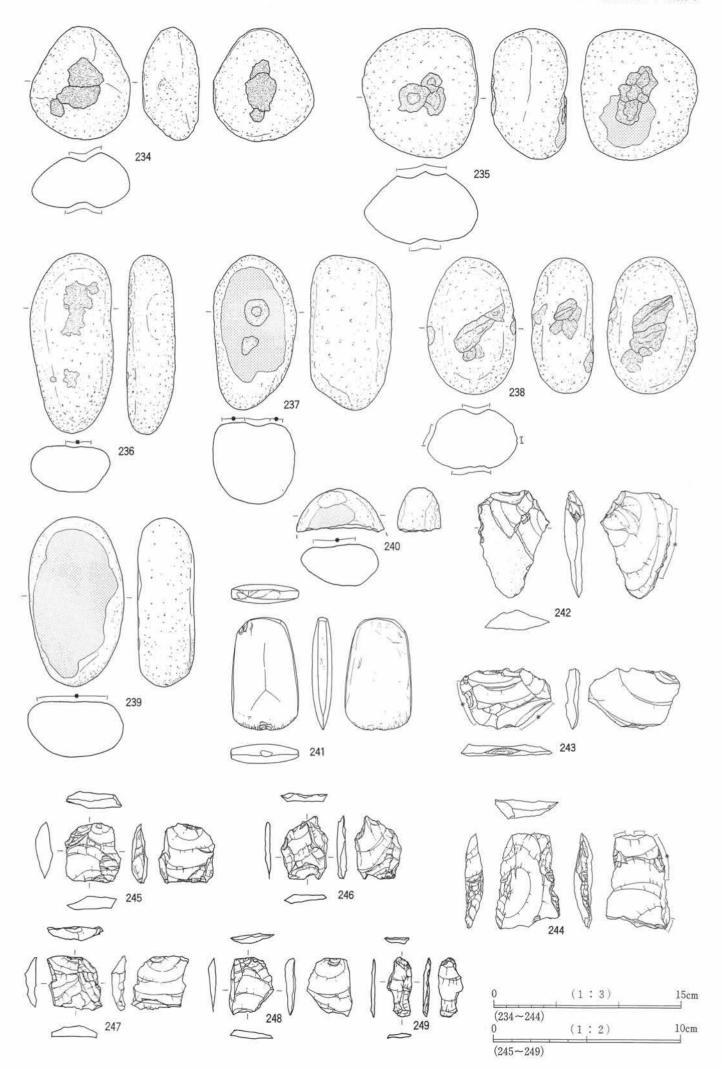
A 地点 縄文時代の石器(9) 図版25

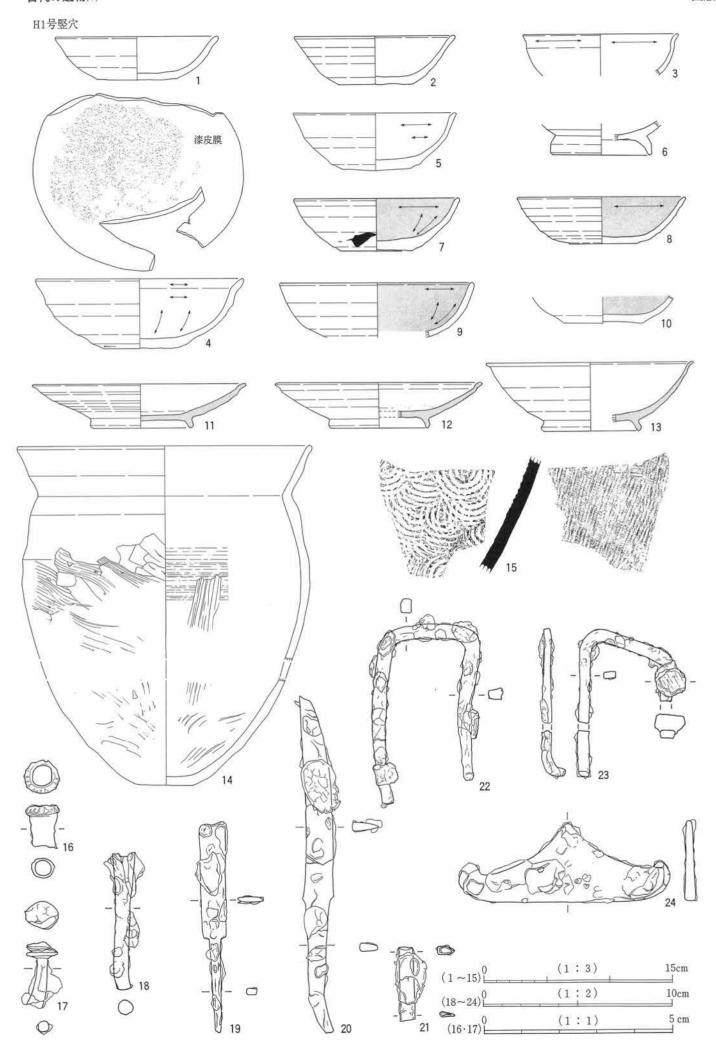


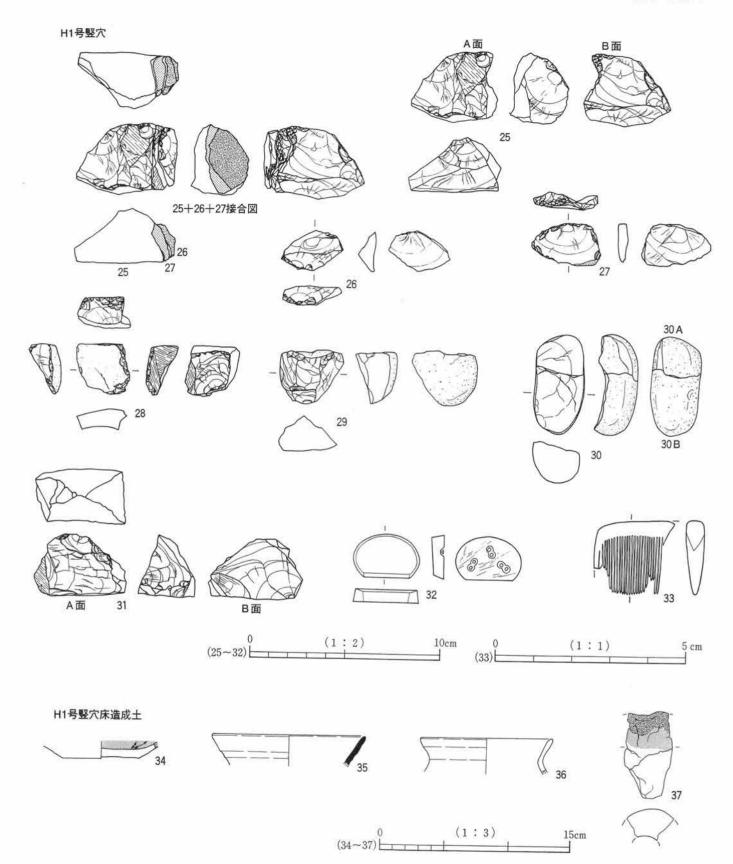


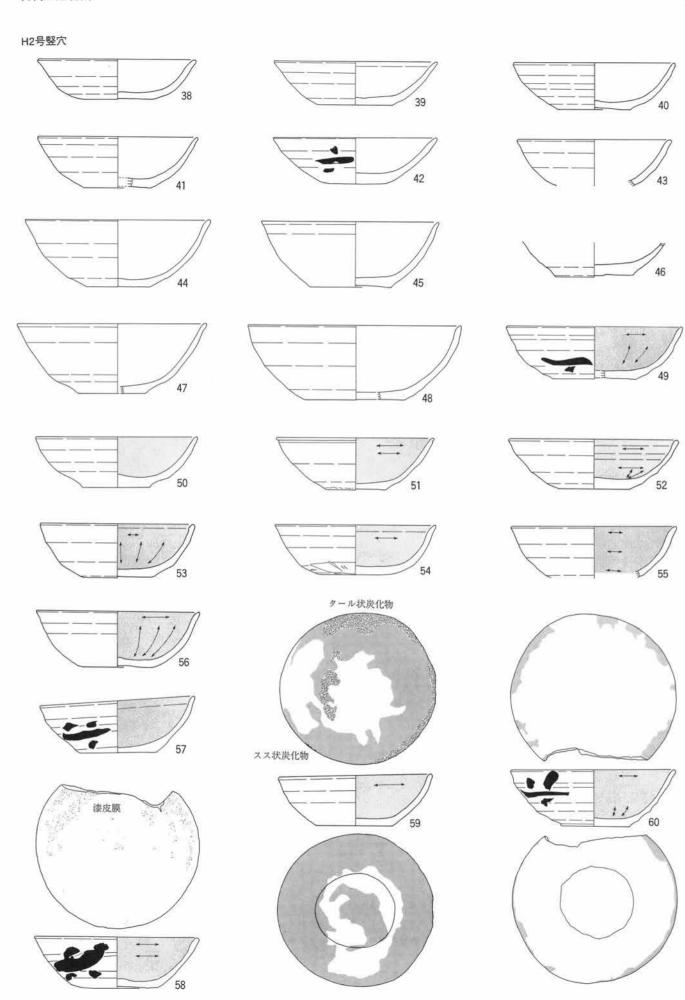
B地点 縄文時代の石器(2)





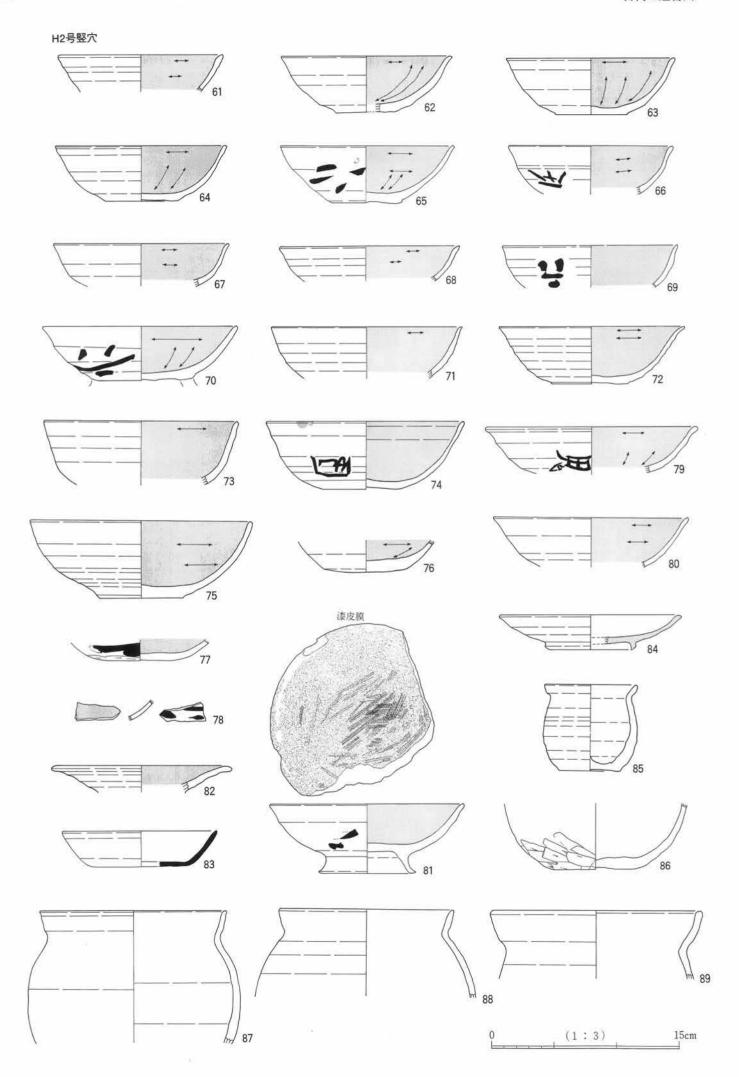




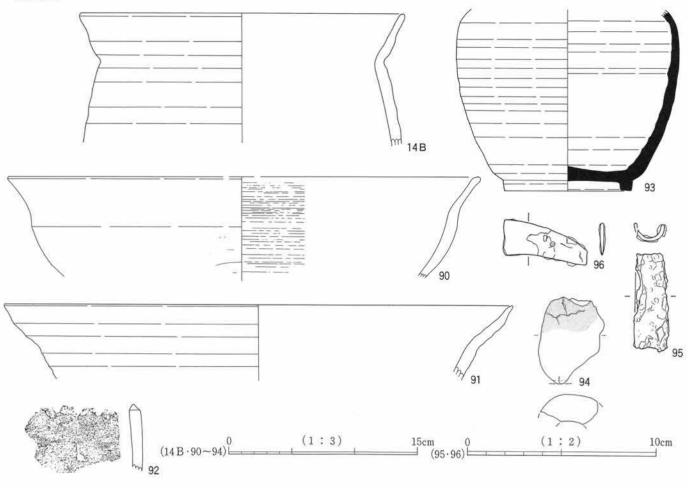


(1:3)

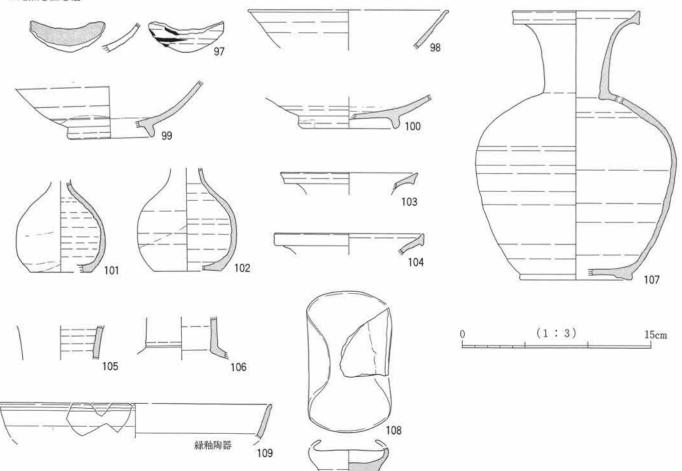
15cm



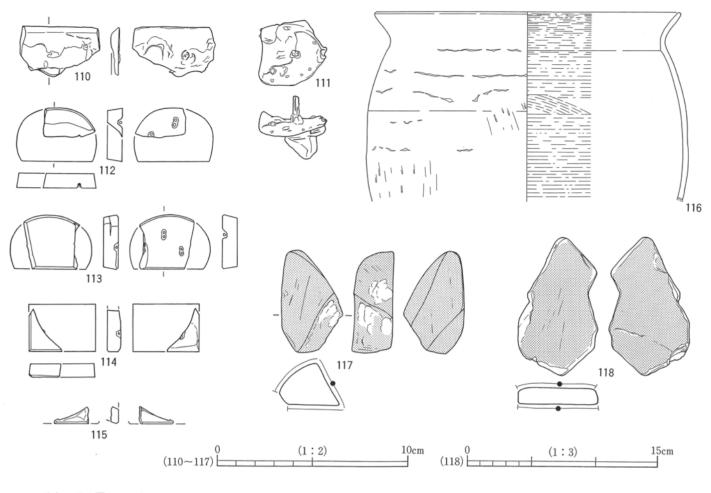




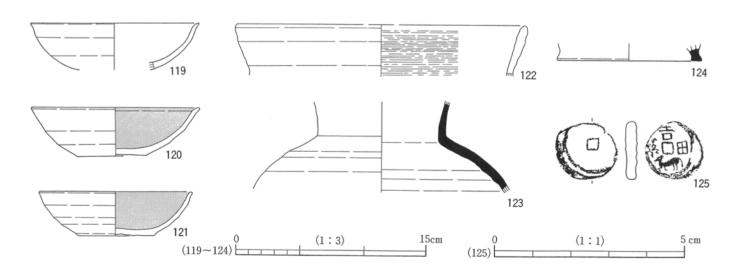
B地点I区I層

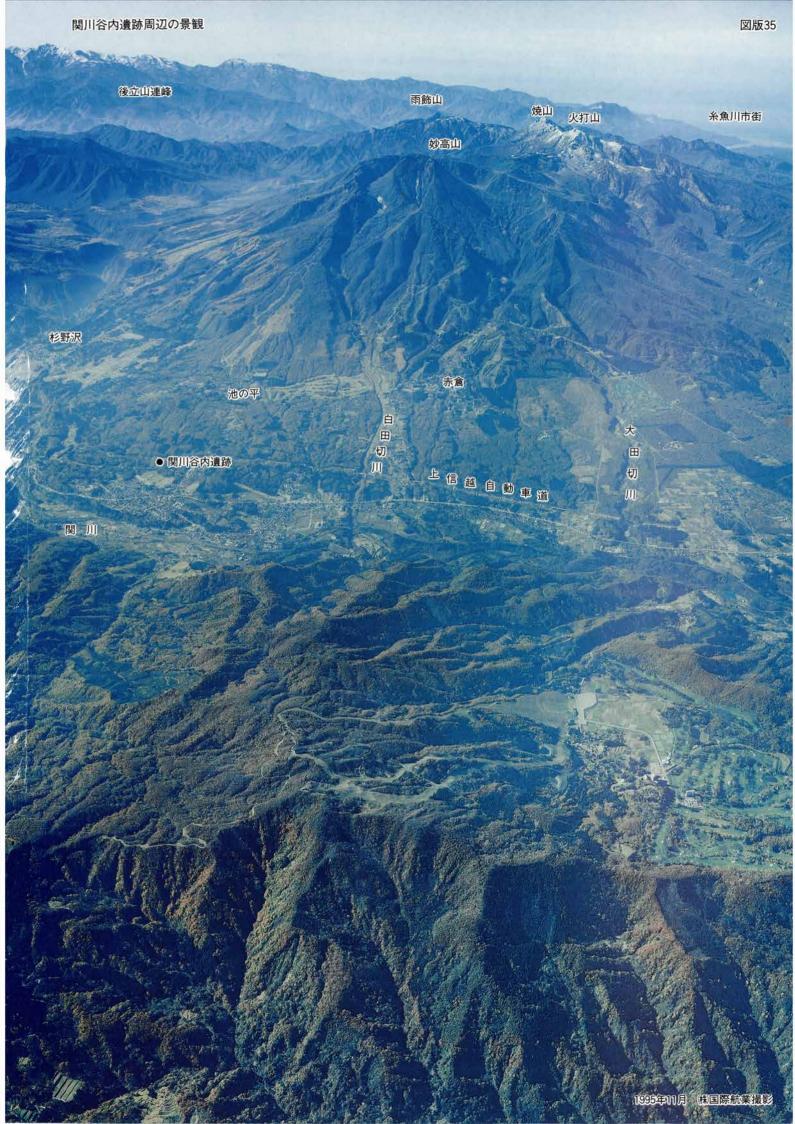


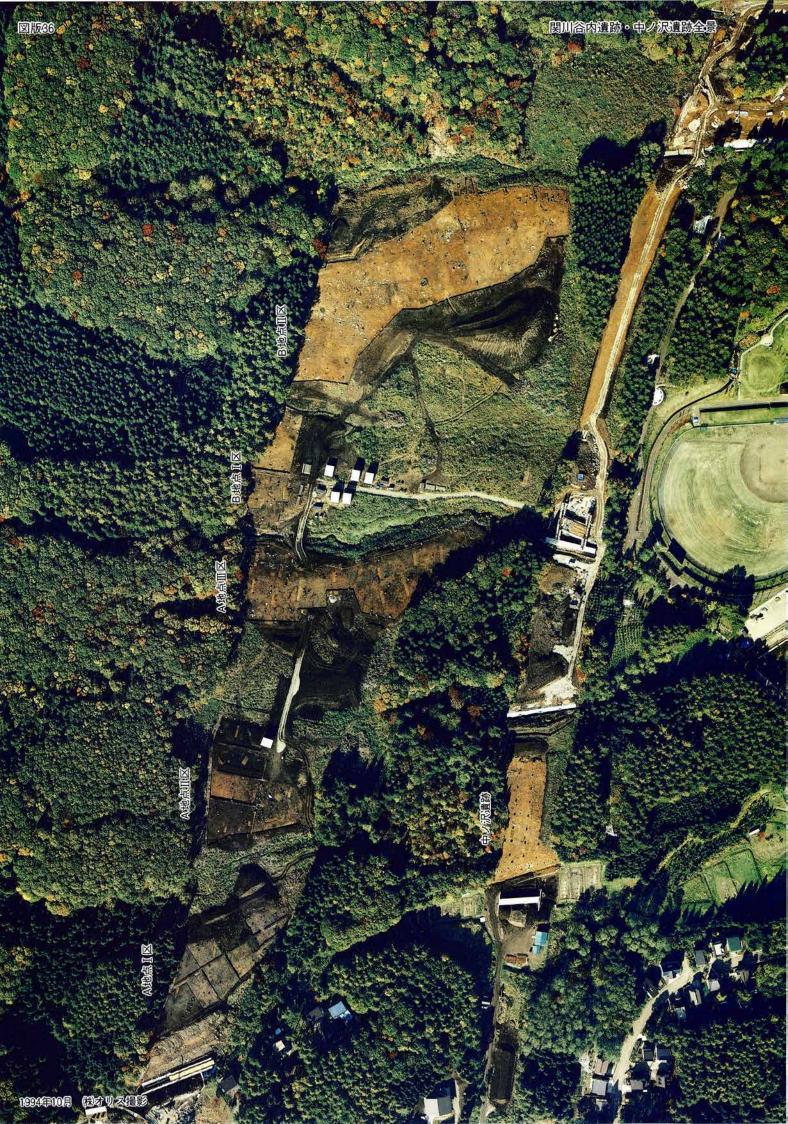
B地点I区I層



A地点I区I層

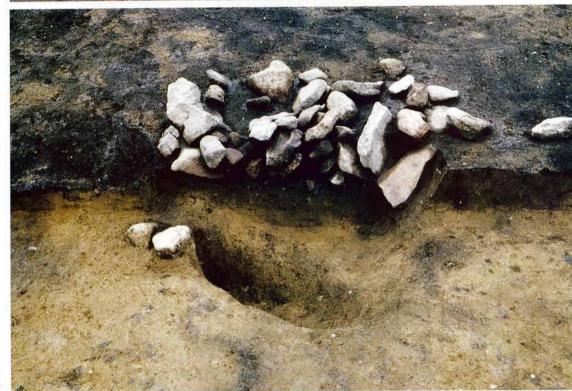








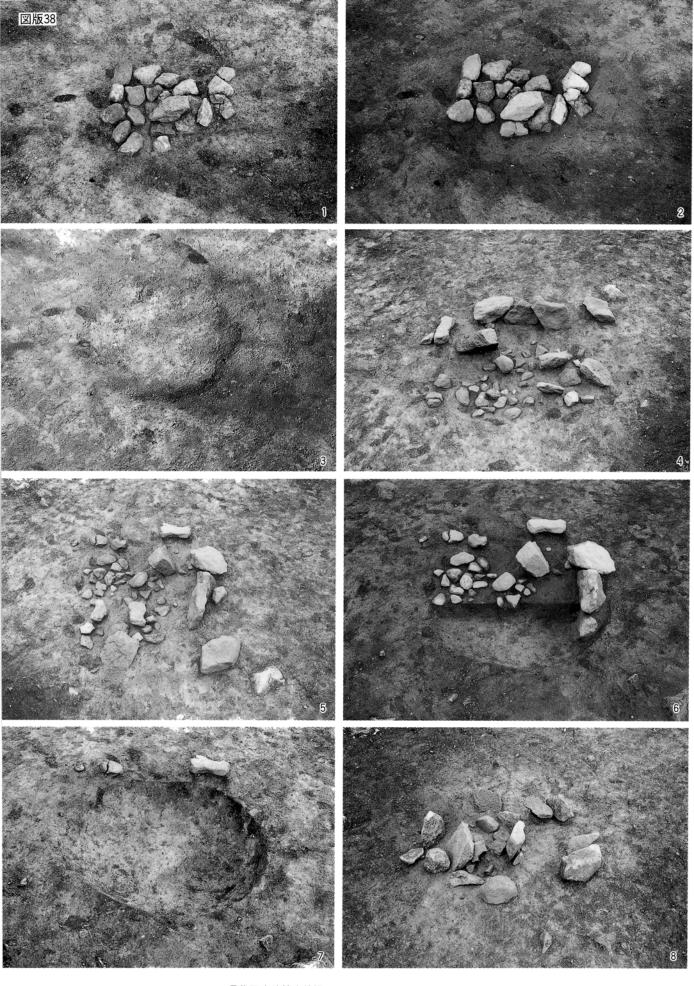
土層断面 (39Lグリッド)



6号集石土坑半截状況

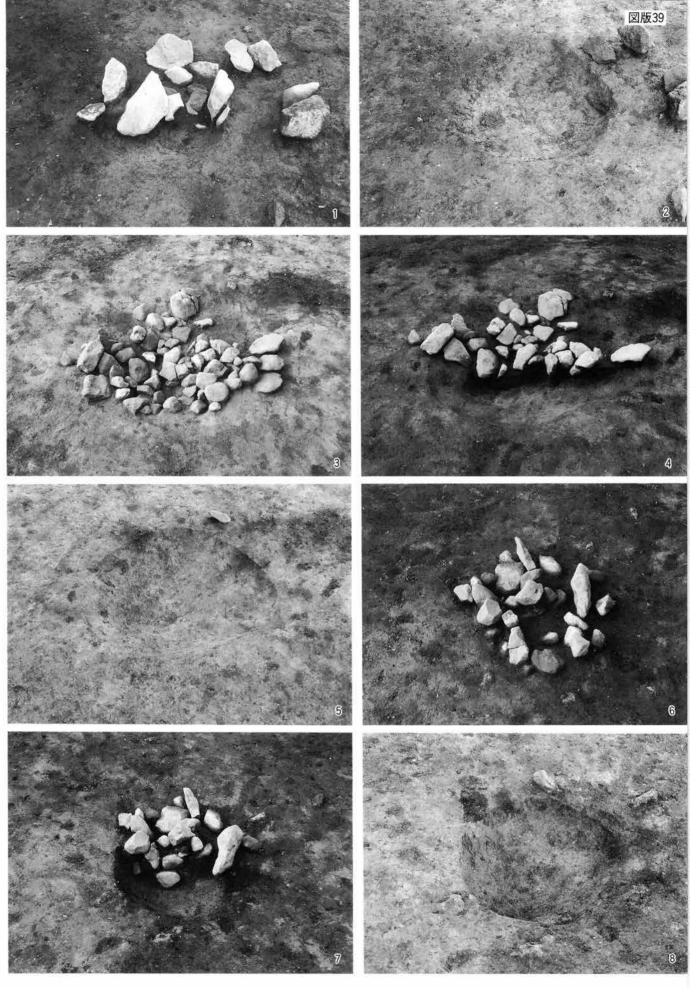


H2号竪穴調查風景



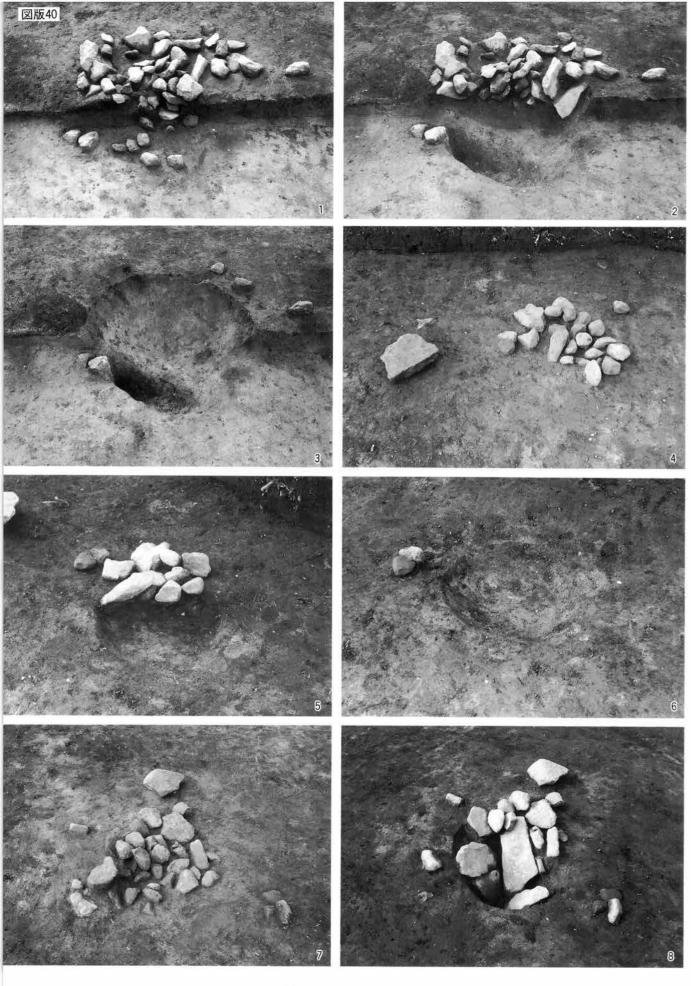
- 1 1 号集石土坑検出状況 ^(南から)
- 3 1号集石土坑完掘状況 (南から)
- 5 2号集石土坑検出状況 (南から)
- 7 2号集石土坑完掘状況 (南から)

- 2 1 号集石土坑半截状況 (南から)
- 4 2 号集石土坑検出状況 (西から)
- 6 2 号集石土坑半截状況 (南から)
- 8 3号集石土坑検出状況 ^(南東から)



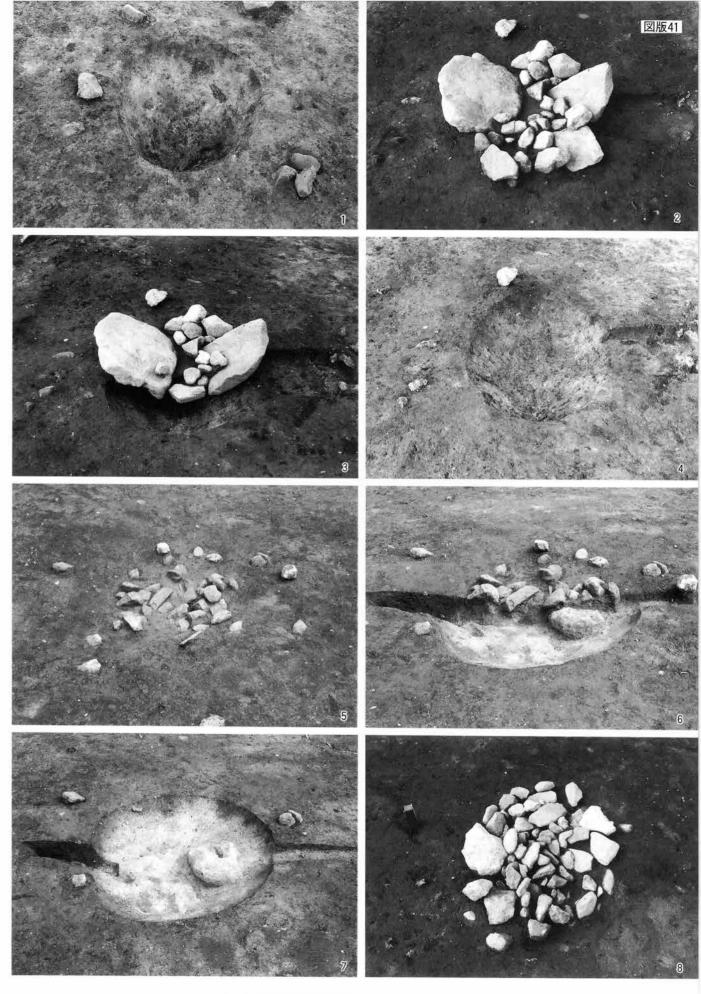
- 1 3号集石土坑半截状況 (南東から)
- 3 4 号集石土坑検出状況 (南東から)
- 5 4号集石土坑完掘状況 (南東から)
- 7 5号集石土坑半截状況 ^(南東から)

- 2 3号集石土坑完掘状況 (南東から)
- 4 4号集石土坑半截状況 (西東から)
- 6 5 号集石土坑検出状況 (南東から)
- 8 5 号集石土坑完掘状況 (南東から)



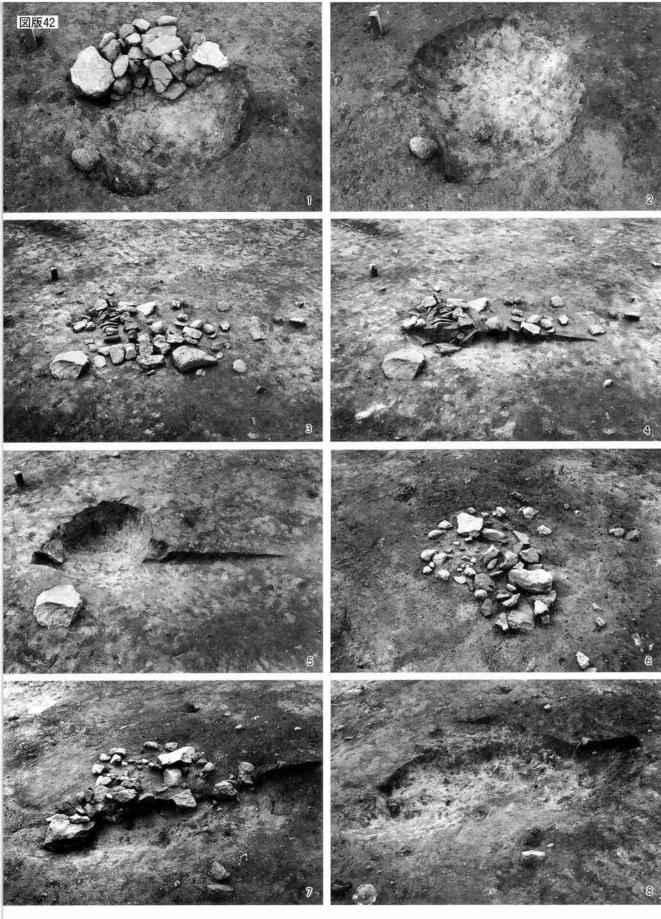
- 1 6号集石土坑検出状況 (東から)
- 3 6 号集石土坑完掘状況 (東から)
- 5 7号集石土坑半截状況 (南から)
- 7 8号集石土坑検出状況 (南から)

- 2 6号集石土坑半截状況 (東から)
- 4 7号集石土坑検出状況 (南から)
- 6 7号集石土坑完掘状況 (南から)
- 8 8号集石土坑半截状況 (南から)



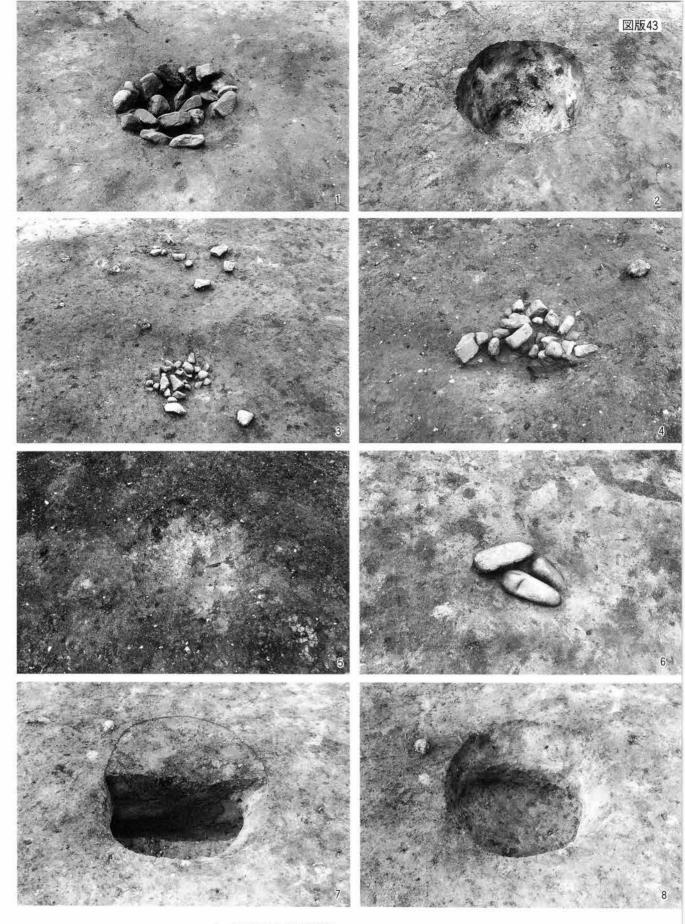
- 1 8号集石土坑完掘状況 (南から)
- 3 9号集石土坑半截状況 (南から)
- 5 10号集石土坑検出状況 (南西から)
- 7 10号集石土坑完掘状況 (南西から)

- 2 9号集石土坑検出状況 (南から)
- 4 2号集石土坑完掘状況 (西から)
- 6 10号集石土坑半截状況 (南西から)
- 8 11号集石土坑検出状況 ^(南東から)



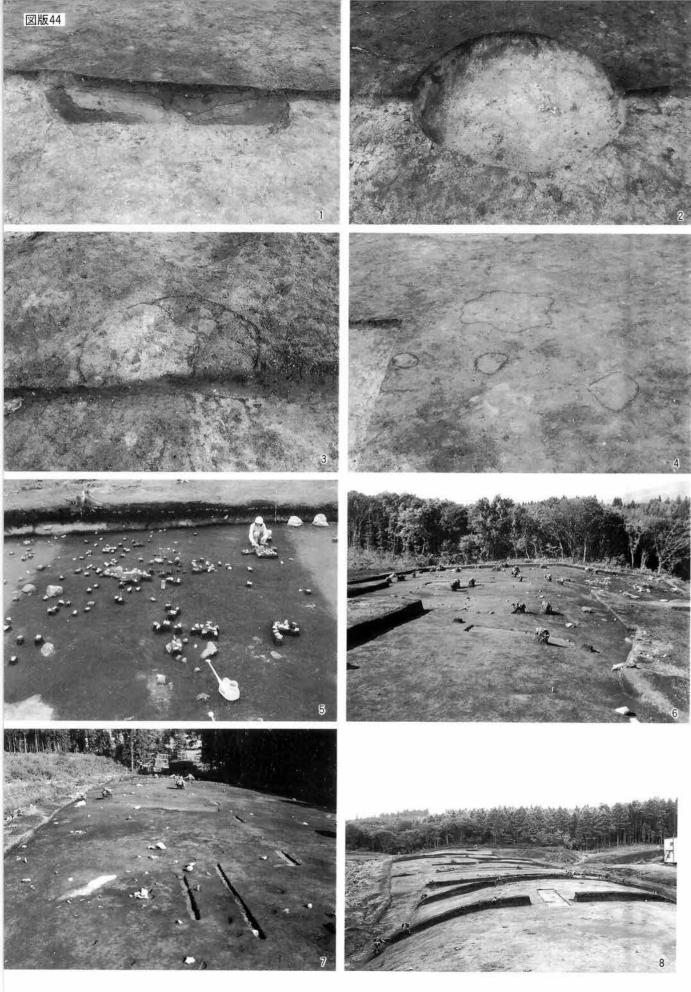
- 1 11号集石土坑半截状況 (南東から)
- 3 12号集石土坑検出状況 (東から)
- 5 12号集石土坑完掘状況 (東から)
- 7 13号集石土坑半截状況 ^(北東から)

- 2 11号集石土坑完掘状況 (南東から)
- 4 12号集石土坑半截状況 (東から)
- 6 13号集石土坑検出状況 (南から)
- 8 13号集石土坑完掘状況 (北東から)



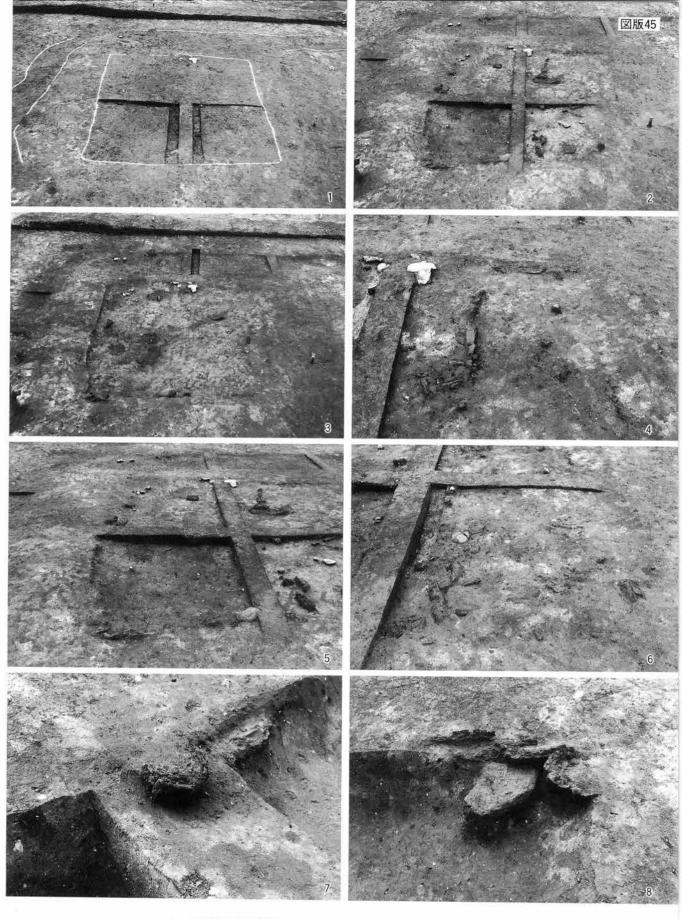
- 1 14号集石土坑検出状況 (東から)
- 3 15号集石土坑検出状況 (南から)
- 5 15号集石土坑完掘状況 (南から)
- 7 1号土坑半截状況 (南東から)

- 2 14号集石土坑完掘状況 (東から)
- 4 15号集石土坑半截状況 (東から)
- 6 1号石器集積検出状況 (東から)
- 8 1号土坑完掘状況 (南東から)



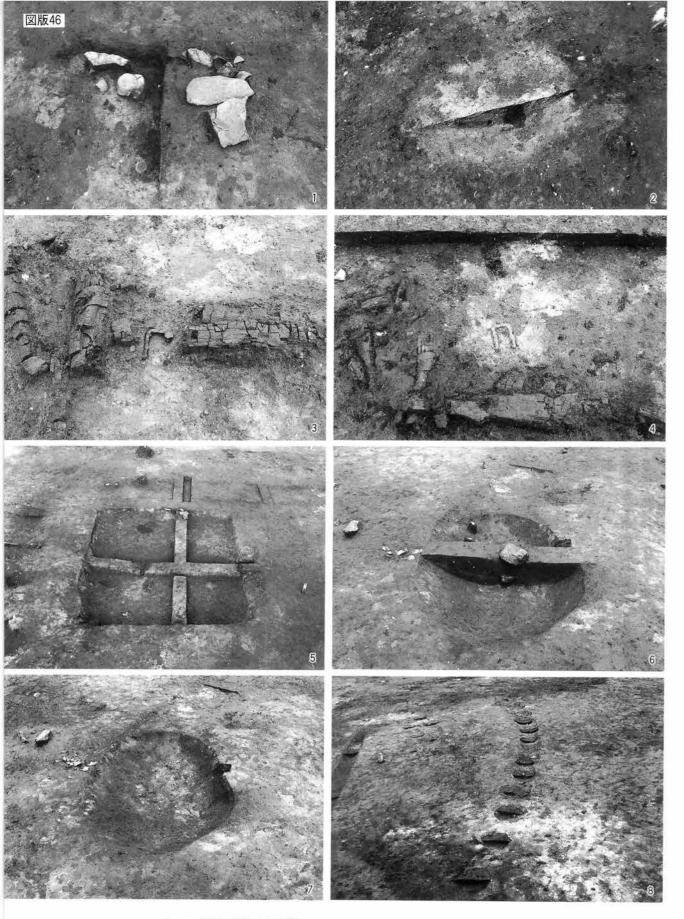
- 1 2号土坑半截状況
 - (南から)
- 3 焼土2検出状況
- 5 A地点Ⅲ区V層の遺物出土状況
- 7 A地点Ⅲ区東側完掘状況 (西から)

- 2 2号土坑完掘状況 (南から)
- 4 焼土3検出状況 (南から)
- 6 A地点Ⅲ区西側完掘状況 (東から)
- 8 B地点 I 区完掘状況 (東から)



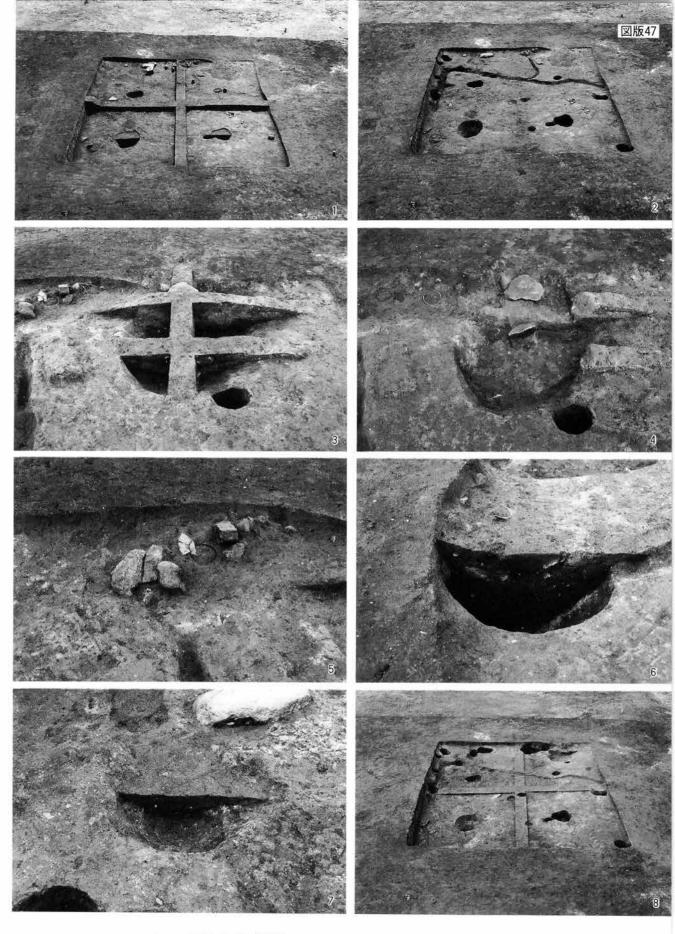
- 1 H1号竪穴検出状況 (西から)
- 3 H1号竪穴完掘状況 (西から)
- 5 H1号竪穴 c 区炭化材出土状況 (西から)
- 7 H1号竪穴西縁中央の炭化材 (南東から)

- 2 H1号竪穴覆土調査状況 (西から)
- 4 H1号竪穴 a 区炭化材出土状況 (西から)
- 6 H1号竪穴 b 区炭化材出土状況
- 8 H1号竪穴北西隅の炭化材 (東から)



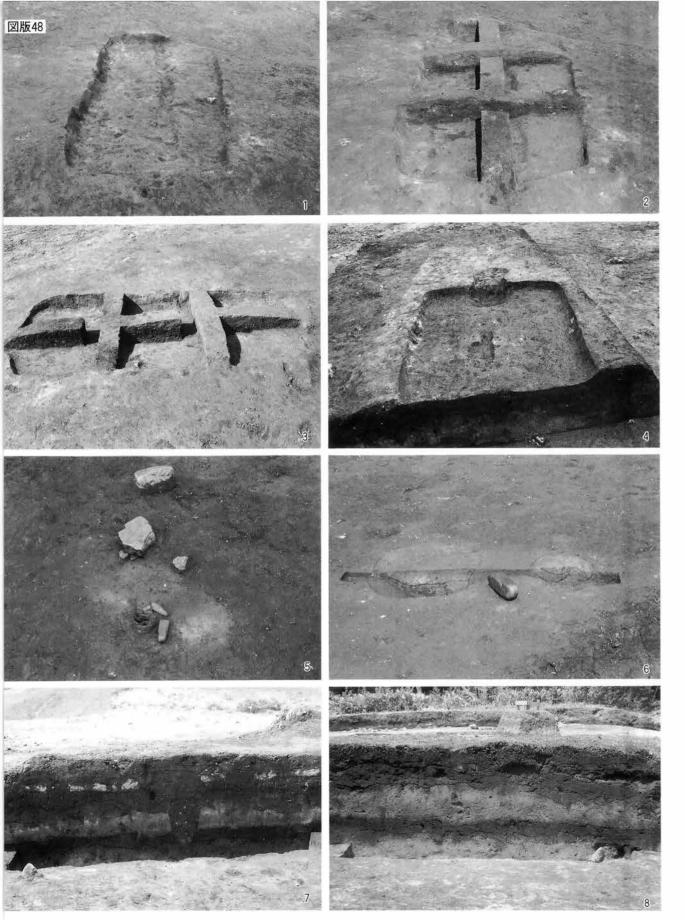
- 1 H1号竪穴東縁中央の礫 (西から)
- 3 H1号竪穴鉄製品出土状況 (南から)
- 5 H1号竪穴床造成土調査状況 (西から)
- 7 H1号土坑完掘状況 (西から)

- 2 H1号竪穴焼土半截状況 (南から)
- 4 H1号竪穴鉄製品出土状況 (南から)
- 6 H1号土坑半截状況 (西から)
- 8 H3号溝調査状況 (東から)



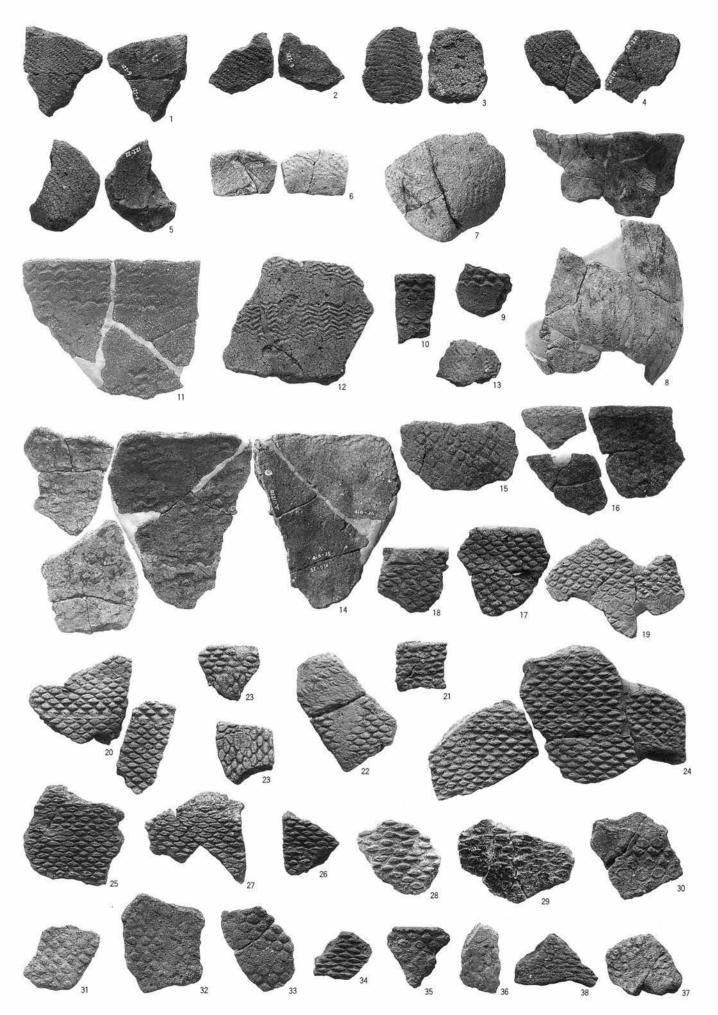
- 1 H2号竪穴覆土調査状況 (西から)
- 3 H2号竪穴カマド調査状況 (西から)
- 5 H2号竪穴カマド北側の礫検出状況 (西から)
- 7 H2号竪穴 pit R 半截状況 (西から)

- 2 H2号竪穴完掘状況 (西から)
- 4 H2号竪穴カマド完掘状況 (西から)
- 6 H2号竪穴 pit T・V 半截状況 (北から)
- 8 H2号竪穴床造成土調査状況 (西から)

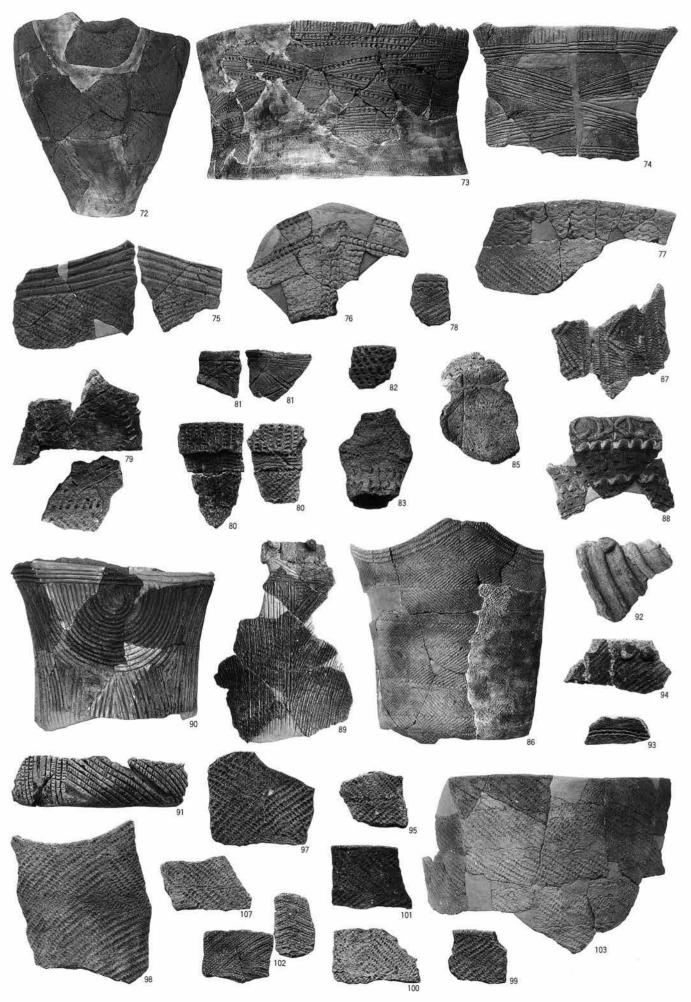


- 1 1号炭窯完掘状況 (南から)
- 3 1号炭窯覆土調査状況 (東から)
- 5 H1号炉跡検出状況 (東から)
- 7 土層断面④ (東から)

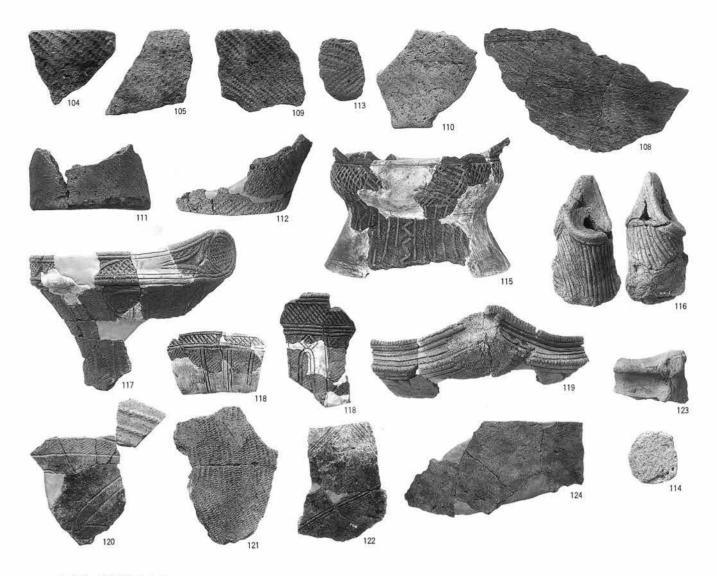
- 1号炭窯覆土調査状況 (南から)
- 4 2号炭窯完掘状況 (北から)
- 6 H1号炉跡半截状況 (南東から)
- 8 土層断面⑥ (北から)



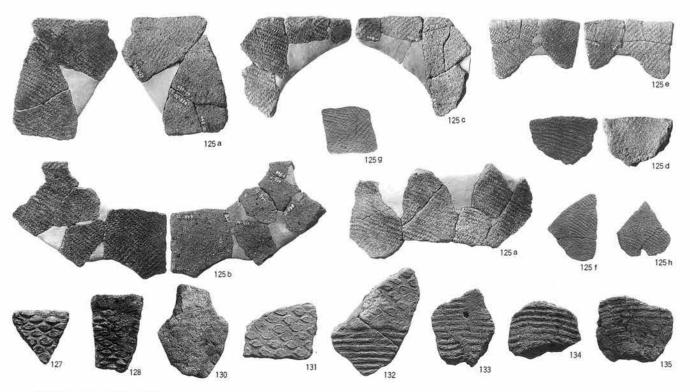




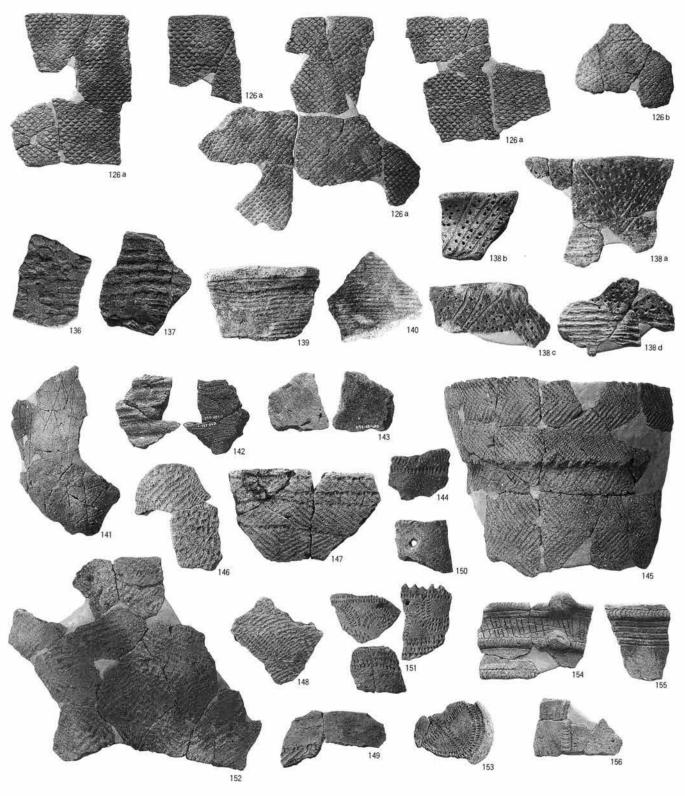
1:3 1:4 (73.86.89.103)



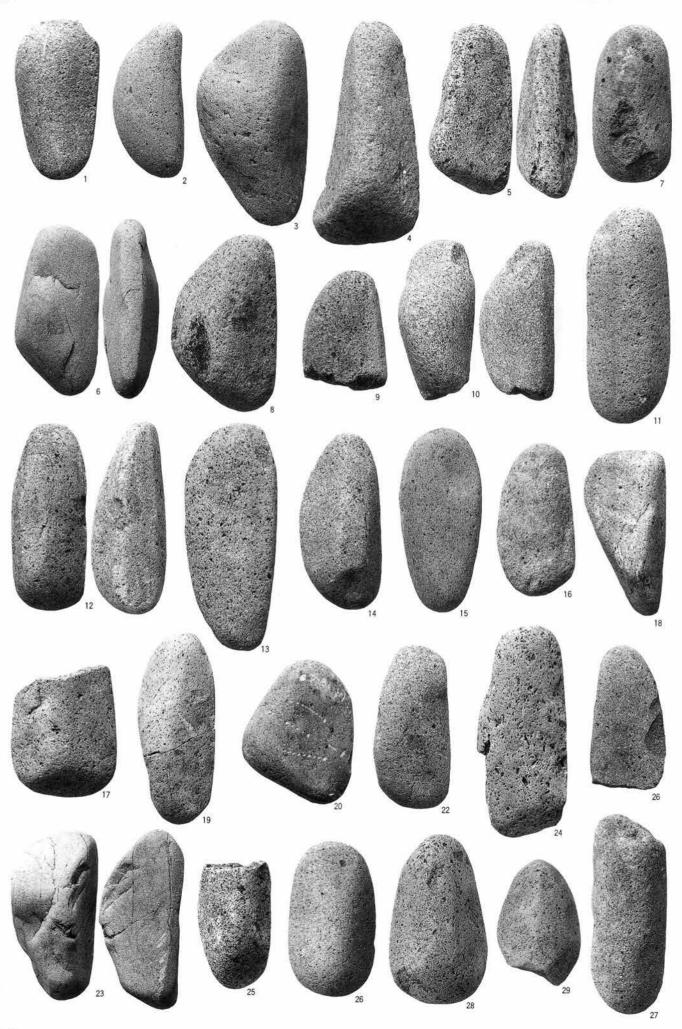
1:3 124のみ1:4



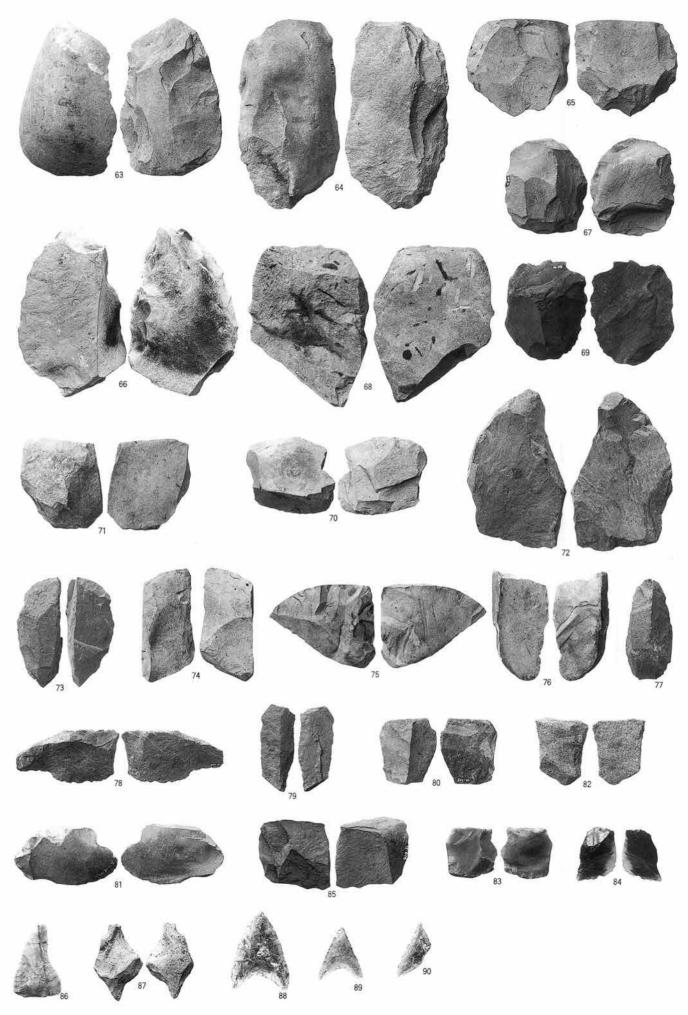
1:3(125) 1:2(127~135)



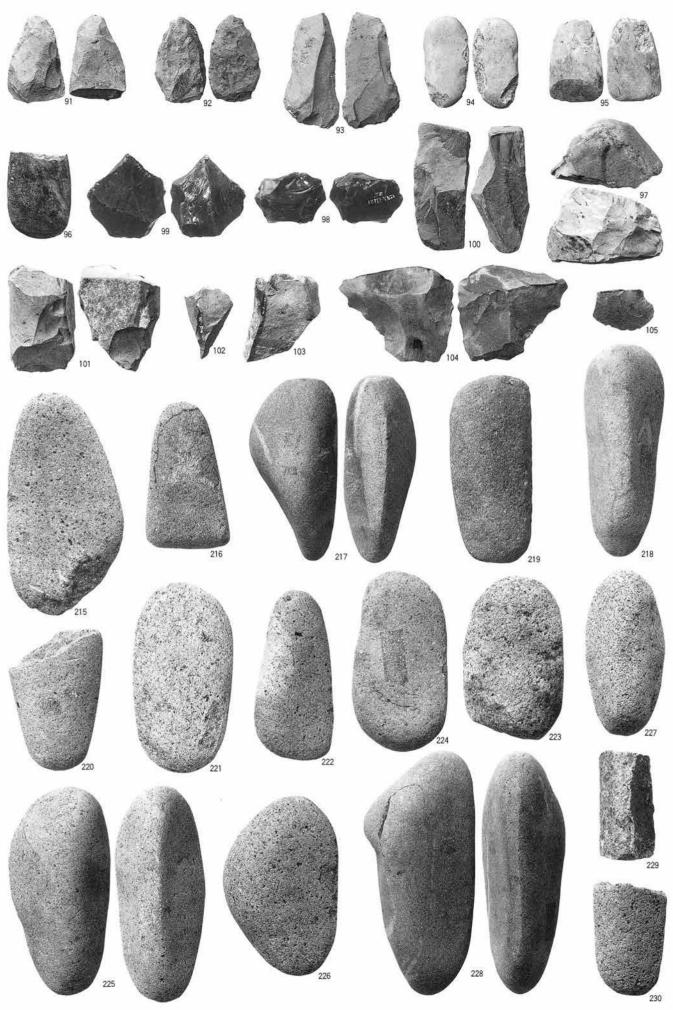
1:2(136~140) 1:3(ほか)



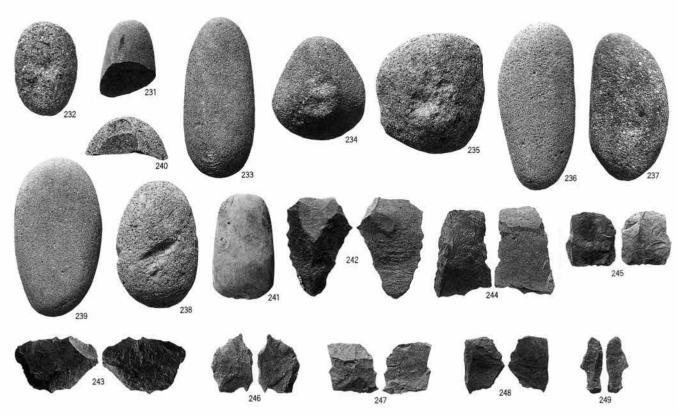




1:2(81.83.84) 3:4(86~90) 1:3(ほか)



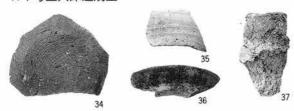
1:2(91・95・96・98・99・102・103・105) 1:3(ほか)



1:2(245~249) 1:3(ほか)

H 1 号竪穴

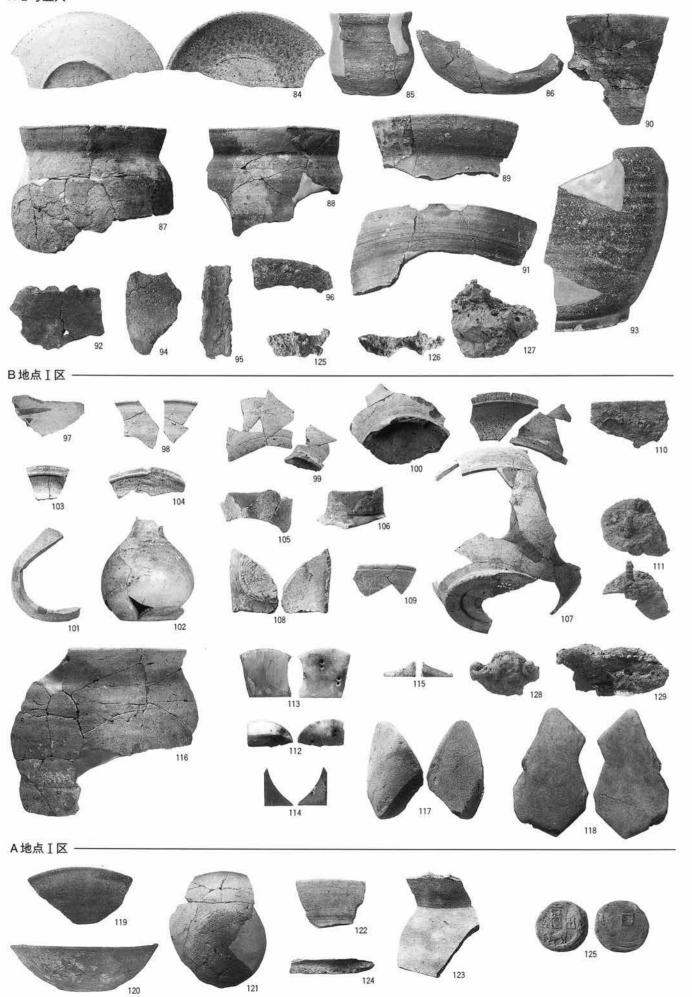




1:2(18~32) 1:1(16・17・33) 1:3(ほか)



H 2号竪穴



1:2(95·96·110~115·117) 1:1(125) 1:3(ほか)



縄交土器139 沈線と平行線状文



縄文土器25 繊維痕



縄文土器17~20と同一個体 繊維痕



古代の遺物74 墨書「仇」?



古代の遺物66 墨書「本」



古代の遺物79 墨書「鬼」あるいは「思」



古代の遺物70 墨書「六」



古代の遺物42 墨書「六」



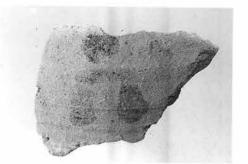
古代の遺物60 墨書「六」



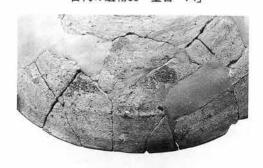
古代の遺物58 墨書「六」



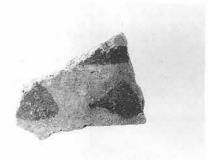
古代の遺物97 墨書「六」



古代の遺物69 墨書「六」



古代の遺物65 墨書「七」?

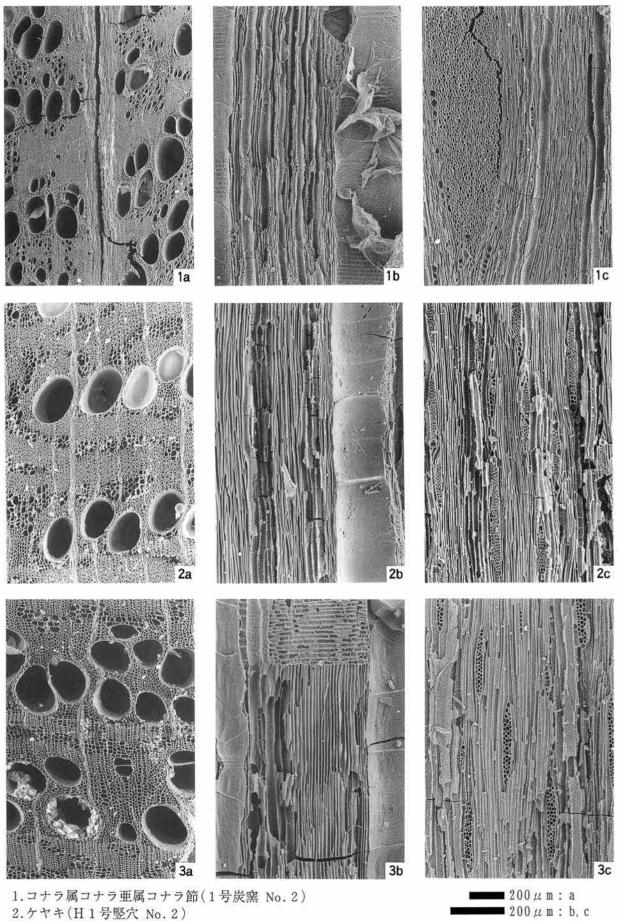


古代の遺物78 墨書「六」



古代の遺物88 器壁の発泡と変色

炭化材の顕微鏡組織



2.ケヤキ(H 1 号竪穴 No. 2) 3.キハダ(H 1 号竪穴 No. 3) a:木口, b:柾目, c:板目

報告書抄録

書 名	関川谷内遺跡	etanto e s 関川谷内遺跡 I							
副書名	上信越自動車	上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第90集	第90集							
編著者名	小池義人 江	小池義人 江口志麻							
編集機関	財団法人 新	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所 在 地	₹956-0845	〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1							
発行年月日	1998年9月1日	1998年9月1日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調本原因	
// 1/XX	/// 11.76	市町村	遺跡番号	7074	八九五	Pol TF 263 [12]	阿且四項	門且小八口	
数	析潟県中頸城郡 沙高高原町 大字関川字谷内・ 中ノ沢ほか	15-545	52 · 53	36度 51分 37秒	11分	$\begin{array}{c} 19930927 \sim \\ 19931018 \\ 19940425 \sim \\ 19941118 \\ 19950417 \sim \\ 19950825 \end{array}$	35,000 m ²	上信越自動	車道の建設
遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
関川谷内遺跡	遺物散布地	縄文時代(早期・前期) 平安時代		集石土坑15基(縄文) 竪穴建物2基(平安) 炭窯2基(平安)		縄文土器・石器 土師器・灰釉陶器 鉄製品・鉄滓			

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第90集 上信越自動車道関係発掘調査報告書IV 関川谷内遺跡 I

平成 10 年 8 月 31日 印刷 発行·編集 新潟県教育委員会

平成10年9月1日 発行

〒 950-8570 新潟市新光町 4 番地 1

電話 025 (285) 5511

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒 956-0845 新潟県新津市金津 93 番地 1

電話 0250 (25) 3981

印刷·製本 新高速印刷株式会社

〒950-0963 新潟市南出来島2丁目1-25

電話 025 (285) 3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集

上信越自動車道関係発掘調査報告書 **関川谷内遺跡 I** 訂正

図版 34 縮尺 誤 (110~117)(1:2) (118)(1:3)

正 (110~115·117) (1:2) (116·118) (1:3)

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第90集『関川谷内遺跡 I 』 正誤表追加 2018年11月追加

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	36度51分37秒	36度51分45秒
抄録	東経	138度11分57秒	138度11分51秒